4 ClientManager の導入

本章では、ClientManagerのインストール（セットアップ）およびアンインストール手順について説明します。また、オプションコンポーネントのインストール（セットアップ）およびアンインストール手順についても説明します。

4.1 導入の概要

以下にセットアップのおおまかな流れを示します。

1. システム構成の決定
   - ■システム（マネージャ、中継エージェント、クライアント）の構成の決定
   - ■マネージャIDの決定

2. ハードウェア／ソフトウェア環境の準備

   ClientManagerをセットアップする前に行う設定については「4.2 CMマネージャのセットアップの準備」を参照してください。

   （マネージャ）

   - ■付属のデータベースソフトウェア以外を利用する場合には、「Microsoft SQL Server」または「Oracle」の利用するデータベースソフトウェアのセットアップのドキュメントを参照してデータベースソフトウェアをインストールします。付属のCMデータベースエンジンを用いる場合には、「4.2.2 データベースエンジンセットアップ」を参照してください。
   - ■データベースの作成とODBC（システムデータソース）の設定

     「4.2.3 データベースの作成とODBC（システムデータソース）の設定」を参照してください。
   - ■ESMPROユーザグループ（NvAdminグループ）の追加

     Windows XP / Windows 2000 / Windows NTの場合に行います。「4.2.4 ESMPROユーザグループ（NvAdminグループ）の追加」を参照してください。

   （クライアント）

   - ■SNMPサービスのセットアップ

     「4.4.1 SNMPエージェントの組み込みと設定」を参照してください。
   - ■レジストリサイズの確認と変更

     「4.4.2 レジストリサイズの確認と変更」を参照してください。

3. ClientManagerのセットアップ

セットアップにはインストール対象により、次の種類が存在します。

■CMマネージャセットアップ

管理マネージャを対象にプログラムをインストールします。インストールするプログラムは、CMマネージャおよびCM GUIです。また、ClientManagerで使用するデータベースのテーブル作成も行います。

クラスタシステムにセットアップする場合には、「4.9 クラスタシステム」を参照してセットアップしてください。

■CMクライアントセットアップ

管理マネージャから管理されるクライアントを対象にプログラムをインストールします。インストールするプログラムは、CMクライアントです。「4.10ネットワークインストール」で説明するネットワークインストールによりセットアップを行うことも可能です。

■CM GUIセットアップ

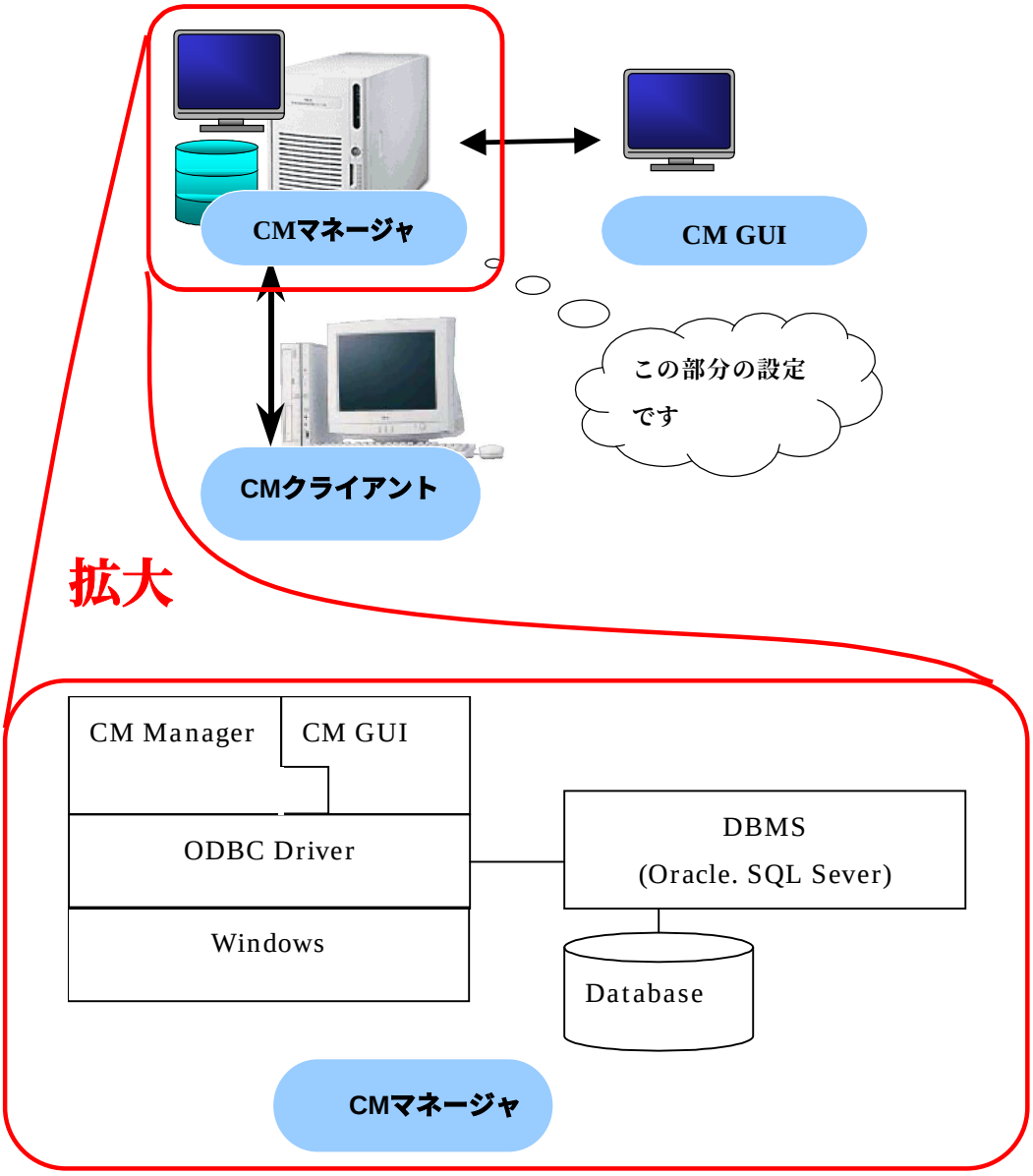
CM GUIを対象にプログラムをインストールします。インストールするプログラムは、CM GUIです。

■中継エージェントセットアップ

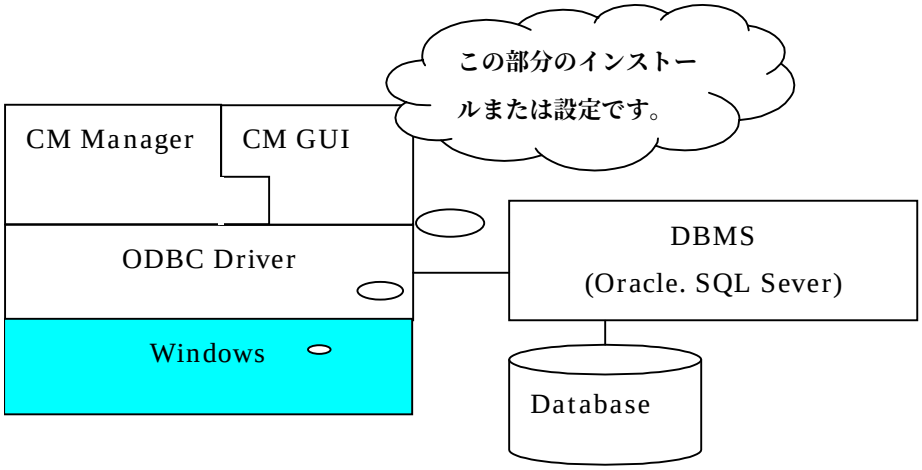
中継エージェントを対象にプログラムをインストールします。インストールするプログラムは、CM中継エージェントです。

4.2 CM マネージャのセットアップの準備

本節で、CMマネージャをセットアップする前の準備について説明します。

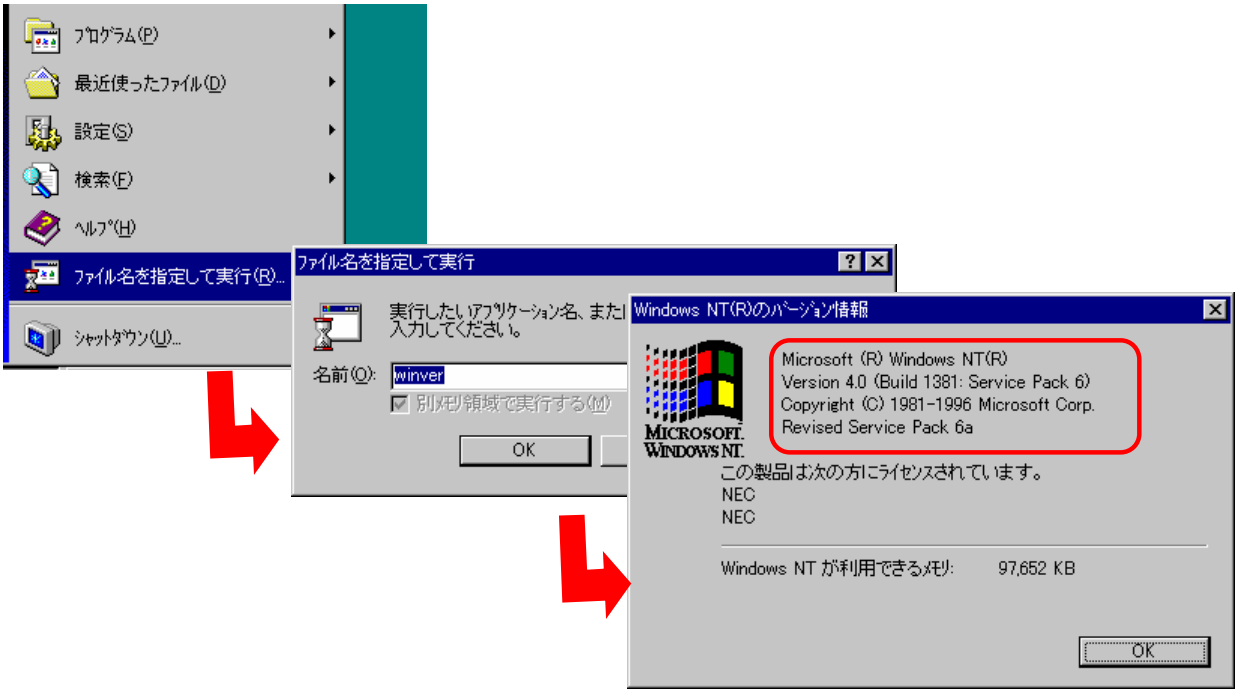


4.2.1　Windows NT



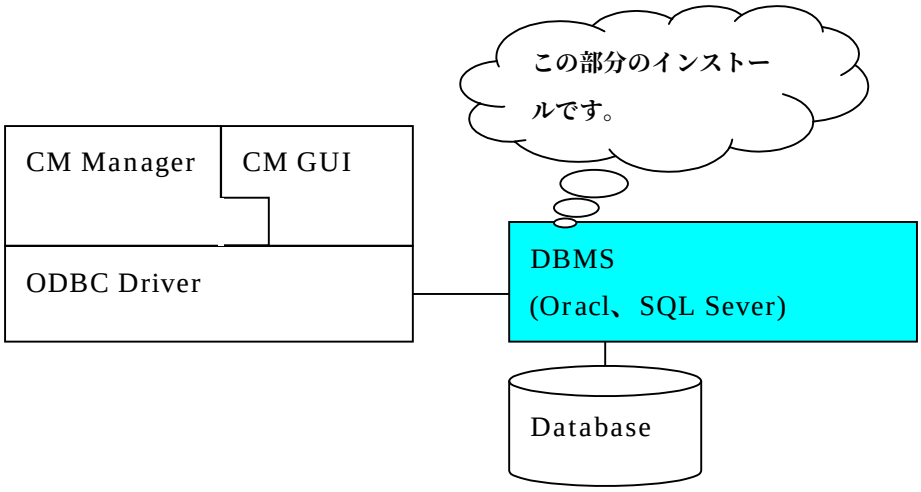
Windows NT 4.0 において、データベースとしてSQL ServerやOracleを利用しないで<u>CMデータベースエンジン</u>をインストールする場合には、Windows NT 4.0のサービスパック4以上を適用してください。サービスパック4を適用していない場合には、インストールを中断いたします。

Windows NT 4.0のサービスパックが適用済かは winver コマンドを実行する事により確認できます。



4.2.2　データベースエンジンセットアップ

データベース製品のインストールを行います。



クライントの台数が少ない場合には、市販のMicrosoft社のSQL Server や、Oracle社のOracleの他に、ESMPRO/CM添付のCMデータベースエンジンを利用する事ができます。SQL Serverまたは、Oracle、またはCMデータベースエンジンの何れかをインストールする必要があります。

4.2.2.1　以前の CM データベースエンジンからの移行

以前のMSDE 1.0ベースのCMデータベースエンジンVer1.0からのそのままのアップグレードはできません。データ移行する場合には以下の手順に従ってください。

1．既存のCMデータベースエンジンVer1.0をアンインストールしてください。
2．データベースファイルを別のフォルダに退避してください。退避するファイルは以下の通りです。
　[CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Data¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名.mdf　　→ [ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ退避ﾌｫﾙﾀﾞ]
　[CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Data¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名_log.ldf　→ [ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ退避ﾌｫﾙﾀﾞ]
　[CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Backup¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名.bak　　→ [ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ退避ﾌｫﾙﾀﾞ]
3．4.2.2.2 の手順でCMデータベースエンジン Ver4.0 をインストールしてください。
4．以下の方法で２で退避したデータベースの復旧をします。
　① CMマネージャが起動している場合は、「ESMPRO/CM Manager」サービスの停止を行ってください。
　② MSDE2000 の既存のインスタンスが起動していない場合は、SQL Server サービスマネージャを起動しサーバ名（ホスト名）を選択し開始ボタンを押して起動する。
　③ 退避しているデータベースファイルをCMデータベースエンジンのインストールフォルダにコピー（移動）する。

[ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ退避ﾌｫﾙﾀﾞ]¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名.mdf → [CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Data
[ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ退避ﾌｫﾙﾀﾞ]¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名_log.ldf → [CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Data
[ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ退避ﾌｫﾙﾀﾞ]¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名.bak → [CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Backup

④ データベースをサーバにアタッチ（関連付け）します。

まず、コマンドプロンプトを起動し、サーバへ接続するコマンドを実行します。

```
X:>osql -E (または osql -U ﾕｰｻﾞ名 -P ﾊﾟｽﾜｰﾄﾞ)
```

サーバへ接続が成功すると以下の状態になります。

```
1>
```

ここでデータベースをサーバからアタッチさせるためのコマンドを実行します。

```
1> sp_attach_db 'ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名','[CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Data¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ
   名.mdf','[CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Data¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名_log.ldf'
2> go
```

何もメッセージが出なければアタッチは成功しています。

⑤ バックアップファイルがある場合、データベース作成ツールで使用するためにはバックアップデバイスをサーバに登録する必要があります。

まず、コマンドプロンプトを起動し、サーバへ接続するコマンドを実行します。

```
X:>osql -E (または osql -U ﾕｰｻﾞ名 -P ﾊﾟｽﾜｰﾄﾞ)
```

サーバへ接続が成功すると以下の状態になります。

```
1>
```

ここでバックアップデバイスをサーバへ登録させるためのコマンドを実行させる。

```
1> sp_addumpdevice 'disk', 'ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名', '[CMﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽｴﾝｼﾞﾝｲﾝｽﾄｰﾙﾌｫﾙﾀﾞ]¥Backup¥ﾃﾞｰﾀﾍﾞ
   ｰｽ名.bak'
2> go
```

何もメッセージが出なければバックアップデバイスの登録は成功しています。

⑥ CMデータベースエンジンのレジストリにデータベース名、バックアップデバイス名を設定します。設定するキー名と値は以下の通りです。

```
キー名   ：HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥ESMPRO/CMD¥DBE
値の名前：DataBase
値       ：ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名

キー名   ：HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥ESMPRO/CMD¥DBE
値の名前：LogName
値       ：ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名_log

（バックアップがある場合）
キー名   ：HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥ESMPRO/CMD¥DBE
値の名前：BackupDevice
値       ：ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ名
```

⑦ CMマネージャマシンを再起動してください。

4.2.2.2　CM データベースエンジンセットアップ

ここでは、ESMPRO/CMマネージャのデータベースとして利用することができるCMデータベースエンジンのセットアップについて説明します。

CMデータベースエンジンは、Microsoft SQL Server 2000 Desktop Engine (MSDE 2000)をインストールします。そのため、Microsoft SQL Server が既にインストールされているマシンでは、CMデータベースエンジンを使用することはできません。インストールされているSQL Serverを利用してください。

CMデータベースエンジンのインストール手順を以下に示します。

① CMデータベースエンジンのセットアップを起動してください。
CMデータベースエンジンのセットアップは、「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入し、¥CLIENT¥NT95¥ESMCMM¥(メジャーバージョン,マイナーバージョン)¥CMDBE に格納されているSETUP.exeを実行してください。
例えば、ESMPRO/CM 4.0の場合には、「NEC Expressサーバ Express5800シリーズ Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #2 (3/3)」と書かれているCD-ROMの¥CLIENT¥NT95¥ESMCMM¥40¥CMDBEに格納されているSETUP.exeを実行します。

② 「ようこそ」ダイアログボックスが表示されますので、<次へ(N)>ボタンを押してください。

③ 「データベース作成ツール インストール状況の確認」ダイアログボックスが表示されます。表示内容を確認して<次へ(N)>ボタンを押してください。

④ 「データベース作成ツールをセットアップするディレクトリ」ダイアログボックスが表示されますので、データベース作成ツールをインストールするディレクトリを指定して、<次へ(N)>ボタンを押してください。

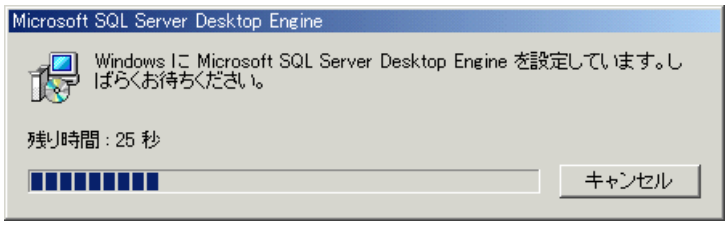
⑤ 「CMデータベースエンジン インストール状況の確認」ダイアログボックスが表示されます。表示内容を確認して<次へ(N)>ボタンを押してください。

⑥ 「CMデータベースエンジン インストール先の選択」ダイアログボックスが表示されますので、CMデータベースエンジン(MSDE2000)をインストールするディレクトリを指定して、<次へ(N)>ボタンを押してください。

⑥ 「インストール情報一覧」ダイアログボックスが表示されますので、表示内容を確認して、<次へ(N)>ボタンを押してください。

⑦ CMデータベースエンジンのセットアップが開始されると、まずはファイルのコピーが行なわれます。

そのままお待ちいただくと、Microsoft SQL Server 2000 Desktop Engine (MSDE 2000)のセットアップを開始します。



⑧ CMデータベースエンジンのセットアップが完了すると、「セットアップ終了」メッセージボックスが表示されます。

以後は表示されたメッセージに従ってください。データベースの作成は 4章 4.2.3.6 「CMデータベースエンジンのデータベースの作成」を参照のこと。

※「SQL Server サービス マネージャ」がタスクバーにない場合には、予めスタートアップメニューより起動してからご利用ください。

※MSDE2000のインストールの際、saログインの初期パスワードとして「esmprocm」を設定しています。パスワードはセキュリティの面からも変更されることをお奨めいたします。「データベース作成ツール」にて変更可能です。

※MSDE2000 のインスタンスを新規にインストールすると、デフォルトでは、ネットワークプロトコルのサポートが無効になっており、ローカルコンピュータ以外から接続できない状態になっています。CMデータベースエンジンをCMマネージャとは別のコンピュータにインストールする場合にはネットワークライブラリを有効にする必要があります。SQL Server Tools¥Binn フォルダ内の Svrnetcn.exe ファイルを実行し、必要なネットワークプロトコルを有効にしてください。

4.2.2.3　Oracle セットアップ

（1）　データベースとCMマネージャが別々のコンピュータ

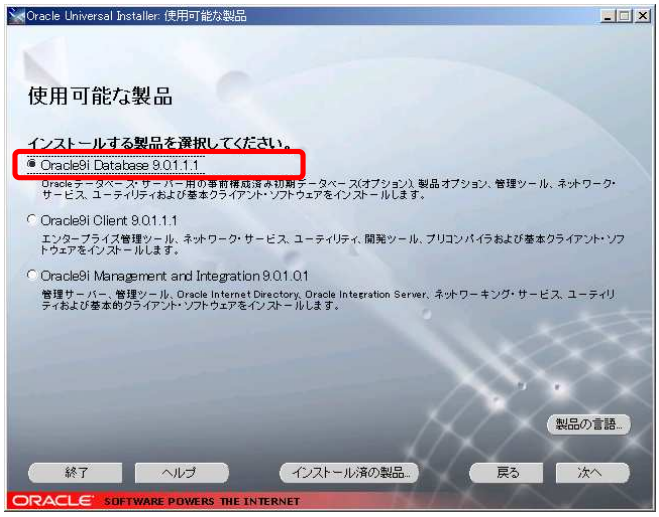
データベースとCMマネージャを別々のコンピュータにインストールする場合には、DBマシンにOracle Serverを、CMマネージャマシンにOracle Client をインストールします。

Oracleのテーブルスペース（表領域）、アカウント、データベース別名（サービス名）、ODBCデータソースの設定は以降の項で説明を行います。

□ **DB マシンで行う作業**

・ORACLE Server のインストール

Oracle 8の場合の画面



Oracle　9i の場合の画面

Oracle10g の場合の画面

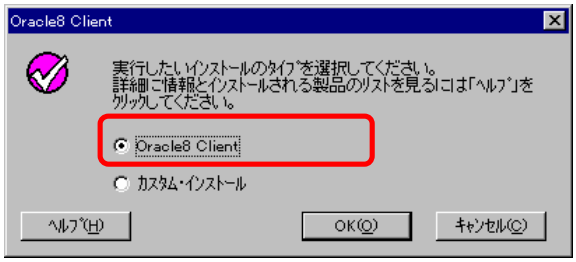
「Oracle® Database 10g のインストール・メディア」を使用します。

・ORACLE のテーブルスペースの作成

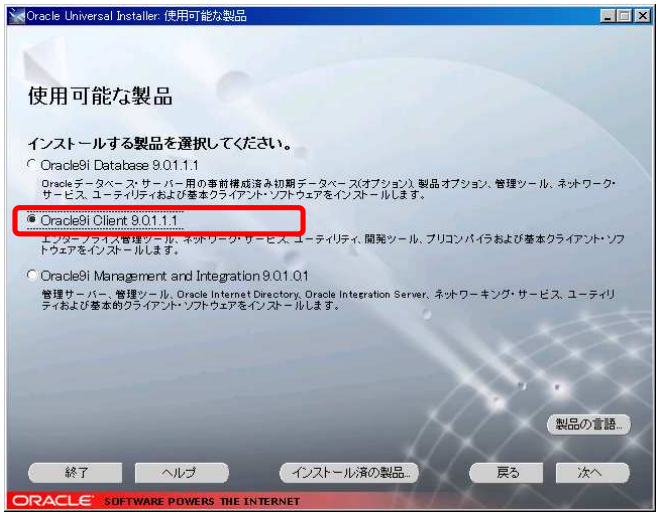
・ORACLE のアカウント作成

□ **マネージャマシンで行う作業**

・ORACLE Clientのインストール



Oracle 8の場合の画面



Oracle 9i の場合の画面

Oracle10g の場合の画面

「Oracle® Database 10g Client のインストール・メディア」を使用します。

・データベース別名の設定

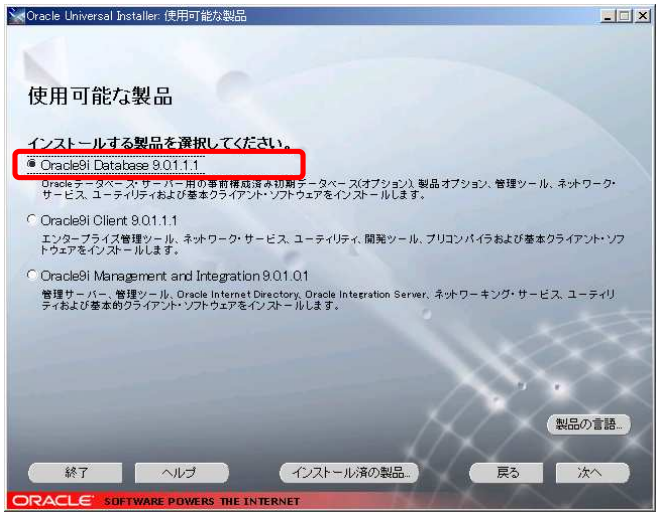
・ODBCデータソースの設定

（2） データベースとCMマネージャが同一のコンピュータ

□ DB/マネージャマシンで行う作業

- ORACLE Server のインストール

Oracle 8の場合の画面



Oracle 9i の場合の画面

Oracle10g の場合の画面

「Oracle® Database 10g のインストール・メディア」を使用します。

- ORACLE のテーブルスペースの作成
- ORACLE のアカウント作成
- データベース別名の設定
- ODBCデータソースの設定

4.2.2.4　SQL Server 7.0 セットアップ

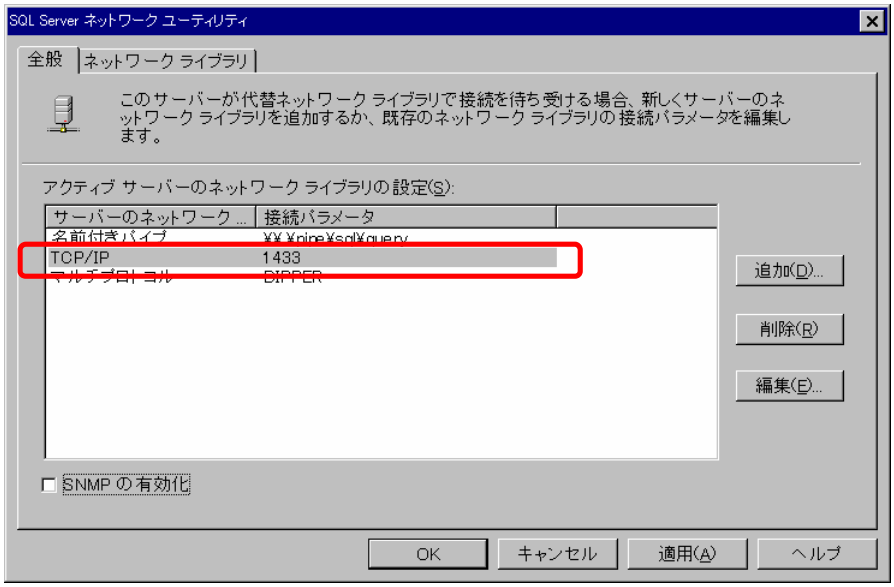
■　SQL Serverのインストール

SQL Serverのインストールは、SQL Server製品パッケージ中のインストールツールを起動して行います。インストール作業の詳細については、『SQL Server セットアップガイド』を参照してください。

■　ネットワークサポートへのTCP/IPソケットの追加

CMマネージャをWindows 98で動作させる場合にはネットワークサポートにデフォルトの“名前付きパイプ”の他に“TCP/IPソケット”を追加します。

「スタート」-「Microsoft SQL Server 7.0」-「ネットワークユーティリティ」で、追加を行います。



4.2.2.5　SQL Server 6.5 セットアップ

■　SQL Serverのインストール

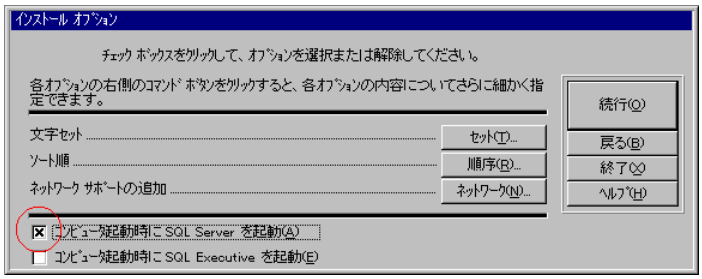
SQL Serverのインストールは、SQL Server製品パッケージ中のインストールツールを起動して行います。インストール作業の詳細については、『SQL Server セットアップガイド』を参照してください。

■　SQL Serverの自動起動の設定

SQL Serverは、自動起動の設定にしなければなりません。SQL Serverのセットアップ時に設定を行うか、またはセットアップ後にWindows NTのコントロールパネルのサービスから行います。詳細

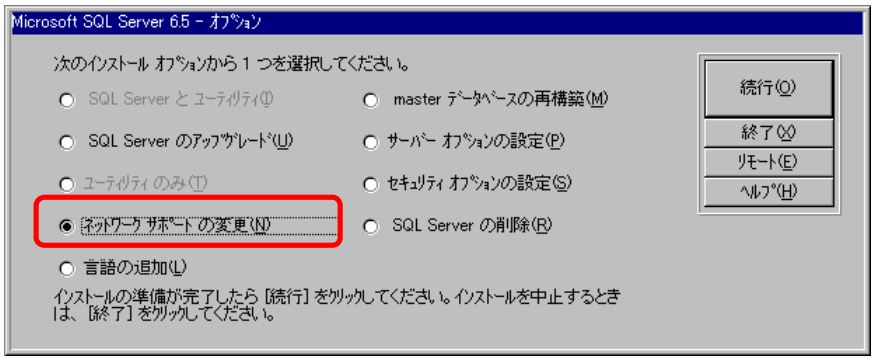
は、ご使用のMicrosoft Windows NT Serverのマニュアルを参照してください。自動起動の設定を行った場合には、SQL Serverをインストールしたマシンを再起動してください。

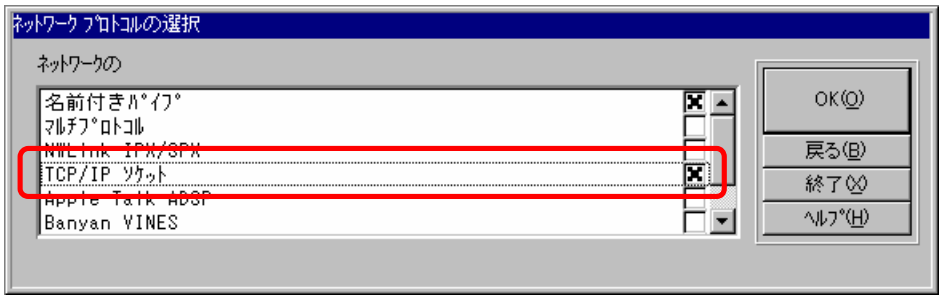
セットアップ時にSQL Serverの自動起動の設定を行う場合は「コンピュータ起動時にSQL Serverを起動」を選択してください。



■　ネットワークサポートにTCP/IP ソケットを追加

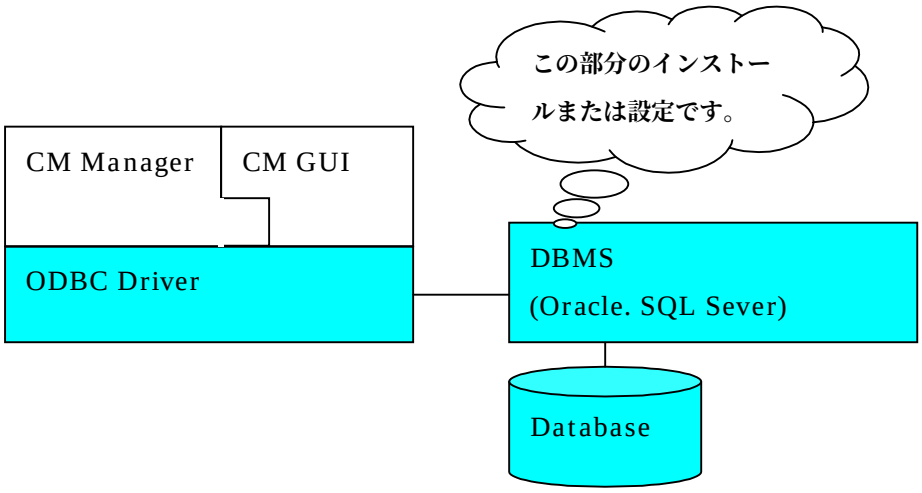
CMマネージャをWindows 98で動作させる場合にはネットワークサポートにデフォルトの“名前付きパイプ”の他に“TCP/IPソケット”を追加します。





4.2.3 データベースの作成と ODBC（システムデータソース）の設定

CMマネージャをセットアップする前にデータベースの作成とODBCのシステムデータソースの設定を行います。



ClientManagerは、クライアントPCの構成情報等の情報をデータベースに格納し、管理します。そのためClientManagerを運用するシステムにはデータベースサーバの設定が必要です。ClientManagerでは、市販のORACLE 、SQL Serverや、添付のCMデータベースエンジンのいずれかを使用できます。

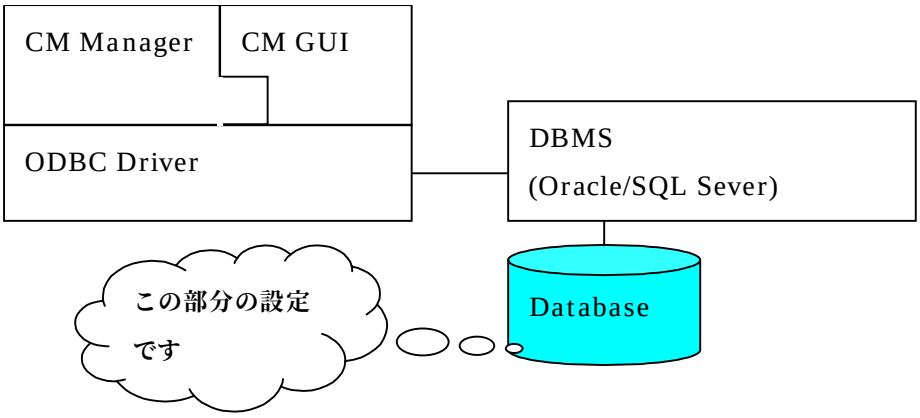
データベース(ファイル)およびODBCのデータソースネームは、他のプロダクトと共用しないで下さい。データベース(ファイル)を共用した場合、テーブル名が重複し、ClientManagerおよび他のプロダクト両方の動作がおかしくなる事が考えられます。

また、ODBCのデータソースを共有した場合、必要としているODBCドライバの設定が異なり、ClientManagerおよび他のプロダクトどちらかの動作がおかしくなる事が考えられます。

4.2.3.1　データベース容量の算出

ClientManagerが使用するデータベースを作成する場合には、データベースのサイズとして30Mバイト+（クライアント台数×30Kバイト）程度の容量を設定してください。ファイルの一覧を収集する機能を使用する場合には、30Mバイト+（クライアント台数×２Mバイト）程度の容量を設定してください。

親子関係を付けてマネージャを階層化する場合には子マネージャのデータベースの情報が親マネージャにも転送され、親マネージャのデータベースにも格納されるため、親マネージャのサイズは子マネージャのサイズを含めた値を設定してください。



4.2.3.2　ORACLE のデータベースの作成

データベースサーバとしてORACLEを使用する場合、ClientManagerを運用するシステムは、そのシステムから同一（ローカル）ホスト上のORACLEサーバにアクセスできなければなりません。

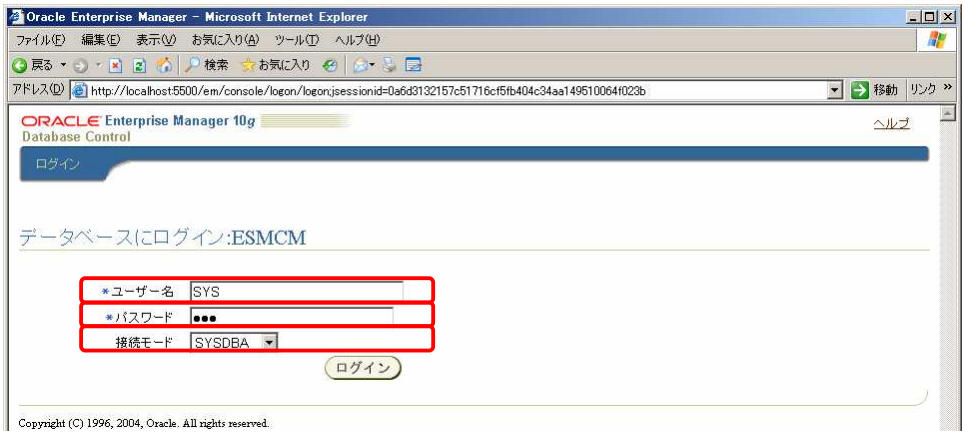
インストールはORACLEサーバ製品パッケージ中のインストールツールを起動して行います。インストール作業の詳細については、「ORACLEインストレーションおよびユーザーズガイド」を参照してください。

これらの作業を行うためには、ORACLEサーバに管理者権限を持つユーザ（internal 等）としてログインする必要があります。

（1）　ログイン(接続)方法

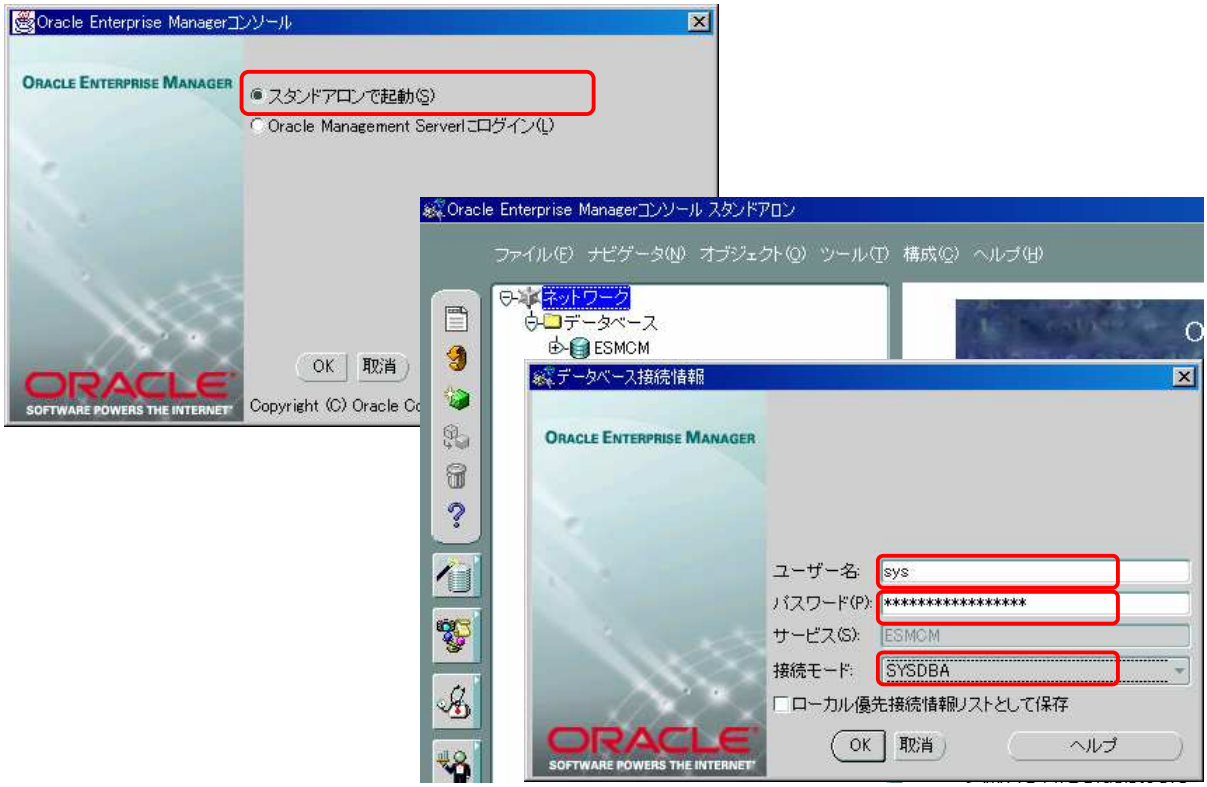
■　Enterprise Manager Database Consoleで接続 (Oracle10g)

Enterprise Manager Database Consoleを使用してWebベースで作業を行えます。データベースに管理者権限を持つユーザ（sys）としてログインします。



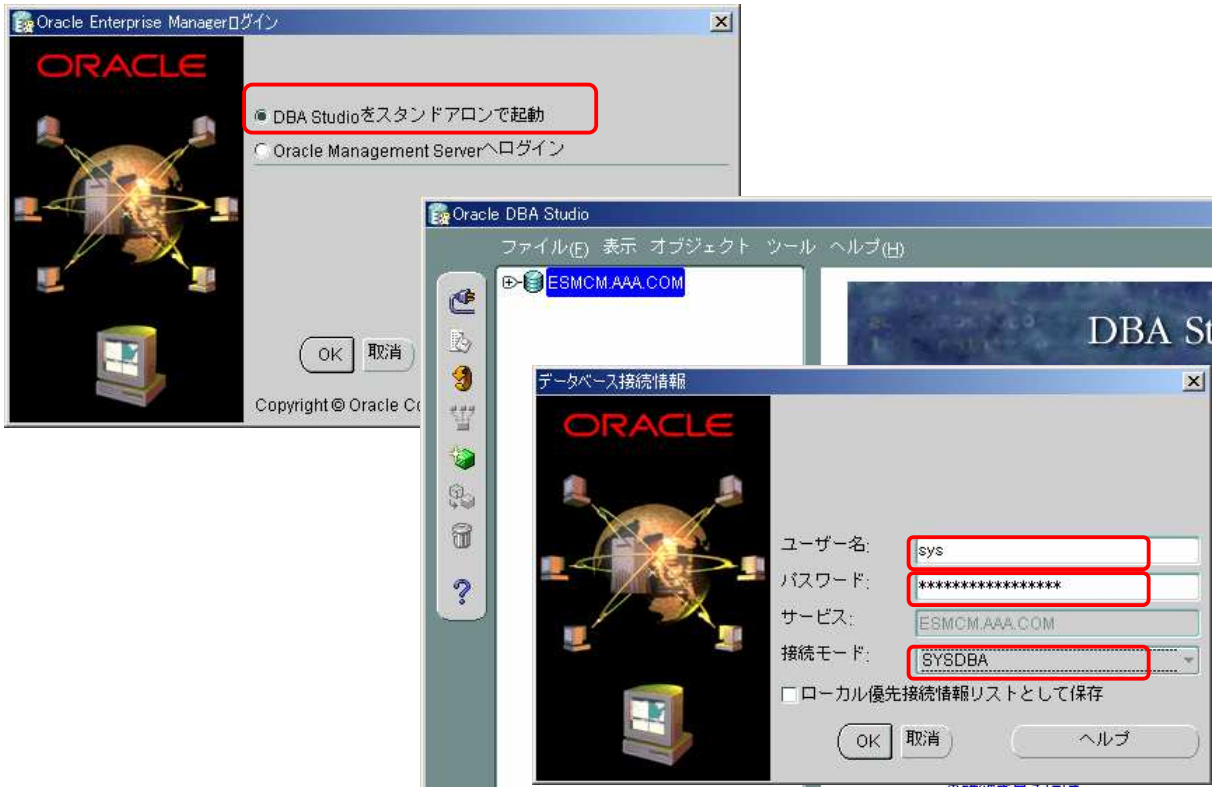
■ Enterprise Manager Consoleで接続 (Oracle9i)

Enterprise Manager Consoleを使用してGUIで作業を行えます。データベースを選択した場合にログイン画面が表示されます。データベースに管理者権限を持つユーザ(sys)としてログインします。



■　DBA Studioで接続 (Oracle8i)

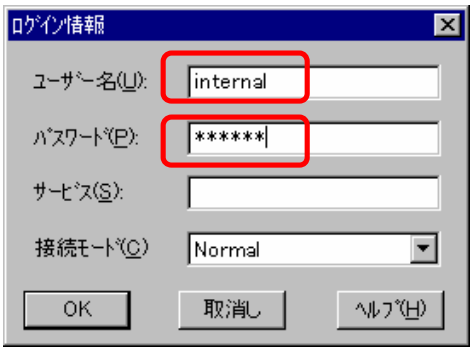
DBA Studioを使用してGUIで作業を行えます。データベースを選択した場合にログイン画面が表示されます。データベースに管理者権限を持つユーザ（sys）としてログインします。



■ Storage Manager, Security Managerで接続 (Oracle7,Oracle8)

Storage Manager, Security Managerを使用して、GUIで作業を行えます。各ツールを起動した場合にログイン画面が表示されます。

ORACLEサーバに管理者権限を持つユーザ（internal）としてログインします。



■ SVRMGRxコマンドで接続 (Oracle7,Oracle8,Oracle8i)

ORACLE に添付されるユーティリティである SQL*DBA 、SQL Plus 上や Server Manager(SVRMGRxコマンド)でSQLコマンドを使用して作業を行えます。SVRMGRxコマンドでの接続方法を以下に示します。

まず、コマンドを実行します。

バージョン	SVRMGRxコマンド
ORACLE 8i	SVRMGRL
ORACLE 8	SVRMGR30
ORACLE 7.3	SVRMGR23

次に、connect でORACLEサーバに管理者権限を持つユーザ（internal）としてログインします。

例： SVRMGRxコマンドで接続

```
XXX> Connect internal
パスワード: oracle
```

作業が終わった後は、exit文で接続を解除します。

例： exitを実行

```
XXX> exit;
```

コマンドの詳細については、ORACLEサーバのマニュアルを参照してください。

■　SQL*Plusで接続 (Oracle9i,Oracle10g)

ORACLEに添付されるユーティリティであるSQL*PlusでSQLコマンドを使用して作業を行えます。SQL*Plusでの接続方法を以下に示します。

まず、SQL*Plusを実行します。

```
X:¥> sqlplus　/ nolog
```

次に、connect でORACLEサーバに管理者権限を持つユーザ（sys）としてログインします。

例： SQL*Plusで接続

```
SQL> Connect sys / change_on_install as sysdba
```

作業が終わった後は、exit文で接続を解除します。

例： exitを実行

```
SQL > exit;
```

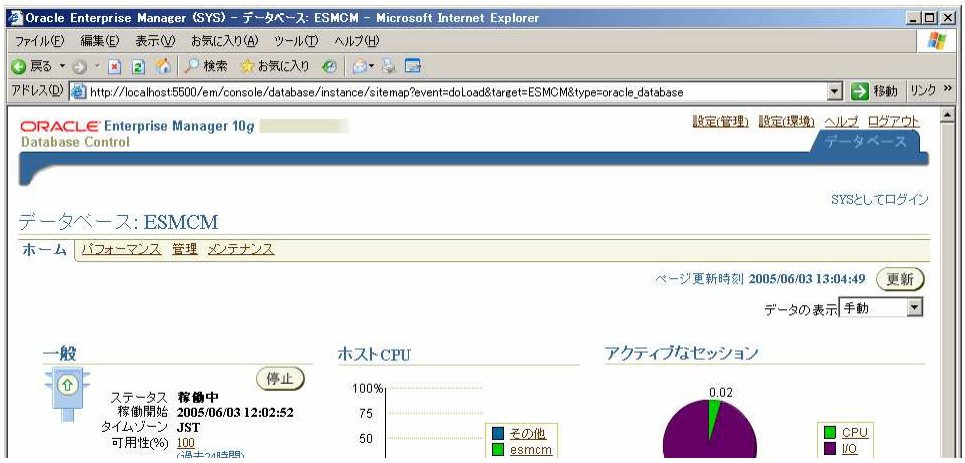
コマンドの詳細については、ORACLEサーバのマニュアルを参照してください。

（2） テーブルスペースの作成

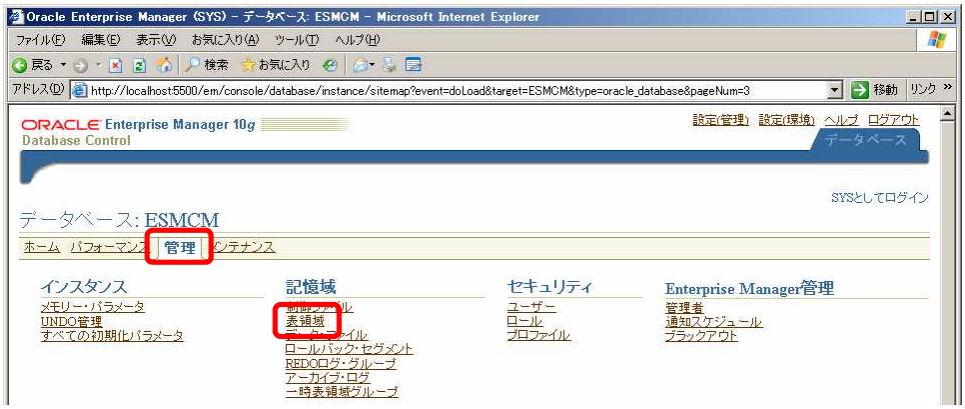
ここでは、テーブルスペース（表領域）の作成方法について例を示して説明します。なお、ここで設定した、ユーザ、パスワードは、ClientManagerの動作環境情報としてClientManagerセットアップ時に設定する必要があります。

■ Enterprise Manager Database Consoleで作成する場合 (Oracle10g)

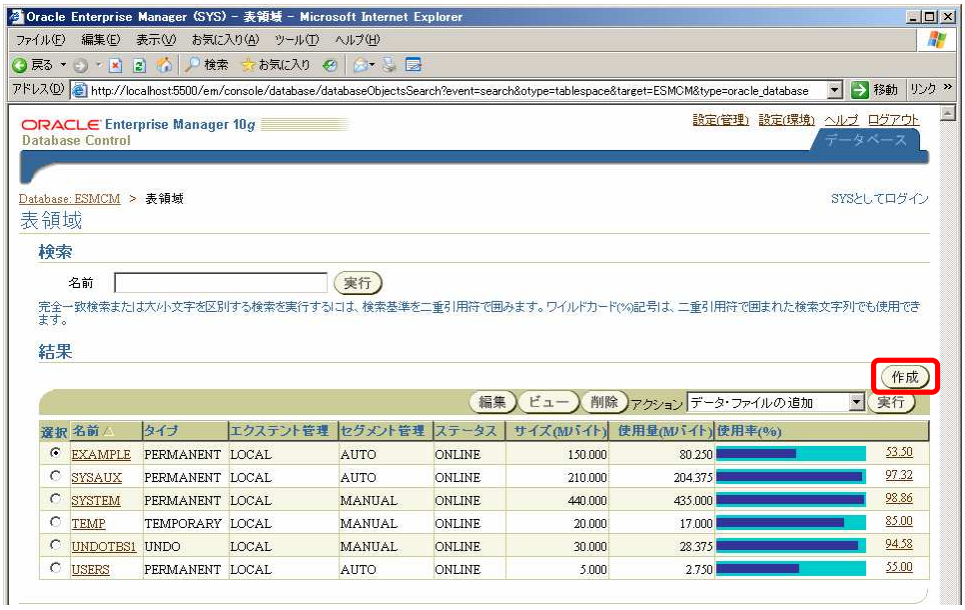
Enterprise Manager Database Console を起動しデータベースに接続を行います。



「管理」-「表領域」を選択します。

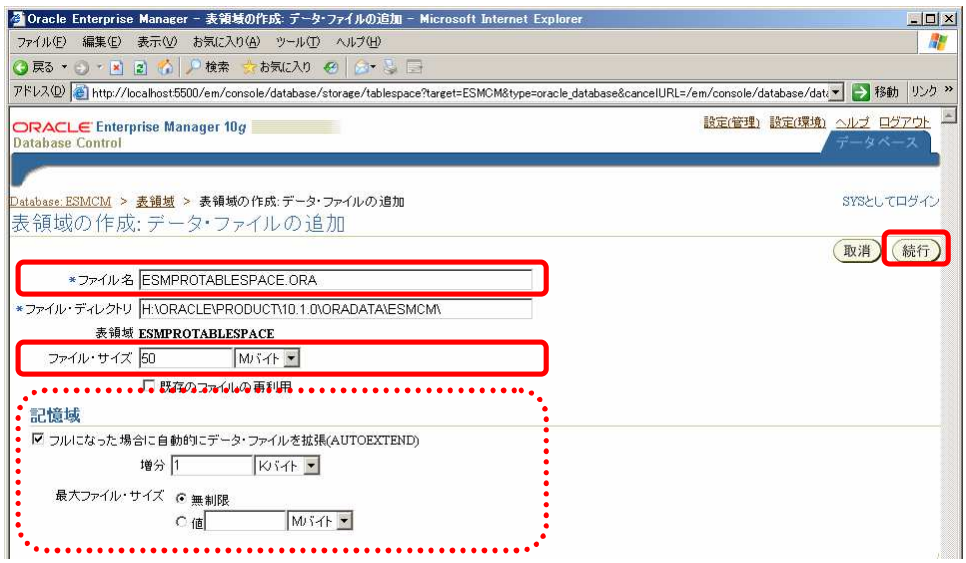


「作成」を選択します。



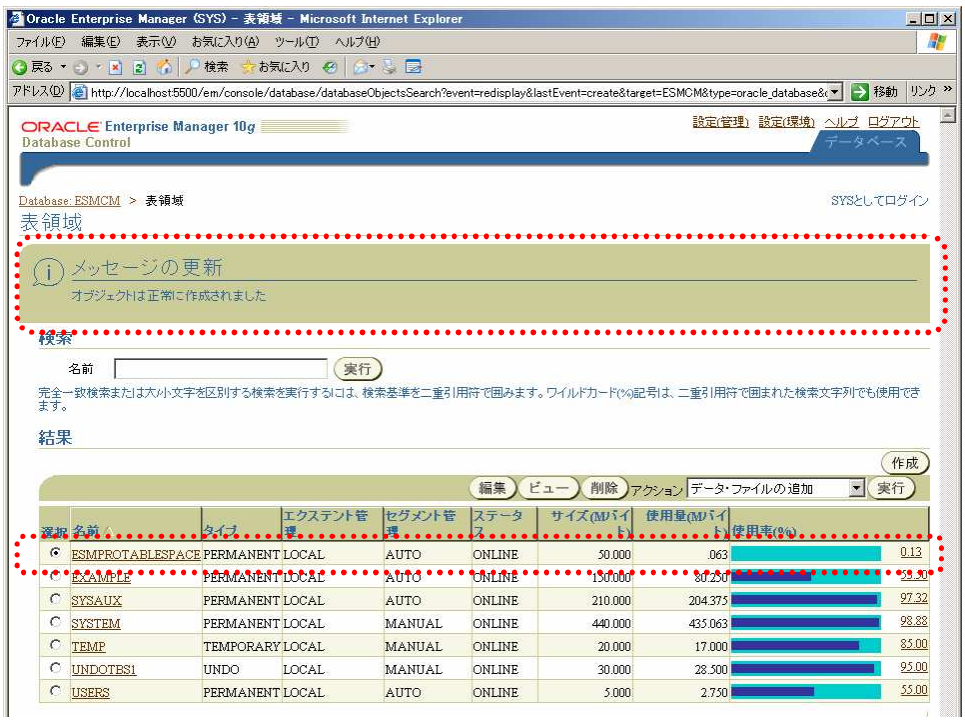
表領域の名前を設定し、「追加」を選択します。

データ・ファイルの名前およびサイズを設定し、「続行」を選択します。
自動拡張にしておくと頻繁にDBの空き容量を確認する必要は少なくなります。



データ・ファイルに「ESMPROTABLESPACE.ORA」が追加されます。
「OK」を選択します。

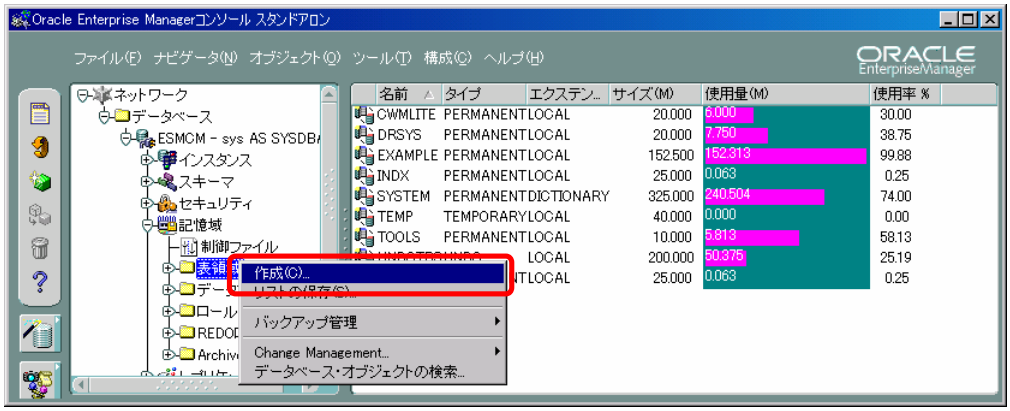
表領域に「ESMPROTALESPACE」が追加されます。



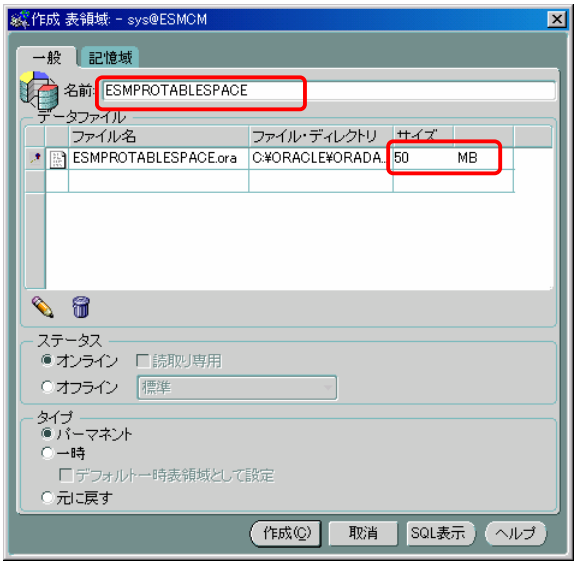
■ Enterprise Manager Console で作成する場合 (Oracle9i)

Enterprise Manager Console を起動しデータベースに接続を行います。

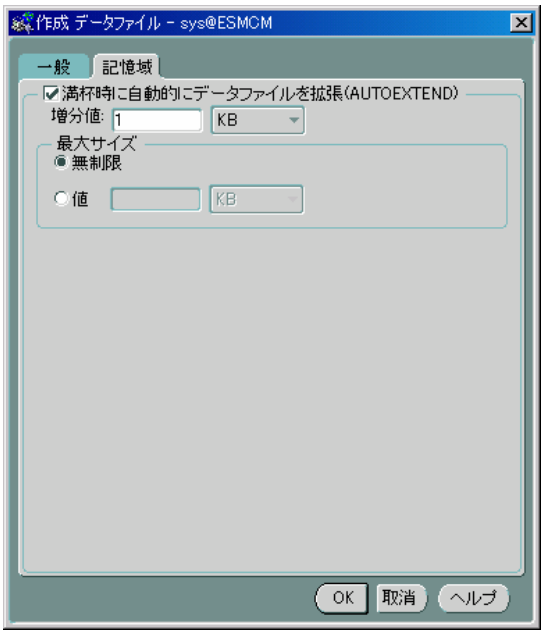
「記憶域」-「表領域」で「作成」を選択します。



表領域の名前を設定します。

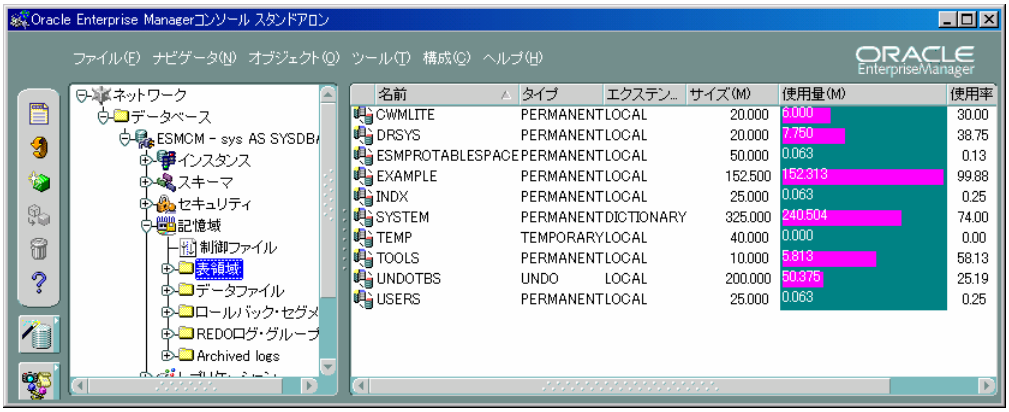


自動拡張にしておくと頻繁にDBの空き容量を確認する必要は少なくなります。



<OK>ボタンを押します。

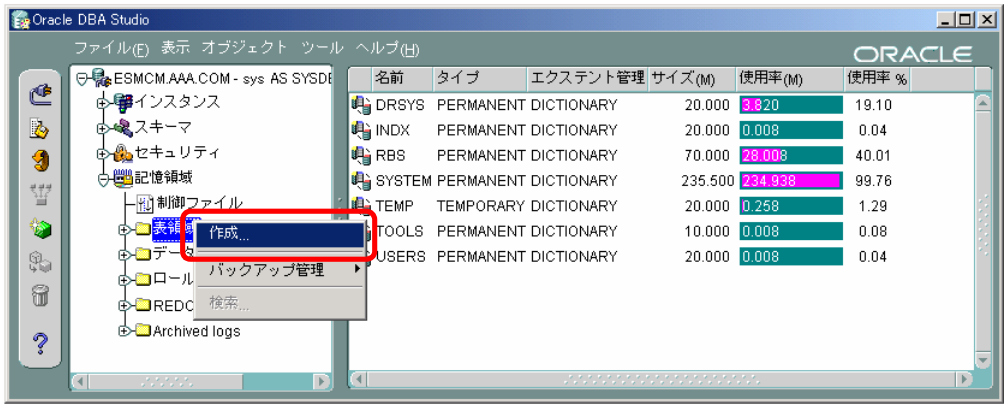
表領域に、ESMPROTALESPACE が追加されます。



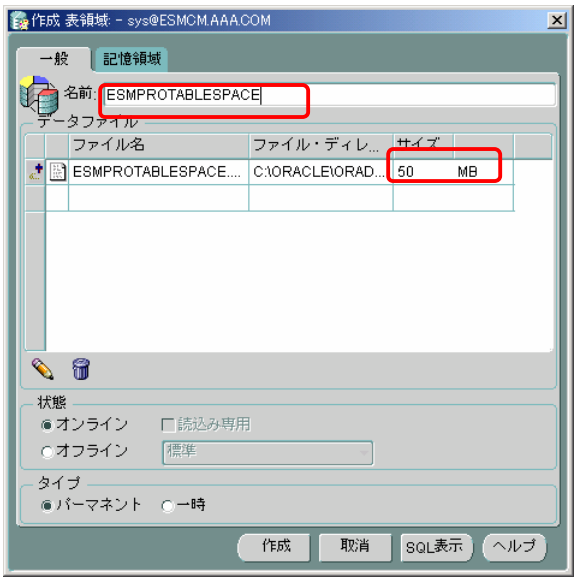
■　DBA Studio で作成する場合 (Oracle8i)

DBA Studio を起動しデータベースに接続を行います。

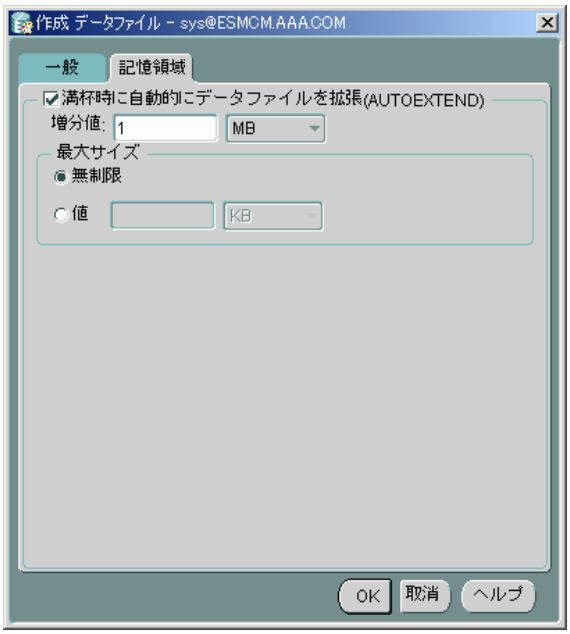
「記憶領域」-「表領域」で「作成」を選択します。



表領域の名前を設定します。



自動拡張にしておくと頻繁にDBの空き容量を確認する必要は少なくなります。



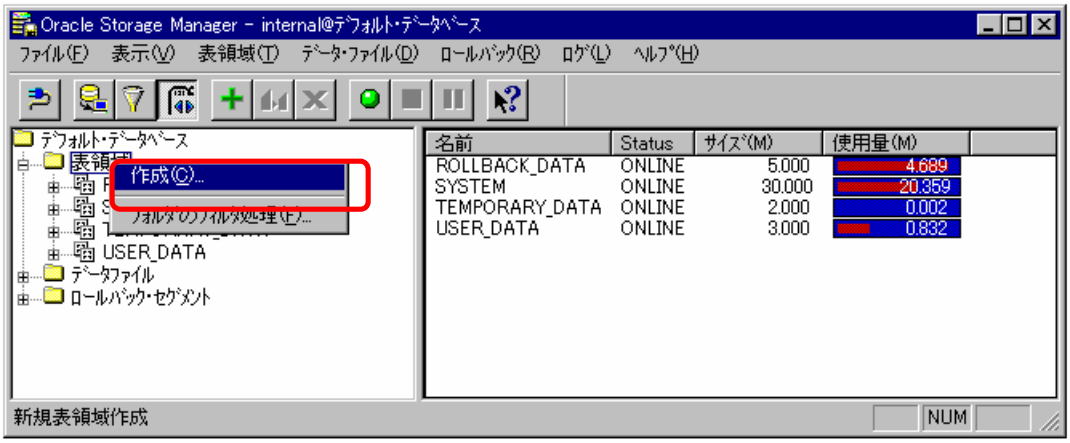
<OK>ボタンを押します。

表領域に、ESMPROTALESPACE が追加されます。

■　Storage Managerでテーブルスペースを作成する場合 (oracle7,Oracle8)

Storage Manager を起動してログインを行います。

「表領域」で「作成」を行います。

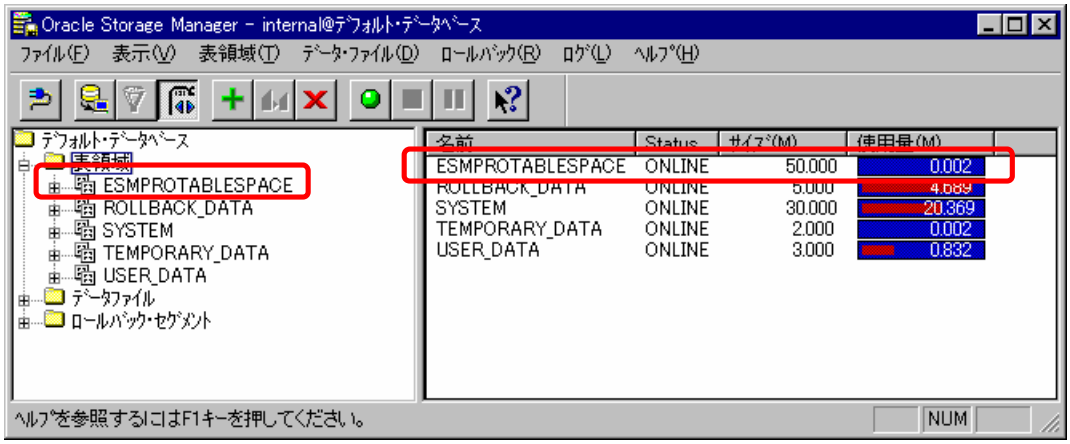


表領域の名前を設定します。

＜追加＞ボタンをクリックします。名前にデータファイル名、ファイルサイズに値を設定します。

＜OK＞ボタンをクリックします。

＜OK＞ボタンをクリックします。



■　手動でテーブルスペースを作成する場合 (Oracle 7, Oracle8, Oracle 8i, Oracle 9i,Oracle10g)

ClientManagerはORACLEのインスタンス上にあらかじめ作成されたテーブルスペースに、自動的にテーブルを作成します。そのため、テーブルスペースはClientManagerの起動に先立って作成しておかなければなりません。このテーブルスペースの大きさは、4.2.3.1 データベース容量の算出にしたがって、ある程度の余裕を持った大きさのものを作成することをお勧めします。

テーブルスペースを作成するディレクトリをあらかじめ作成します。

例： C:ドライブに ¥DATA¥ESMPRO　ディレクトリを作成

```
C:¥>MD DATA
C:¥>CD DATA
C:¥DATA>MD ESMPRO
```

Create tablespace文でテーブルスペースを作成します。たとえば、以下のようなSQL文を実行します。

create　tablespace　(テーブルスペース) datafile　(ファイル名)　size　(サイズ)　;

（テーブルスペース）:テーブルスペースの名前

(ファイル名): テーブルスペースのファイル名

(サイズ): 4.2.3.1 データベース容量の算出を参照し環境に合わせたサイズ

例： ５０Mバイトの C:¥DATA¥ESMPRO¥ESMCM.DAT を作成

```
XXX> create　tablespace　esmcmtablespace　datafile　'c:¥data¥esmpro¥esmcm.dat'
size　50m;
```

ここで作成したテーブルスペースは、次のログインIDのデフォルトテーブルスペースとして登録します。

テーブルスペースはインスタンス（データベース）上に作成されますが、インスタンスそのものを新規に作成する方法はここではふれません。デフォルトインスタンスORCLE上にテーブルスペースを作成したものとします。

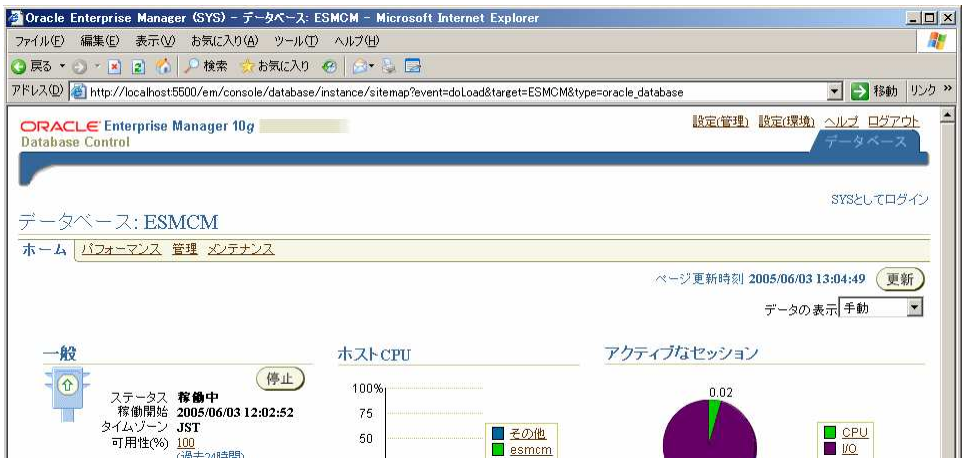
（3）ログインIDの作成

ここでは、ログインIDの作成方法について例を示して説明します。ログインID設定時には、デフォルトテーブルスペースを指定する必要があります。このテーブルスペースは前項で作成したものを使用します。

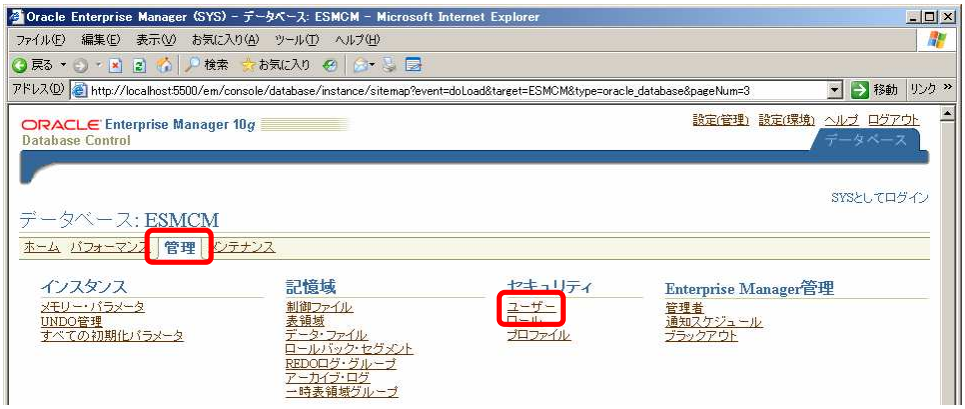
なお、ここで設定した、ユーザ、パスワードは、ClientManagerの動作環境情報としてClientManagerセットアップ時に設定する必要があります。

■ Enterprise Manager Database Consoleで作成する場合 (Oracle10g)

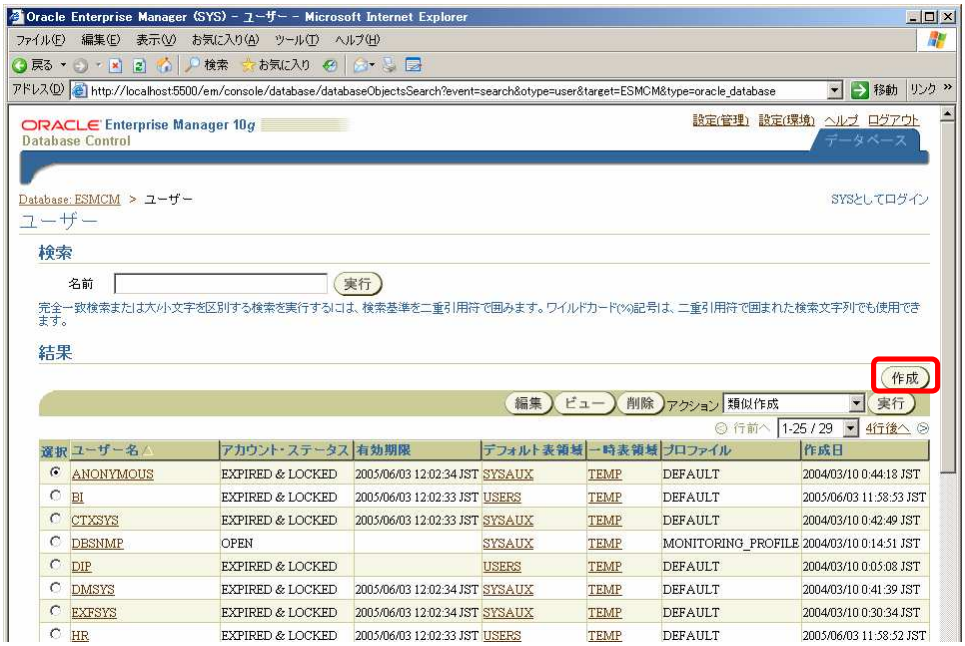
Enterprise Manager Database Console を起動しデータベースに接続を行います。



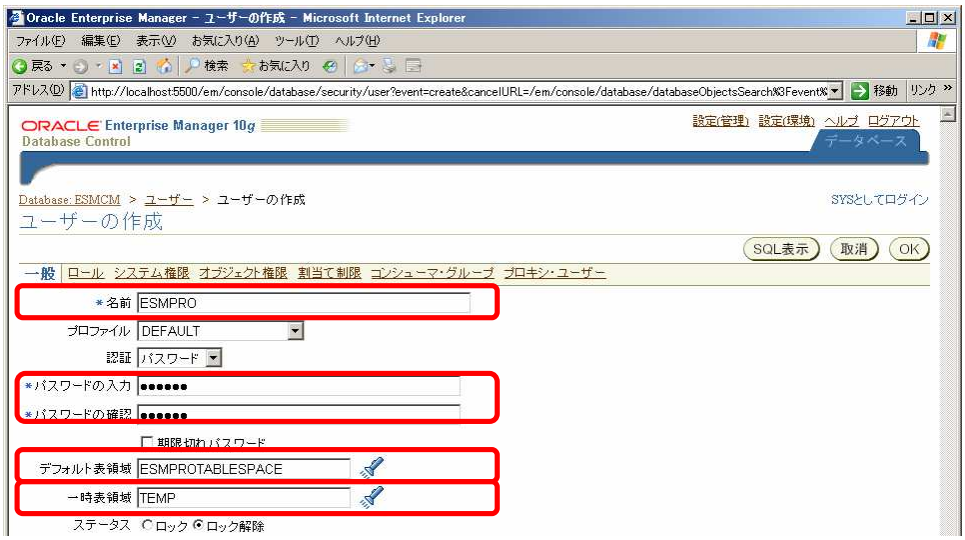
「管理」-「ユーザー」を選択します。



「作成」を選択します。



ユーザの作成



「名前」に任意の名前を設定します。

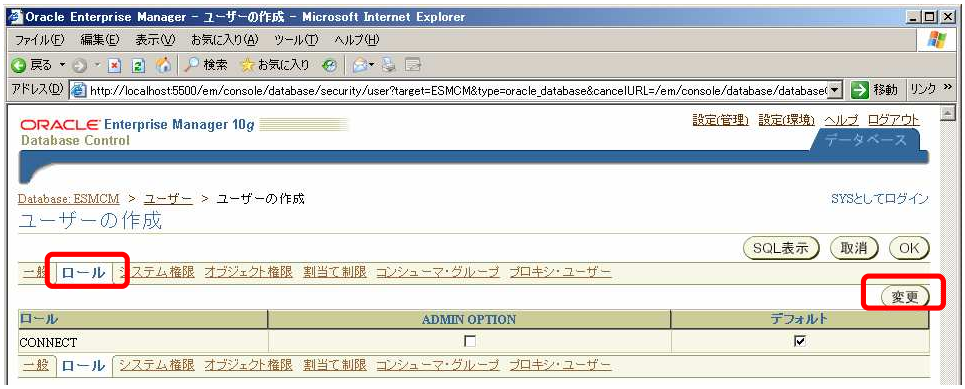
「パスワード」に任意のパスワードを設定します。

「デフォルト表領域」に作成したデータスペース領域を指定します。

「一時表領域」に「TEMP」を指定します。

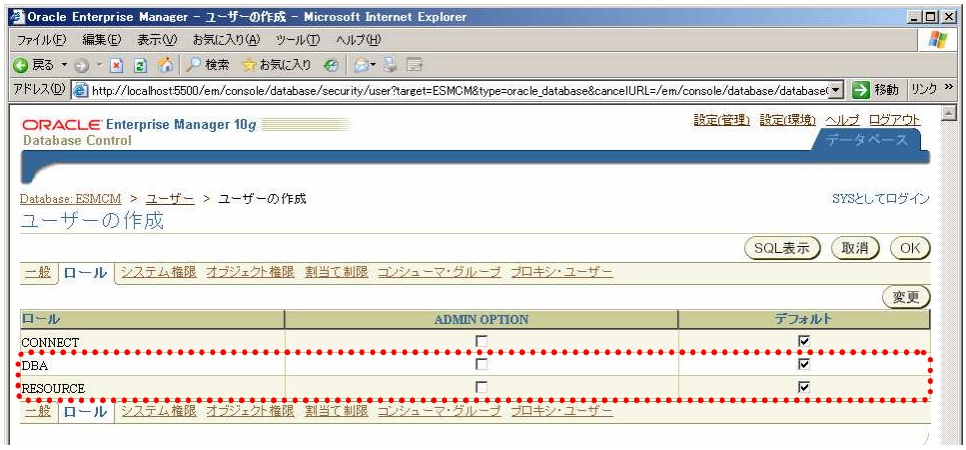
ロール権限に「DBA」と「RESOURCE」を追加します。

・「ロール」-「変更」を選択します。

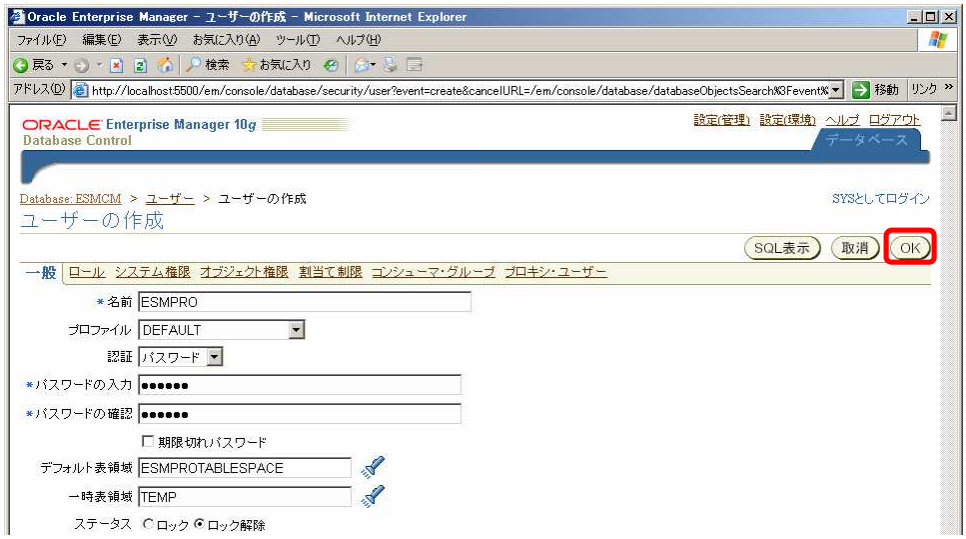


・「DBA」と「RESOURCE」を「移動」により追加し、「OK」を選択します。

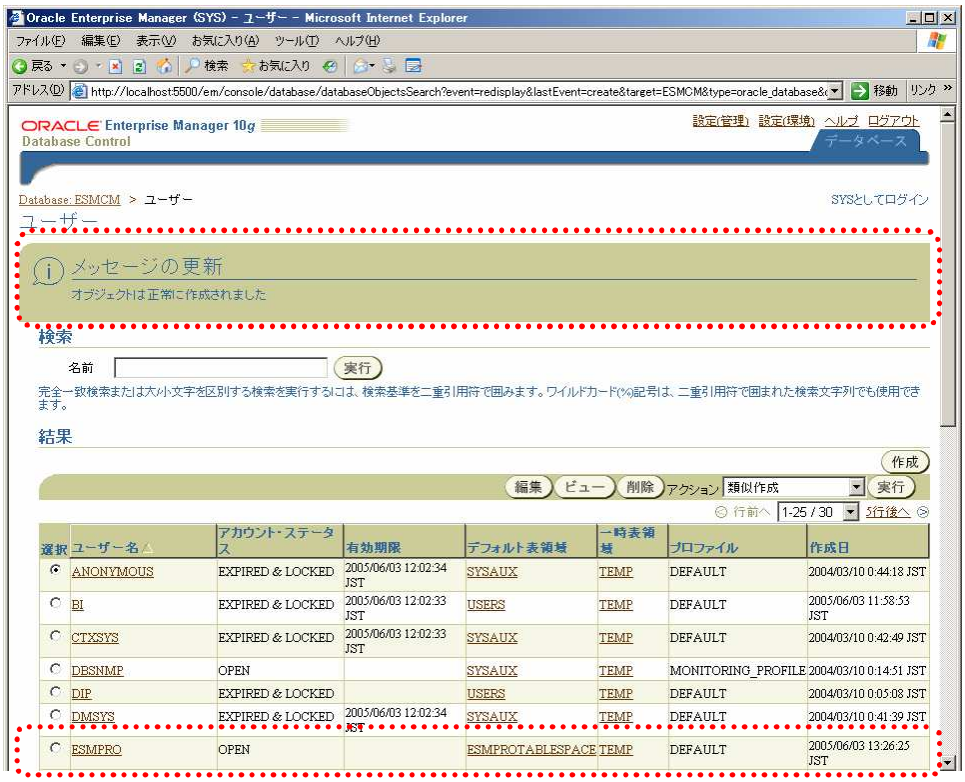
・ロール権限に「DBA」と「RESOURCE」が追加されます。



「OK」を選択します。



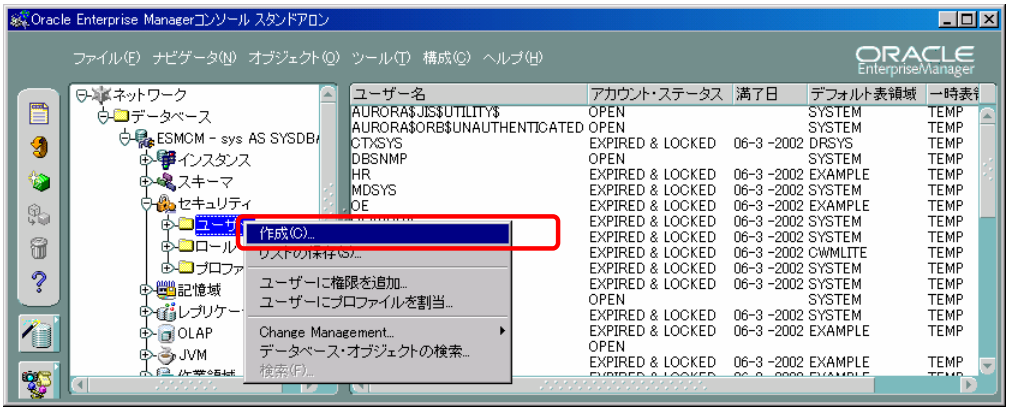
以上でユーザの作成は終了です。


Oracle Enterprise Manager (SYS) - ユーザー - Microsoft Internet Explorer
ファイル(F) 編集(E) 表示(V) お気に入り(A) ツール(T) ヘルプ(H)
戻る 検索 お気に入り
アドレス(D) http://localhost:5500/em/console/database/databaseObjectsSearch?event=redisplay&lastEvent=create&target=ESMCM&type=oracle_database&
移動 リンク
ORACLE Enterprise Manager 10g
Database Control
設定(管理) 設定(環境) ヘルプ ログアウト
データベース
Database: ESMCM > ユーザー
SYSとしてログイン
ユーザー
メッセージの更新
オブジェクトは正常に作成されました
検索
名前
実行
完全一致検索または大小文字を区別する検索を実行するには、検索基準を二重引用符で囲みます。ワイルドカード(%)記号は、二重引用符で囲まれた検索文字列でも使用できます。
結果
作成
編集 ビュー 削除 アクション 類似作成 実行
行前へ 1-25 / 30 5行後へ
選択 ユーザー名 アカウント・ステータス 有効期限 デフォルト表領域 一時表領域 プロファイル 作成日
ANONYMOUS EXPIRED & LOCKED 2005/06/03 12:02:34 JST SYSAUX TEMP DEFAULT 2004/03/10 0:44:18 JST
BI EXPIRED & LOCKED 2005/06/03 12:02:33 JST USERS TEMP DEFAULT 2005/06/03 11:58:53 JST
CTXSYS EXPIRED & LOCKED 2005/06/03 12:02:33 JST SYSAUX TEMP DEFAULT 2004/03/10 0:42:49 JST
DBSNMP OPEN SYSAUX TEMP MONITORING_PROFILE 2004/03/10 0:14:51 JST
DIP EXPIRED & LOCKED USERS TEMP DEFAULT 2004/03/10 0:05:08 JST
DMSYS EXPIRED & LOCKED 2005/06/03 12:02:34 JST SYSAUX TEMP DEFAULT 2004/03/10 0:41:39 JST
ESMPRO OPEN ESMPROTABLESPACE TEMP DEFAULT 2005/06/03 13:26:25 JST

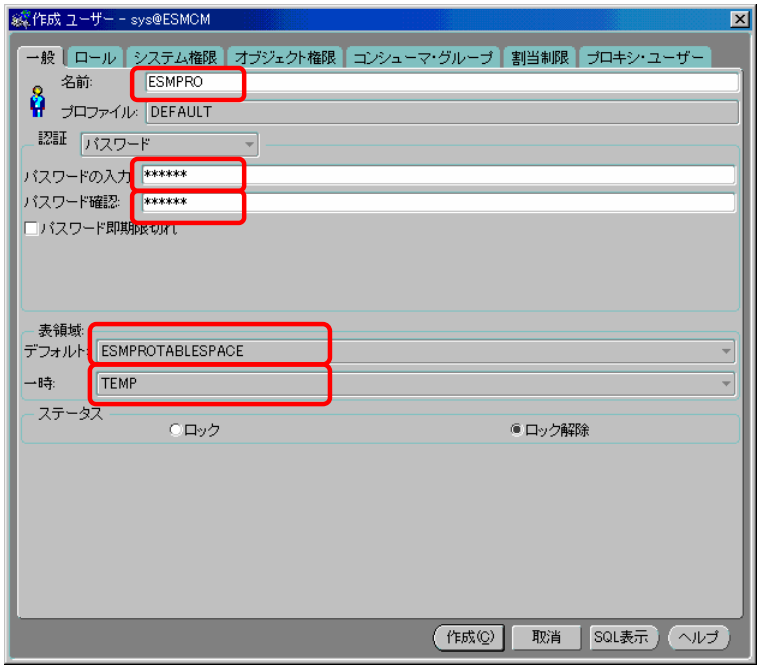
■ Enterprise Manager Console で作成する場合 (Oracle9i)

Enterprise Manager Console を起動しデータベースに接続を行います。

「セキュリティ」-「ユーザー」で「作成」を選択します。



ユーザの作成

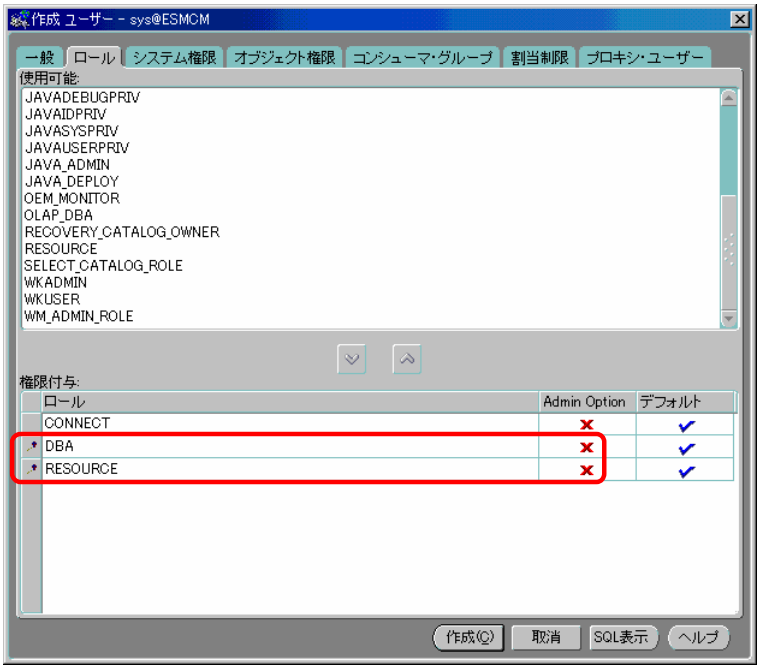


「名前」に任意の名前を設定します。

「パスワード」に任意のパスワードを設定します。

表領域の「デフォルト」に作成したデータスペース領域を指定します。

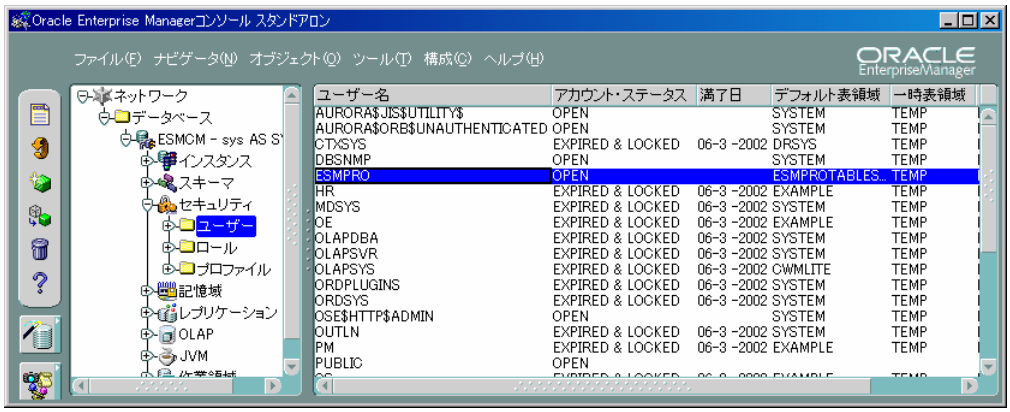
表領域の「一時」にTEMPを指定します。



ロール権限に「DBA」と「RESOURCE」を「↓」ボタンにより追加します。

＜OK＞ボタンを押します。

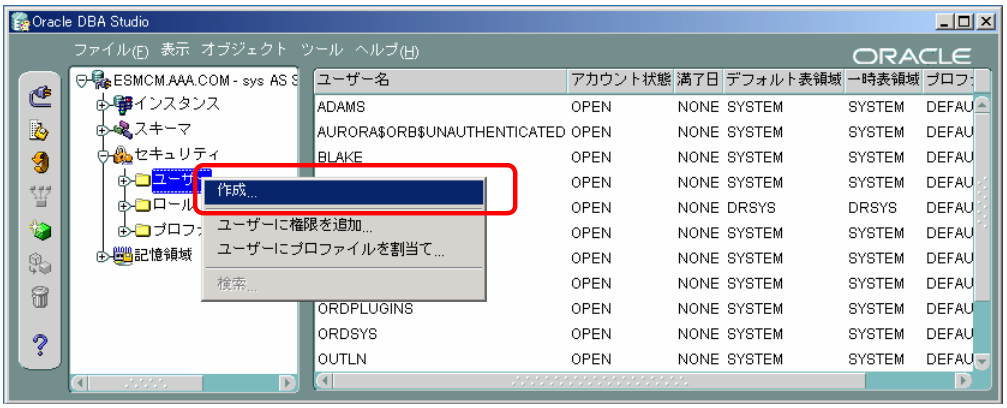
以上でユーザの作成は終了です。



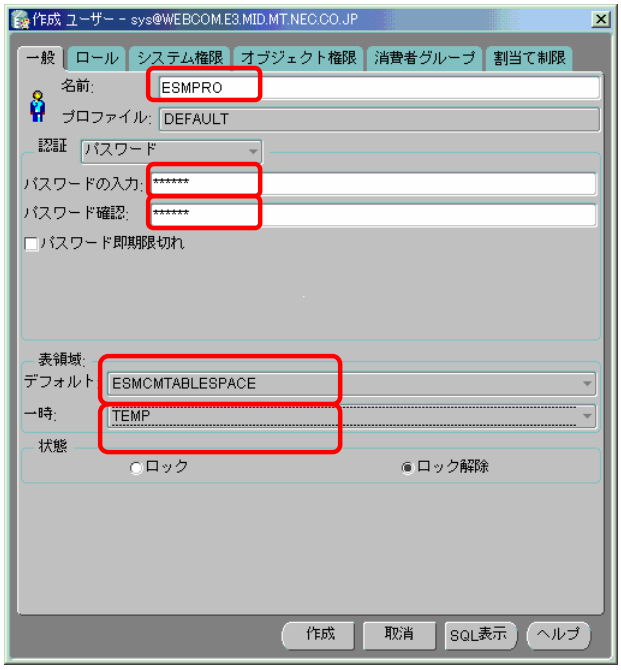
■　DBA Studio で作成する場合 (Oracle8i)

DBA Studio を起動しデータベースに接続を行います。

「セキュリティ」-「ユーザ」で「作成」を選択します。



ユーザの作成

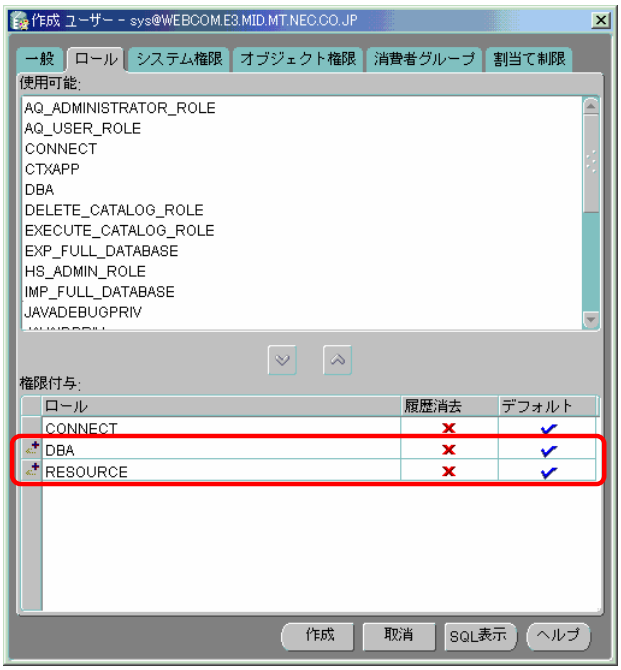


「名前」に任意の名前を設定します。

「パスワード」に任意のパスワードを設定します。

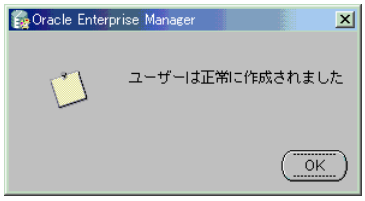
表領域の「デフォルト」に作成したデータスペース領域を指定します。

表領域の「一時」にTEMPを指定します。



ロール権限に「DBA」と「RESOURCE」を「↓」ボタンにより追加します。

＜OK＞ボタンを押します。

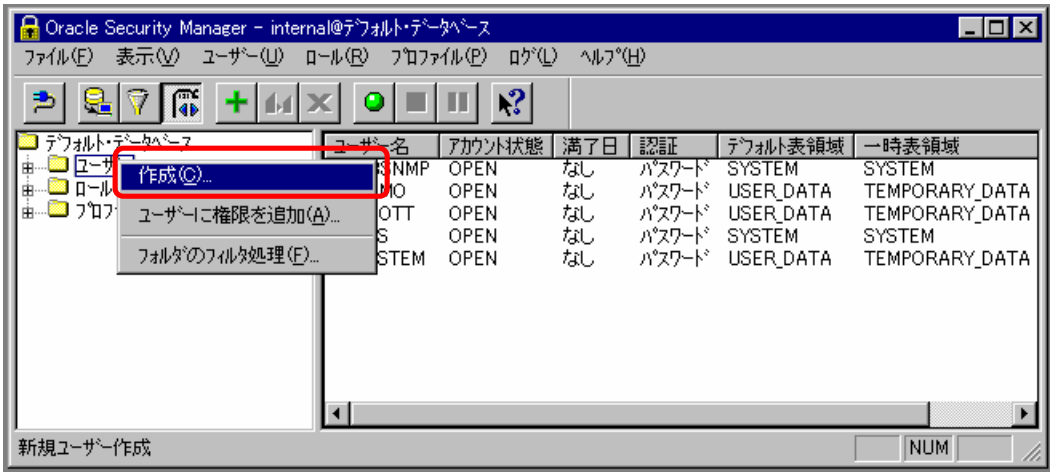


以上でユーザの作成は終了です。

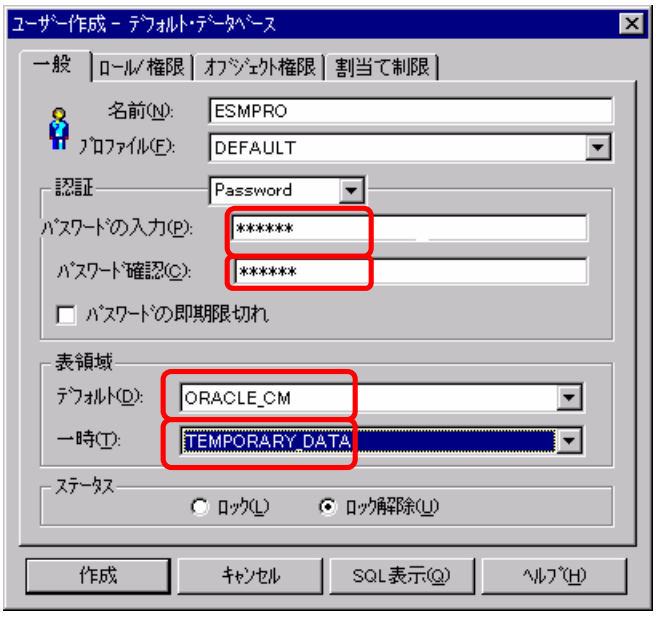
■ Security Managerでログイン**ID**を作成する場合(Oracle 7, Oracle8)

Security Manager を起動してログインを行います。

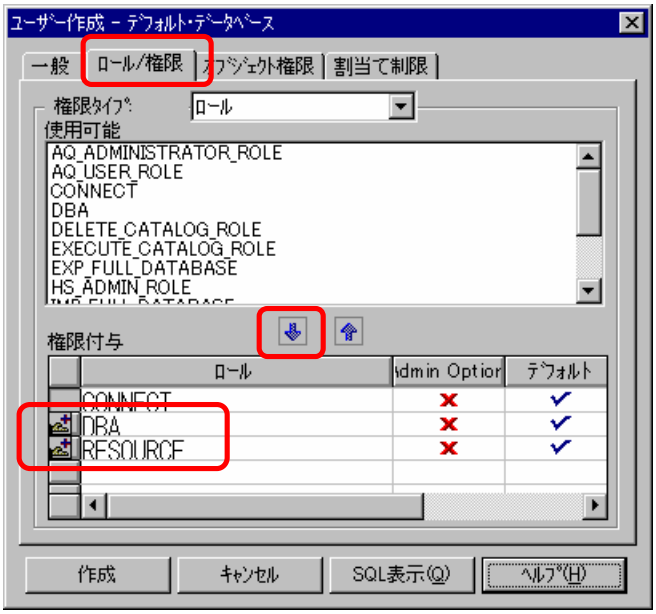
ユーザの作成を選択します。



ユーザの作成

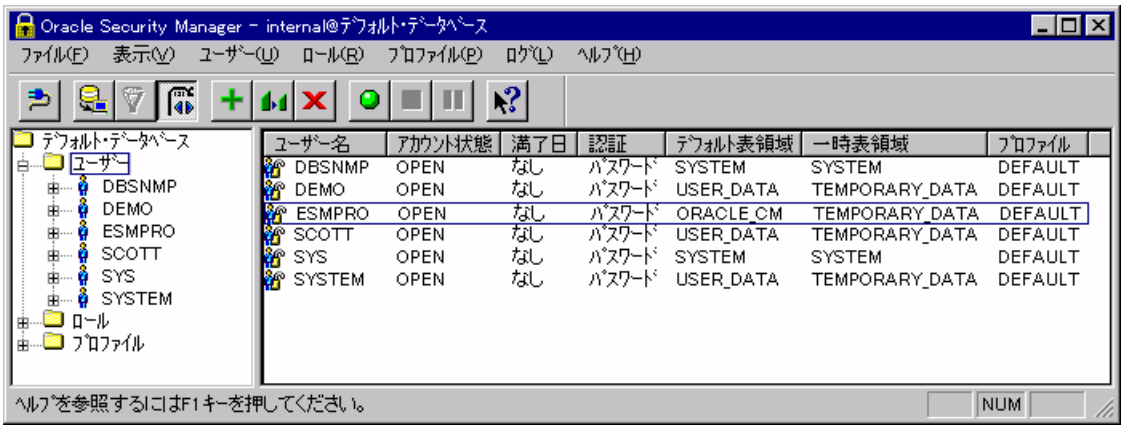


「名前」に任意の名前を設定します。
「パスワード」に任意のパスワードを設定します。
表領域の「デフォルト」に作成したデータスペース領域を指定します。
表領域の「一時」にTEMPORARY_DATAを指定します。



ロール権限に「DBA」と「RESOURCE」を「↓」ボタンにより追加します。
「作成」ボタンを選択します。

以上で設定は終了です。



■ 手動でログインIDを作成する場合(Oracle 7, Oracle8, Oracle 8i, Oracle 9i,Oracle10g)

Create user文でログインIDを作成します。たとえば、以下のようなSQL文を実行します。

create user (ログインID) identified by (パスワード) default tablespace (テーブルスペース) quota unlimited on (テーブルスペース);

(ログインID): ユーザ名

(パスワード): パスワード

(テーブルスペース)

例： ESMPROユーザをパスワード CRIPAZで作成

```
XXX> create user ESMPRO identified by CRIPAZ default tablespace esmcmtablespace
quota unlimited on esmcmtablespace;
```

なお、作成したログインIDには、Grant文にて、connect, resource, dbaの権限を付与します。たとえば、以下のようなSQL文を実行します。

Grant connect,resource,dba to (ログインID);

例： ESMPROユーザに、connect, resource, dba権限を付与

```
XXX> grant connect,resource,dba to ESMPRO;
```

4.2.3.3 SQL Server 2000 または 2005 のデータベースの作成

ここでは、ログインIDの設定方法とデータベースの作成方法について、例を示して説明します。これらの作業を行うためには、SQL Serverにシステムアドミニストレータ（sa）としてログインしなければなりません。

■ ログインIDの設定

ClientManagerが、SQL Serverにログインするためのログインの追加を行います。ログインの追加方法の詳細については、「SQL管理ツールユーザズガイド」を参照してください。

なお、ここで設定したログインIDおよびパスワードを、ClientManagerのセットアップ時に設定します。

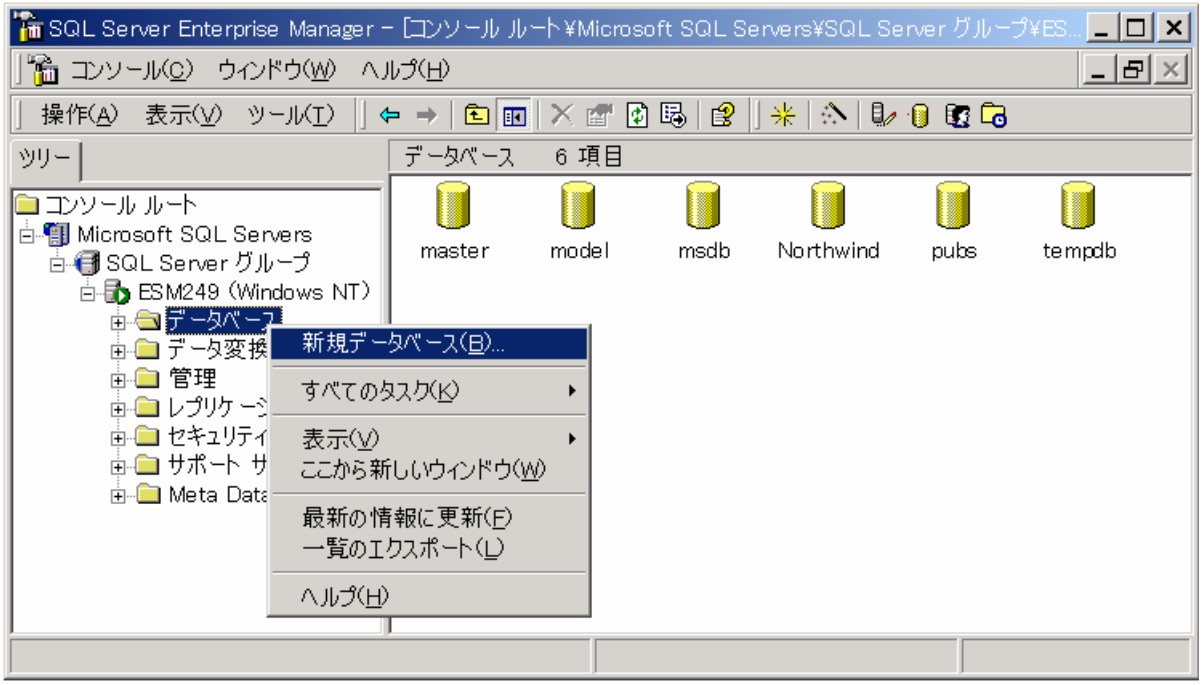
■ データベースの作成

ClientManagerが、構成情報を格納するのに使用するデータベースを作成します。

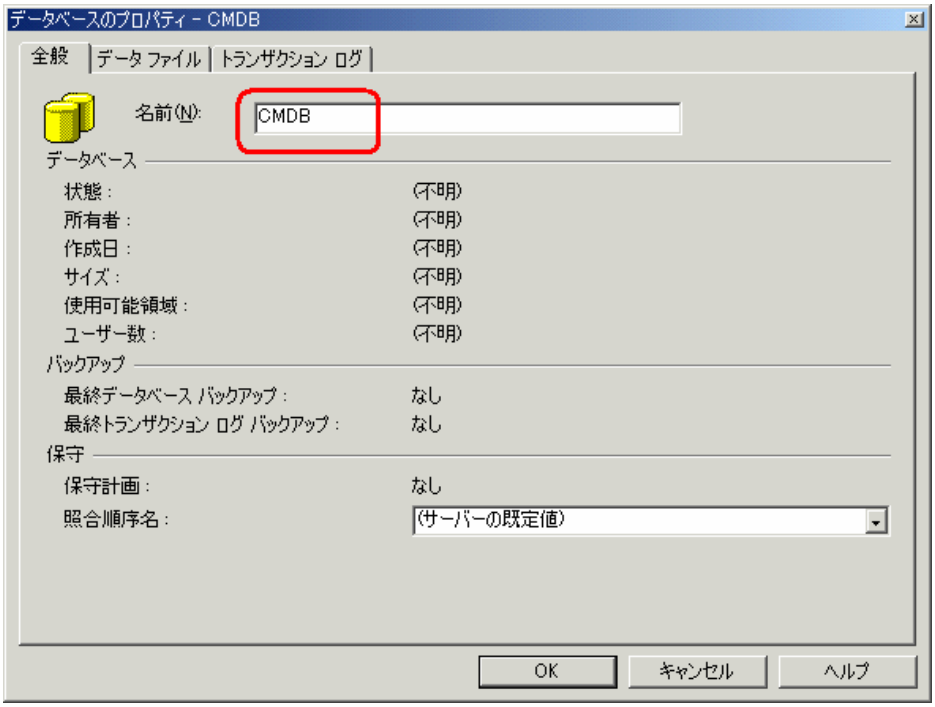
なお、ここで設定したデータベース名を、ClientManagerのセットアップ時に設定します。

SQL Server 2000の場合はSQL Enterprise Manager、SQL Server 2005の場合はSQL Server Management Studioを起動します。

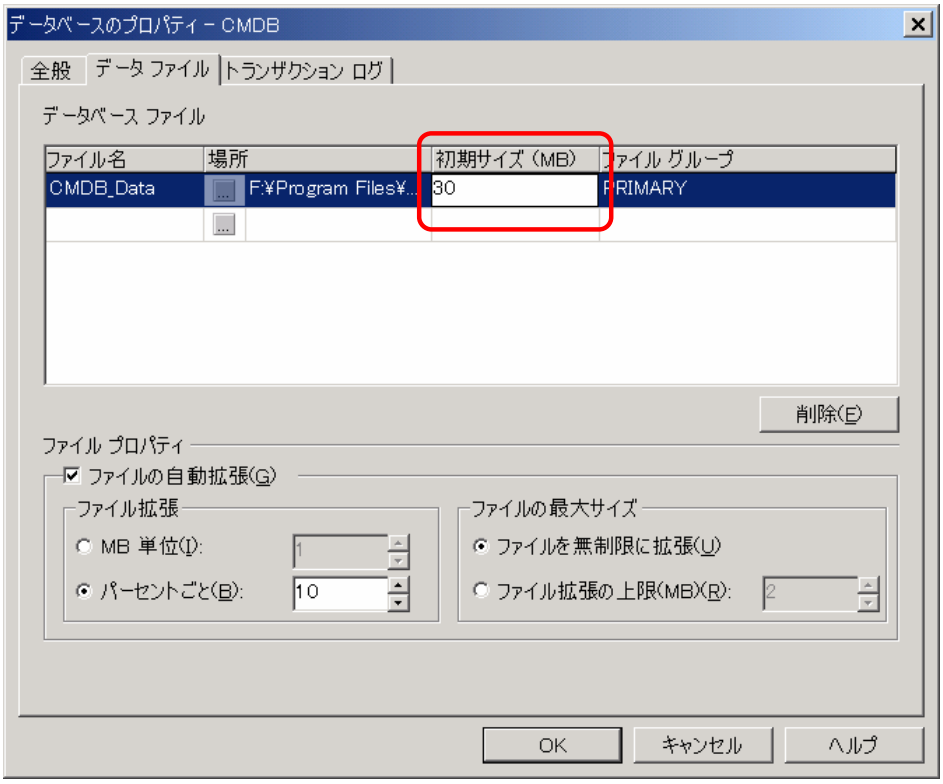
ツリーの中からデータベースを選択しメニューを表示し新規データベースを選択します。



「名前」を設定します。



「初期サイズ」を設定します。「初期サイズ」には容量算定した値を入れてください。



■　復旧モデルの設定

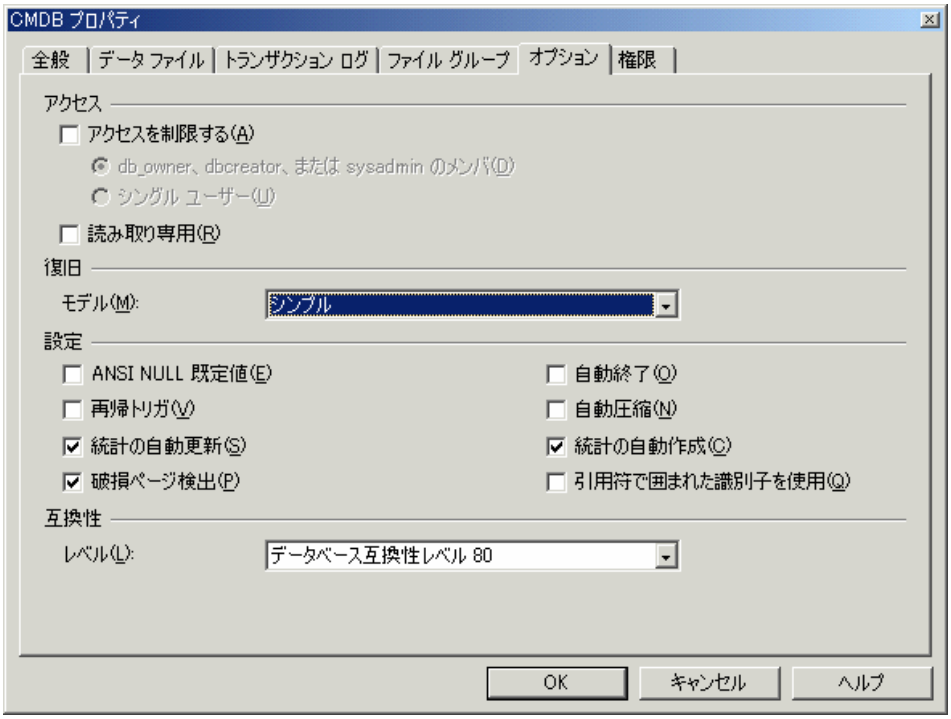
SQL Server 2000または2005を利用する場合、ログスペースが一杯になることを防ぐため、「復旧モデル」シンプル(単純)に設定することを推奨します。

設定方法を以下に示します。

作成した”CMDB”データベースに対してマウスの右クリックを行い、ポップアップメニューを表示します。ポップアップメニューの**プロパティ**をクリックします。

「CMDBプロパティ」ダイアログが表示されます。

「オプション」タブを選択して、「復旧モデル」を「シンプル」(「単純」)に変更してください。



4.2.3.4　SQL Server 7.0 のデータベースの作成

ここでは、ログインIDの設定方法とデータベースの作成方法について、例を示して説明します。これらの作業を行うためには、SQL Serverにシステムアドミニストレータ（sa）としてログインしなければなりません。

■　ログインIDの設定

ClientManagerが、SQL Serverにログインするためのログインの追加を行います。ログインの追加方法の詳細については、「SQL管理ツールユーザズガイド」を参照してください。

なお、ここで設定したログインIDおよびパスワードを、ClientManagerのセットアップ時に設定します。

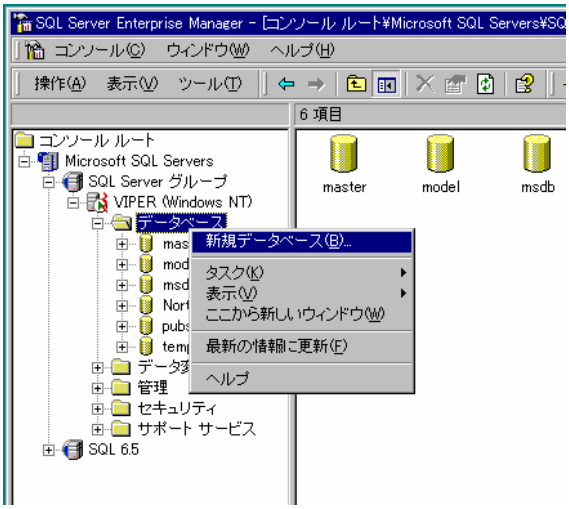
■　データベースの作成

ClientManagerが、構成情報を格納するのに使用するデータベースを作成します。

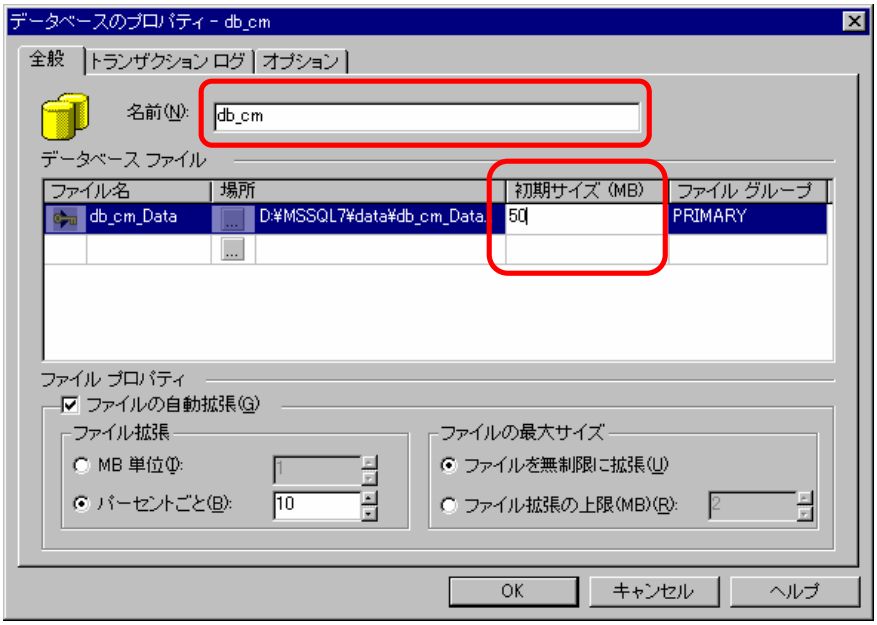
なお、ここで設定したデータベース名を、ClientManagerのセットアップ時に設定します。

SQL Enterprise Managerを起動します。

ツリーの中からデータベースを選択しメニューを表示し新規データベースを選択します。



「名前」、「初期サイズ」を設定します。



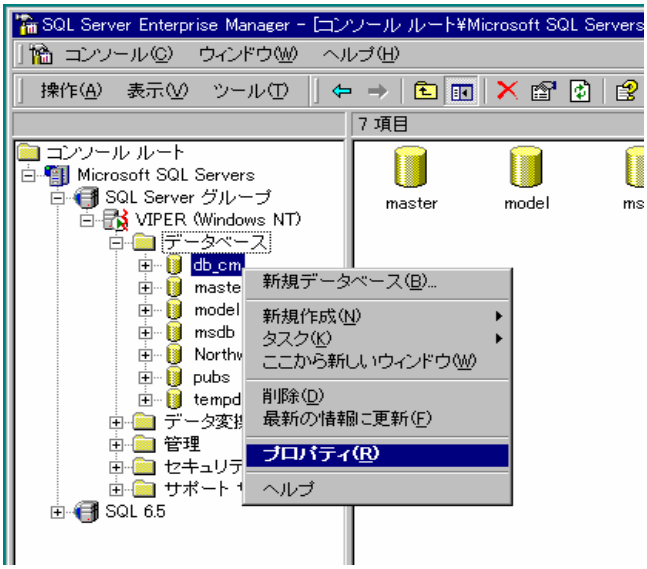
「初期サイズ」には容量算定した値を入れてください

■　ログ切り捨てオプションの設定

SQL Serverを利用する場合、ログスペースが一杯になることを防ぐため、「チェックポイント時のログ切り捨てオプション」を有効にすることを推奨します。

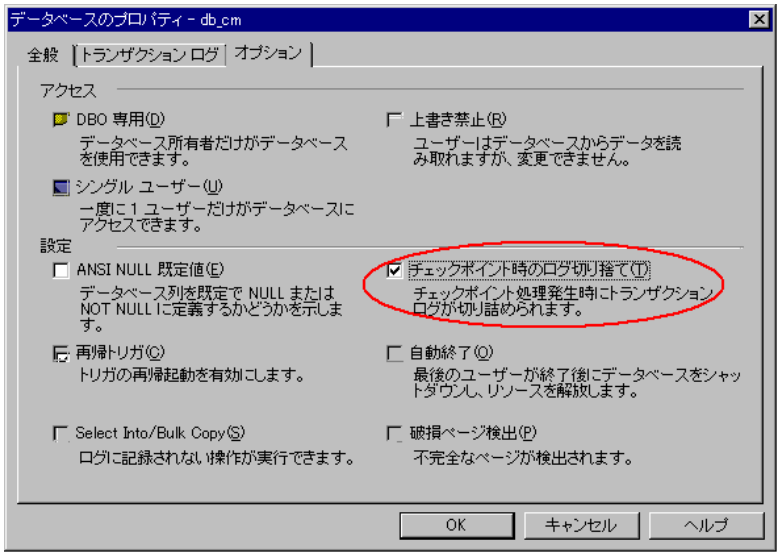
設定方法を以下に示します。

ログ切り捨てを行うデータベースに対してマウスの右クリックを行い、ポップアップメニューを表示します。ポップアップメニューの**プロパティ**をクリックします。



データベースの編集ダイアログが表示されます。

「オプション」を選択し「チェックポイント時のログの切り捨て」を選択します。

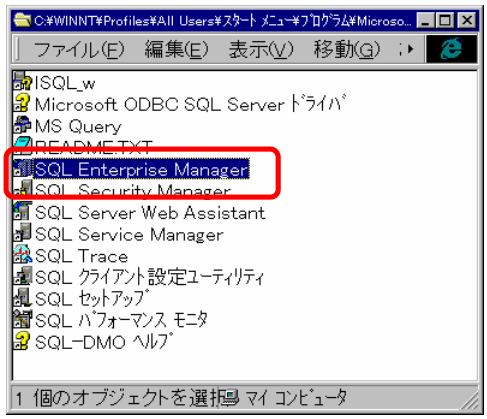


4.2.3.5　SQL Server6.5 のデータベースの作成

（1）ＳＱＬ Serverの設定

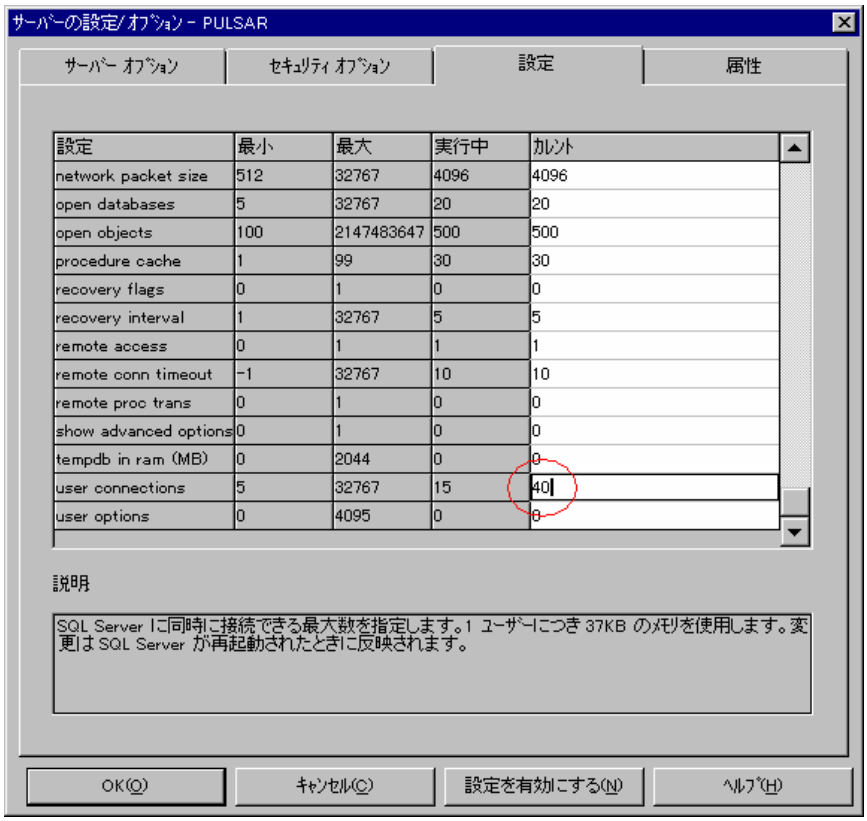
■　環境設定

SQL Enterprise Managerを起動します。



対象サーバでマウスの右ボタンをクリックし環境設定を選択します。

「設定」を選択しUser Connectionの数を３５以上に設定し「OK」ボタンを押します。



（2）SQL Serverの設定例

ここでは、ログインIDの設定方法と論理デバイスの作成方法について、例を示して説明します。これらの作業を行うためには、SQL Serverにシステムアドミニストレータ（sa）としてログインしなければなりません。

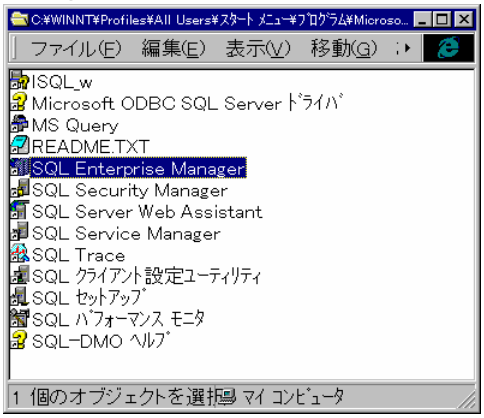
■　ログインIDの設定

ClientManagerが、SQL Serverにログインするためのログインの追加を行います。ログインの追加方法の詳細については、「SQL管理ツールユーザズガイド」を参照してください。

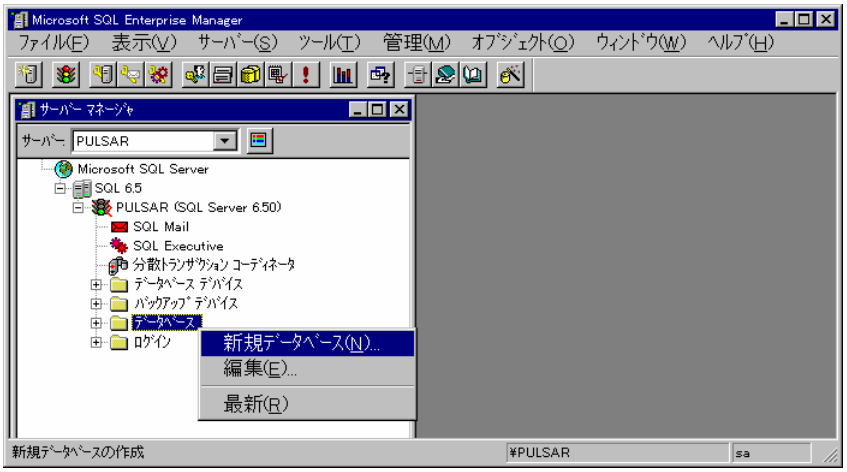
なお、ここで設定したログインIDおよびパスワードを、ClientManagerのセットアップ時に設定します。

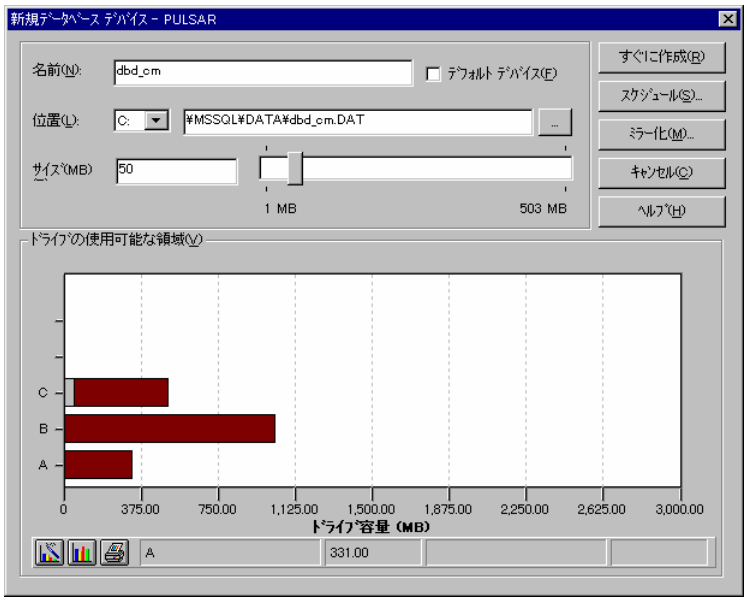
■　デバイスとデータベースの作成

SQL Enterprise Managerを起動します。



ツリーの中のデータベースデバイスからメニューを出し新規デバイスを選びます。

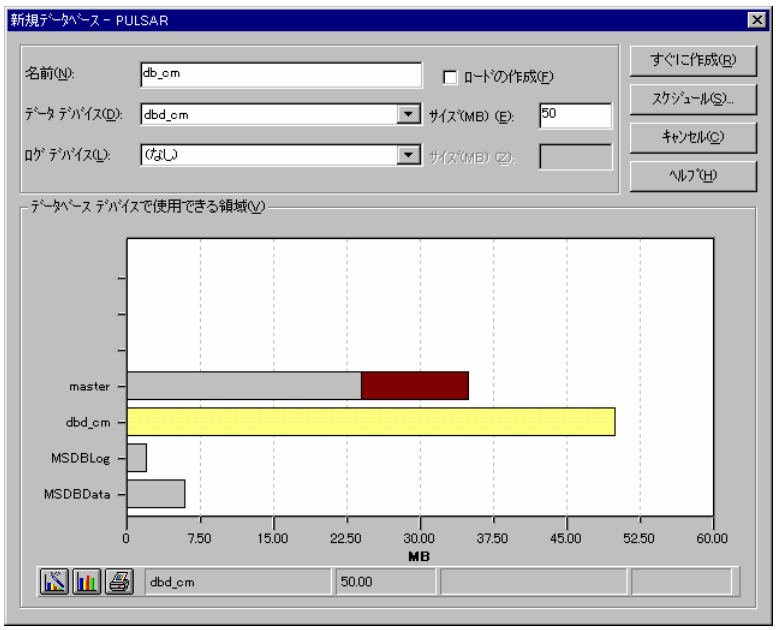




「名前」、「位置」、「サイズ」を設定しデータベースデバイスを作成します。

次に、データベースの作成を行います。

ツリーの中からデータベースを選択しメニューを表示し新規データベースを選択します。

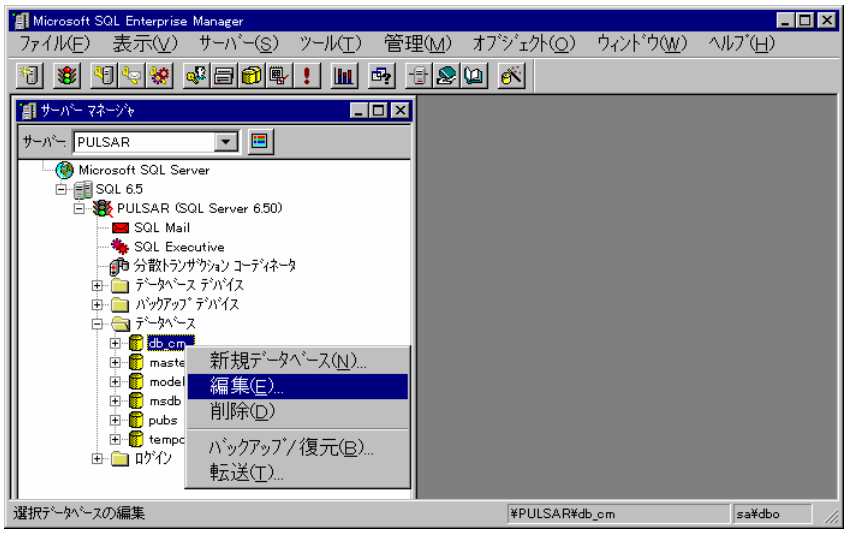


「名前」、「データデバイス」を設定し作成します。

■　ログ切り捨てオプションの設定

SQL Serverを利用する場合、ログスペースが一杯になることを防ぐため、「チェックポイント時のログ切り捨てオプション」を有効にすることを推奨します。

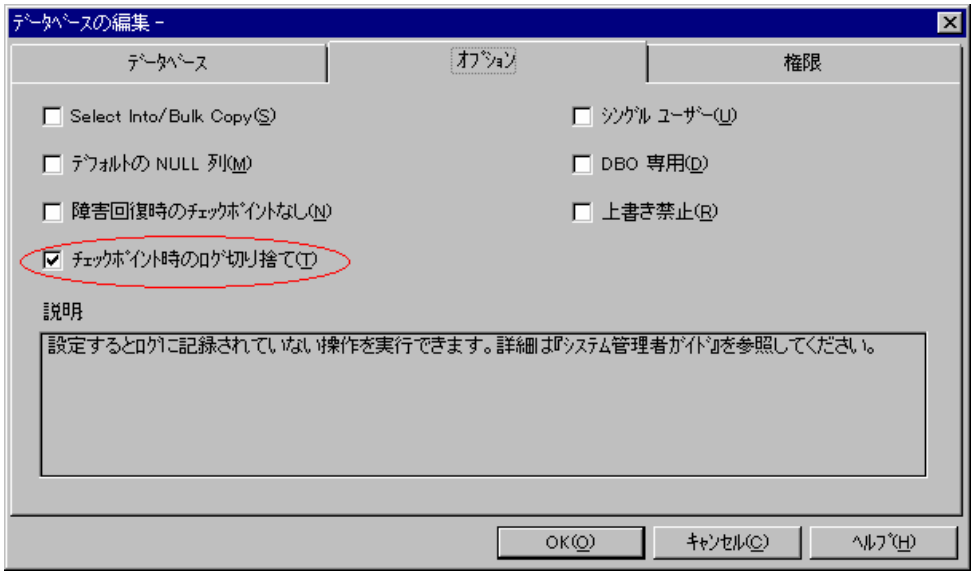
設定方法の一例を以下に示します。



ログ切り捨てを行うデータベースに対してマウスの右クリックを行い、ポップアップメニューを表示します。メニューの編集をクリックします。

データベースの編集ダイアログが表示されます。

「オプション」を選択し「チェックポイント時のログの切り捨て」を選択します。



4.2.3.6　CM データベースエンジンのデータベースの作成

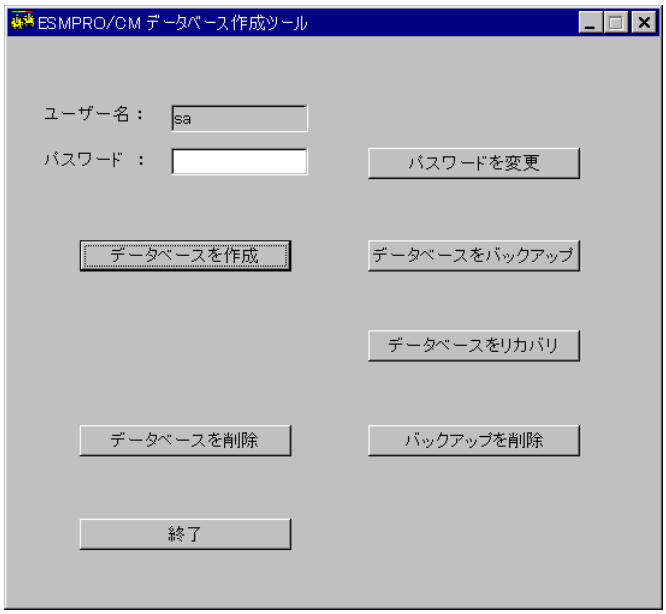
■　自動起動の設定の確認

「SQL Server サービスマネージャ」を起動します。
「OS起動時にサービスを自動的に開始」チェックボタンがチェックされている事を確認します。

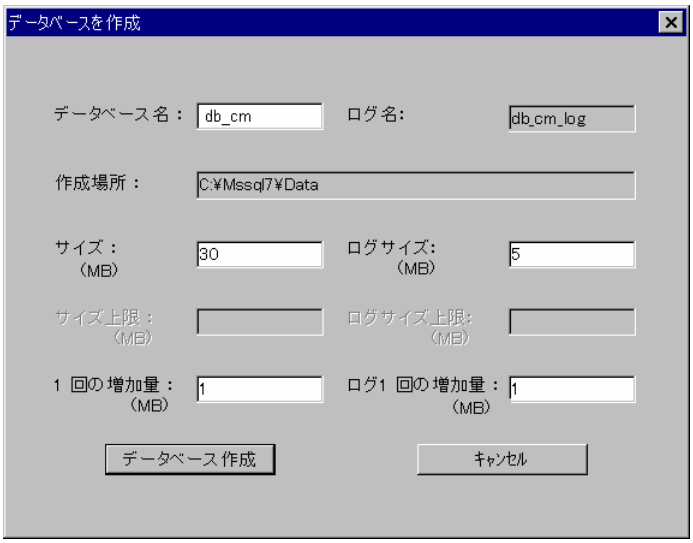
起動状態が、「停止」の場合には、「開始/再開」ボタンを押して開始します。

■　データベースの作成

「スタート」―「ESMPRO_CMDBE」―「データベースの作成ツール」を起動します。



パスワード(初期値は"esmprocm")を入力し、＜データベースを作成＞ボタンを押して「データベースを作成」ダイアログを起動します。



ここで、データベース名を入力して、＜データベース作成＞ボタンを押します。

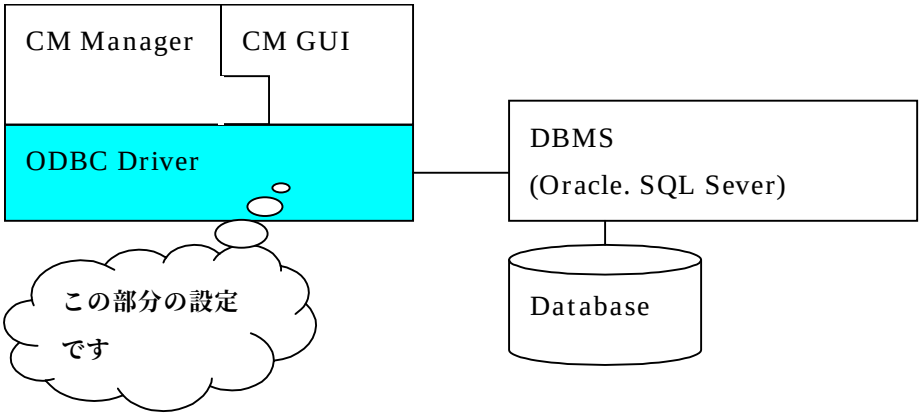
＜終了＞ボタンを押して　データベースの作成ツールを終わります。

4.2.3.7　ODBC ドライバの設定

■　ODBCドライバのインストール

ClientManagerを導入するシステムには、ODBCドライバがインストールされていなければなりません。ODBCドライバのインストールは、ODBCドライバ製品パッケージ中のインストールツールを起動して行います。インストール作業の詳細については、ODBCドライバ製品パッケージに添付されているマニュアルを参照してください。

ODBCデータソースの設定時には、必ずシステムデータソース（“システムDSN”）で設定してください。



以下、例として、ORACLE 、SQL Serverサーバ、のODBC Driverのインストール方法について説明します。

■ Oracle10g ODBC Driverのインストール

Oracle10g ODBC Driverのインストールは、「Oracle® Database 10g Clientのインストール・メディア」をデバイスにセットしたときに起動するインストーラ(「Oracle® Database 10g Clientのインストール・メディア」のルートディレクトリにあるSetup.exe)から行います。

実行するインストールのタイプとして [InstantClient]、[管理者]、[ランタイム]、[カスタム]が選択でき、カスタムインストールを行う事ができます。カスタムインストールを行う場合はどれを選択しても構いませんが、[Oracle ODBC Driver]のほかに [Oracle Net]をインストールする必要があります。カスタムインストール[カスタム]で [Oracle ODBC Driver]のみインストールしても ODBC Administratorでデータソースを登録することはできません。

■ ORACLE9i ODBC Driverのインストール (Windows 98)

ORACLE9i ODBC Driverのインストールは、ORACLE9iのCD－ROMをデバイスにセットしたときに起動するインストーラ(CD－ROMのルートディレクトリにあるSetup.exe)から行います。

Windows 98の場合、実行するインストールのタイプとして [Oracle9i Client]と [カスタム・インストール]が選択でき、カスタムインストールを行う事ができます。どちらを選択しても構い

ませんが、カスタムインストールを行う[カスタム・インストール]を選択した場合は [ORACLE ODBC Driver]のほかに [ORACLE Net Client]をインストールする必要があります。

カスタムインストール[カスタム・インストール]で [ORACLE ODBC Driver]のみインストールしても ODBC Administratorでデータソースを登録することはできません。

■ ORACLE9i ODBC Driverのインストール (Windows XP、Windows 2000、Windows NTPro)

ORACLE9i ODBC Driverのインストールは、ORACLE9iのCD－ROMをデバイスにセットしたときに起動するインストーラ(CD－ROMのルートディレクトリにあるSetup.exe)から行います。

Windows NT、Windows 2000、Windows XPの場合、実行するインストールのタイプとして [Oracle9i DataBase]、[Oracle8 Oracle9i Client]、[カスタム・インストール]が選択でき、カスタムインストールを行う事ができます。カスタムインストールを行う場合はどれを選択しても構いませんが、[ORACLE ODBC Driver]のほかに [ORACLE NetORACLE Net8]をインストールする必要があります。カスタムインストール[カスタム・インストール]で [ORACLE ODBC Driver]のみインストールしても ODBC Administratorでデータソースを登録することはできません。

■ ORACLE8 ODBC Driverのインストール (Windows 98、Windows 95Windows 95)

ORACLE8 ODBC Driverのインストールは、ORACLE8のCD－ROMをデバイスにセットしたときに起動するインストーラ(CD－ROMのルートディレクトリにあるSetup.exe)から行います。

Windows 95,Windows 98の場合、実行するインストールのタイプとして [Oracle8 Client]と[カスタム・インストール]が選択でき、どちらを選択しても構いませんが、[カスタム・インストール]を選択した場合は [ORACLE ODBC Driver]のほかに [ORACLE Net8]をインストールする必要があります。

[カスタム・インストール]で [ORACLE ODBC Driver]のみインストールしても ODBC Administratorでデータソースを登録することはできません。

■ ORACLE8 ODBC Driverのインストール (Windows NT)

ORACLE8 ODBC Driverのインストールは、ORACLE8のCD－ROMをデバイスにセットしたときに起動するインストーラ(CD－ROMのルートディレクトリにあるSetup.exe)から行います。

Windows NTの場合、実行するインストールのタイプとして [Oracle8 Enterprise Edition]、[Oracle8 Client]、[カスタム・インストール]が選択でき、どれを選択しても構いませんが、[カスタム・インストール]を選択した場合は [ORACLE ODBC Driver]のほかに [ORACLE Net8]をインストールする必要があります。[カスタム・インストール]で [ORACLE ODBC Driver]のみインストールしても ODBC Administratorでデータソースを登録することはできません。

■ ORACLE7 ODBC Driverのインストール

ORACLE7に付属している、ODBC Driverはマルチスレッド対応が行われていません
そのため、マルチスレッド対応が行われている、メラント社(旧 Intersolv社)の DataDirect Connect ODBC Ver3.1,3.5 を使用してください。Oracle7 のODBCドライバは、2002年より、メラント社の部門が独立して、データディレクトテクノロジーズ社が販売＆サポートしています。

■ SQL Server 7.0 ODBC Driverのインストール(Windows NT、Windows 98、Windows 95)

SQL Server 7.0 ODBC Driverのインストールは、SQL Server 7.0のCD-ROMの¥x86¥OTHERフォルダに格納されているmdac_typ.exe (Microsoft Data Access 2.1)を実行することで行います。

■ SQL Server 6.5 ODBC Driverのインストール (Windows NT、Windows 98、Windows 95)

SQL Server 6.5 ODBC Driverのインストールは、SQL Server 6.5のインストーラが存在するディレクトリにある［ODBC］フォルダ内のSetup.exeを実行することで行います。

■ CMデータベースエンジン ODBC Driverのインストール

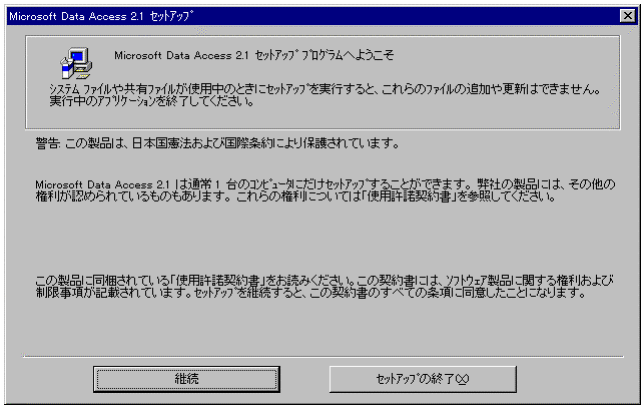
CMデータベースエンジン ODBC Driverのインストールは以下の手順で行います。

① CMデータベースエンジン ODBC Driverのセットアップを起動します。

CMデータベースエンジン ODBC Driverのセットアップは、「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入し、¥CLIENT¥NT95¥ESMCMM¥(メジャーバージョン,マイナーバージョン)¥CMODBC に格納されているmdac_typ.exeを実行してください。これにより、Microsoft Data Access (MDAC) 2.8がインストールされます。（Windows2000、Windows xp,WindowsSV2003では もともとCMデータベースエンジン(MSDE2000)に対応したバージョンのMDACがインストールされています。）

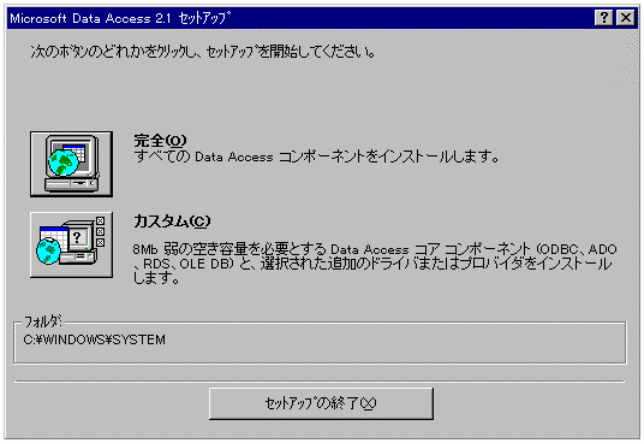
例えば、ESMPRO/CM 4.0では、「NEC Expressサーバ Express5800シリーズ Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #2 (3/3)」と書かれているCD-ROMの¥CLIENT¥NT95¥ESMCMM¥40¥CMODBCに格納されているmdac_typ.exeを実行します。

② セットアップが起動すると以下のメッセージが表示されます。[継続]ボタンを押してください。



③ セットアップの選択のメッセージについては[完全]を選択してください。

尚、CMデータベースエンジン ODBC ドライバの設定については、「4.2.3.13SQL Server 7.0 / 2000 / 2005のODBCドライバの設定例」を参照してください。


Microsoft Data Access 2.1 ｾｯﾄｱｯﾌﾟ
次のﾎﾞﾀﾝのどれかをｸﾘｯｸし、ｾｯﾄｱｯﾌﾟを開始してください。
完全(O)
すべての Data Access コンポーネントをインストールします。
カスタム(C)
8Mb 弱の空き容量を必要とする Data Access コア コンポーネント (ODBC、ADO、RDS、OLE DB) と、選択された追加のドライバまたはプロバイダをインストールします。
ﾌｫﾙﾀﾞ:
C:¥WINDOWS¥SYSTEM
ｾｯﾄｱｯﾌﾟの終了(X)

4.2.3.8　Oracle10g の ODBC ドライバの設定例

（1）データベース別名(サービス名)の設定

Oracle Netを使用する場合にはサービス名を設定する必要があります。

これは、OracleをCMマネージャと異なるコンピュータ（データベースサーバ）にインストールする場合には、CMマネージャをインストールする Oracle Clientをインストールしたコンピュータで必要な作業です。

ここでは、「Oracle Net Configuration Assistant」または「Oracle Net Manager」ツールを使用してデータベース別名を設定する方法について説明します。

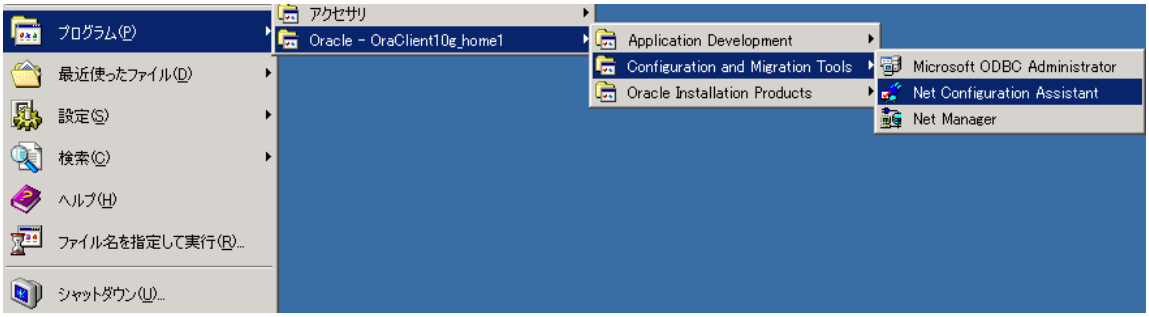
なお、データベース別名を設定しなければ、Oracle Netを使用してClientManagerは起動できません。

また、Oracle Netの場合の[OracleHOME_NAME]TNSListenerサービスが、「手動」になっている場合は「自動」に変更してください。「手動」の場合は、ClientManagerは起動できません。

■　Oracle10gで「Oracle Net Configuration Assistant」を使用する場合

ORACLEをインストールした場合に、「Net Configuration Assistant」が作成された場合は、これを使ってサービス名を設定します。

「Net Configuration Assistant」を選択し起動します。



ローカル・ネット・サービス名構成を選択します。

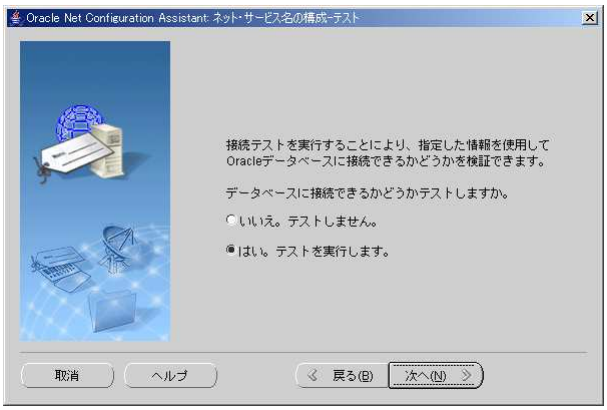
「追加」を選択します。

グローバル・データベース名を入力します。

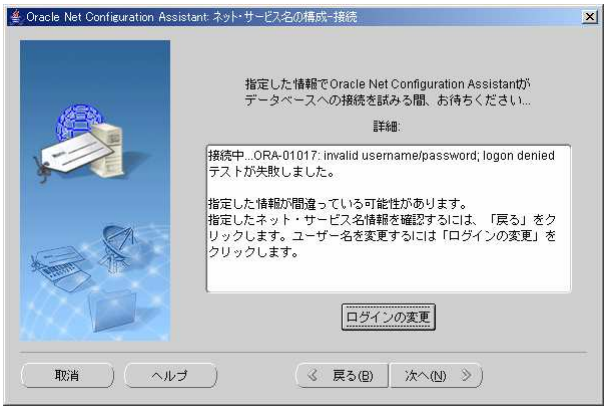
「TCP」を選択します。

データベースがあるコンピュータのホスト名を入力します。

テストの実行を選択します。

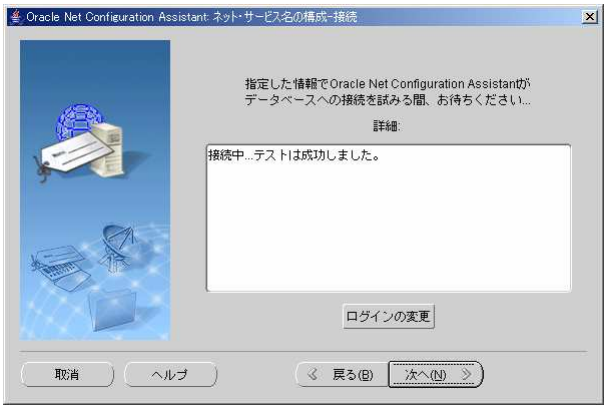


テストの結果が表示されます。



「ログインの変更」を選択し、ログインのアカウントを、作成したユーザに変更します。

接続テストが成功しない場合にはメッセージの番号でエラー原因を特定し、問題を修正します。



ネットサービス名を入力します。

「いいえ」を選択します。

そのまま次に進みます。

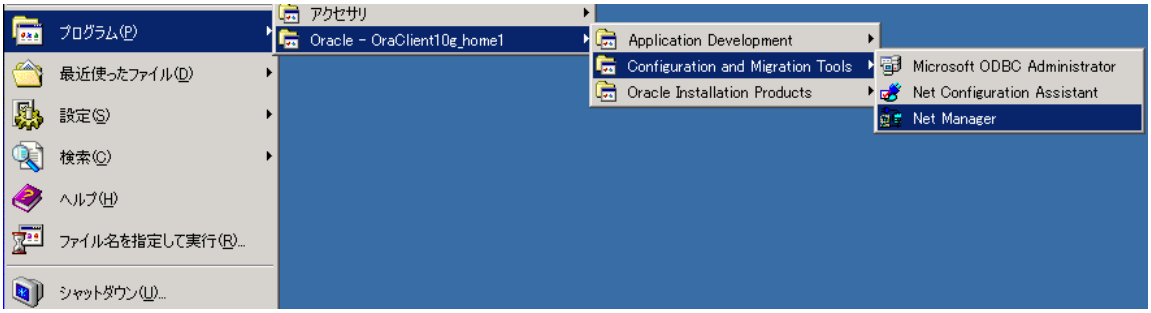
「終了」を選択します。

Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ
Oracle Net Configuration Assistantへようこそ。
このツールを使用すると、次の一般的な構成手順
を実行できます。
実行する構成を選択してください。:
リスナー構成
ネーミング・メソッド構成
ローカル・ネット・サービス名構成
ディレクトリ使用構成
取消
ヘルプ
戻る(B)
次へ(N)
終了(F)

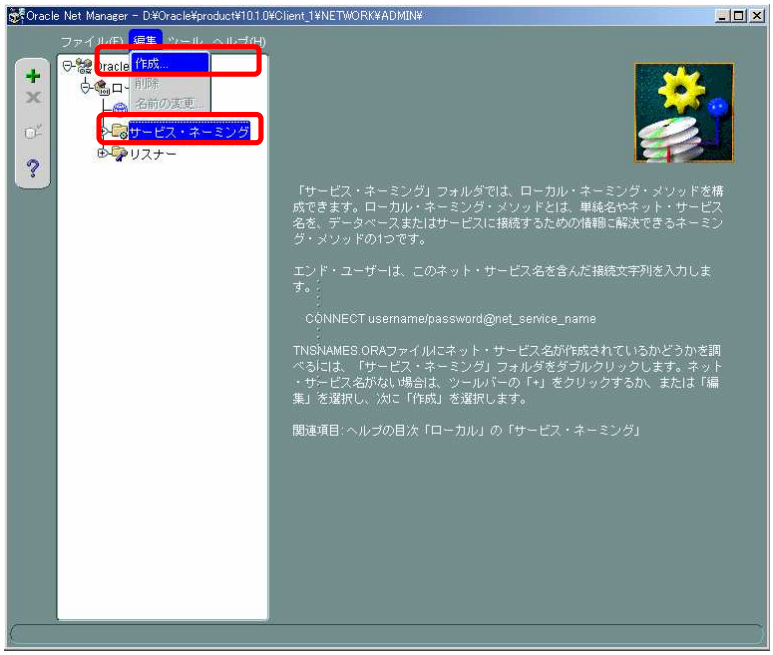
■　Oracle10gで「Oracle Net Manager」を使用する場合

ORACLEをインストールした場合に、「Oracle Net Manager」が作成された場合は、これを使ってサービス名を設定します。

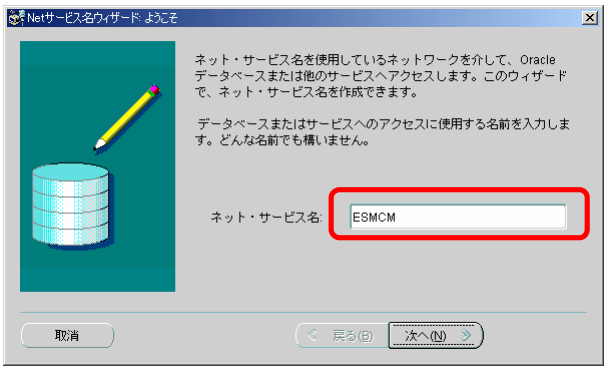
「Net Manager」を選択し起動します。



「サービス・ネーミング」で「編集」-「作成」を選択します。



新規に作成するサービス名を入力します。
（ここで設定した値はODBCの設定で「サービス名」として、CMマネージャのDBの設定で「SQL＊NET文字列」として使用します。）

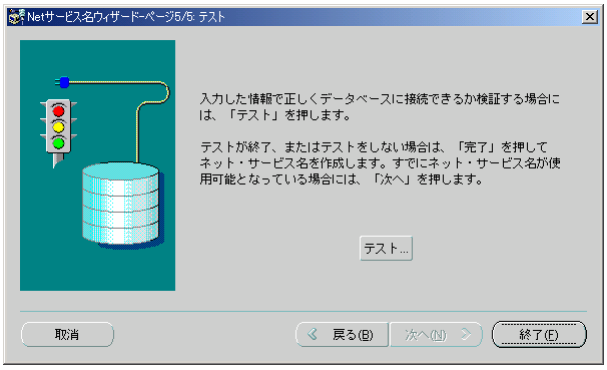


利用するプロトコルを選択します。

選択したプロトコルに応じた設定を行います。

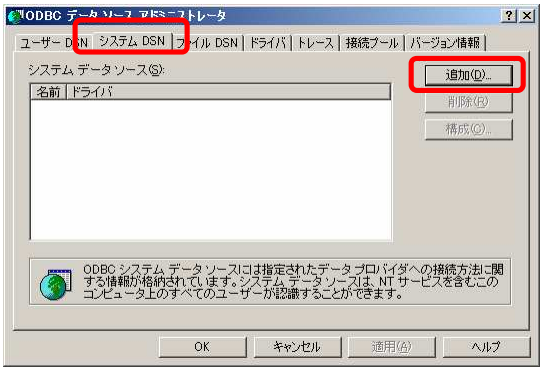
データベースの作成時に指定したサービス名を指定します。

テストを行い、終了します。



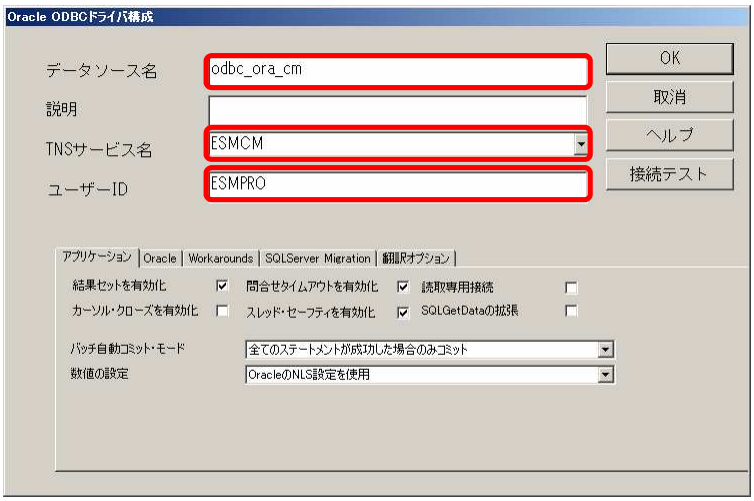
（2）データソースの設定

[コントロールパネル]-[ODBC]または、[コントロールパネル]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を動します。[システムDSN]を選択します。



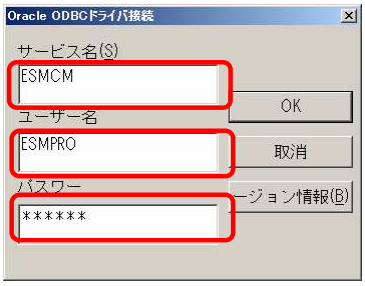
設定を行うOracle10gのドライバを選択します。Microsoft社が提供する Microsoft ODBC for Oracle は利用できませんので選択してはいけません。

データソース名、サービス名、ユーザ名を入力します。

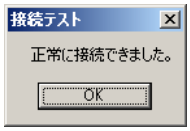


データソース名	任意のデータソース名を指定します（ClientManagerインストール時に使用します）。
ＴＮＳサービス名	Oracle10gで作成したサービス名を指定します。
ユーザ名	Oracle10gで作成したユーザ名を指定します。

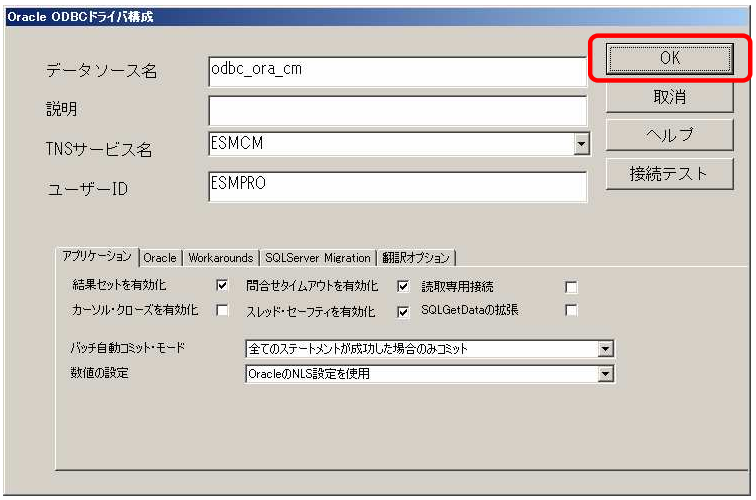
＜接続テスト＞ボタンを押します。



接続に成功したら＜OK＞ボタンを押します。接続に失敗したら設定を見直します。



＜OK＞ボタンを押します。



4.2.3.9　Oracle9i の ODBC ドライバの設定例

（1）データベース別名(サービス名)の設定

Oracle Netを使用する場合にはサービス名を設定する必要があります。

これは、OracleをCMマネージャと異なるコンピュータ（データベースサーバ）にインストールする場合には、CMマネージャをインストールする Oracle Clientをインストールしたコンピュータで必要な作業です。

ここでは、「Oracle Net Configuration Assistant」または「Oracle Net Manager」ツールを使用してデータベース別名を設定する方法と、手動で設定する方法について説明します。

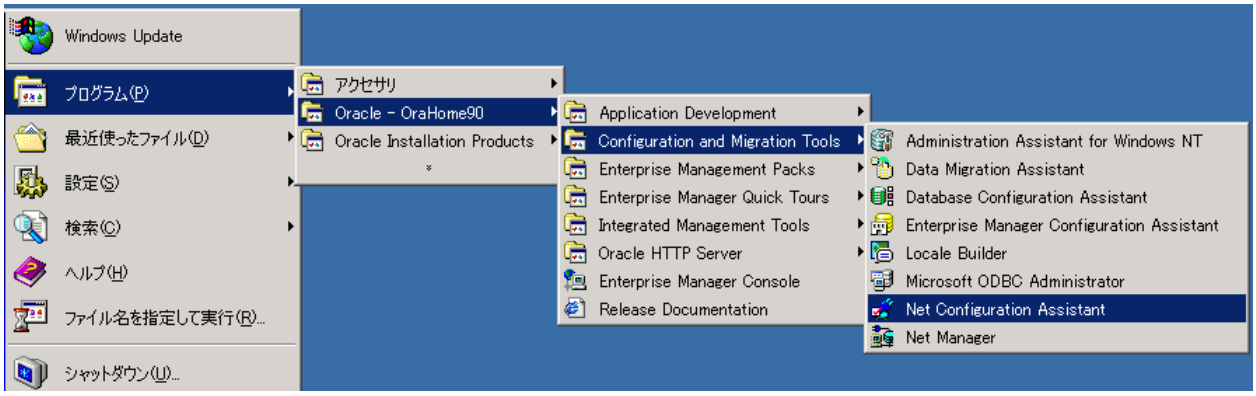
なお、データベース別名を設定しなければ、Oracle Netを使用してClientManagerは起動できません。

また、Oracle Netの場合の[OracleHOME_NAME]TNSListenerサービスが、「手動」になっている場合は「自動」に変更してください。「手動」の場合は、ClientManagerは起動できません。

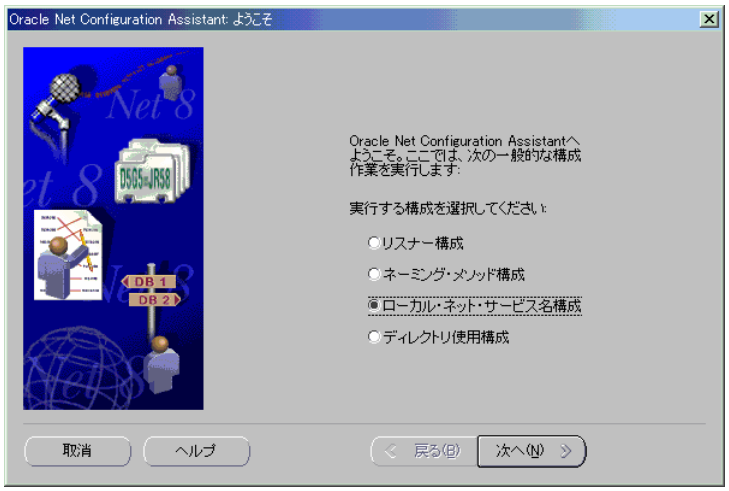
■　Oracle9iで「Oracle Net Configuration Assistant」を使用する場合

ORACLEをインストールした場合に、「Net Configuration Assistant」が作成された場合は、これを使ってサービス名を設定します。

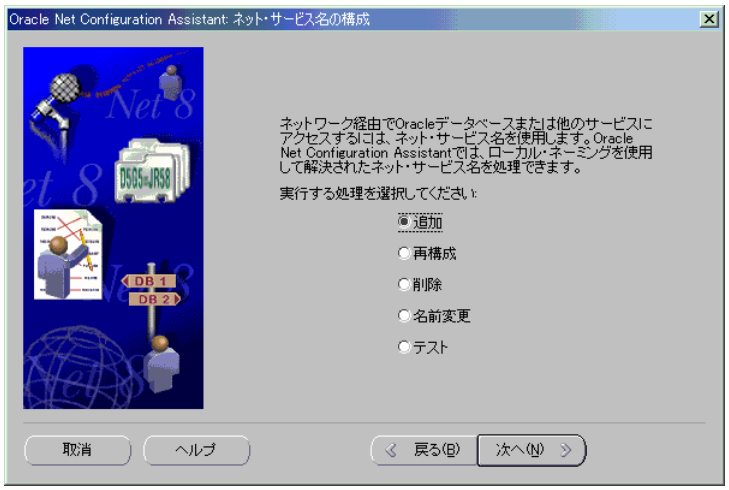
「Net Configuration Assistant」を選択し起動します。



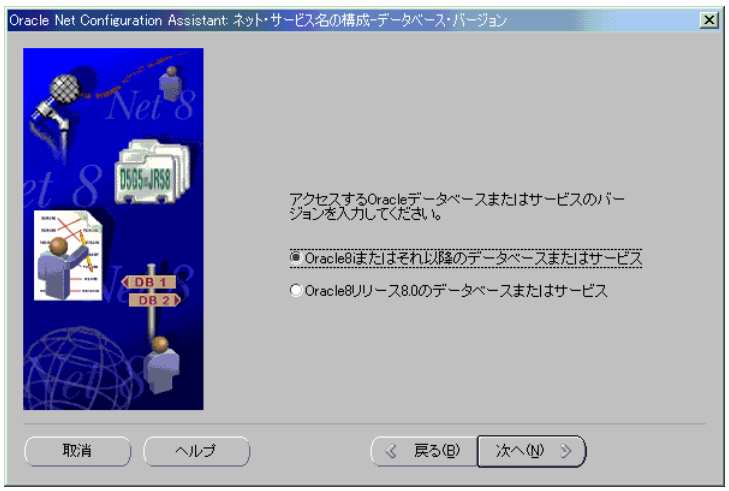
ローカルネットサービス名構成を選択します。



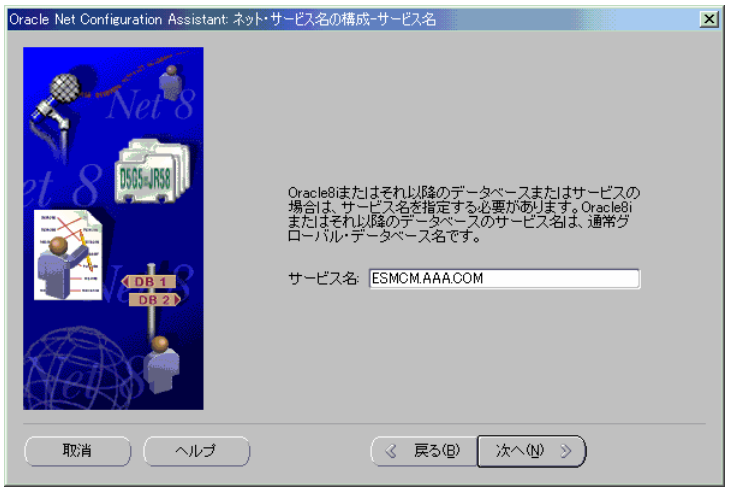
「追加」を選択します。



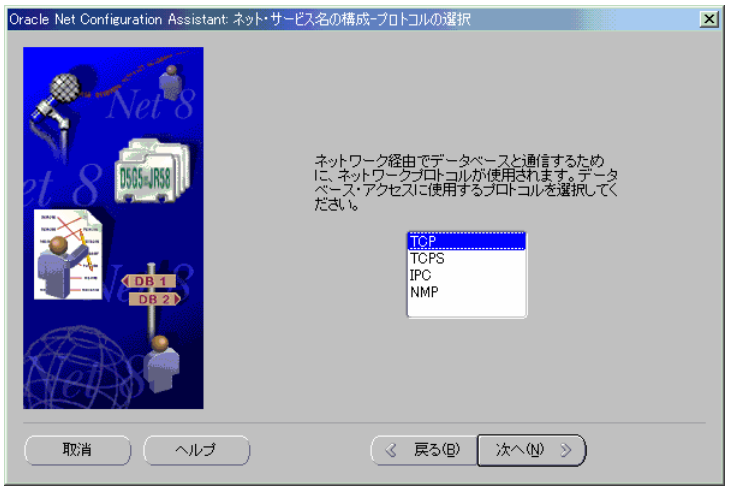
「Oracle8iまたはそれ以降のデータベースまたはサービス」を選択します。



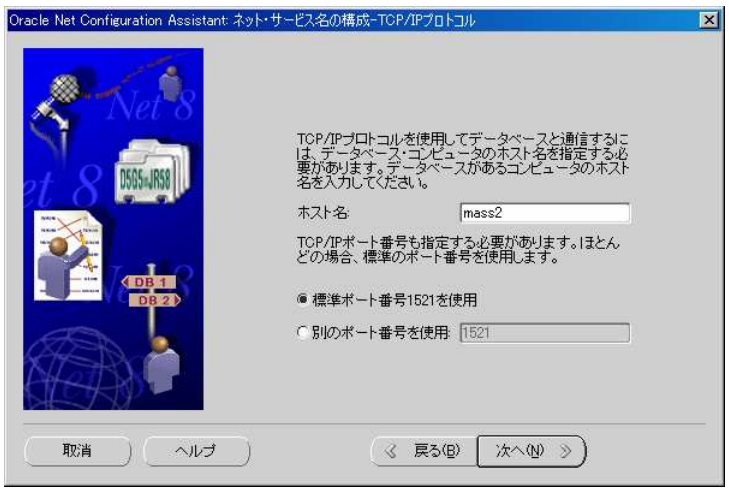
グローバルデータベース名を入力します。



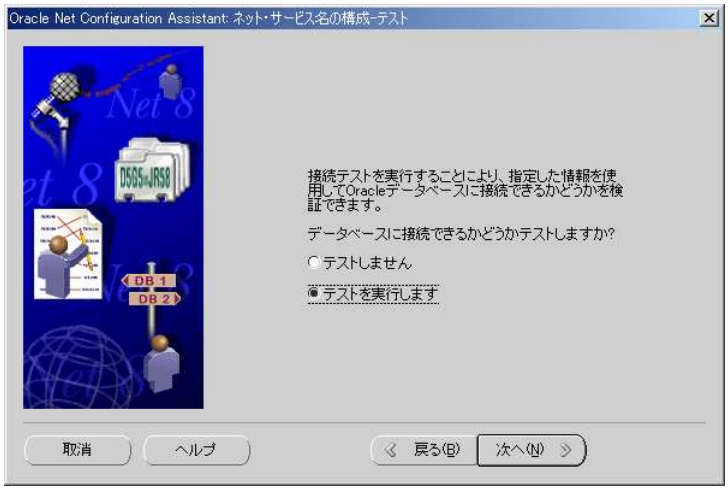
「TCP」を選択します。



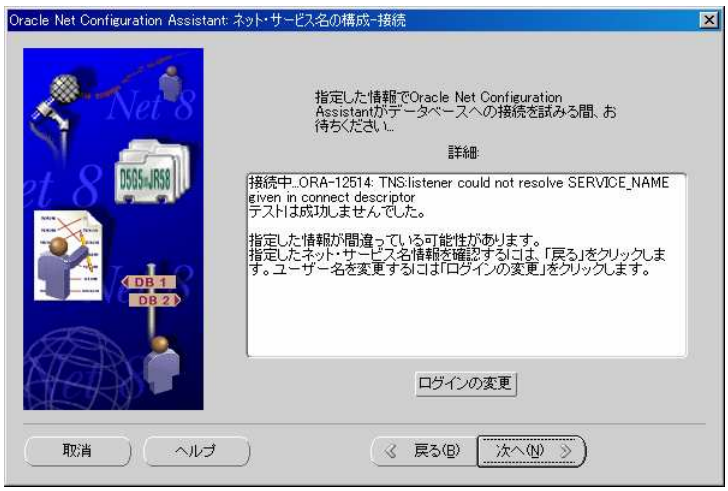
データベースがあるコンピュータのホスト名を入力します。



テストの実行を選択します。



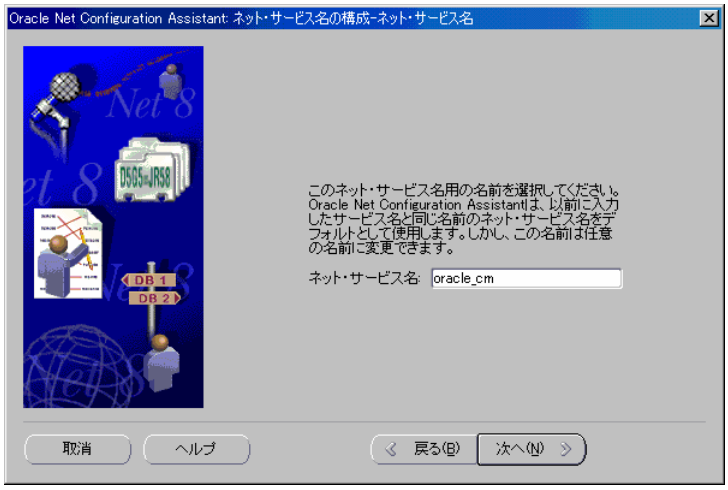
テストの結果が表示されます。



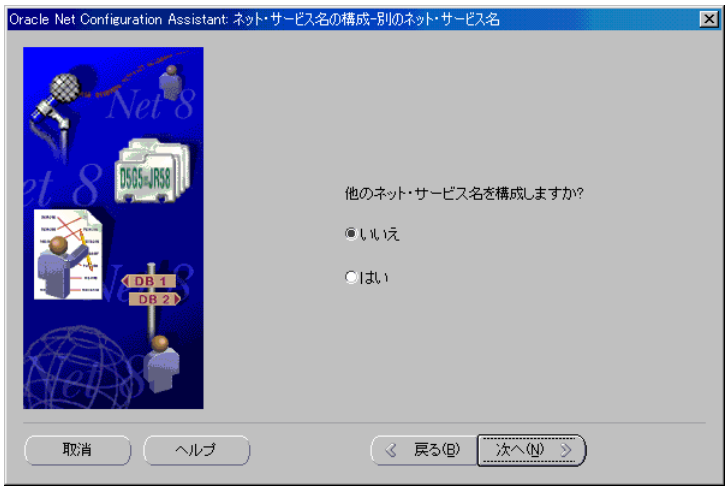
＜ログインの変更＞ボタンを押してログインのアカウントを、作成したユーザに変更します。

接続テストが性能しない場合にはメッセージの番号でエラー原因を特定し、問題を修正します。

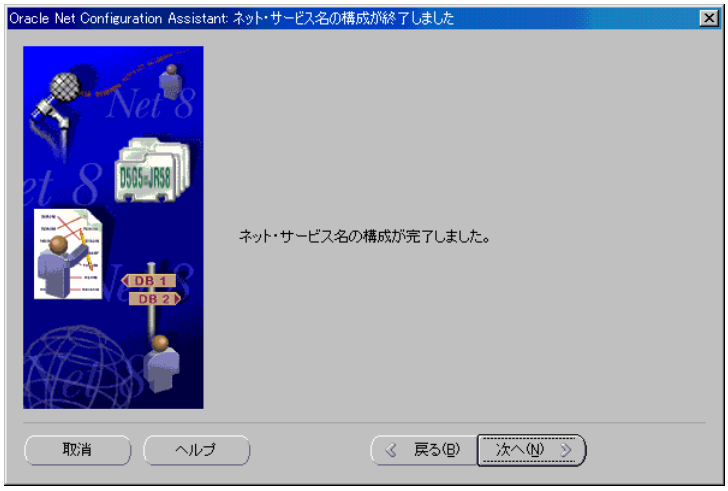
ネットサービス名を入力します。



「いいえ」を選択します。



そのまま次に進みます。

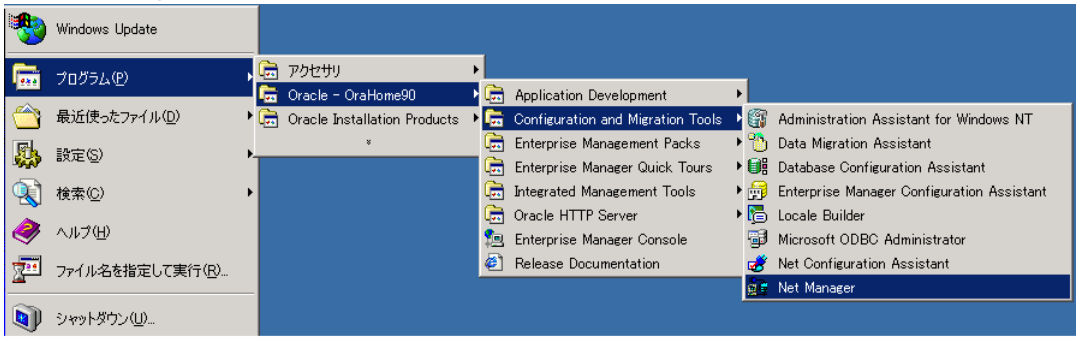


「完了」ボタンを選択します。

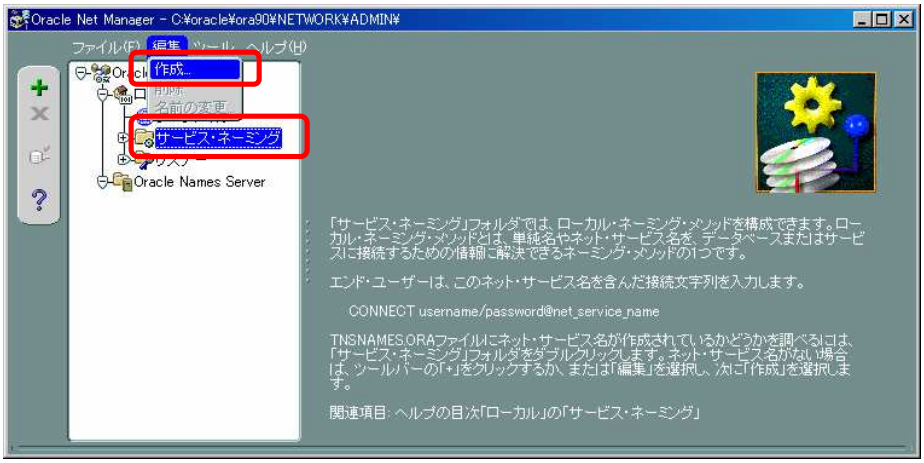
■　Oracle9iで「Oracle Net Manager」を使用する場合

ORACLEをインストールした場合に、「Oracle Net Manager」が作成された場合は、「Oracle Net Manager」ツールを使ってサービス名を設定します。

「Net Manager」を選択し起動します。

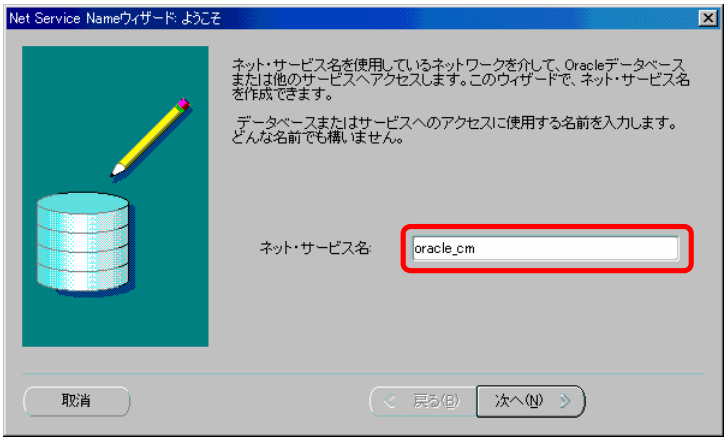


「サービス・ネーミング」で「編集」-「作成」を選択します。

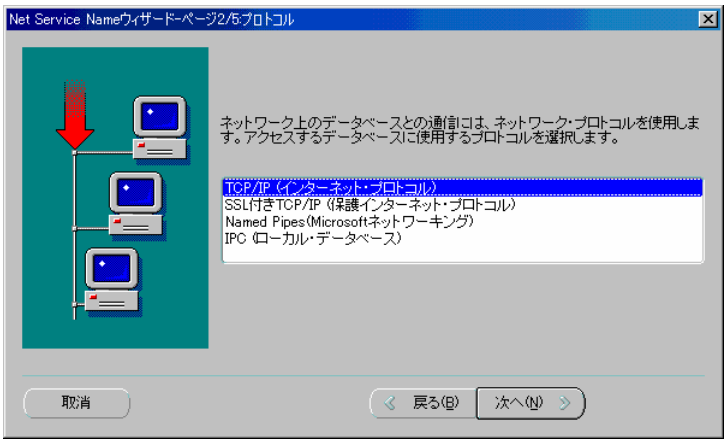


新規に作成するサービス名を入力します。

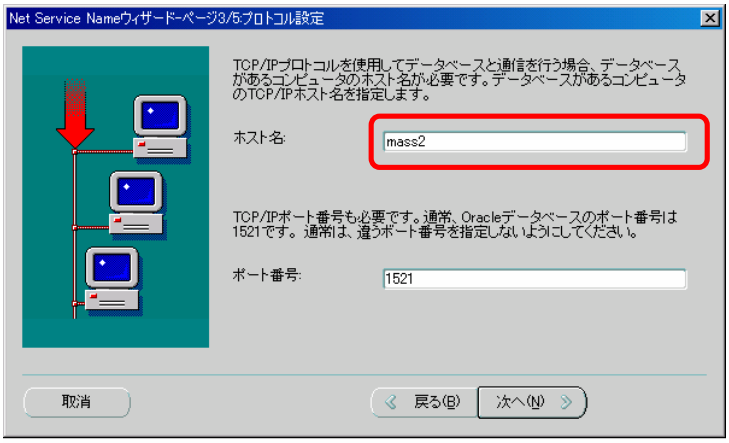
（ここで設定した値はODBCの設定で「サービス名」として、CMマネージャのDBの設定で「SQL＊NET文字列」として使用します。）



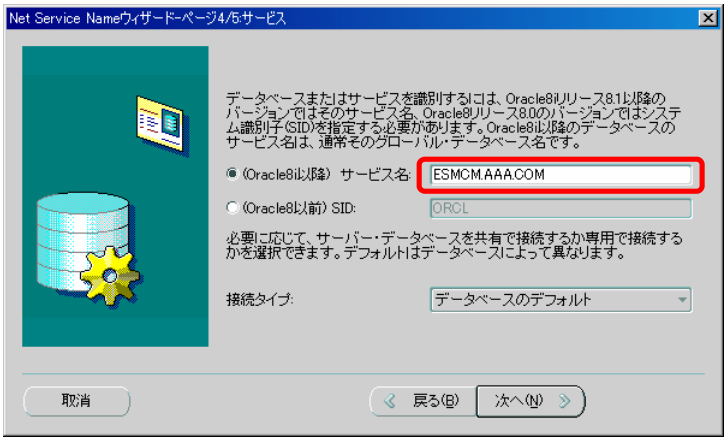
利用するプロトコルを選択します。



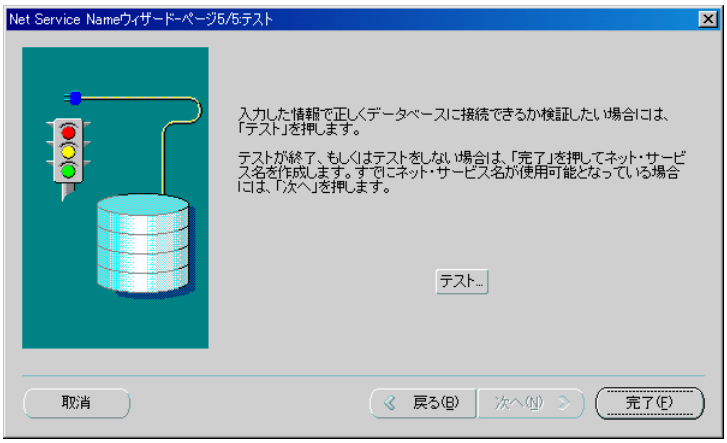
選択したプロトコルに応じた設定を行います。



データベースの作成時に指定したサービス名を指定します。

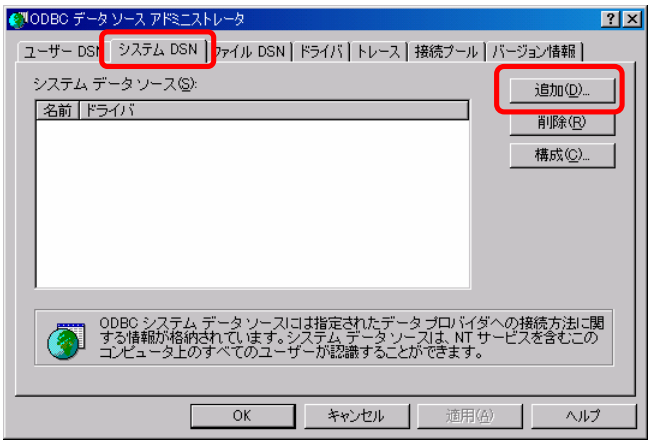


テストを行い終了します。

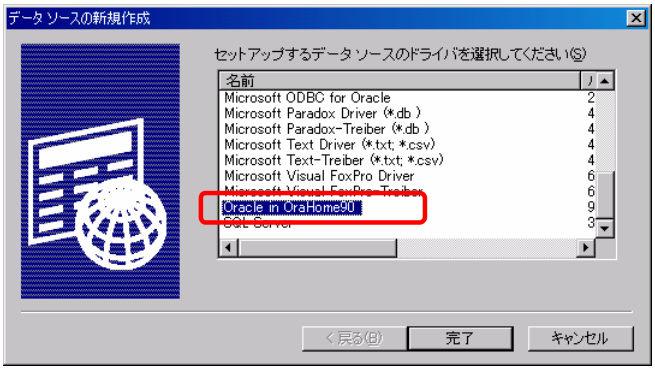


（2）データソースの設定

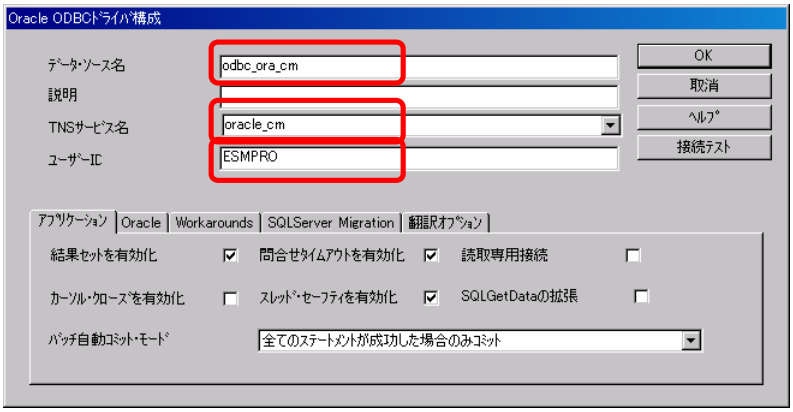
[コントロールパネル]-[ODBC]または、[コントロールパネル]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を動します。[システムDSN]を選択します。



設定を行うOracle9iのドライバを選択します。Microsoft社が提供する Microsoft ODBC for Oracleは利用できませんので選択してはいけません。



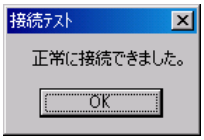
データソース名、サービス名、ユーザ名を入力します。



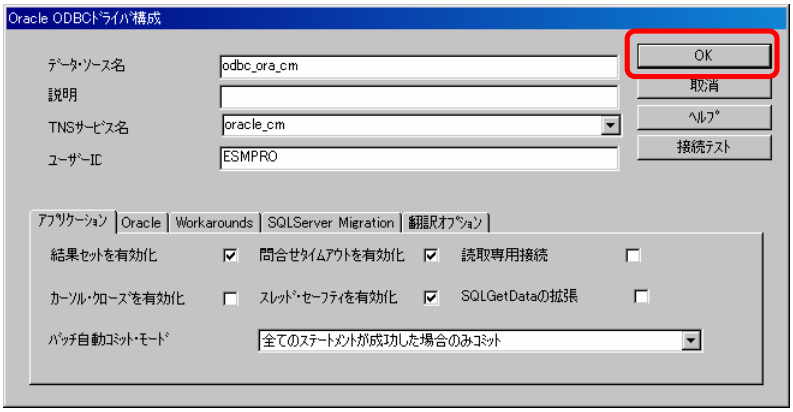
データソース名	任意のデータソース名を指定します（ClientManagerインストール時に使用します）。
ＴＮＳサービス名	Oracle9iで作成したサービス名を指定します。
ユーザ名	Oracle9iで作成したユーザ名を指定します。

＜接続テスト＞ボタンを押します。

接続に成功したら＜OK＞ボタンを押します。接続に失敗したら設定を見直します。



＜OK＞ボタンを押します。



4.2.3.10 Oracle8i の ODBC ドライバの設定例

（1）データベース別名(サービス名)の設定

Oracle Net8を使用する場合にはサービス名を設定する必要があります。

これは、OracleをCMマネージャと異なるコンピュータ（データベースサーバ）にインストールする場合には、CMマネージャをインストールする Oracle Clientをインストールしたコンピュータで必要な作業です。

ここでは、「Oracle Net8 Configuration Assistant」または「Oracle Net8 Easy Config」ツールを使用してデータベース別名を設定する方法と手動で設定する方法について説明します。

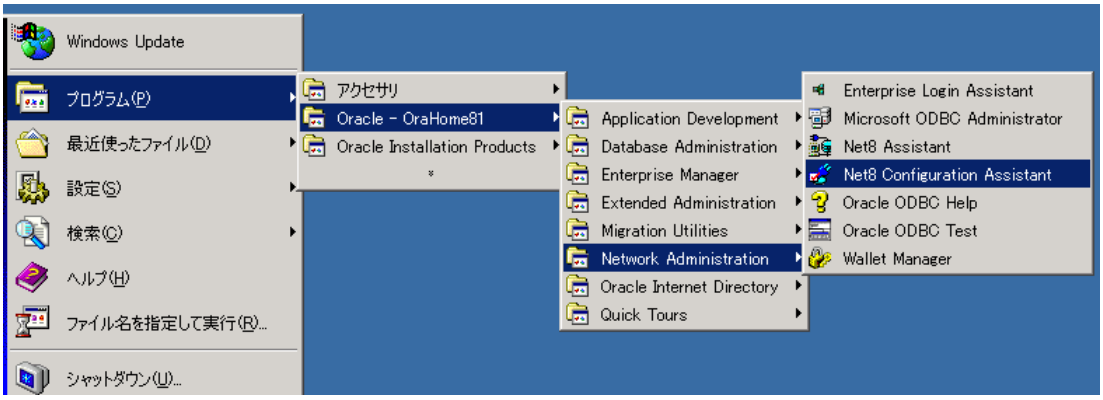
なお、データベース別名を設定しなければ、Oracle Net8を使用してClientManagerは起動できません。

また、Oracle Net8の場合のOracleTNSListener80サービスが、「手動」になっている場合は「自動」に変更してください。「手動」の場合は、ClientManagerは起動できません。

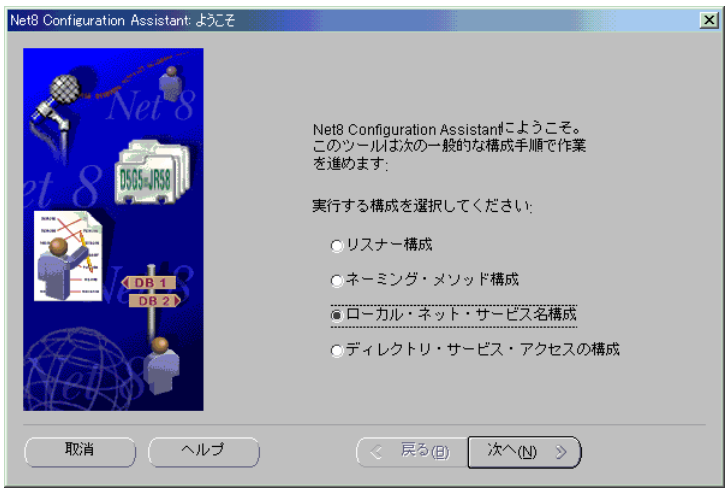
■ Oracle8iで「Oracle Net8 Configuration Assistant」を使用する場合

ORACLEをインストールした場合に、「Net8 Configuration Assistant」が作成された場合は、これを使ってサービス名を設定します。

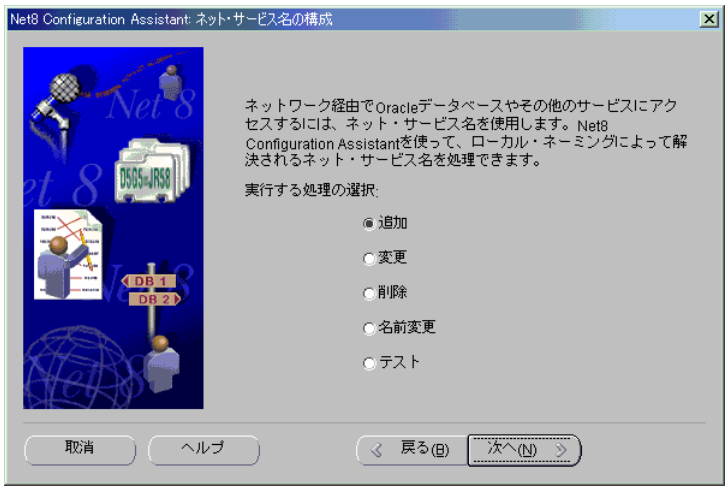
「Net8 Configuration Assistant」を選択し起動します。



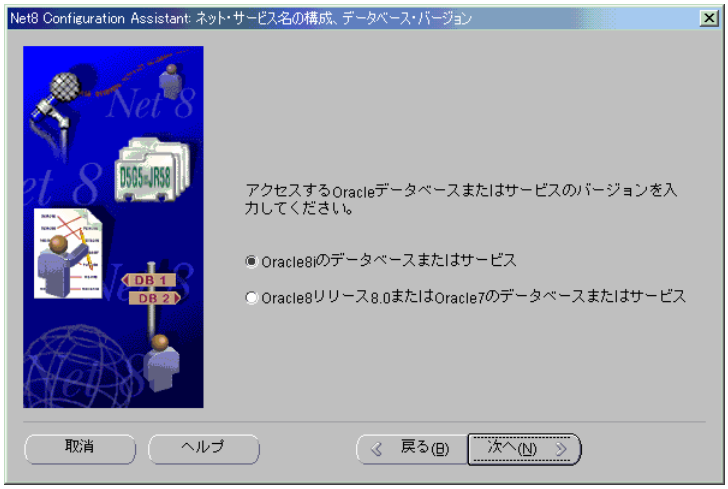
ローカルネットサービス名構成を選択します。



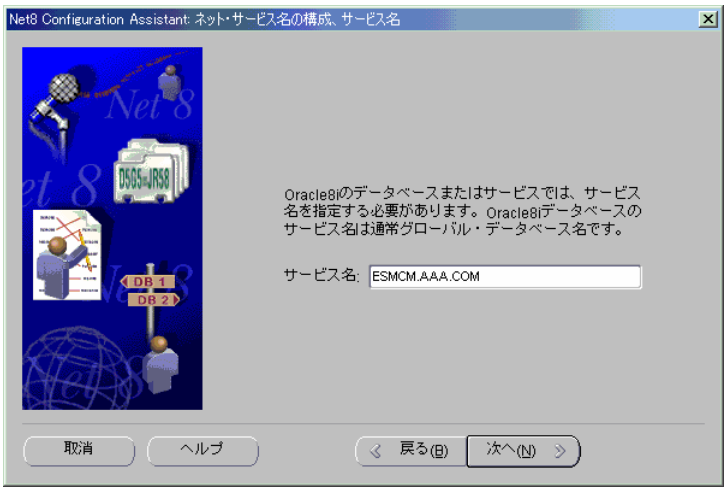
「追加」を選択します。



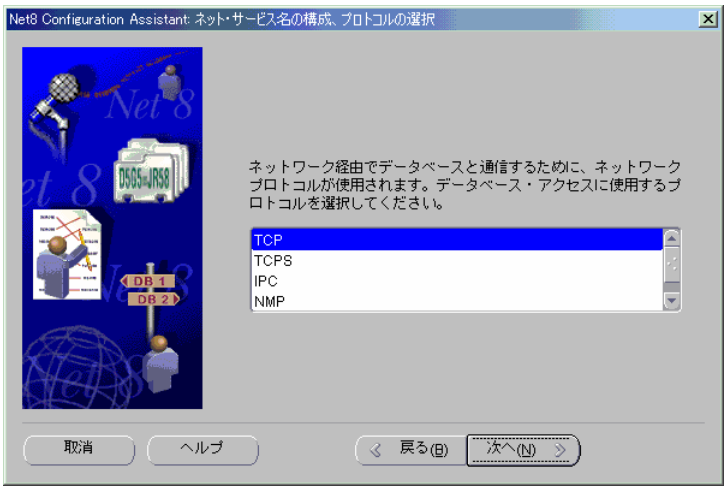
「Oracle 8i のデータベースまたはサービス」を選択します。



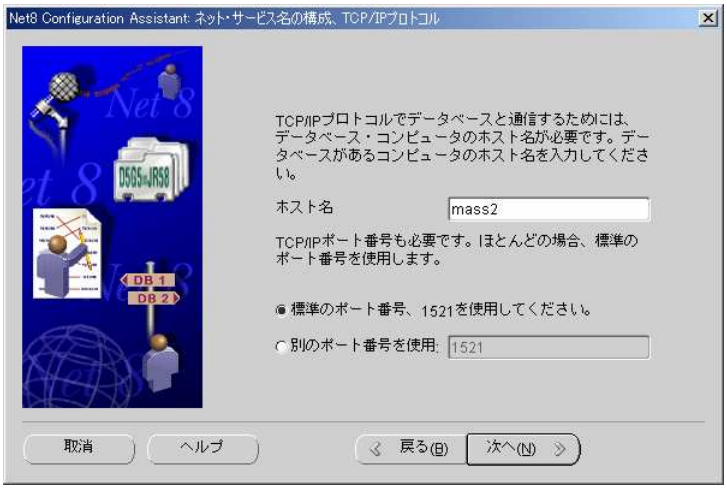
グローバルデータベース名を入力します。



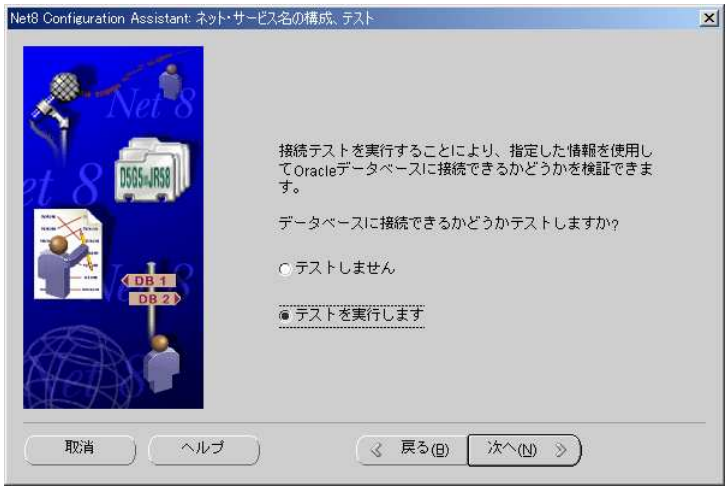
「TCP」を選択します。



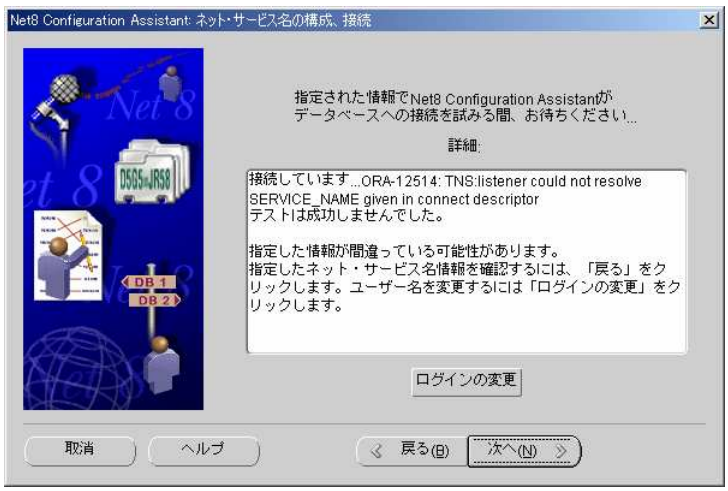
データベースがあるコンピュータのホスト名を入力します。



テストの実行を選択します。



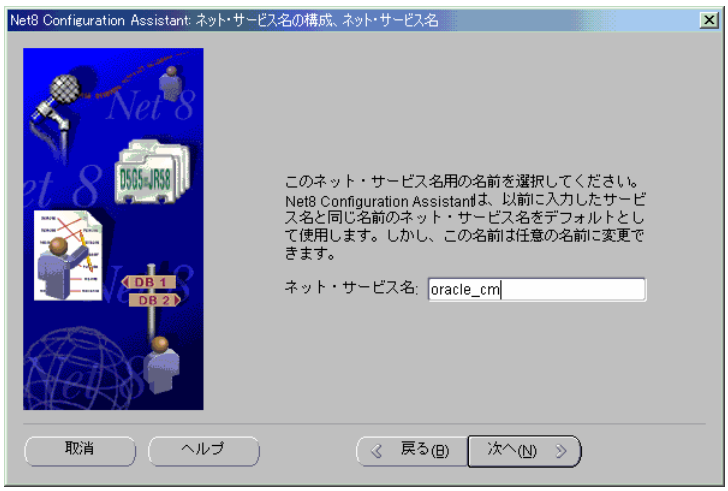
テストの結果が表示されます。



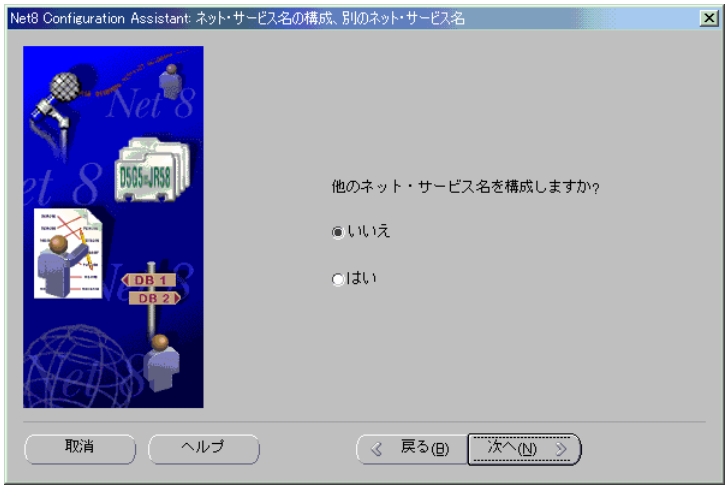
＜ログインの変更＞ボタンを押してログインのアカウントを作成したユーザに変更します。

接続テストが性能しない場合にはメッセージの番号でエラー原因を特定し、問題を修正します。

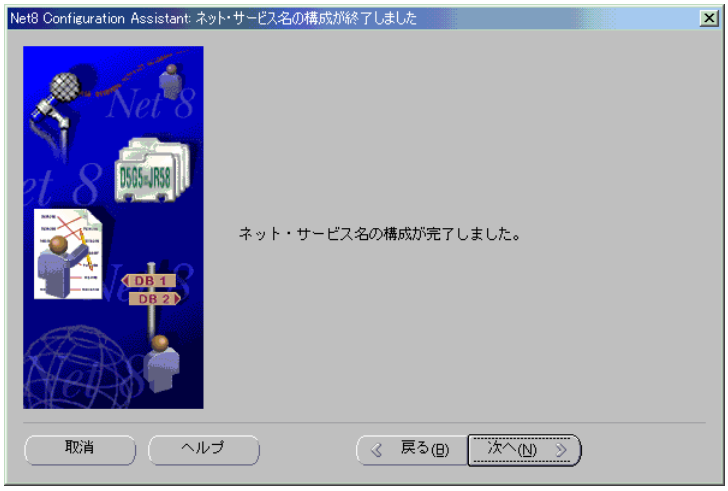
ネットサービス名を入力します。



「いいえ」を選択します。



そのまま次に進みます。

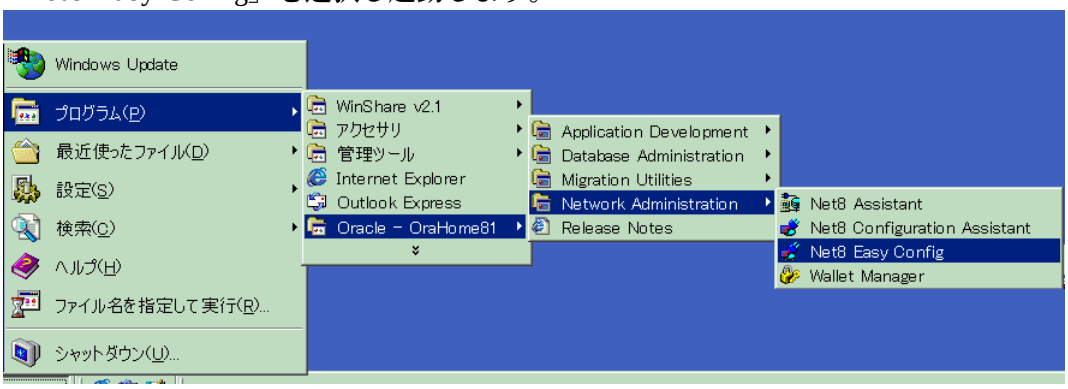


「完了」ボタンを選択します。

■　Oracle8iで「Oracle Net8 Easy Config」を使用する場合

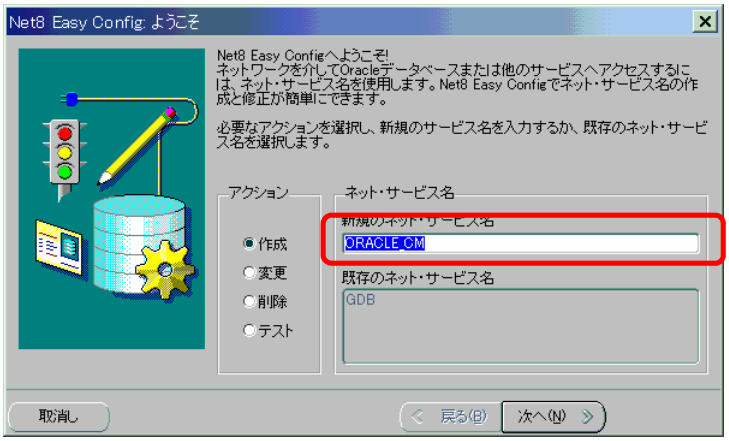
ORACLEをインストールした場合に、「Oracle Net8 Easy Config」が作成された場合は、「Oracle Net8 Easy Config」ツールを使ってサービス名を設定します。

「Net8 Easy Config」を選択し起動します。

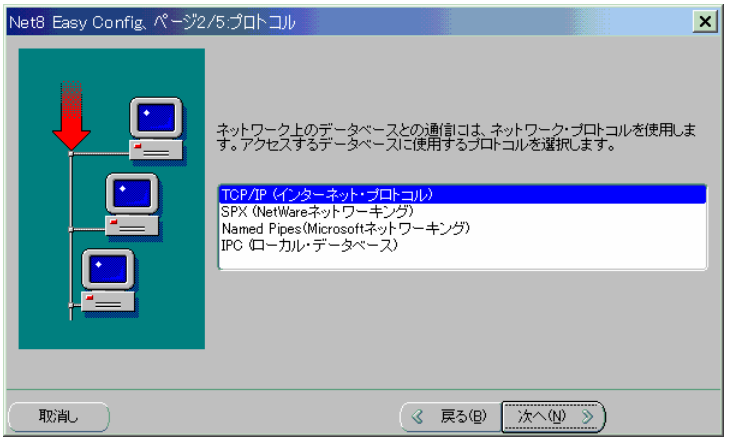


新規に作成するサービス名を入力します。

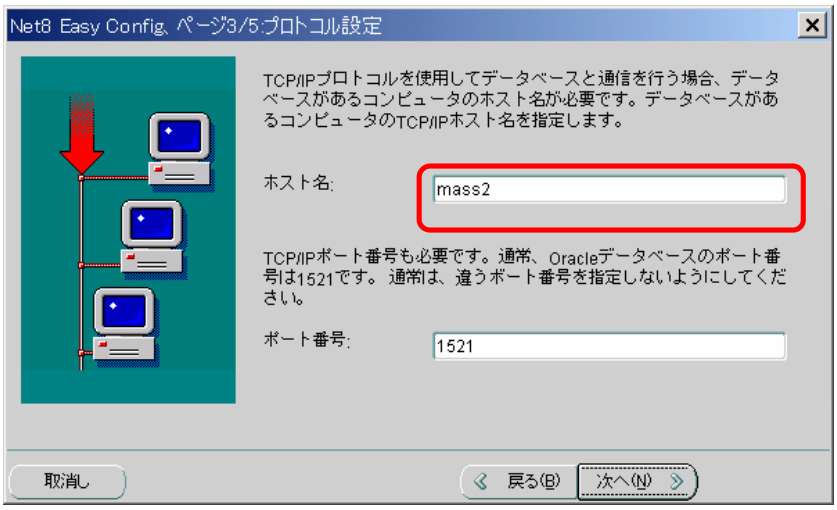
（ここで設定した値はODBCの設定で「サービス名」として、CMマネージャのDBの設定で「SQL＊NET文字列」として使用します。）



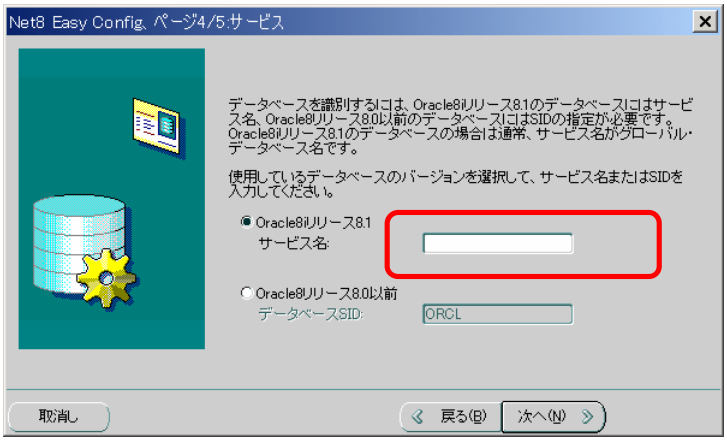
利用するプロトコルを選択します。



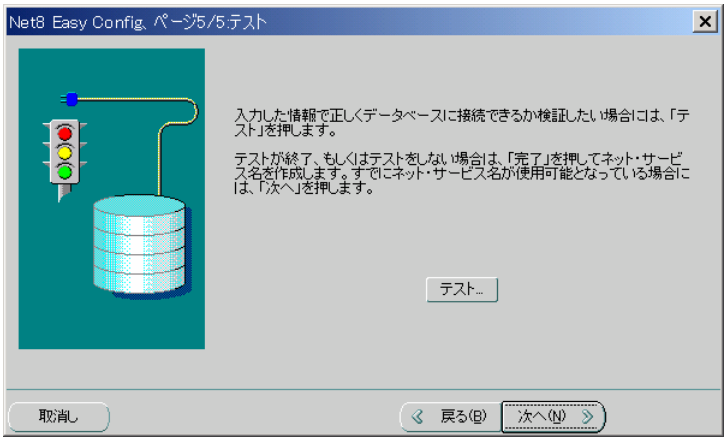
選択したプロトコルに応じた設定を行います。



データベースの作成時に指定したサービス名を指定します。

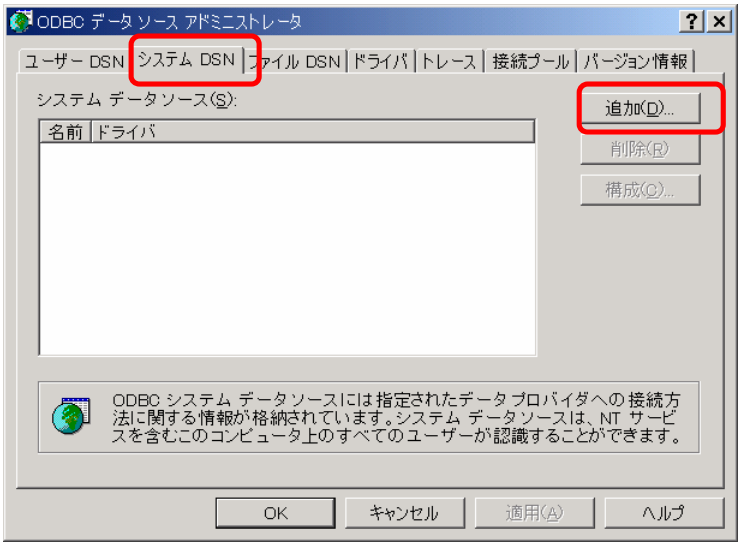


テストを行い終了します。



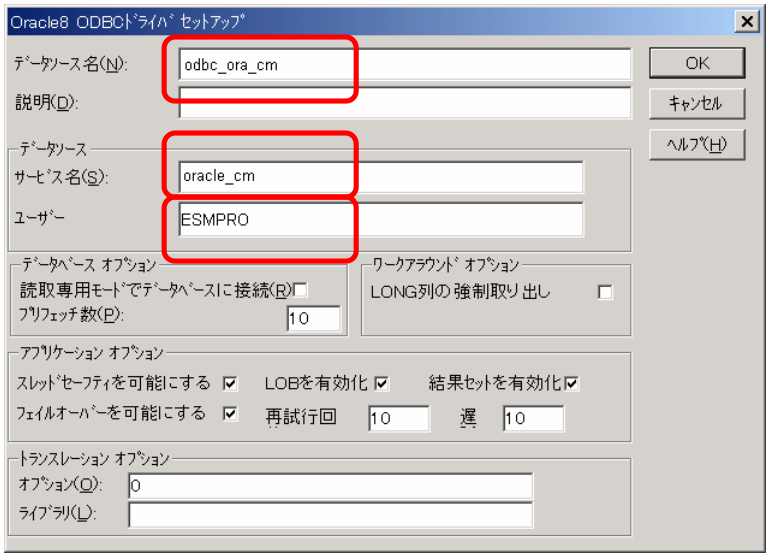
（2）データソースの設定

[コントロールパネル]-[ODBC]または、[コントロールパネル]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を起動します。[システムDSN]を選択します。



Oracle社が提供している[Oracle ODBC Driver]を選択します。Microsoft社が提供するMicrosoft ODBC for Oracle は利用できませんので選択してはいけません。

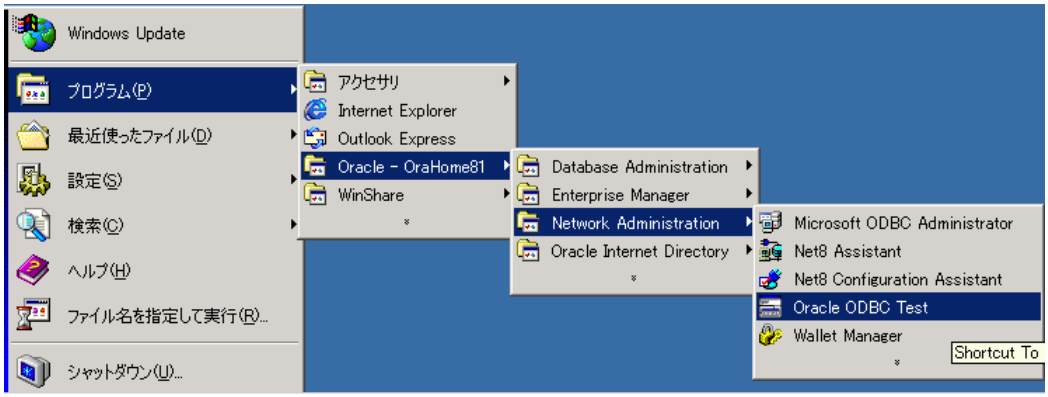
データソース名、サービス名、ユーザ名を入力します。



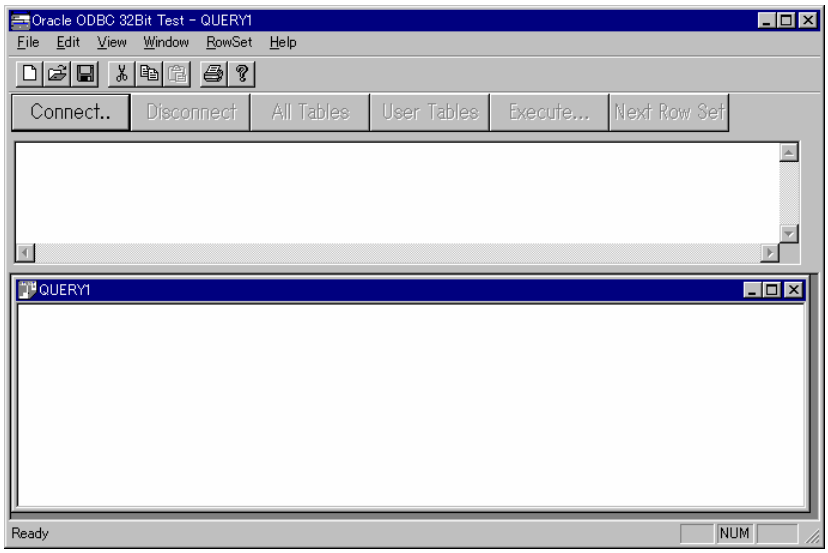
データソース名	任意のデータソース名を指定します（ClientManagerインストール時に使用します）。
サービス名	Oracle8iで作成したサービス名を指定します。
ユーザ名	Oracle8iで作成したユーザ名を指定します。

（3）データソースのテスト

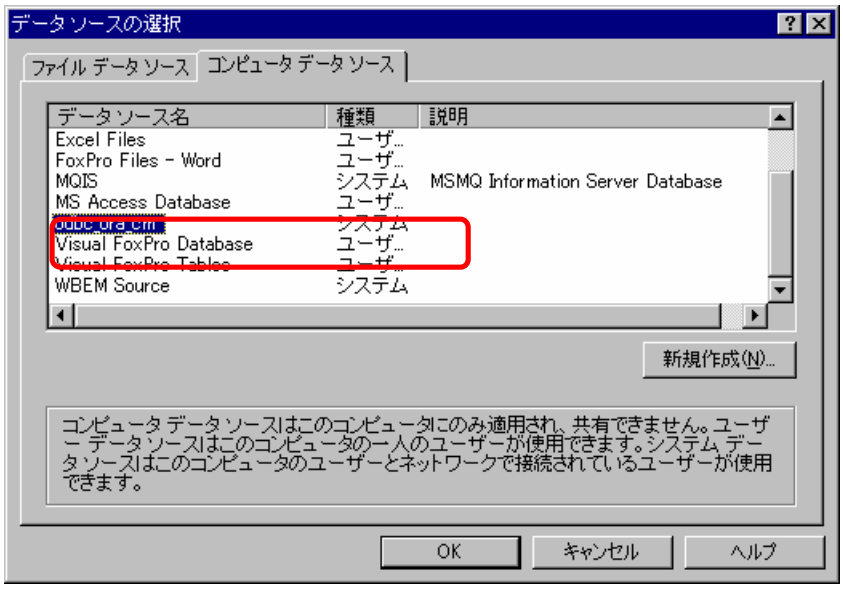
プログラムフォルダより、「Oracle ODBC Test」を実行します。



＜Connect＞ボタンを押します。



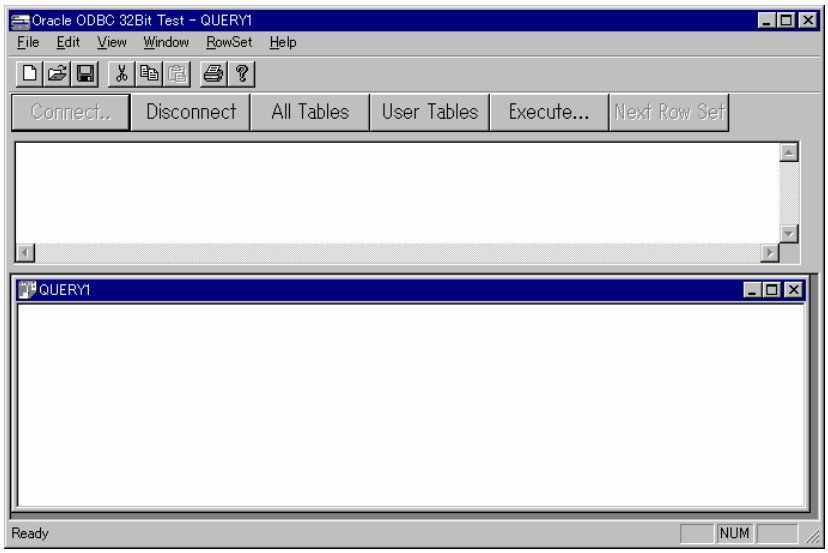
作成したデータソースを選択します。



ユーザ名、パスワードを入力し、＜OK＞ボタンを押します。

ログインできなかった場合には、Oracleのメッセージが表示されますので、Oracleのマニュアルを参照して原因を取り除いてください。

ログインが成功した場合には以下の画面が表示されます。



4.2.3.11 Oracle8 の ODBC ドライバの設定例

（1）データベース別名(サービス名)の設定

SQL*Net Version2を使用する場合にはデータベース別名を、Oracle Net8を使用する場合にはサービス名を、設定する必要があります。

これは、OracleをCMマネージャと異なるコンピュータ（データベースサーバ）にインストールする場合には、CMマネージャをインストールする Oracle Clientをインストールしたコンピュータで必要な作業です。

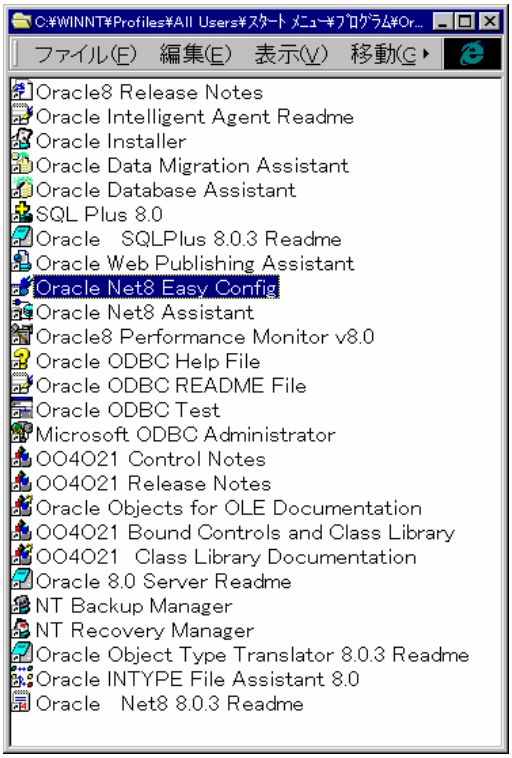
ここでは、「SQL*Net Easy Configuration」ツール(SQL*Net)または「Oracle Net8 Easy Config」ツール(Net8)を使用してデータベース別名（サービス名）を設定する方法について説明します。

なお、データベース別名（サービス名）を設定しなければ、 SQL*Net Version2 またはOracle Net8を使用してClientManagerは起動できません。

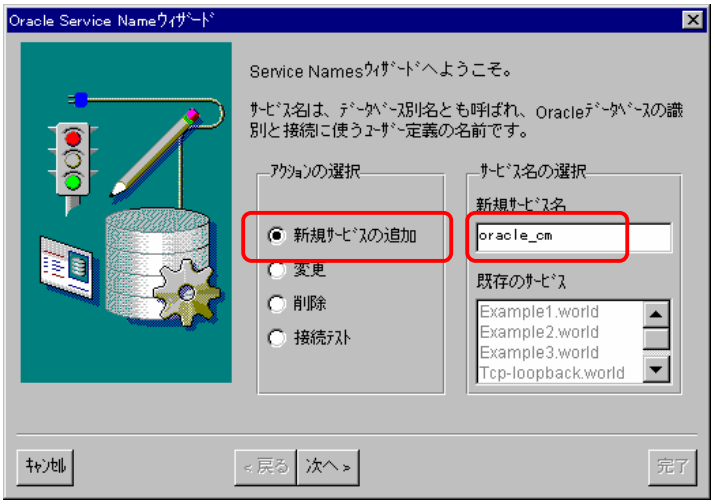
また、SQL*Net Ver2 の場合のOracleTNSListener サービス、Oracle Net8の場合のOracleTNSListener80サービスが、「手動」になっている場合は「自動」に変更してください。「手動」の場合は、ClientManagerは起動できません。

■ Oracle8で「SQL*Net Easy Configuration」を使用する場合

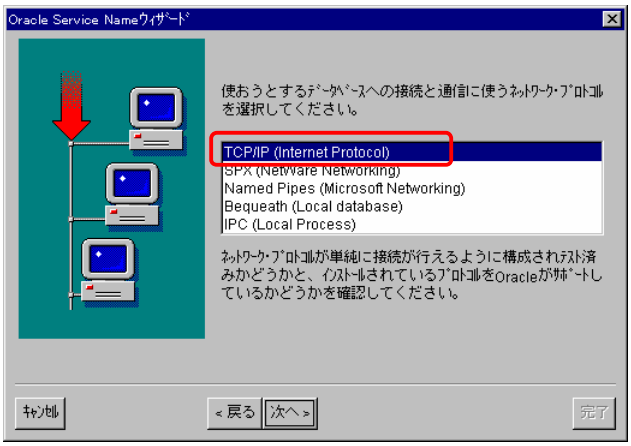
ORACLEをインストールした場合に、「Oracle Net8 Easy Config」が作成された場合は、「Oracle Net8 Easy Config」ツールを使ってデータベース別名を設定します。



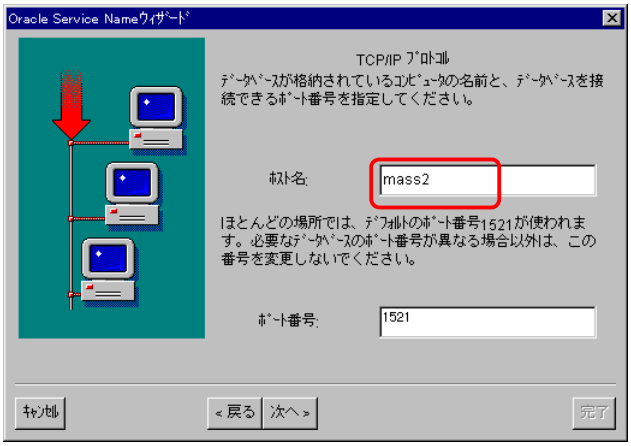
まず、「Oracle Net8 Easy Config」アイコンをダブルクリックします。



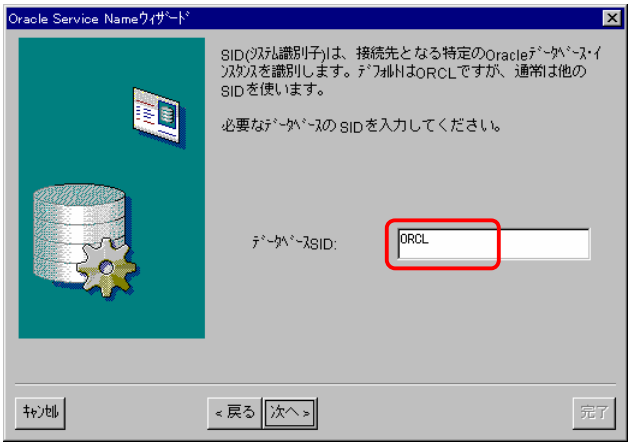
新規サービスを選択し新規サービス名を入力し次へ行きます。
（ここで設定した値はODBCの設定で「SQL＊NET文字列」として使用します。）



使用するサービスを選択し次へ行きます。

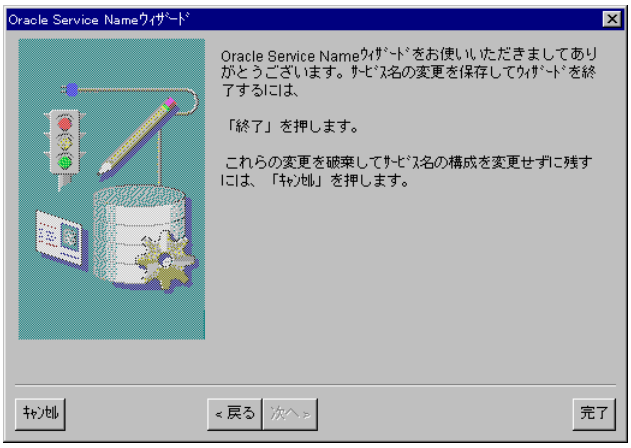


データベースを接続するホストとポートを指定し次へ行きます。



データベースSIDを指定します（注意 本例では既定値ORCLの場合の説明です）

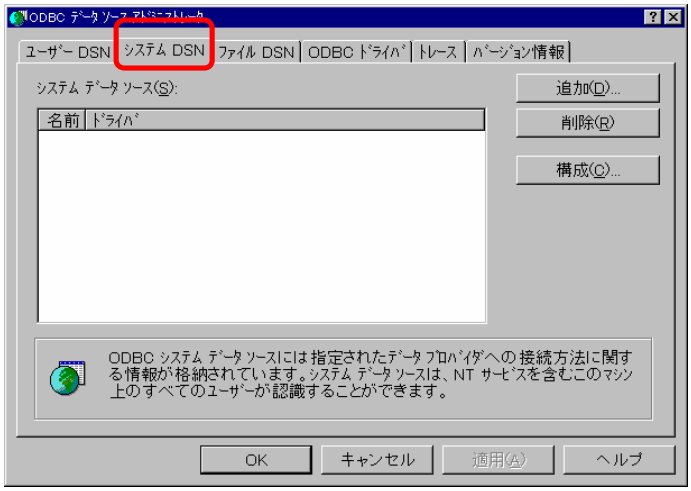
「次へ」ボタンを選択します。



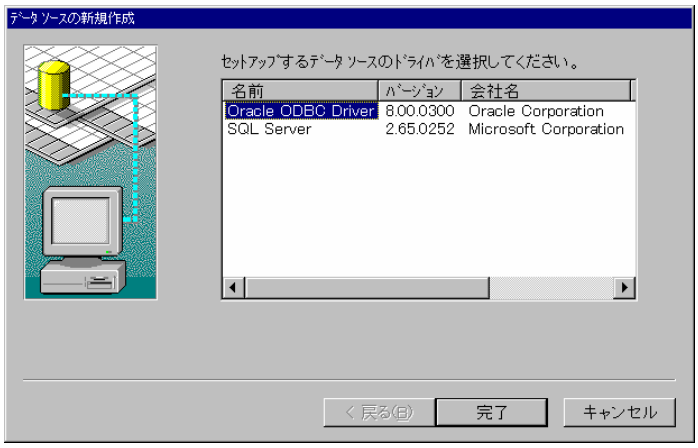
「完了」ボタンを選択して作業を終了します。

（2）データソースの設定

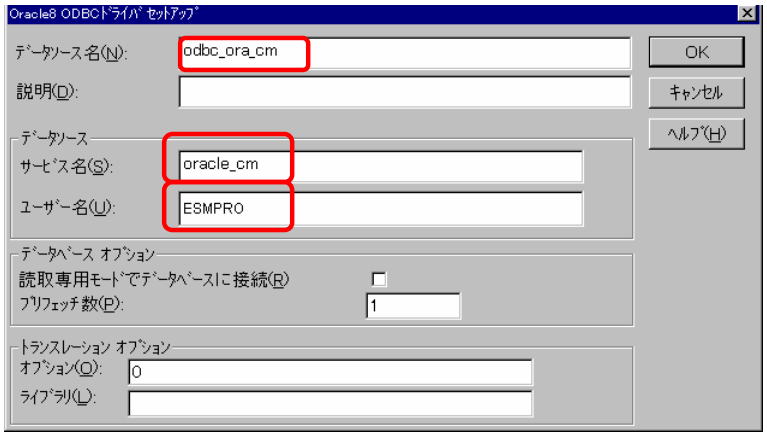
[コントロールパネル]の[ODBC]を起動し、[システムDSN]を選択します。



＜追加＞を選択します。



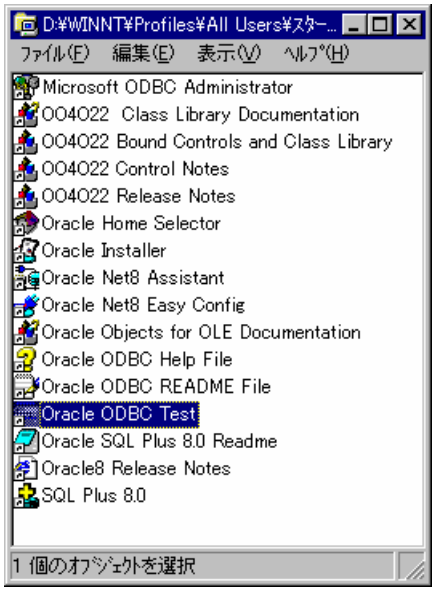
設定を行うドライバOracle ODBC Driver を選択し＜完了＞を押します。



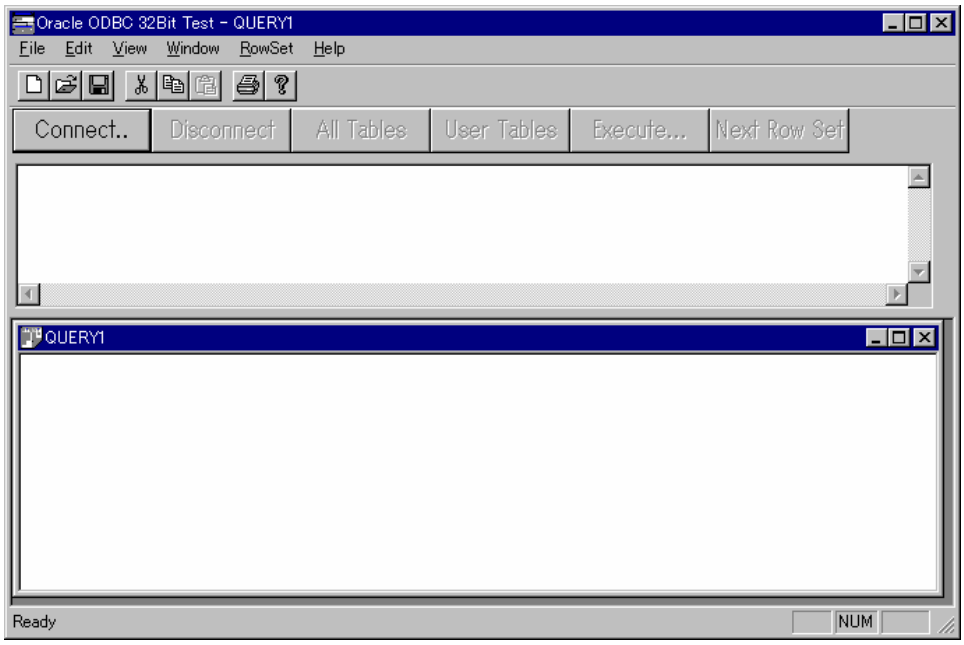
データソース名	任意のデータソース名を指定します （ClientManagerインストール時に使用します）。
サービス名	Oracle8で作成したサービス名を指定します。
ユーザ名	Oracle8で作成したユーザ名を指定します。

（3）データソースのテスト

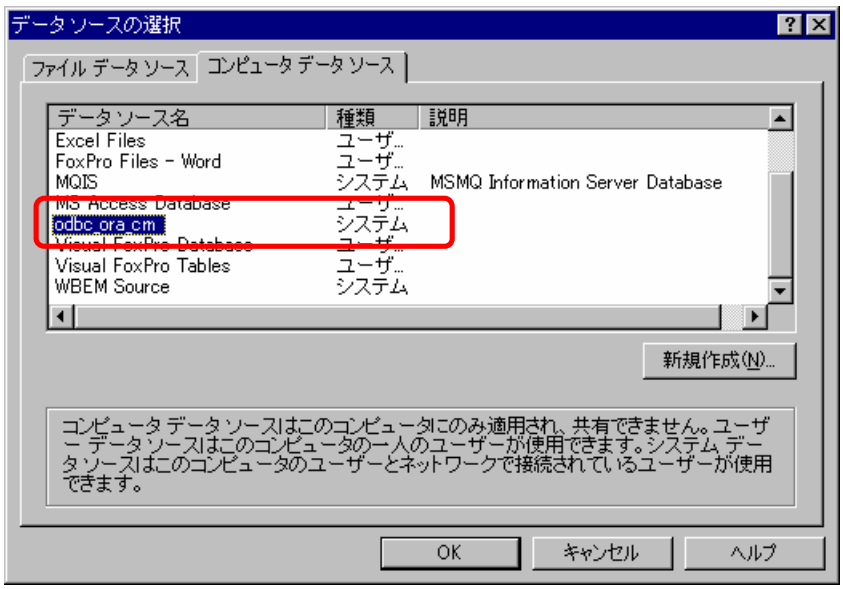
プログラムフォルダより、「Oracle ODBC Test」を実行します。



＜Connect＞ボタンを押します。

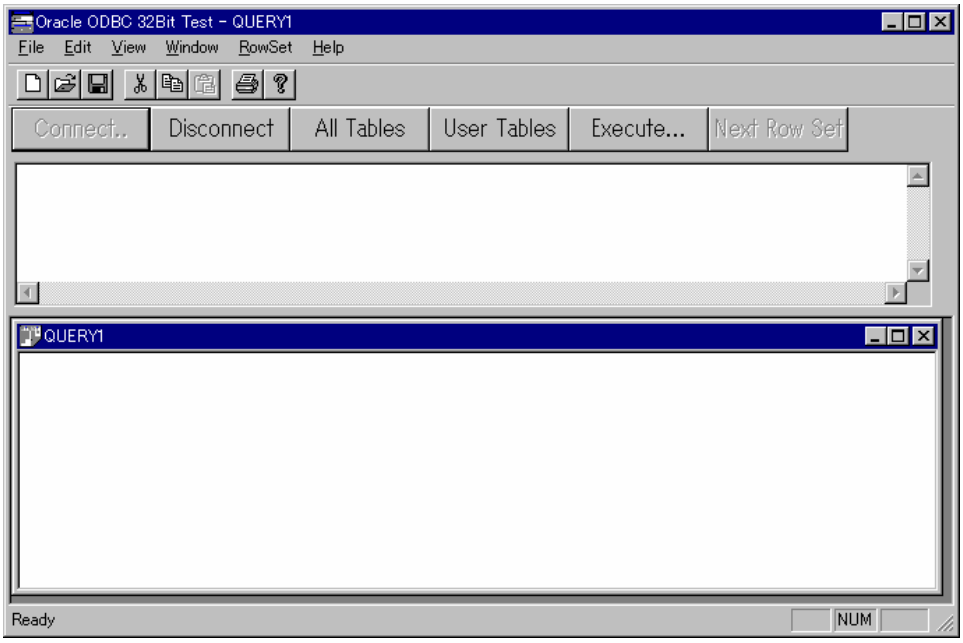


作成したデータソースを選択します。



ユーザ名、パスワードを入力し、＜OK＞ボタンを押します。

ログインできなかった場合には、Oracleのメッセージが表示されますので、Oracleのマニュアルを参照して原因を取り除いてください。
ログインが成功した場合には以下の画面が表示されます。



4.2.3.12 Oracle 7 の ODBC ドライバの設定例

（1）データベース別名の設定

SQL*Net Version2を使用する場合にはデータベース別名を設定する必要があります。

これは、OracleをCMマネージャと異なるコンピュータ（データベースサーバ）にインストールする場合には、CMマネージャをインストールする Oracle Clientをインストールしたコンピュータで必要な作業です。

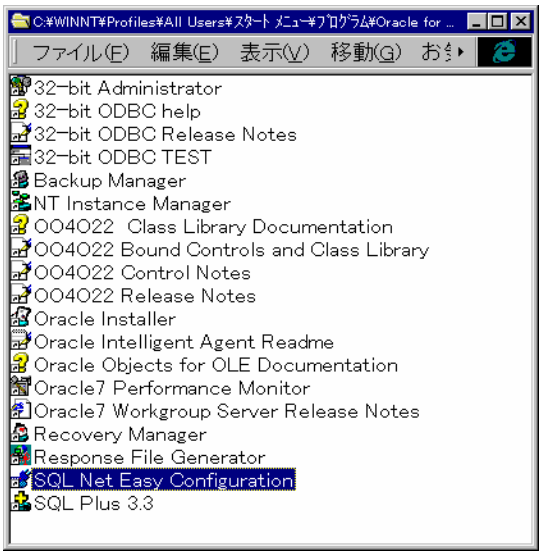
ここでは、「SQL*Net Easy Configuration」ツールを使用してデータベース別名を設定する方法と手動で設定する方法について説明します。

なお、データベース別名を設定しなければ、 SQL*Net を使用してClientManagerは起動できません。

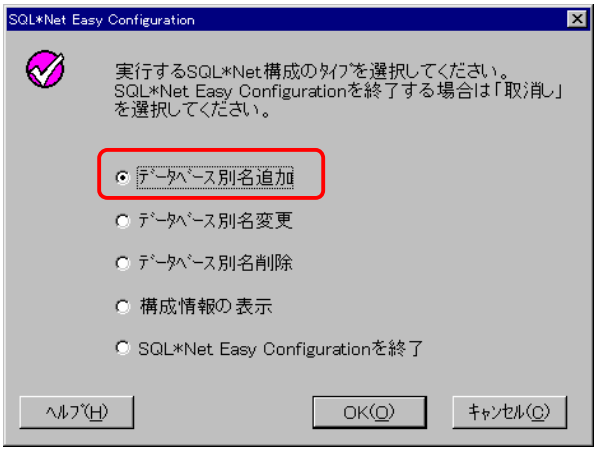
また、SQL*Net Ver2 の場合のOracleTNSListener サービス、SQL*Net Ver1 の場合のOracleTCPListenerサービスが、「手動」になっている場合は「自動」に変更してください。「手動」の場合は、ClientManagerは起動できません。

■ Oracle7で「SQL*Net Easy Configuration」を使用する場合

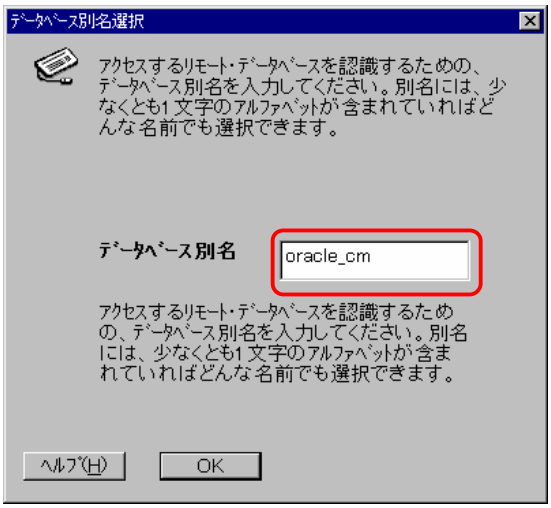
ORACLEをインストールした場合に、「SQL*Net Easy Configuration」というアイコンが作成された場合は、「SQL*Net Easy Configuration」ツールを使ってデータベース別名を設定します。



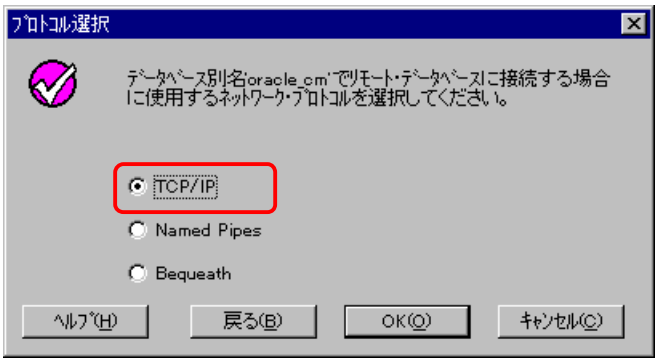
まず、「SQL*Net Easy Configuration」アイコンをダブルクリックします。



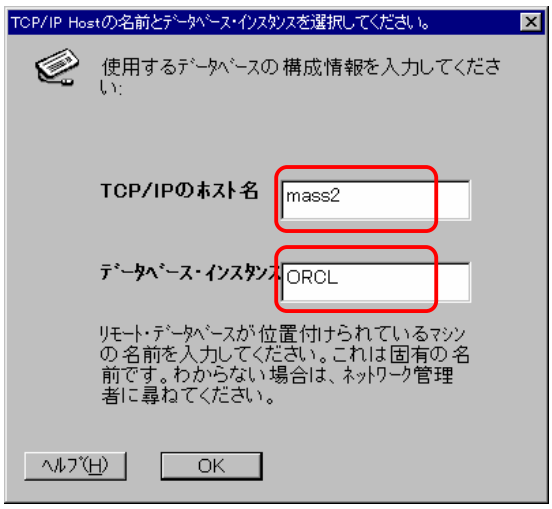
「データベース別名追加」ボタンを選択し、OKボタンを選択します。



データベース別名を設定し、OKボタンを選択します。
（ここで入力した値はODBCドライバの設定で「SQL＊NET文字列」または「サーバ名」として使用します。）



「TCP/IP」を選択し、OKボタンを選択します。



TCP/IPのホスト名には、ORACLEサーバがインストールされているマシンの名前を入力します。データベース・インスタンスには、使用するデータベース・インスタンスを入力し、OKボタンを選択します。なお、デフォルトのデータベースを使用する場合は、データベース・インスタンスには、「ORCL」を入力します。

「はい」ボタンを選択します。

これで、データベース別名の設定は完了です。

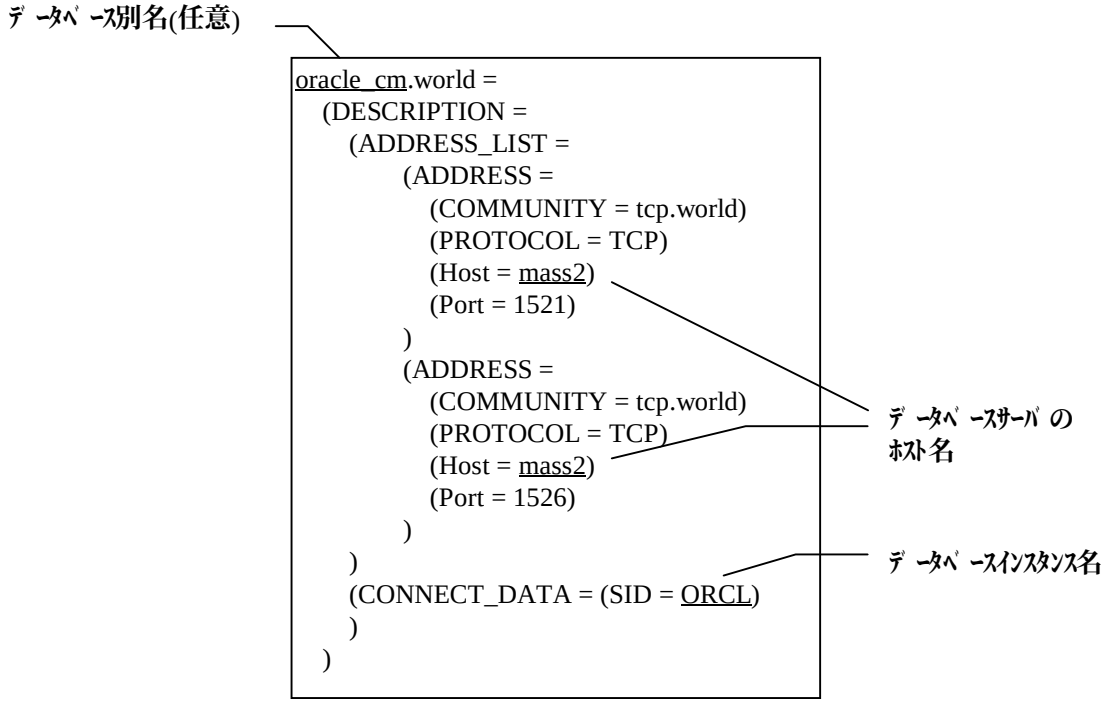
■　手動でデータベース別名を設定する場合

ORACLEをインストールした場合に、「SQL*Net Easy Configuration」というアイコンが作成されなかった場合は、手動でデータベース別名を設定します。

まず、ORACLEをインストールしているドライブの、NETWORK¥ADMIN 配下に以下のファイルがあることを確認します。

- SQLNET.ORA
- TNSNAMES.ORA

これらのファイルが上記ディレクトリに存在しない場合は、NETWORK¥ADMIN¥SAMPLE 配下から NETWORK¥ADMIN 配下にコピーしてください。そして、TNSNAMES.ORA ファイルの最後に以下の内容を追加してください。その際、下線部分のみ各環境に合わせて変更してください。



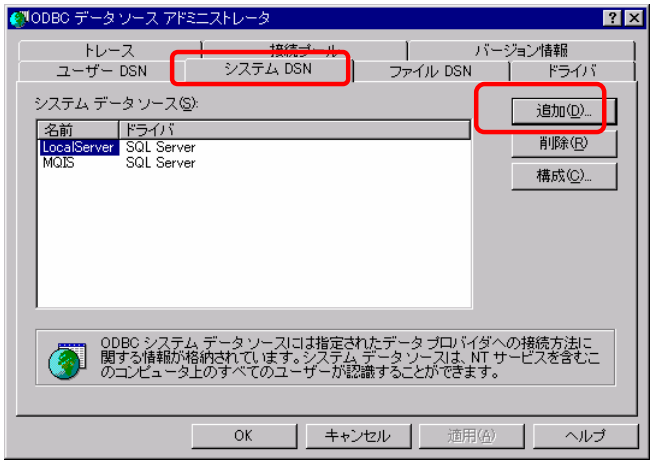
ORACLEのインスタンスの設定を「AUTO」（自動起動）にしてください。「AUTO」になっていない場合は、ClientManagerは起動できません。

（2） データソースの設定

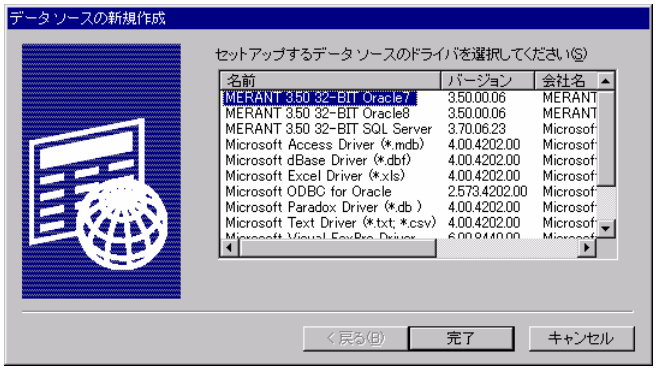
■ メラント社 DataDirect® connect ODBC 3.5を使用する場合

[コントロールパネル]の[ODBC]を起動します。

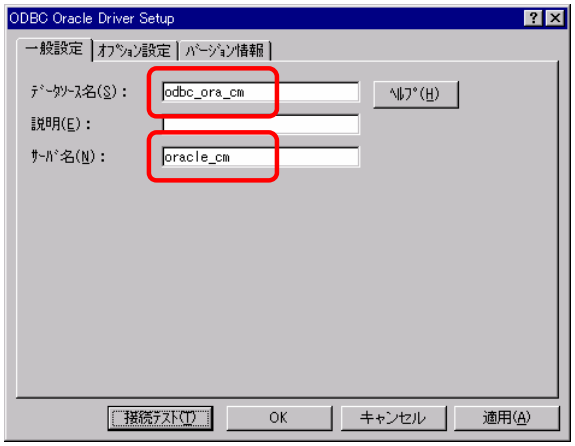
システムＤＳＮ (System DSN)を選択し、＜追加＞ボタンを押します。



設定を行うOracle7のドライバを選択し＜完了＞を押します。



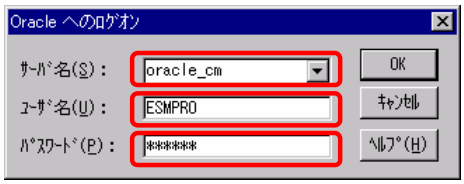
データソース、サーバ名を設定します。



データソース名　任意の名前を設定します（CMインストール時に使用します）。

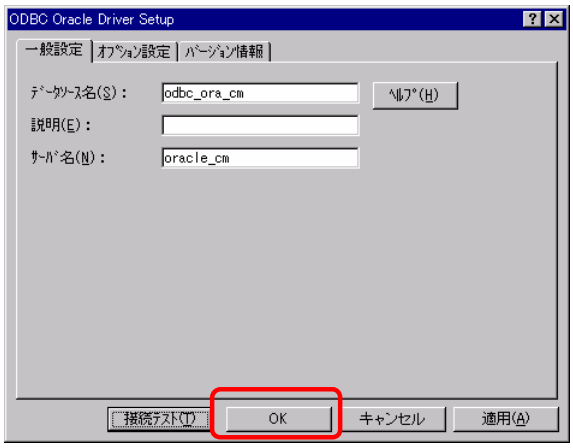
サーバ名　Oracle7で作成したデータベース別名を指定します。

＜接続テスト＞ボタンを押します。



接続に成功したら＜OK＞ボタンを押します。接続に失敗したら設定を見直します。

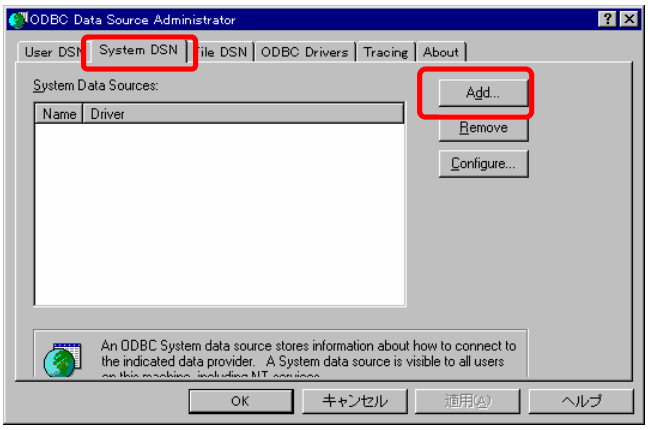
＜OK＞ボタンを押します。



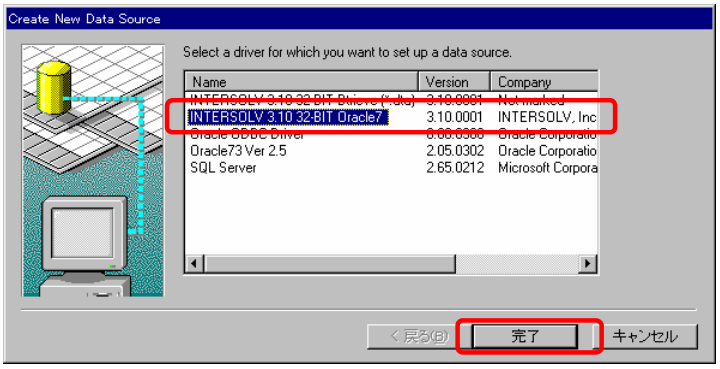
■　メラント社 DataDirect® connect ODBC 3.1を使用する場合

[コントロールパネル]の[ODBC]を起動します。

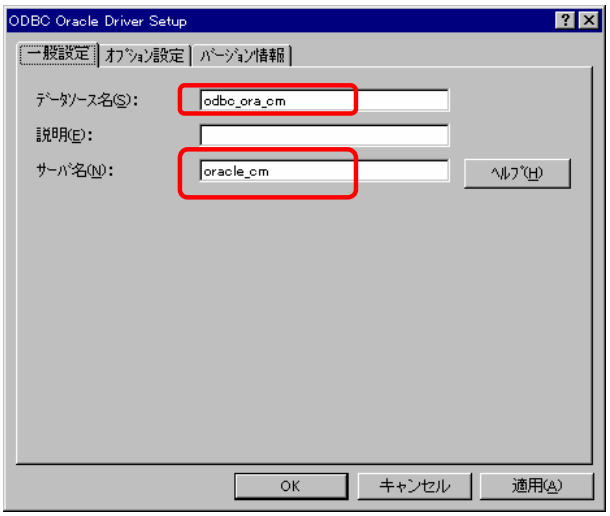
システムＤＳＮ (System DSN)を選択し、＜追加＞ボタンを押します。



設定を行うOracle7のドライバを選択し＜完了＞を押します。



データソース、サーバ名を設定します。



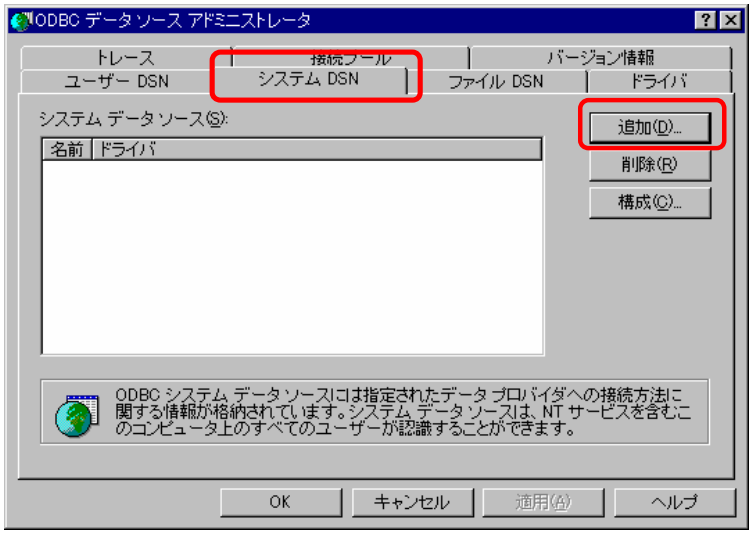
データソース名　任意の名前を設定します（CMインストール時に使用します）。

サーバ名　　Oracle7で作成したデータソース別名を指定します。

4.2.3.13 SQL Server 7.0 / 2000 / 2005 の ODBC ドライバの設定例

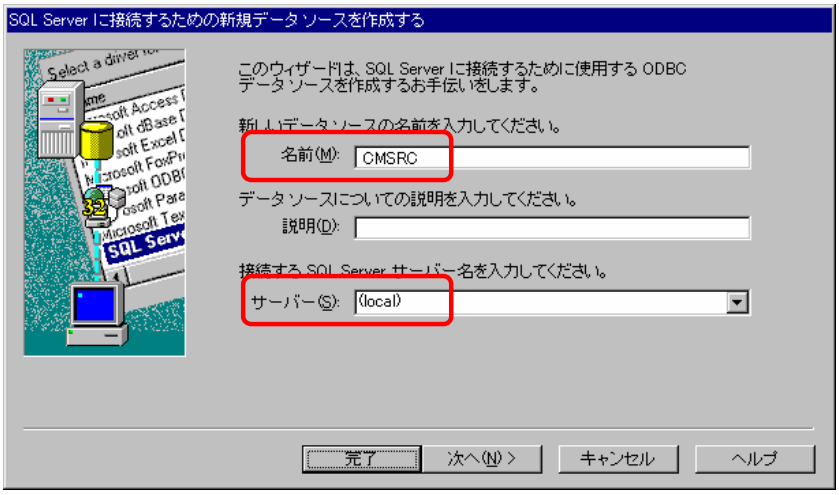
[コントロールパネル]-[ODBCデータソース]または、[コントロールパネル]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]または、[コントロールパネル]-[パフォーマンスちとメンテナンス]-[管理ツール]-[データソース(ODBC)]を起動します。

システムＤＳＮ (System DSN)を選択します。[追加]を選択します。



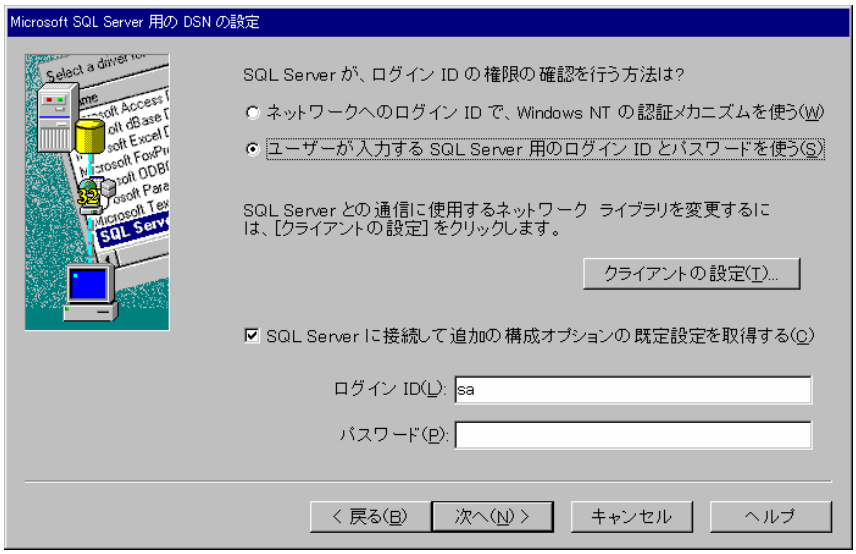
SQL Serverを選択し[完了]ボタンを押します。

データソース名前とサーバを指定します。

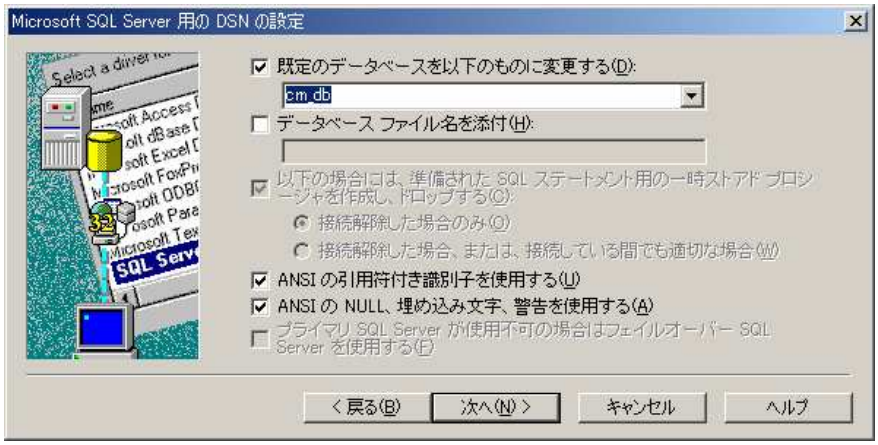


データソース名	任意の名前を設定します。
サーバ	ＤＢが格納されているマシン名を設定します。 自マシンの場合には “(Local)”を選択します。

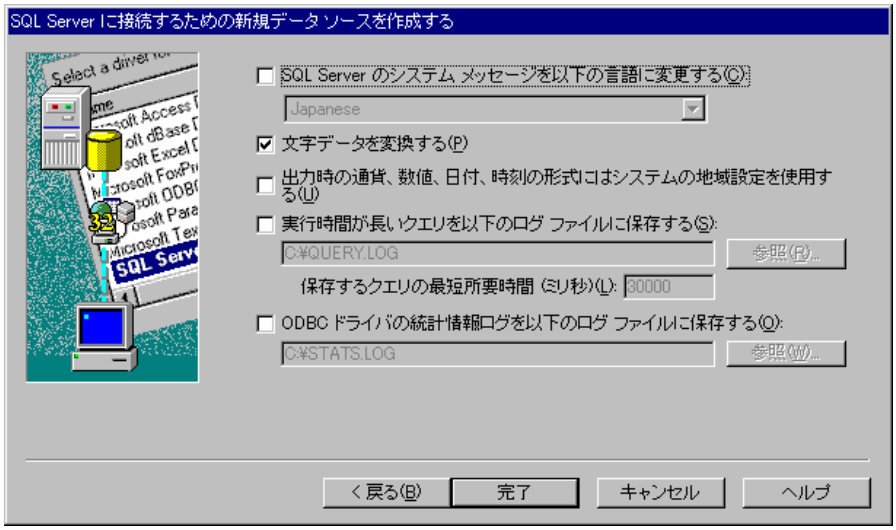
ログインＩＤの権限の確認方法を選択します。また、Windows 95/98 の場合には、＜クライントの設定＞ボタンを押してネットワークライブラリを“ TCP/IPソケット ”に変更します。Windows NT/2000では必須ではありませんが、変更する事を推奨いたします。



規定のデータベースをClientManager用に作成したデータベースを選択します。



この画面はなにも設定する必要はありません。



データソースのテストボタンをクリックしSQL Server との通信が正しく行えるかテストします。

OKを押して終了します。

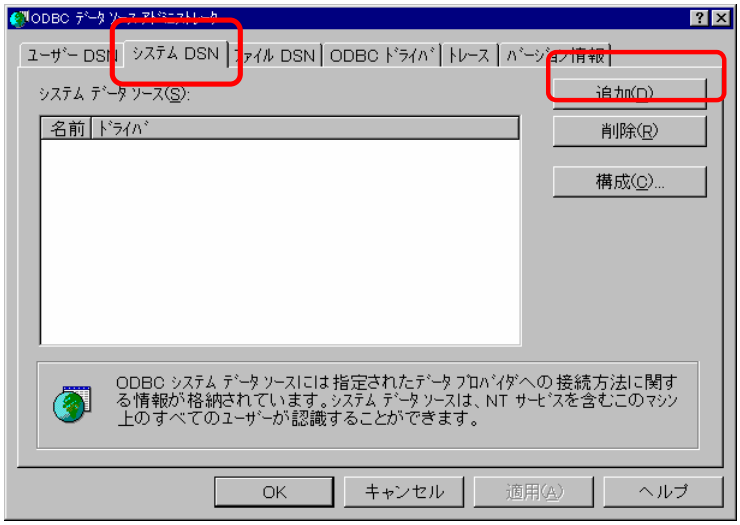
4.2.3.14 SQL Server 6.5 の ODBC ドライバの設定例

Microsoft Data Access 2.0/2.1/2.5 をインストールしている場合には、「SQL Server7.0のODBCドライバの設定例」を参照してください。

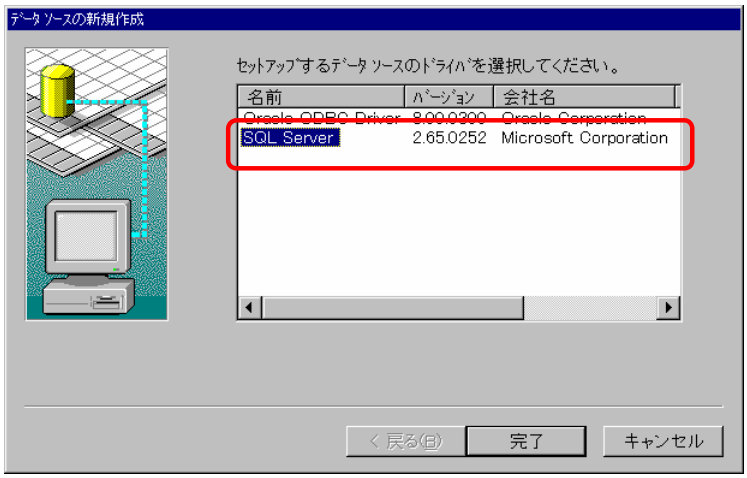
■ ODBCドライバの設定

[コントロールパネル]の[ODBC]を起動します。

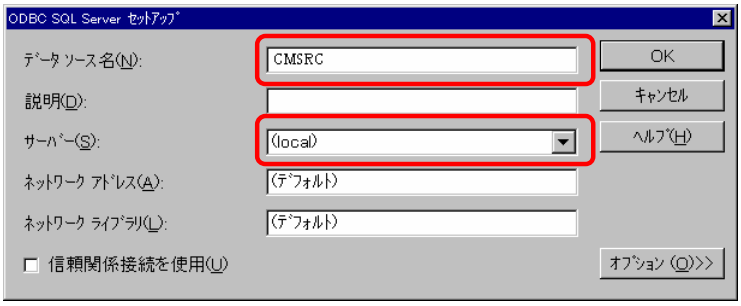
システムＤＳＮを選択し [追加]ボタンを選択します。



SQL Serverを選択し[完了]ボタンを押します。



データソース名とサーバを入力します。



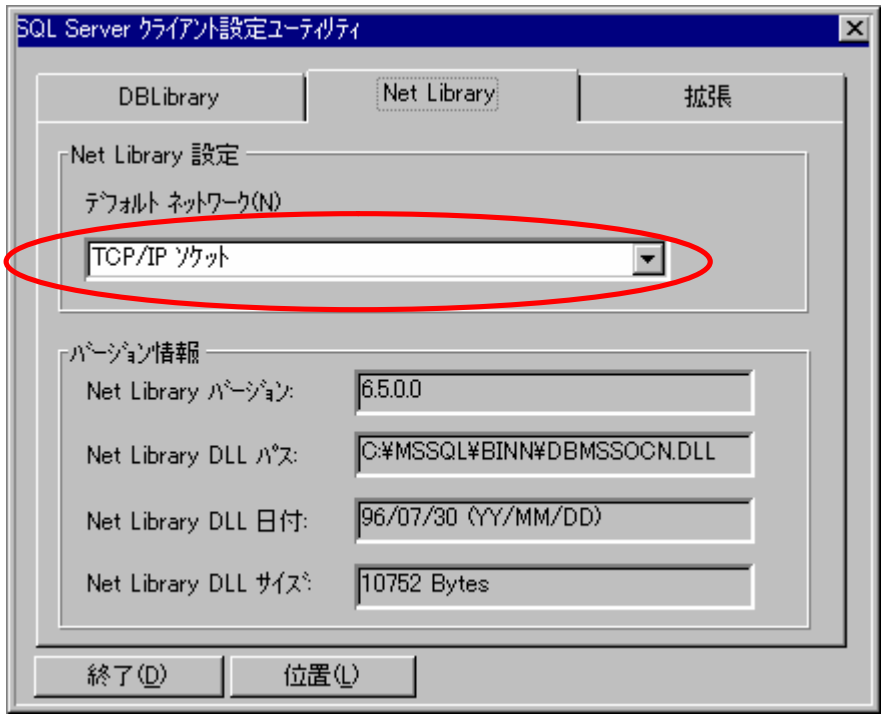
データソース名	任意の名前を設定します。
サーバ	ＤＢが格納されているマシン名を設定します。 自マシンの場合には “(Local)”を選択します。

■ SQLクライントの設定

Windows 95, Windows 98の場合、デフォルトのネットワークの設定を“名前付きパイプ”から“TCP/IPソケット”に変更します。Windows NT/2000では必須ではありませんが、変更する事を推奨いたします。

「スタート」-「Microsoft SQL Server 6.5」-「SQLクライント設定ツール」を起動し、「Net Library」タグを選択します。

「デフォルトネットワーク」を“名前付きパイプ”から“TCP/IPソケット”に変更して＜終了＞ボタンを押します。



4.2.3.15 ClientManager の作成するテーブル

ClientManagerは、クライアントPCの構成情報等の情報をデータベースのテーブル上に格納します。ClientManagerが作成する構成管理に関するテーブルの名前と格納する情報について示します。

テーブル名	説明
CMGeneralInformation	CM情報
CMNetwork	ネットワーク
CMTcpIp	TCP/IP
CMGateway	ゲートウェイ
CMDNS	DNS
CMDNSServer	DNSサーバ
CMDNSSerchList	サーチリスト
CMROUTE	中継エージェント
CMSLPPVersion	DMIサービスプロバイダのバージョン
CMVersion	CMクライアントのバージョン
CMComponent	CM関係のコンポーネント
CMOffStateAlert	オフステートアラート
CMPorts	ポート番号
CMFiles	ファイルの一覧
CMWarrantyCard	保証書
CMStyle	形状
CMValue	価格
CMUser	利用者
CMTrader	業者
CMUseState	利用状態
STDComponentID	一般情報
STDGeneralInf	システム情報
STDOperatingSystem	OS情報
STDSystemBIOS	BIOS情報
STDBIOSCharacteristics	BIOS情報２
STDProcessor	CPU情報
STDMotherboard	マザーボード情報
STDPhysicalMemory	物理メモリ情報
STDLogicalMemory	論理メモリ情報
STDSystemCache	システムキャッシュ情報

STDParallelPorts	パラレルポート情報
STDSerialPorts	シリアルポート情報
STDIRQ	IRQ情報
STDDMA	DMA情報
STDMemoryMappedIO	メモリマッピング情報
STDSystemEnclosure	システム状態情報
STDPowerSupply	電源情報
STDCoolingDevice	冷却装置情報
STDSystemSlots	システムスロット情報
STDVideo	VIDEOボード情報
STDVideoBIOS	VIDEO BIOS情報
STDVideoBIOSCharacteristics	VIDEO BIOS情報２
STDDisks	物理ディスク情報
STDDiskMappingTable	ディスクマッピング情報
STDPartition	パーティション情報
STDDiskController	ディスクコントローラ情報
STDLogicalDrives	論理ディスク情報
STDMouse	マウス情報
STDKeyboard	キーボード情報
STDFieldReplaceableUnit	モデル情報
STDOperationalState	システム状態情報
STDSystemResourcesDesc	システムリソース(表示)情報
STDSystemResources	システムリソース情報
STD802AlternateAddr	ネットワークの代替アドレス
STDCoolingUnitGlobalTable	冷却装置テーブル
STDDeviceBay	デバイスベイ
STDDynamicStates	携帯用システム
STDElectricalCurrentProbe	Electrical Current Probe
STDFileList	管理ソフトウェアのファイルリスト
STDInfraredPort	赤外線ポート
STDLocation	ロケーション
STDMemoryArrayMappedAddr	メモリアレイのアドレス
STDMemoryDeviceMappedAddr	メモリデバイスのアドレス
STDMemoryDevice	メモリデバイス
STDMonitorResolution	モニタの解像度

STDNetworkAdapter802Port	ネットワークアダプタ
STDNetworkAdapterDriver	ネットワークアダプタのドライバ
STDOutofBandRemoteAccess	アウトバンドリモートアクセス
STDPhsContainerGlobalTable	コンテナ
STDPhsMemoryArray	メモリアレイ
STDPointingDevice	ポインティングデバイス
STDPortableBattery	携帯用バッテリの情報
STDPowerMgmtBinAssocTable	パワーマネージメント(バイナリ関係)
STDPowerMgmTable	パワーマネージメント
STDPowerUnitGlobalTable	パワーユニット
STDSPIndicationSubscription	イベント通知先
STDSPFilterInformation	イベント通知先(フィルタ)
STDSystemHardwareSecurity	ハードウェアセキュリティ
STDSystemMemorySettings	メモリ情報
STDSystemPowerControls	パワーコントロール
STDSystemPowerMgmt	パワーマネージメント
STDSystemResDMAInfo	システムリソース(DMA)
STDSystemResDeviceInfo	システムリソース(デバイス)
STDSystemResIOInfo	システムリソース(I/Oポート)
STDSystemResIRQInfo	システムリソース(IRQ)
STDSystemResMemoryInfo	システムリソース(Memory Mapped I/O)
STDSystemRes2	システムリソース２
STDTemperatureProbe	温度
STDVideoOutputDevice	ビデオ(出力デバイス)
STDVoltageProbe	電圧
LNDSKSystemResExtensions	システムリソース(拡張情報)
LNDSKSystemRes2Extensions	システムリソース２(拡張情報)
TOOLComponentIDGroup	DMITOOL情報
TOOLSoftwareComponentInf	DMITOOLバージョン情報
TOOLSoftwareSignature	DMITOOL識別情報
TOOLProductId	プロダクトID
TOOLCpu	CPU(DMITOOL)情報
TOOLMemory	メモリ(DMITOOL)情報
TOOLDisplay	ディスプレイ情報
TOOLVideo	VIDEOボード(DMITOOL)情報
TOOLSupportResolusion	解像度情報

TOOLKeyboard	キーボード(DMITOOL)情報
TOOLMouse	マウス(DMITOOL)情報
TOOLPrinterPort	プリンタポート情報
TOOLRc232cPort	RS-232Cポート情報
TOOLPcCardSlot	PCカードスロット情報
TOOLSlot	スロット情報
TOOLPrinter	プリンタ情報
TOOLDisk	物理ディスク(DMITOOL)情報
TOOLPartition	論理ディスク(DMITOOL)情報
TOOLModem	モデム情報
TOOLSoftware	ソフトウェア情報
TOOLHardwareResource	ハードウェアリソース情報

構成情報以外のテーブルとしては以下のものがあります。

テーブル名
CLIENT
CLIENTGROUP
CMAssetFormat
CMDBTABLE
CMROUTEEX
EVENT
EVENTOPT
FILESRHOPT
GROUPMEMBER
HISTORYDATA
IDCOUNTER
INDICATIONOPT
INVENTORYOPT
MANAGER
OTHEROPT
PROCESSWATCHOPT
QUERY
QUERYEXPRESSION
REQEVENTOPT
REQFILESRHOPT
REQINDICATIONOPT

REQOFFSTATEALERTOPT
REQOTHEROPT
REQPROCESSWATCHOPT
SGDETAIL
SGRESULT

これらのテーブルは、CMマネージャのセットアップ中に作成されます。

注意：

■ ログの削除

- データベースとしてSQL Serverを使用する場合、ログの使用可能領域を定期的に確認するか、チェックポイント時のログ切り捨てオプションを有効にしてください。

■ サービスの設定

- データベースサービスは自動起動するよう設定してください。

■ データソースの設定

- データソースはシステムデータソースを設定してください。

■ DBマシンとClientManager マネージャをインストールするマシンが異なる場合の設定。

DBがORACLEの場合はClientManagerマネージャをインストールするマシンにORACLEクライアントが必要となります。

4.2.4 ESMPRO ユーザグループ（NvAdmin グループ）の追加

この作業は、Windows Server 2003 / Windows XP / Windows 2000 / Windows NTでのCMマネージャでのみ必要となります。また、以下の製品がインストールされている場合には、その製品のインストール時に設定が終わっていますので作業は必要ありません。

- ESMPRO/Netvisor
- ESMPRO/ServerManager
- SystemScope/UXServerManager

Windows Server 2003 / Windows XP / Windows 2000 / Windows NTでCMマネージャの統合ビューアを使用するには、Administratorsグループ、もしくはインストール時に登録するESMPROユーザグループに所属している必要があります。ESMPROユーザグループとしてローカルグループ、またはグローバルグループに登録されているユーザグループを指定することができます。ClientManagerを使用する場合は、NvAdminという名前のユーザグループをESMPROユーザグループとして登録することをお勧めします。

OS	
Windows XP	「スタート」→「プログラム」→「パフォーマンスとメンテナンス」→「管理ツール」→「コンピュータの管理」→「ローカルユーザとグループ」で行います。
Windows XP Home Edition	グループを作成できません。 既定のグループを選択してください。
Windows 2000, Windows Server 2003	「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「コンピュータの管理」→「ローカルユーザとグループ」で行います。
Windows 2000, Windows Server 2003 で Active Directoryをインストール。	「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「Active Directory ユーザとコンピュータ」で行います。
Windows NT 4.0	NvAdminグループの追加は「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「（ドメイン）ユーザーマネージャ」で行います。

4.3 CM マネージャセットアップ

4.3.1 インストール

管理サーバセットアップは管理サイトのサイトサーバを対象にインストール処理を行います。

Windows Sever2003, Windows XP,Windows 2000、Windows NTにおいてインストール処理を行うには、必ずAdministratorsローカルグループに属している（管理者権限を持っている）アカウントでセットアッププログラムを起動するようにしてください。セットアップ中にエラーが発生した場合には、「4.12 エラーコード表」でエラー内容を確認してください。

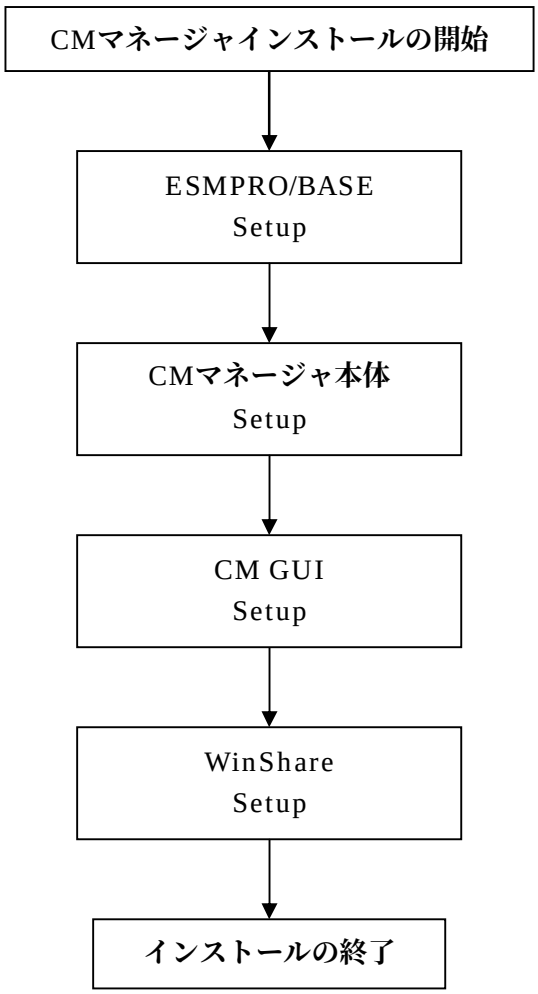
1. 「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。

2. CD-ROMドライブのルートディレクトリにある以下のコマンドを、OSの違いに応じて選択し、起動してください。

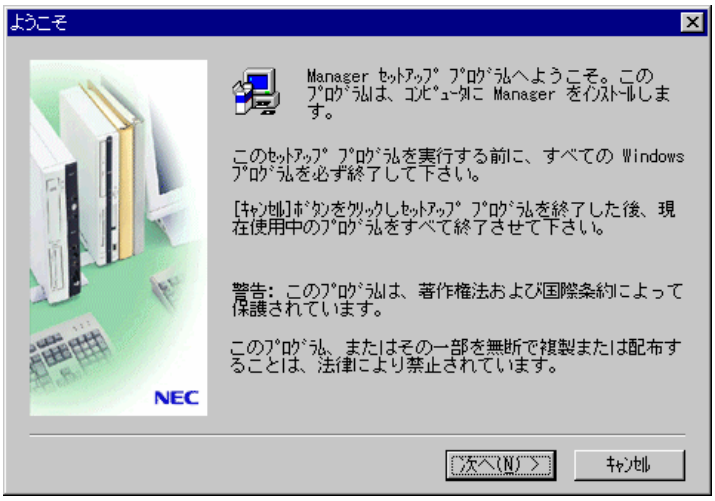
<table>
<tr><th></th><th>PC-9821シリーズの場合</th><th>PC98-NXシリーズおよび
AT互換機の場合</th></tr>
<tr><td rowspan="2">Windows Server 2003
Windows XP
Windows 2000
Windows NT</td><td></td><td rowspan="2">SETUP32I.EXE</td></tr>
<tr><td>SETUP329.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows Me</td><td></td><td rowspan="2">SETUP95D.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows 98</td><td>SETUP959.EXE</td></tr>
</table>

3. 「インストール」のボタンをクリックした後、表示されるダイアログにそって作業を行ってください。インストール作業の種類を求められた場合は、「個別インストール」を選択し、製品名「ESMPRO/CM Manager」、バージョン／ユーザセット数「バージョンx.y　1セット」を選択してください。

インストールのフローを示します。次頁以降に設定画面と項目を説明します。



（1）「ようこそ」ダイアログ ボックスが表示されますので、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

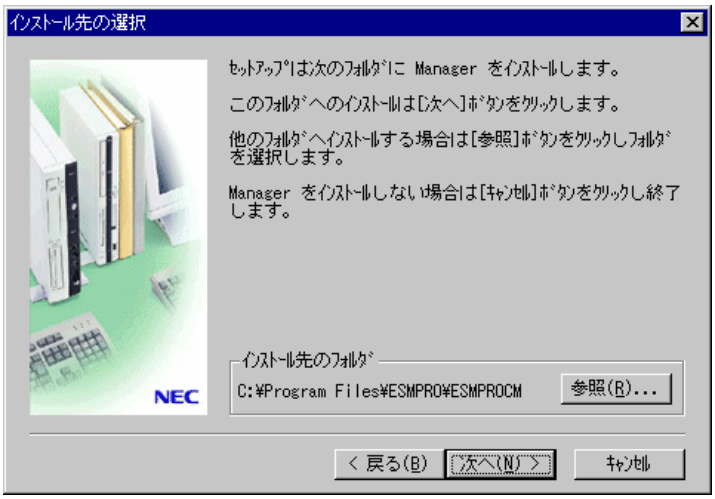


各ボタンを押したときの動作は、次のとおりです。

［次へ(N)］　　次のダイアログを表示します。

［キャンセル］　　セットアップを中止します。

（2）「インストール先の選択」ダイアログ ボックスが表示されますので、ディレクトリを指定した後、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。



CMマネージャのインストールに必要な空き容量を参考にして、 CMマネージャのインストール先を指定してください。他のアプリケーションと同一のディレクトリは指定しないでください。

各ボタンを押したときの動作は、次のとおりです。

［戻る(B)］　　1つ前のダイアログを表示します。

［次へ(N)］　　次のダイアログを表示します。

［キャンセル］　　セットアップを中止します。

以降特に断らない限り、各ボタンを押したときの動作は同じです。

注意： インストール中にドライブの空き容量が不足した場合は、ClientManagerのインストールが失敗しますので十分注意してください。

注意： ESMPRO/ServerManagerがインストールされているディレクトリにClientManagerをインストールする場合には、指定するディレクトリを一階層ずらしてください。たとえば、ESMPRO/ServerManagerで ¥ESMPRO を指定した場合には、ClientManagerでは、¥ESMPRO¥ESMPROCM を指定してください。

（3）「マネージャIDの設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、マネージャIDを指定し、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

マネージャIDは、**3桁の英数字**で指定します(000は指定しないでください)。このマネージャIDがマネージャを識別する識別子になりますので注意して指定してください。

（4）「データベースサーバの設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、データベースサーバ名もしくは、データベースサーバのIPアドレスを指定し、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（5）「コンポーネントの選択」ダイアログ ボックスが表示されますので、使用するデータベースを選択して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（6）「データソース名の設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、ODBCドライバの設定時に指定したデータソース名を入力して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（7）（SQL Serverもしくは CMデータベースエンジンを使用する場合）

「データベース名の設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、使用するデータベース名を入力して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（Oracle 7を使用する場合）

「データベース別名の設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、使用するデータベース別名を入力して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（Oracle 8を使用する場合）

「サービス名（データベース別名）の設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、使用するサービス名（データベース別名）を入力して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（Oracle 8i、Oracle 9i、Oracle10gを使用する場合）

「ネットサービス名の設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、使用するネットサービス名を入力して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（８）「ユーザ名の設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、データベースに接続する際に使用するユーザ名を入力して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（9）「パスワードの入力」ダイアログ ボックスが表示されますので、データベースに接続する際に使用するパスワードを入力して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（１０）「コンポーネントの選択」ダイアログ ボックスが表示されますので、データベース接続テストを行うかどうかを選択して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

注意： セットアップは指定されたデータベースにテーブルを作成します。テーブル作成時にデータベースとの接続に失敗すると、セットアップは中断されます。指定した項目に誤りが無いことを確認するために、特別な理由が無い限り、接続テストは必ず行うようにしてください。

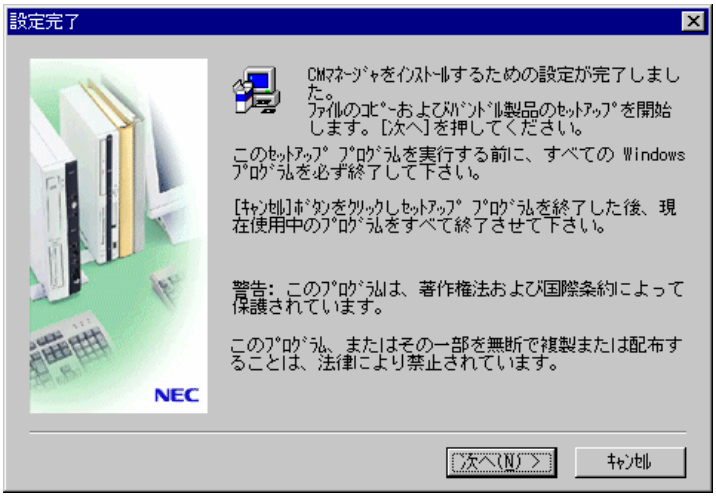
（１１）データベース接続テストの結果が表示されます。

（成功時）

（失敗時の例）

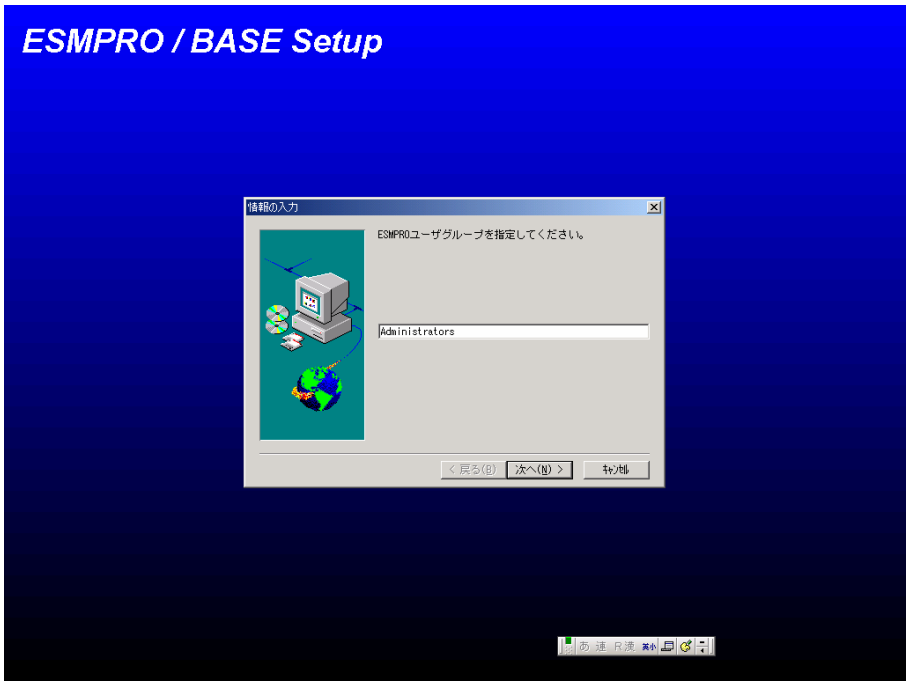
失敗した場合は、メッセージを参考に設定項目を見直して再試行してください。

（１２）「設定完了」ダイアログ ボックスが表示されます。＜次へ(N)＞ボタンを押してください。
バンドル製品のセットアップおよびファイルのコピーが開始されます。

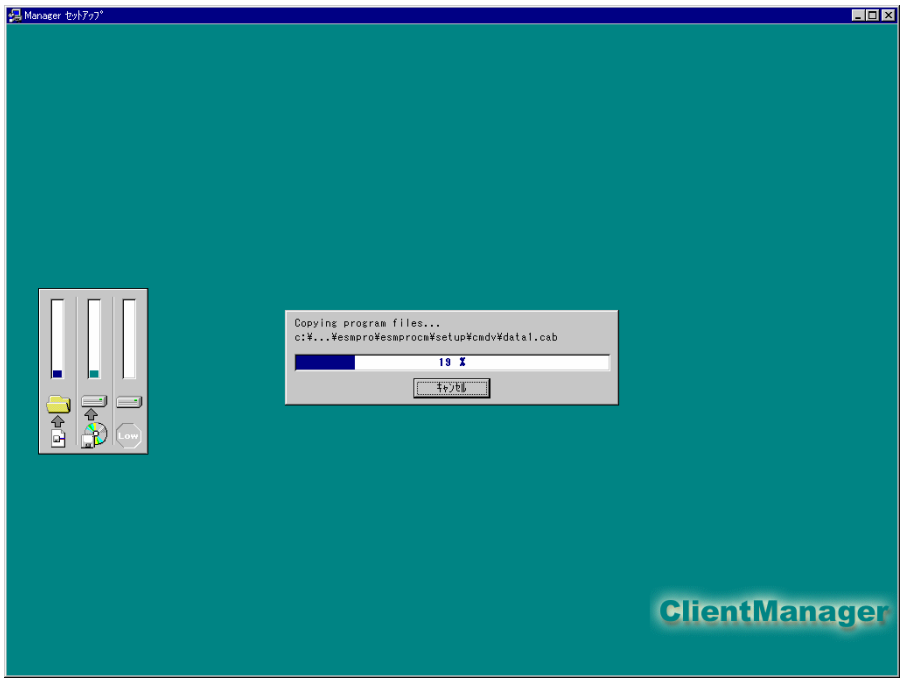


（１３）ESMPRO/BASEのセットアップが開始されます。

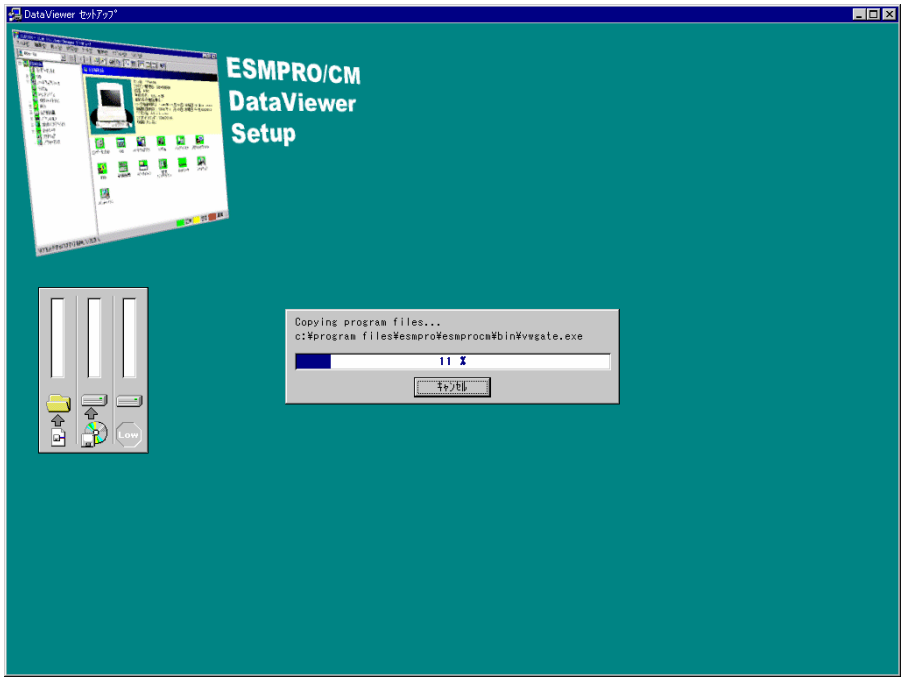
Windows Server 2003, Windows XP、Windows 2000、Windows NTの場合には「ESMPROユーザグループ」を指定するためのダイアログボックスが表示されますので、「4.2.4 ESMPROユーザグループ(NvAdminグループ)の追加」で登録したユーザグループを指定してください。Windows XP Home Editionでは、既存のユーザグループである「Administrators」を指定してください。すでにESMPRO/ServerManager、ESMPRO/Netvisor、SystemScope/UxServerManagerのうち、いずれかがインストールされている場合には省略されます。



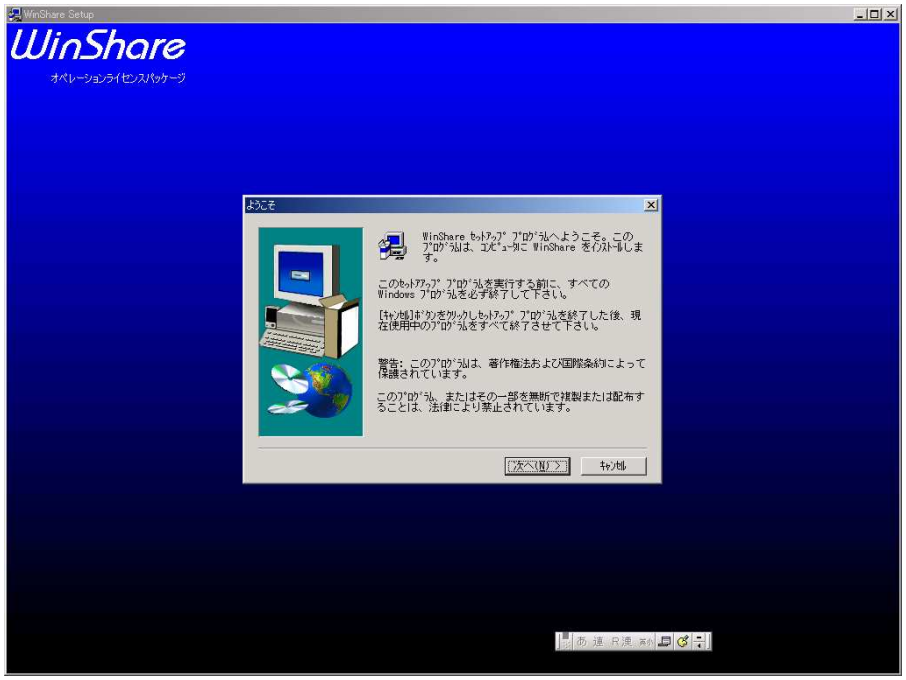
（１４）ESMPRO/BASEのセットアップ完了後、自動的にClientManagerマネージャのセットアップが開始されます。



（１５）ClientManagerマネージャのセットアップ完了後、自動的にClientManagerデータビューアのセットアップが開始されます。



１６） ClientManagerデータビューアのセットアップ完了後、自動的にWinShare(リモート制御機能)のセットアップが開始されます。画面の指示にしたがって、インストールしてください。



以上でセットアップ処理は終了です。セットアップの内容を有効にするにはシステムを再起動してください。

4.3.2　アンインストール

マネージャの階層化を行っている場合には、階層化を解除してからアンインストールを行ってください。

Windows Server 2003, Windows XP、Windows 2000、Windows NTにおいてCMマネージャのアンインストール処理を行うには、必ずAdministratorsローカルグループに属している（管理者権限を持っている）アカウントでセットアッププログラムを起動するようにしてください。セットアップ中にエラーが発生した場合には、「4.12 エラーコード表」でエラー内容を確認してください。

4.3.2.1　CM マネージャアンインストール

1. 「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。
2. CD-ROMドライブのルートディレクトリにある以下のコマンドを、OSの違いに応じて選択し、起動してください。

<table>
<tr><th></th><th>PC-9821シリーズの場合</th><th>PC98-NXシリーズおよび
AT互換機の場合</th></tr>
<tr><td rowspan="2">Windows Server 2003
Windows XP
Windows 2000
Windows NT</td><td></td><td rowspan="2">SETUP32I.EXE</td></tr>
<tr><td>SETUP329.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows Me</td><td></td><td rowspan="2">SETUP95D.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows 98</td><td>SETUP959.EXE</td></tr>
</table>

3. 「アンインストール」のボタンをクリックした後、表示されるダイアログにそって作業を行ってください。

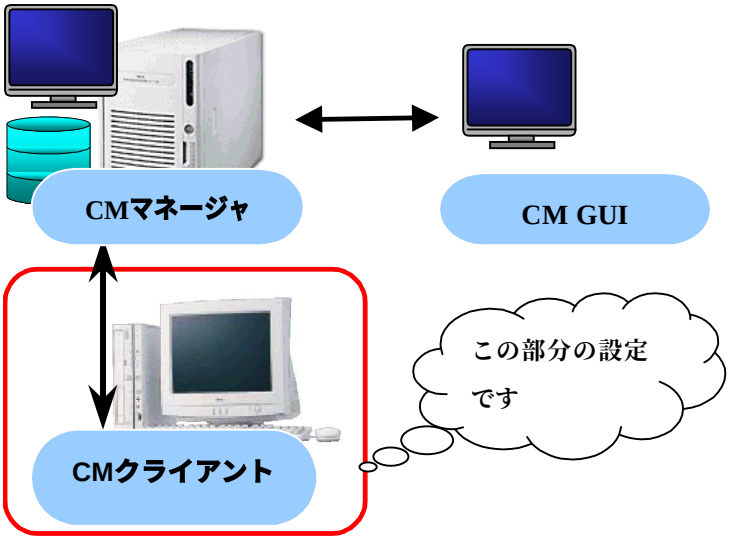
4.3.2.2　CM データベースエンジンのアンインストール

CMデータベースエンジンのアンインストーラを実行します。

CMデータベースエンジンのアンインストーラの起動は、[コントロールパネル]の[アプリケーションの追加と削除]から「ESMPRO/CM データベースエンジン」を選択して[追加と削除]ボタンをクリックしてください。

4.4 CM クライントのセットアップの準備

本節で、CMクライアントをセットアップする前の準備について説明します。



4.4.1 SNMP エージェントの組み込みと設定

統合ビューアのオペレーションウィンドウにてクライアントを自動発見するには、SNMPエージェント(サービス)の組み込みが必要です。

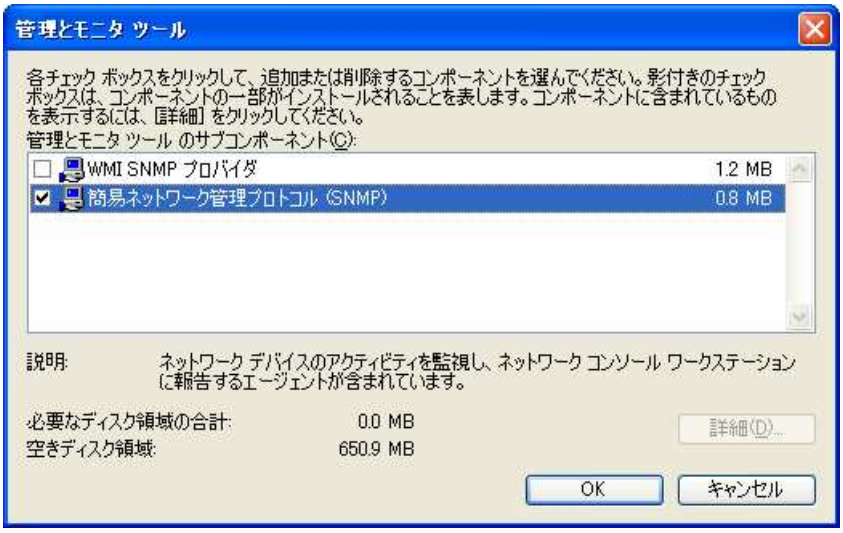
SNMPエージェントの組み込みおよび設定は、CMクライアントのセットアップの前に行います。

SNMPエージェントの組み込みおよび設定の手順を、Windows Server 2003, Windows XP、Windows 2000、 WindowsNT 4.0、WindowsNT 3.51、Windows Me、Windows 98, Windows 95、に分けて説明を行います。

4.4.1.1 Windows Server 2003, Windows XP の場合

1．SNMP サービスの組み込み

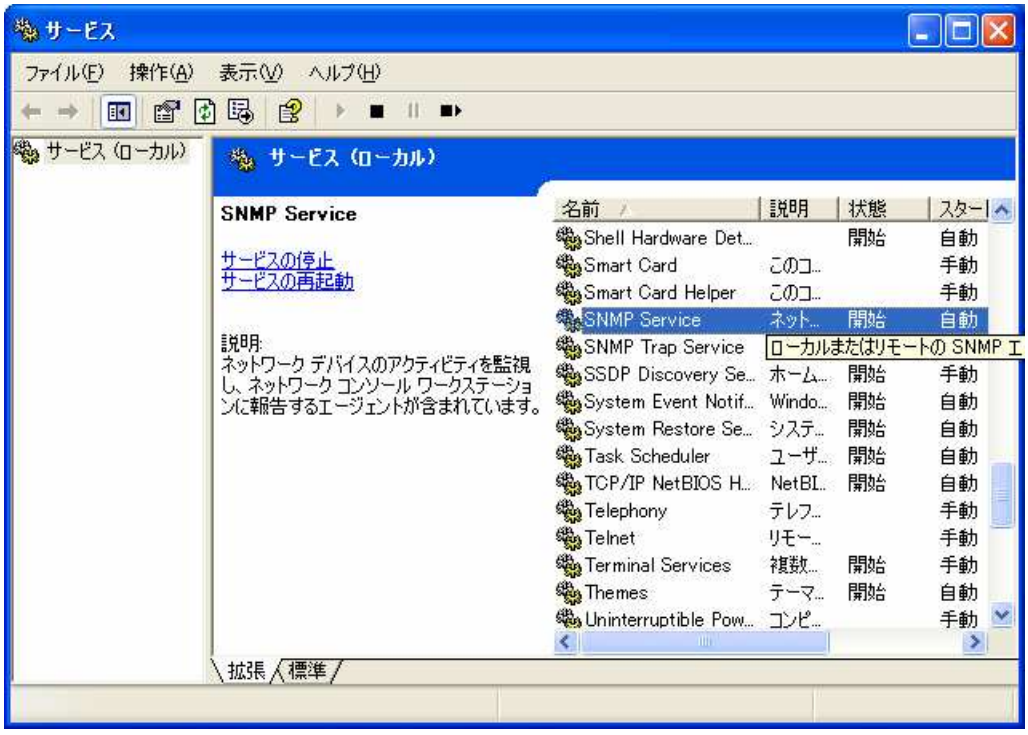
[スタート]メニューより [コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダを開きます。「アプリケーションの追加と削除」アイコンをダブルクリックし「アプリケーションの追加と削除」を開きます。「Windowsコンポーネントの追加と削除」を選択し「Windowsコンポーネント」ウィザードを開きます。「管理とモニタツール」をチェックして、＜詳細＞ボタンを選択して、「管理とモニタツール」ダイアログを開きます。「簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)」をチェックし、<OK>ボタンを押してください、「Windowsコンポーネント」に戻ります。



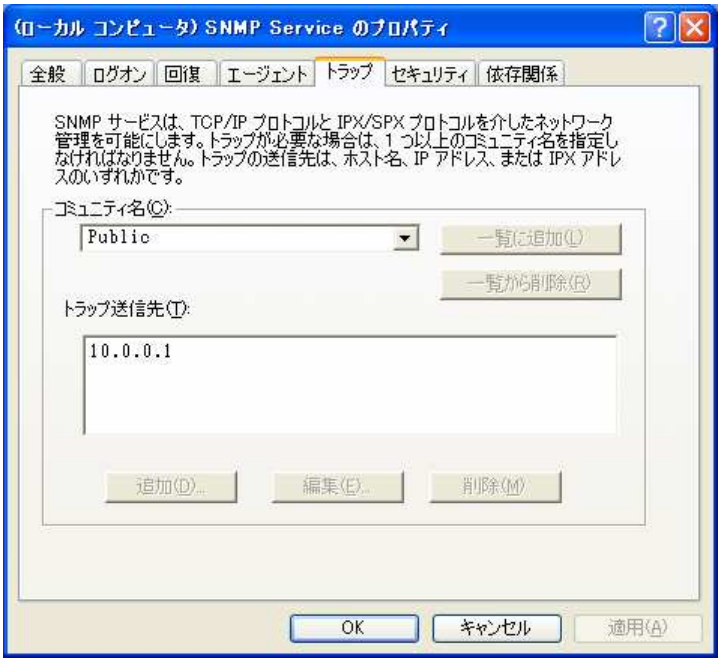
<次へ>ボタンを押してインストールを行います。ファイルコピーなどが終了したら<完了>ボタンを押します。<閉じる>ボタンを押して「アプリケーションの追加と削除」を閉じます。

2．SNMP サービスの設定

「コントロールパネル」の「管理ツール」アイコンをダブルクリックして、「管理ツール」を開きます。「サービス」アイコンを選択し、「サービス」を開きます。

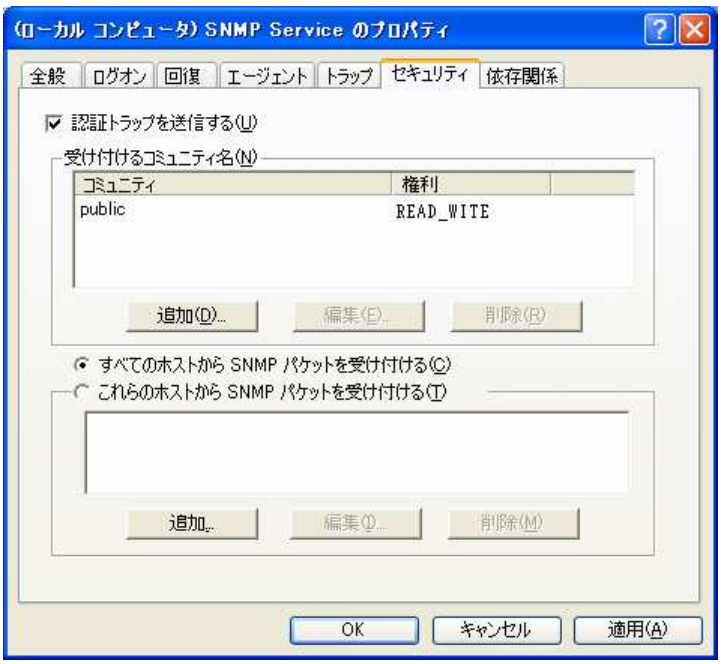


「SNMP Service」を選択した状態で「操作」－「プロパティ」を選択すると「(ローカルコンピュータ)のSNMP Service プロパティ」ダイアログが開きます。[トラップ]タブを選択し、[コミュニティ名]に「public」を指定し＜一覧に追加＞ボタンを押します。次に[トラップ送信先]の＜追加＞ボタンを押し、「サービスの構成」ダイアログボックスを開き、CM マネージャのマシン名または IP アドレスを指定し、＜追加＞ボタンを押します。



「セキュリティ」タブを選択して、コミュニティ「public」を選択した状態で＜編集＞ボタンを選択して「SNMPサービスの構成」ダイアログを開きます。**コミュニティの権利で、“READ_ONLY”を“READ_WRITE”に変更します。**

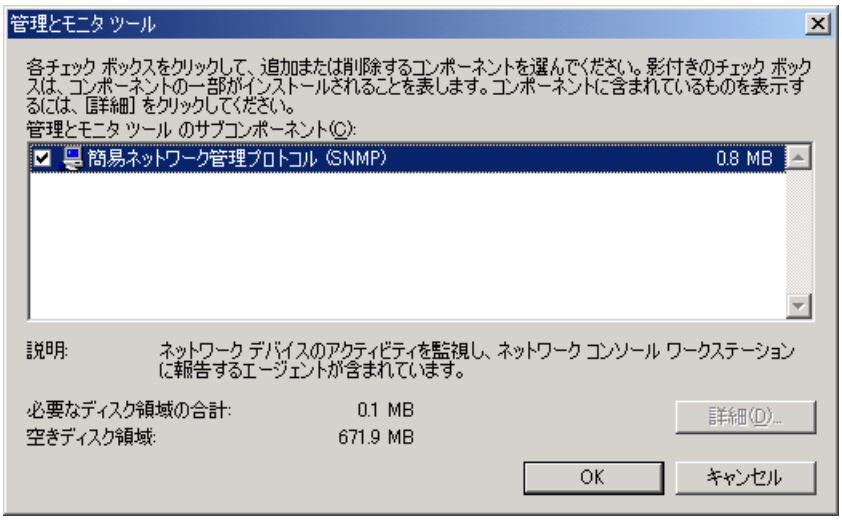
＜OK＞ボタンを押し「SNMPサービスの構成」ダイアログを閉じます。＜OK＞ボタンを押して「(ローカルコンピュータ)のSNMP Service プロパティ」ダイアログを閉じます。



4.4.1.2　Windows 2000 の場合

3．SNMP サービスの組み込み

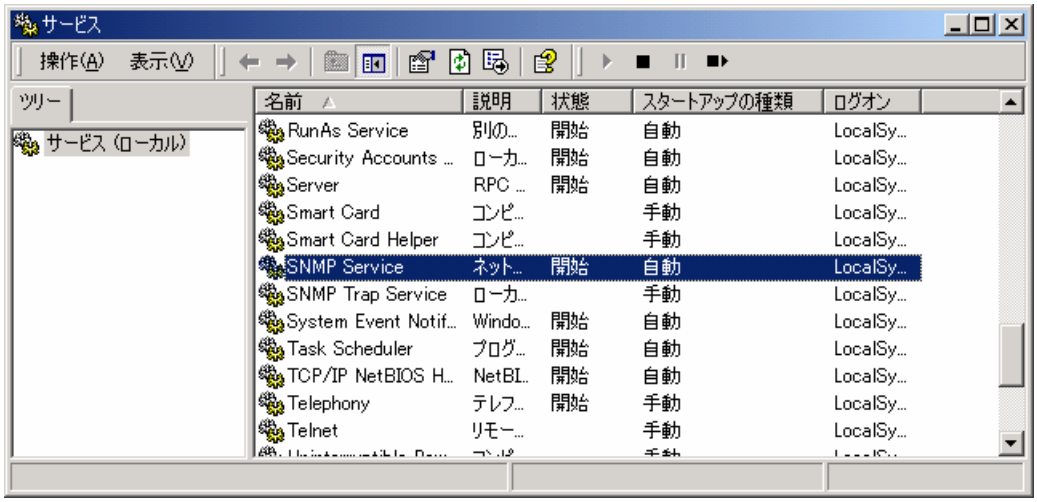
[スタート]メニューより[設定]の[コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダを開きます。「アプリケーションの追加と削除」アイコンをダブルクリックし「アプリケーションの追加と削除」を開きます。「Windowsコンポーネントの追加と削除」を選択し「Windowsコンポーネント」ウィザードを開きます。「管理とモニタツール」をチェックして、<詳細>ボタンを選択して、「管理とモニタツール」ダイアログを開きます。「簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)」をチェックし、<OK>ボタンを押してください、「Windowsコンポーネント」に戻ります。



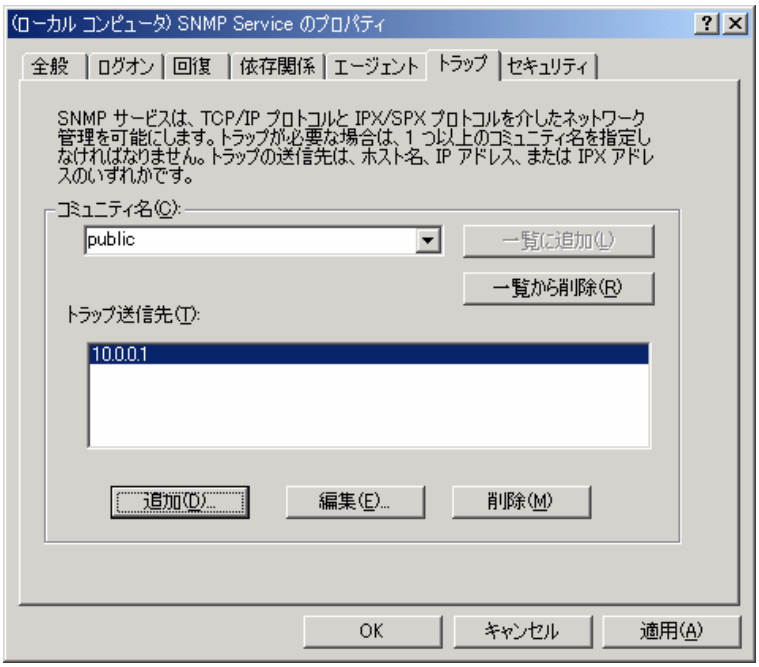
<次へ>ボタンを押してインストールを行います。ファイルコピーなどが終了したら<完了>ボタンを押します。<閉じる>ボタンを押して「アプリケーションの追加と削除」を閉じます。

4．SNMP サービスの設定

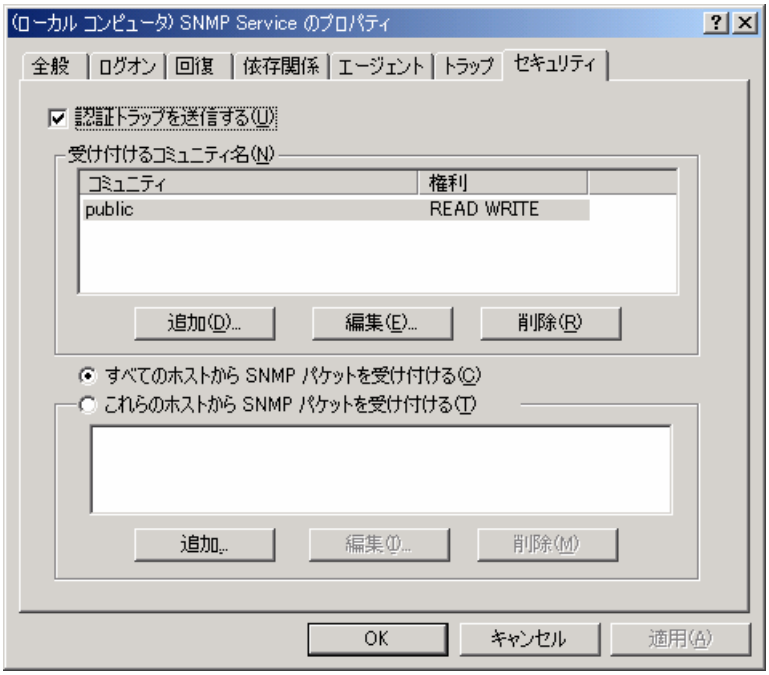
「コントロールパネル」の「管理ツール」アイコンをダブルクリックして、「管理ツール」を開きます。「サービス」アイコンを選択し、「サービス」を開きます。



「SNMP Service」を選択した状態で「操作」－「プロパティ」を選択すると「(ローカルコンピュータ)のSNMP Service プロパティ」ダイアログが開きます。[トラップ]タブを選択し、[コミュニティ名]に「public」を指定し＜一覧に追加＞ボタンを押します。次に[トラップ送信先]の＜追加＞ボタンを押し、「サービスの構成」ダイアログボックスを開き、CM マネージャのマシン名または IP アドレスを指定し、＜追加＞ボタンを押します。



「セキュリティ」タブを選択して、コミュニティ「public」を選択した状態で＜編集＞ボタンを選択して「SNMPサービスの構成」ダイアログを開きます。**コミュニティの権利で、“READ_ONLY”を“READ_WRITE”に変更します。**



＜OK＞ボタンを押し「SNMPサービスの構成」ダイアログを閉じます。＜OK＞ボタンを押して「(ローカルコンピュータ)のSNMP Service プロパティ」ダイアログを閉じます。

4.4.1.3 Windows NT 4.0 の場合

1. SNMP サービスの組み込み前の確認

SNMPエージェントを組み込む前に、SNMPを使用するアプリケーションプログラム（AP）がすでに組み込まれていた場合には、SNMPエージェントを組み込む前に当該APを削除するなどして下記レジストリにキーがなにも設定されていない状態に戻す必要があります。

HKEY_LOCAL_MACHNE¥System¥CurrentControlSet¥Services¥SNMP¥Parameters¥ExtensionAgents¥

SNMPを使用するAPは上記レジストリにキーを設定しますが、SNMPエージェントを組み込む前に上記レジストリにキーが存在すると、SNMPエージェントを組み込んでも、標準MIB（標準的な管理項目）を処理するためのモジュール（拡張エージェント）への設定が正しく行われず、標準MIBの取得ができなくなります。SNMPエージェントを組み込む前に上記レジストリにすでにキーが存在する場合、そのキーを一旦退避（レジストリエディタの「レジストリ」メニューの「レジストリファイルの書き出し」を行い、キーを削除し、SNMPエージェントを組み込んだ後、キーを復元）するか、もしくは当該APを削除してキーが削除されることを確認した後、SNMPエージェントを組み込んでください。

たとえば、PC98-NXシリーズや最近のPC-9821シリーズのWindows NTプリインストールモデルにプリインストールされているMcAfee社のVirusScanは上記レジストリにキーを設定しています。この場合VirusScanを削除しただけではキーは削除されないため、キーを退避した後、レジストリキーを削除し、SNMPエージェントを組み込んだ後、キーを復元する必要があります(Windows 95プリインストールモデルにプリインストールされているVirusScanはSNMPを使用しません) 。

2. SNMP サービスの組み込み

[スタート]メニューより[設定]の[コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダイアログボックスを起動し、「ネットワーク」アイコンをダブルクリックし「ネットワーク」ダイアログボックスで[サービス]タブを選択します。「ネットワークサービス」リストボックスに現在登録しているネットワーク関連のサービス一覧が表示されますので、SNMPサービスがあるか確認してください。SNMPサービスが組み込まれていない場合には、SNMPサービスを組み込むため、＜追加＞ボタンを押し、「ネットワークサービスの選択」ダイアログボックスを表示し、[SNMPサービス]を選択し、＜OK＞ボタンを押します。「Windows NT セットアップ」ダイアログボックスが起動し Windows NT CD-ROM ドライブのディレクトリもしくはハードディスクのディレクトリを選択し＜続行＞ボタンを押します。

「Microsoft SNMPのプロパティ」ダイアログボックスが起動します。
SNMP サービスの設定については、２．SNMP サービスの設定を参照してください。

3. SNMP サービスの設定

[スタート]メニューより[設定]の[コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダイアログボックスを起動します。「ネットワーク」アイコンをダブルクリックし「ネットワーク」ダイアログボックスで[サービス]タブを選択し、「ネットワークサービスの選択」ダイアログボックスで、[SNMPサービス]を選択し、＜プロパティ＞ボタンを押しSNMPサービスの設定を行います。[トラップ]タブを選択し、[コミュニティ名]に「public」を指定し＜追加＞ボタンを押します。次に[トラップ送信先」の＜追加＞ボタンを押し、「サービスの構成」ダイアログボックスで、CM マネージャのマシン名または IP アドレスを指定し、＜追加＞ボタンを押します。

「Microsoft SNMPのプロパティ」ダイアログボックスで＜OK＞ボタンを押し「ネットワーク」ダイアログボックスで＜閉じる＞ボタンを押します。

「ネットワーク設定の変更」ダイアログボックスで＜はい＞ボタンを押しコンピュータを再起動します。

4.4.1.4 Windows NT 3.51 の場合

1. SNMPサービスの組み込み

「プログラムマネージャ」で「メイン」グループの「コントロールパネル」を選択し、「コントロールパネル」を起動します。「コントロールパネル」の「ネットワークアイコン」をダブルクリックし、「ネットワークの設定」ダイアログボックスを起動します。「ネットワークの設定」ダイアログボックスの「組み込まれているネットワークソフトウェア」で「SNMPサービス」があるか確認してください。SNMPサービスが組み込まれていない場合には、「ネットワークの設定」ダイアログボックスの＜ソフトウェアの追加＞ボタンを押し、「ネットワークソフトウェアの追加」ダイアログを起動します。「ネットワークソフトウェアの追加」ダイアログの「ネットワークソフトウェア」リストボックスで「TCP/IPプロトコルおよび関連コンポーネント」を選択、＜続行＞ボタン押し、「Windows NT TCP/IP組み込みオプション」ダイアログを起動します。「Windows NT TCP/IP組み込みオプション」ダイアログの「コンポーネント」チェックボタンで、「SNMPサービス」をチェックし、＜続行＞ボタンを押します。「Windows NT セットアップ」ダイアログが起動し、Windows NT CD-ROMドライブのディレクトリもしくは、ハードディスクのディレクトリを選択して続行ボタンを押します。「SNMPサービスの構成」ダイアログが表示されます。SNMPサービスの設定については、２．SNMPサービスの設定を参照してください。

2. SNMPサービスの設定

「プログラムマネージャ」で「メイン」グループの「コントロールパネル」を選択し、「コントロールパネル」を起動します。コントロールパネル」の「ネットワークアイコン」をダ

ブルクリックし、「ネットワークの設定」ダイアログボックスを起動します。「ネットワークの設定」ダイアログボックスの「組み込まれているネットワークソフトウェア」で「SNMPｻｰﾋﾞｽ」を選択し＜構成＞ボタンを押し、「SNMPサービスの構成」ダイアログボックスを起動します。「SNMPサービスの構成」ダイアログボックスの「トラップとともに送信するコミュニティ名」で「public」を選択し、「IPホスト/アドレスまたはIPXアドレス」入力ボックスに、CMマネージャのマシン名またはIPアドレスを指定し、＜追加＞ボタンを押し、さらに＜OK＞ボタンを押します。

4.4.1.5 Windows Me の場合

Windows Meの場合、Windows 95 / 98のようにリソースキットが提供されておりません。このため、リソースキットに含まれるSNMPやシステムポリシーエディタが提供されておりません。CMクライアントはSNMPが必須のため動作しません。

現状の回避方法としてはWindows 98 Second Editionのリソースキットの SNMPを利用する事になります。設定方法は、「Windows 98 の場合」を参照してください。

4.4.1.6 Windows 98 の場合

Windows 98の場合、PC98-NXシリーズの Windows 98 プリインストールモデルとそれ以外の Windows 98マシンとで SNMPエージェントの組み込み方法が若干異なります。PC98-NXシリーズの Windows 98 プリインストールモデルの場合、インストール元のファイルがハードディスク上に格納されています。その他の Windows 98 マシンは Windows 98 の CD-ROM からインストールすることになります。ハードディスクも CD-ROM もインストールするファイルのディレクトリ構造は同様なので以下の説明では、CD-ROM からインストールする場合のみ説明します。

PC98-NXシリーズの Windows 98 Second Editionでないwindows 98 プリインストールモデルに、Windows 98 Second Editionをインストールした場合には、Windows 98 Second Edition のCD-ROMからインストールを行ってください。

1. SNMPサービスの組み込み

   [スタート]メニューの[設定]から[コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダイアログボックスを起動します。「コントロールパネル」の「ネットワーク」アイコンをダブルクリックし「ネットワーク」ダイアログボックスを起動し、＜追加＞ボタンを押します。「ネットワークコンポーネントの選択」ダイアログボックスが表示されたら、インストールするネットワークコンポーネントとして[サービス]を選択し、＜追加＞ボタンを押します。Windows 98 の CD-ROMをドライブに挿入した後、「ネットワークサービスの選択」ダイアログボックスで＜ディスク使用＞ボタンを押し「ディスクからインストール」ダイアログボックスを起動し＜参照＞ボタンを押します。

「開く」ダイアログボックスが起動されたら[ドライブ]に Windows 98 の CD-ROM を挿入したドライブを選択し、[フォルダ]に tools¥reskit¥netadmin¥snmp を選択し、[ファイル名]に snmp.inf ファイルを選択し、＜OK＞ボタンを押します。

「ディスクからインストール」ダイアログボックスも＜OK＞ボタンを押して閉じます。「ネットワークサービスの選択」ダイアログボックスで「Microsoft SNMP エージェント」を選択し＜OK＞ボタンを押します。「ネットワーク」ダイアログボックスで＜OK＞ボタンを押します。

「ファイルのコピー」ダイアログボックスが表示された場合は、「ファイルのコピー元」に Windows 98 の CD-ROM を挿入したドライブの ¥win98 ディレクトリを指定し＜OK＞を押します。

「システム設定の変更」ダイアログボックスが表示されたら＜はい＞を押します。

2. システムポリシーエディタの組み込み

[スタート]メニューの[設定]から[コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダイアログボックスを起動します。「コントロールパネル」の「アプリケーションの追加と削除」アイコンをダブルクリックし、「アプリケーションの追加と削除のプロパティ」ダイアログボックスが起動されたら、[Windowsファイル]タグを選択します。Windows 98 の CD-ROM をドライブに挿入した後、＜ディスク使用＞ボタンを押し、「ディスクからインストール」ダイアログボックスを起動し、＜参照＞ボタンを押します。「開く」ダイアログボックスが起動されたら[ドライブ]に Windows 98 のCD-ROM を挿入したドライブを選択し、[フォルダ]に tools¥reskit¥netadmin¥poledit を選択し、[ファイル名]にgrouppol.inf ファイルを選択し、＜OK＞ボタンを押します。「ディスクからインストール」ダイアログボックスも＜OK＞ボタンを押して閉じます。「ディスクを使ったインストール」ダイアログボックスで、[グループポリシー]と[システムポリシーエディタ]の両方を選択し、＜インストール＞ボタンを押します。「アプリケーションの追加と削除のプロパティ」ダイアログボックスの「Windowsファイル」タブで「システムポリシーエディタ」がチェックされているのを確認して、＜OK＞ボタンを押します。

3. SNMPサービスの設定

(1) [スタート]メニューの[プログラム]→[アクセサリ]→[システムツール]から[システムポリシーエディタ]を選択し、「システムポリシーエディタ」を起動します。

(2) [ファイル]メニューから[レジストリを開く]を選択します。

(3) 「ローカルコンピュータ」アイコンをダブルクリックし、「ローカルコンピュータのプロパティ」ダイアログボックスを表示し、[ローカルコンピュータ]→[ネットワーク]→[SNMP]を選択します。

(4) 以下の項目を設定します。

- 「コミュニティ」
  「表示」ボタンを押し、コミュニティ「public」を追加します。
- 「許可されたマネージャ」

「表示」ボタンを押し、CM マネージャのホスト名またはIP アドレス、およびアドレス ” 127.0.0.1”を追加します。

- 「[パブリック]コミュニティをトラップ」
  「表示」ボタンを押し、CM マネージャのホスト名またはIP アドレスを追加します。
- 「インターネット MIB (RFC1156)」
  「連絡先」と「場所」を指定します。

設定終了後は、コンピュータを再起動します。

4.4.1.7 Windows 95 の場合

1. SNMP サービスの組み込み

[スタート]メニューの[設定]から[コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダイアログボックスを起動します。「コントロールパネル」の「ネットワーク」アイコンをダブルクリックし「ネットワーク」ダイアログボックスを起動し、＜追加＞ボタンを押します。「ネットワーク構成ファイルの追加」ダイアログボックスが表示されたら、インストールするネットワーク構成ファイルとして[サービス]を選択し、＜追加＞ボタンを押します。Windows 95 の CD-ROMをドライブに挿入した後、「ネットワークサービスの選択」ダイアログボックスで＜ディスク使用＞ボタンを押し「フロッピーディスクからインストール」ダイアログボックスを起動し＜参照＞ボタンを押します。

「ファイルを開く」ダイアログボックスが起動されたら[ドライブ]に Windows 95 の CD-ROM を挿入したドライブ（または HD ドライブか FD ドライブ）を選択し、[フォルダ]に admin¥nettools¥snmp を選択し、[ファイル名]に snmp.inf ファイルを選択し、＜OK＞ボタンを押します。

「フロッピーディスクからインストール」ダイアログボックスも＜OK＞ボタンを押して閉じます。「ネットワークサービスの選択」ダイアログボックスで「Microsoft SNMP エージェント」を選択し＜OK＞ボタンを押します。「ネットワーク」ダイアログボックスで＜OK＞ボタンを押します。

「ディスクの挿入」ダイアログボックスが表示された場合は、指示に従ってください。

「ファイルのコピー」ダイアログボックスが表示され場合は、「ファイルのコピー元」で Windows 95 の CD-ROM を挿入したドライブの ¥win95 ディレクトリを指定し＜OK＞を押します。

バージョンの競合ダイアログボックスが表示された場合は、＜はい＞を押します。

「システムの設定変更」ダイアログボックスが表示されたら＜はい＞を押します。

設定終了後は、コンピュータを再起動します。

備考：

SNMPを組み込む際に Windows 95のCD-ROMがない場合には, Microsoftのホームページからダウンロードしてください。

Microsoftのホームページは,

http://www.microsoft.com/

http://www.microsoft.com/japan/

です。

2. システムポリシーエディタの組み込み

[スタート]メニューの[設定]から[コントロールパネル]を選択し、「コントロールパネル」ダイアログボックスを起動します。「コントロールパネル」の「アプリケーションの追加と削除」アイコンをダブルクリックし、「アプリケーションの追加と削除のプロパティ」ダイアログボックスが起動されたら、[Windowsファイル]タグを選択します。Windows 95 の CD-ROM をドライブに挿入した後、＜ディスク使用＞ボタンを押し、「フロッピーディスクからインストール」ダイアログボックスを起動し、＜参照＞ボタンを押します。「ファイルを開く」ダイアログボックスが起動されたら[ドライブ]にWindows 95 の CD-ROM を挿入したドライブ（または HDドライブか FDドライブ）を選択し、[フォルダ]にadmin¥apptools¥poledit を選択し、[ファイル名]に grouppol.inf ファイルを選択し、＜OK＞ボタンを押します。「フロッピーディスクからインストール」ダイアログボックスも＜OK＞ボタンを押して閉じます。「ディスクを使ったインストール」ダイアログボックスで、[グループポリシー]と[システムポリシーエディタ]の両方を選択し、＜インストール＞ボタンを押します。「アプリケーションの追加と削除」ダイアログボックスの「Windowsファイル」タブで「システムポリシーエディタ」がチェックされているのを確認して、＜OK＞ボタンを押します。

3. SNMP サービスの設定

(1) [スタート]メニューの[プログラム]→[アクセサリ]→[システムツール]から[システムポリシーエディタ]を選択し、「システムポリシーエディタ」を起動します。

(2) [ファイル]メニューから[レジストリを開く]を選択します。

(3) ローカルコンピュータ」アイコンをダブルクリックし、「ローカルコンピュータのプロパティ」ダイアログボックスを表示し、[ローカルコンピュータ]→[ネットワーク]→[SNMP]を選択します。

(4) 以下の項目を設定します。

- 「コミュニティ」

  「表示」ボタンをプレスし、コミュニティ「public」を追加します。

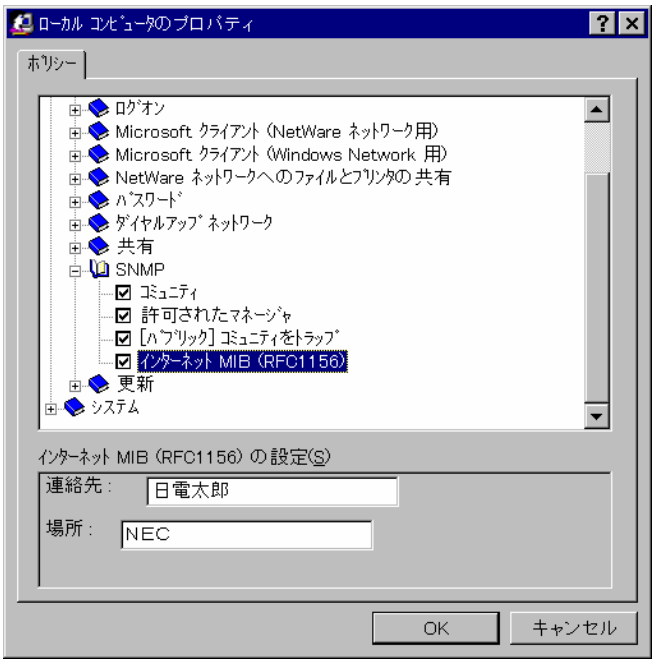
- 「許可されたマネージャ」

  「表示」ボタンをプレスし、CM マネージャのホスト名またはIP アドレス、およびアドレス ”127.0.0.1”を追加します。

- 「[パブリック]コミュニティをトラップ」

［表示」ボタンをプレスし、CM マネージャのホスト名またはIP アドレスを追加します。

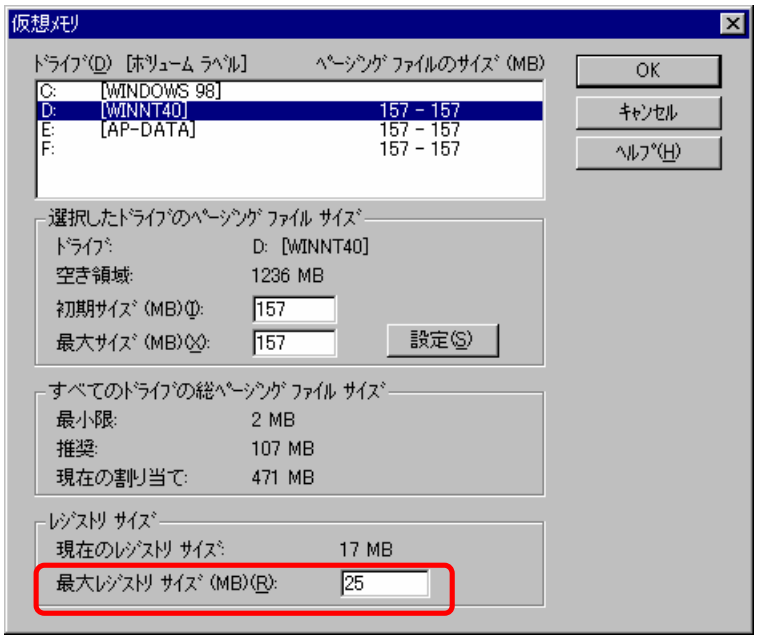
- 「インターネット MIB (RFC1156)」
  「連絡先」と「場所」を指定します。



ここに指定した値が、オペレーションウィンドウのインフォメーションビュー上の管理者・設置場所として表示されます。

4.4.2　レジストリサイズの確認と変更

Wiindows2000、Windows NTシステムにCMクライアントをセットアップする場合、セットアップの前に、クライアントPCのレジストリのサイズを確認してください。「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」から「システム」アイコンをダブルクリックし、「システムのプロパティ」ダイアログボックスを表示し、パフォーマンスタグを選択した後、仮想メモリの＜変更＞ボタンを押し、「仮想メモリ」ダイアログボックスを表示します。



「現在のレジストリサイズ」と「最大レジストリサイズ」を比較し、その差が5MB未満の場合には「最大レジストリ」サイズを変更し、差が5MB以上となるように設定します。

4.4.3　DMI 製品のインストール

そのPCを管理するためのDMI対応の製品がハードウェアにバンドルされている場合に、その製品をインストールしてからClientManagerをインストールすると、ClientManagerはその製品からも詳細な情報を取得します。

なお、DMI製品のインストール作業は必須ではありません。

■ LANDesk ClientManager with NEC Extension をバンドルしている機種（1999 年 10 月以降）

1999年10月以降のNECのPC98-NXには、Intel® LANDesk® ClientManager with NEC Extensionがバンドルされている機種があります。この機種の場合には、ハードウェアにバンドルされているLANDesk ClientManager with NEC Extensionをインストールします。

バンドルされていない機種でLANDesk ClientManager with NEC Extensionを利用したい場合には別途DMITOOL 8.1以降(LANDesk ClientManager with NEC Extensionを含む)を購入する必要があります。

■ LANDesk ClientManager をバンドルしている機種

ビジネス向けPCには、Intel® LANDesk® ClientManagerがバンドルされている場合が多くあります。この機種の場合には、そのハードウェア付属のIntel® LANDesk® ClientManager　をインストールします。

■ NEC DMITOOL をバンドルしている機種

NECのPC-9821シリーズおよび PC98-NXシリーズにはDMITOOLがバンドルされている機種があります。この機種の場合には、ハードウェアバンドルのDMITOOLをインストールします。

4.5 CM クライアントセットアップ

4.5.1 インストール

CMクライアントセットアップは管理マネージャから管理されるクライアント(クライアントPC)を対象にインストール処理を行います。

Windows Server 2003, Windows XP、Widnows 2000、Windows NT上でこのインストール処理を行う場合には、必ずAdministratorsローカルグループまたはOwnerグループに属しているアカウント（管理者権限を持っているアカウント）でセットアッププログラムを起動するようにしてください。

1. 「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。

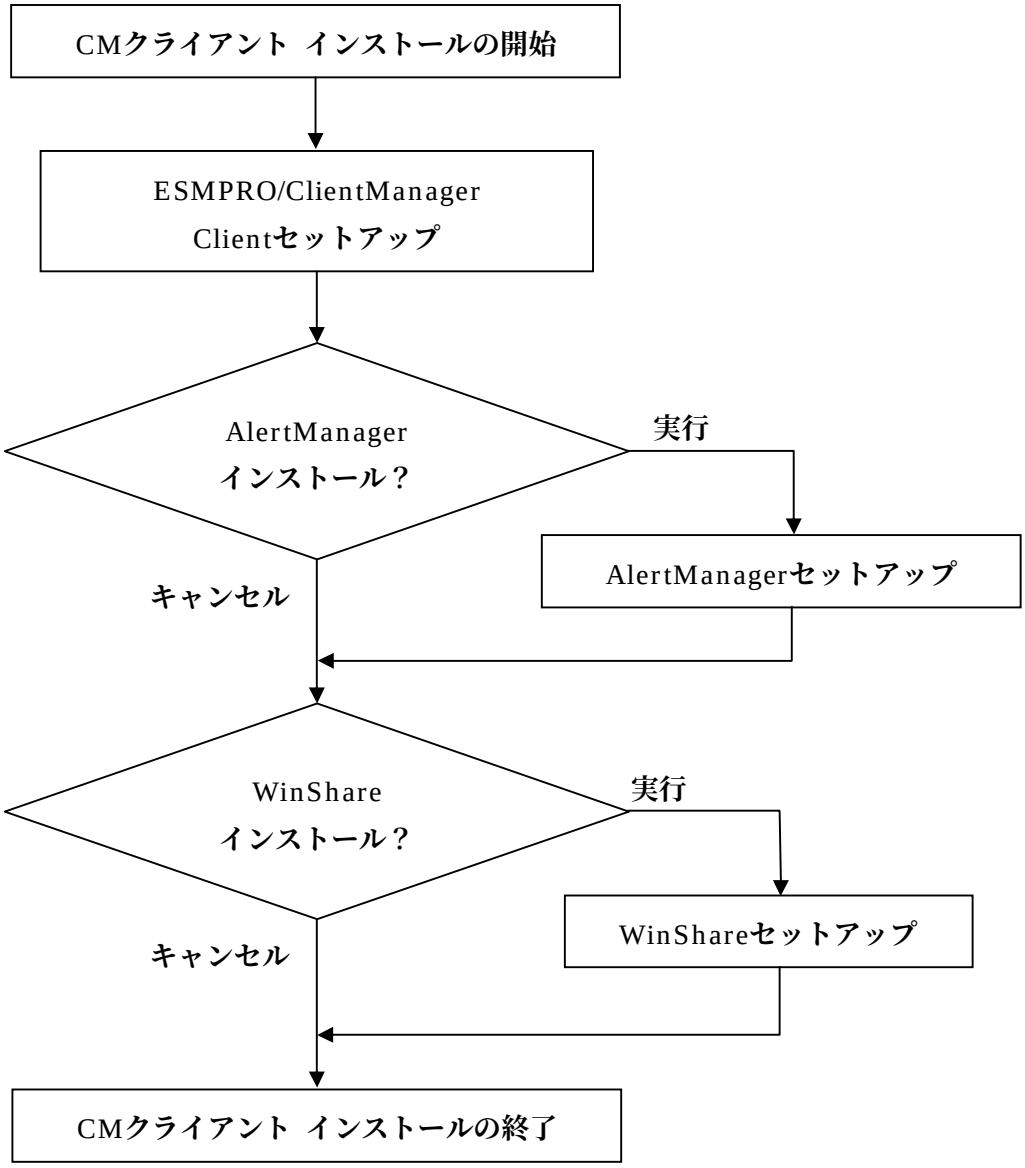
2. CD-ROMドライブのルートディレクトリにある以下のコマンドを、OSの違いに応じて選択し、起動してください。

<table>
<tr><th></th><th>PC-9821シリーズの場合</th><th>PC98-NXシリーズおよび
AT互換機の場合</th></tr>
<tr><td rowspan="2">Windows Server 2003
Windows XP
Windows 2000
Windows NT</td><td></td><td rowspan="2">SETUP32I.EXE</td></tr>
<tr><td>SETUP329.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows Me</td><td></td><td rowspan="2">SETUP95D.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows 98</td><td>SETUP959.EXE</td></tr>
</table>

3. 「インストール」のボタンをクリックした後、表示されるダイアログにそって作業を行ってください。インストール作業の種類を求められた場合は、「個別インストール」を選択し、製品名「ESMPRO/CM Client」と、購入した製品に対応したバージョン／ユーザセット数を選択してください。

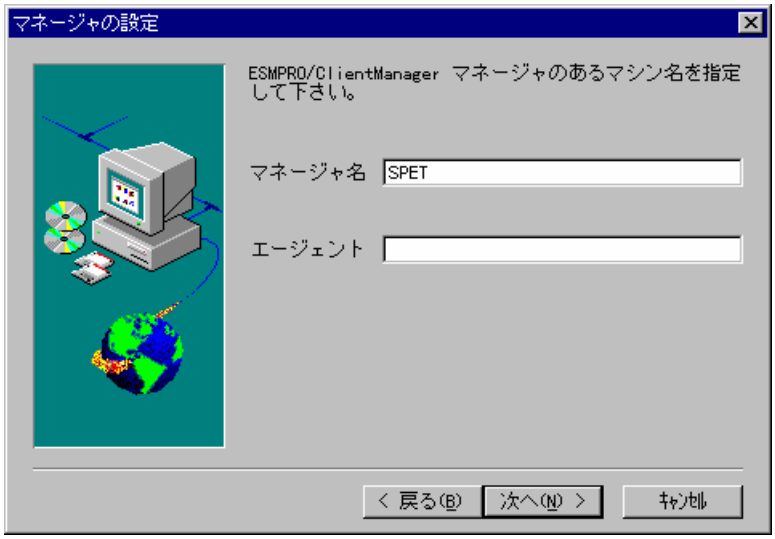
バージョン*x.y*　　5セット
バージョン*x.y*　　20セット
バージョン*x.y*　　100セット
バージョン*x.y*　　1000セット
バージョン*x.y*　　5000セット

次頁にインストールのフローを示します。次々頁以降に設定画面と項目を説明します。



（1）ClientManagerクライアントのセットアップが開始されます。

（2）ClientManagerクライアントのセットアップの中で、マネージャの設定を行うダイアログボックスが表示されますので、CMマネージャをセットアップしたマシンのマシン名かもしくはIPアドレスを「マネージャ名」に設定してください（DNSまたはWINSまたはHOSTSファイルの設定が行われていない場合にはIPアドレスを指定してください）。

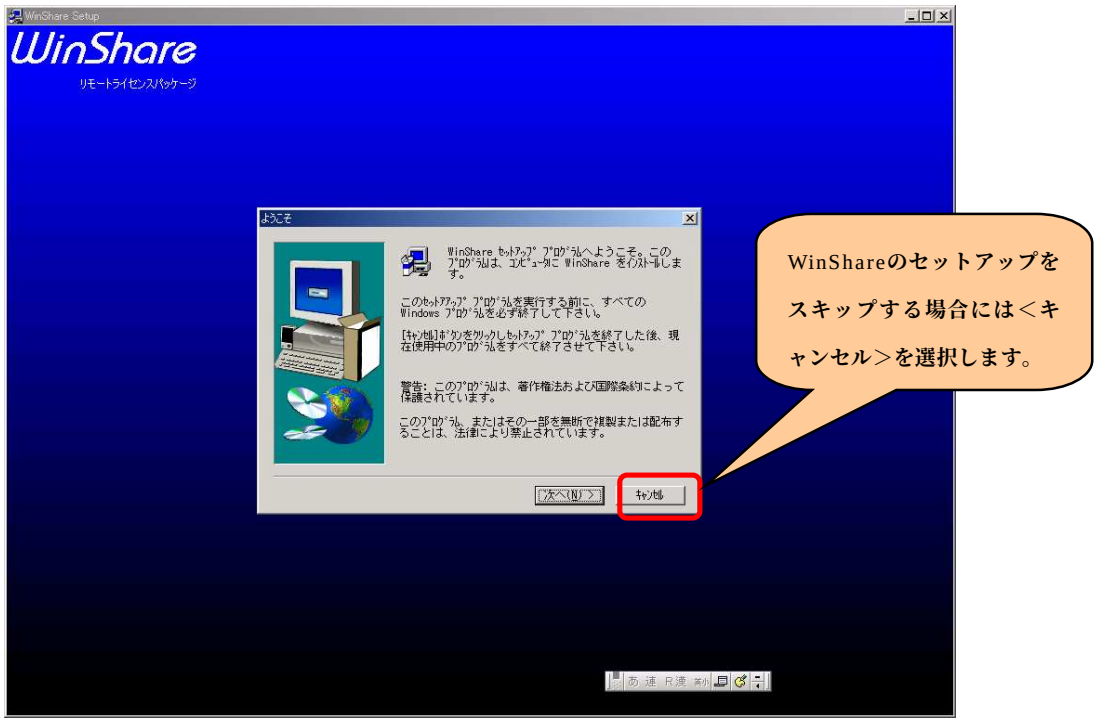


中継エージェントのセットアップが完了し、中継エージェントを用いる場合には中継エージェントをセットアップしたマシンのマシン名またはIPアドレスを「エージェント」に設定してください。

（３）ClientManagerクライアントのセットアップが完了すると、AlertManager（障害情報通報機能）の使用を問い合わせるダイアログボックスが表示されます。

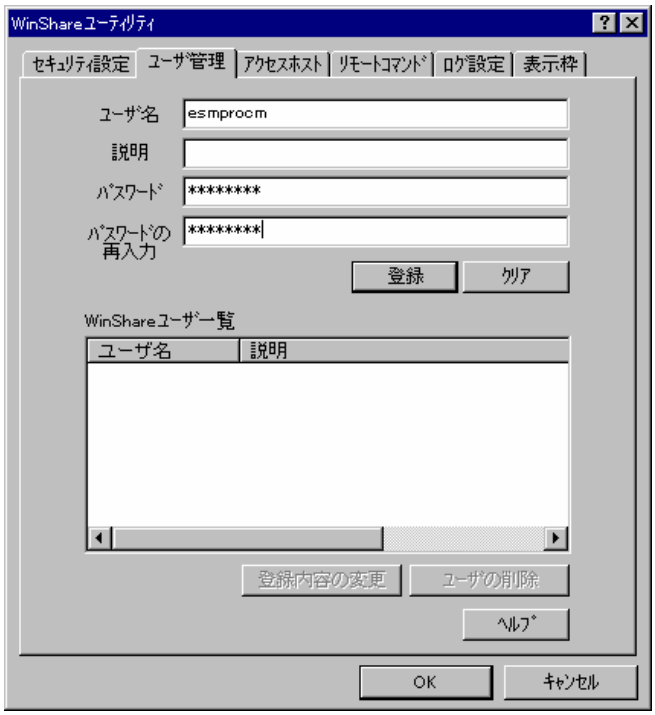
＜はい＞を押すと続けてAlertManagerのセットアップが開始されます。

（4）AlertManagerのセットアップが完了すると、自動的にWinShareのセットアップが開始されます。



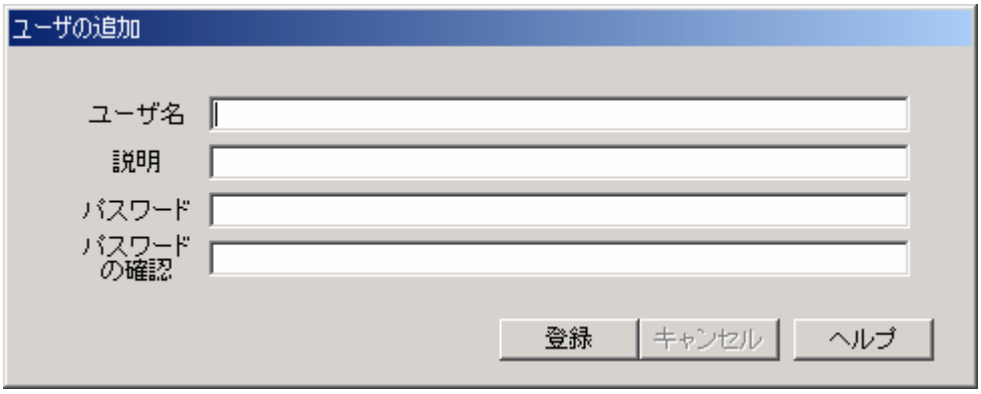
■ WinShare Ver3.0の場合

WinShareのセットアップの中で、WinShareユーティリティの設定を行います。少なくとも1つのユーザ名を登録してください。



■ WinShare Ver4.0の場合

WinShareのセットアップの中で、WinShareアカウントの設定を行います。本設定を省略することはできません。



以上でセットアップ処理は終了です。
セットアップの内容を有効にするにはシステムを再起動してください。

注意： ClientManager 2.1以降では、CMをアンインストールした後やハードディスクがクラッシュした後に再度CMをインストールする場合、以前使用していたクライアント管理IDをそのまま使用できるようにするため、クライアント管理IDの引き継ぎセットアップを行います。

以前使用していたクライアントIDを使わず、新しいクライアント管理IDを割り当てたい場合には、Windowsディレクトリ配下の esmprocm.ini ファイルを削除した後、CMをインストールするようにしてください。

注意： DMITOOL 4.xがインストールされているパッカードベルNECジャパン(PB-NEC) ProMate Vシリーズに ClientManager 3.0以降をインストールする場合にはインストールの前に以下の操作を行ってください。

Windowsディレクトリ(デフォルトでは、Windows NTの場合WinNT、Windows 95 / 98の場合Windows)に以下の内容のファイル「Esmprocm.ini」を置いてください。

```
[Setup]
Machine=PROMATE
```

注意： WinShare 2.0をご使用の方へ

ClientManager 3.1以降ではWinShare 3.0を、2003年1月リリースのVer4.0以降ではWinShare 4.0をバージョンアップインストールします。WinShare 2.0オペレーションPCから操作する必要があるWinShare 2.0リモートPCにClientManagerクライアントをインスト

ールする場合は、WinShare 3.0またはWinShare 4.0のセットアップをキャンセルしてください。
また、バージョンアップインストールを行うと、スタートメニューからNAVIPADの項目が無くなります。新しいWinShareにおいてNAVIPADはオペレーションPCのWinShareツールバーまたはリモートコマンド実行から起動します。

注意：2003年1月リリースのVer4.0以降では、WinShare 4.0がインストールされます。このバージョンでは、リモートPCの初期設定が、全てのオペレーションPCからの接続要求を拒否するようになっています。したがいまして、インストールしただけではCMマネージャから接続することができません。WinShareユーティリティを使用して、適切な設定を行ってください。

4.5.2　障害監視設定および通報設定

セットアップが完了した時点での障害監視の設定は以下のとおりです。

1. CMクライアントコンポーネントは障害監視を行いません。
2. CMクライアントコンポーネントは性能ログ（CPU使用率、ディスク使用率、メモリ使用率の記録）、障害ログ（障害通報の記録）の収集を行いません。
3. CMクライアントコンポーネントが障害監視を行う場合の通報先として、OSのSNMPサービスの TRAP通報先（すなわちCMマネージャ）が設定されています。
4. CMクライアントコンポーネントが障害監視を行う場合、CMマネージャに通知するイベントとして、NTイベントログに登録されたイベントの他に以下のイベントがあります。これらのイベントはClientManagerが管理するイベントとしてNTイベントログのイベントとは別に扱われます。Windows95、98が動作しているクライアントPCでは下記のイベントだけが処理されます。

下記のイベントのイベントソースはすべて“ESMPRO/CM”と表示されます。

<table>
<tr><th rowspan="2">イベント（トラップ名）</th><th rowspan="2">DMITOOL以外の場合</th><th colspan="3">DMITOOL</th></tr>
<tr><th>4.X</th><th>5.X</th><th>6.X, 7.X</th></tr>
<tr><td>システムCPU異常高負荷</td><td colspan="4" rowspan="12">利用可能
クライアント側での設定は不要です。CM GUIでの設定のみで設定します。</td></tr>
<tr><td>システムCPU異常高負荷回復</td></tr>
<tr><td>システムCPU高負荷</td></tr>
<tr><td>システムCPU高負荷回復</td></tr>
<tr><td>メモリ使用率異常</td></tr>
<tr><td>メモリ使用率異常回復</td></tr>
<tr><td>メモリ高使用率</td></tr>
<tr><td>メモリ高使用率回復</td></tr>
<tr><td>ディスク使用率異常</td></tr>
<tr><td>ディスク使用率異常回復</td></tr>
<tr><td>ディスク高使用率</td></tr>
<tr><td>ディスク高使用率回復</td></tr>
<tr><td>ディスク障害</td><td></td><td colspan="2">システムビューアの設定が必要</td><td>状態監視ツールの設定が必要</td></tr>
<tr><td>印刷終了</td><td></td><td colspan="2">システムビューアの設定が必要</td><td>状態監視ツールの設定が必要</td></tr>
<tr><td>プリンタ用紙切れ</td><td></td><td colspan="2">システムビューアの設定が必要</td><td>状態監視ツールの設定が必要</td></tr>
</table>

プリンタオフライン		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
プリンタ障害		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
ファン異常		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
ファン異常回復		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
温度異常高温		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
温度異常高温回復		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
温度異常低温		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
温度異常低温回復		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
電圧異常高電圧		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
電圧異常高電圧回復		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
電圧異常低電圧		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
電圧異常低電圧回復		システムビューアの設定が必要	状態監視ツールの設定が必要	
シャーシ開			状態監視ツールの設定が必要	
シャーシ閉			状態監視ツールの設定が必要	
ECCメモリ異常			状態監視ツールの設定が必要	
ECCメモリ異常回復			状態監視ツールの設定が必要	
OSA E2PROM障害				OFF state Alert 設定ツールのインストールが必要。

OSA E2PROM障害回復				OFF state Alert 設定ツールのインストールが必要。

障害監視を行う／行わないの設定はCMデータビューアまたはCM管理ツールを使って行います。また、ファン回転数、温度、電圧、ディスク障害、プリンタ障害、シャーシ開閉、ECCメモリ障害の検出に関しては、DMITOOL4.Xではシステムビューアの設定、DMITOOL5.X 以上では状態監視ツールの設定も必要です。検出した障害の通報先、通報手段、通報の有無はクライアント設定ユーティリティから起動するアラートマネージャ（設定ツール）で設定を行います。DMITOOLの仕様についてはDMITOOLのヘルプを参照してください。

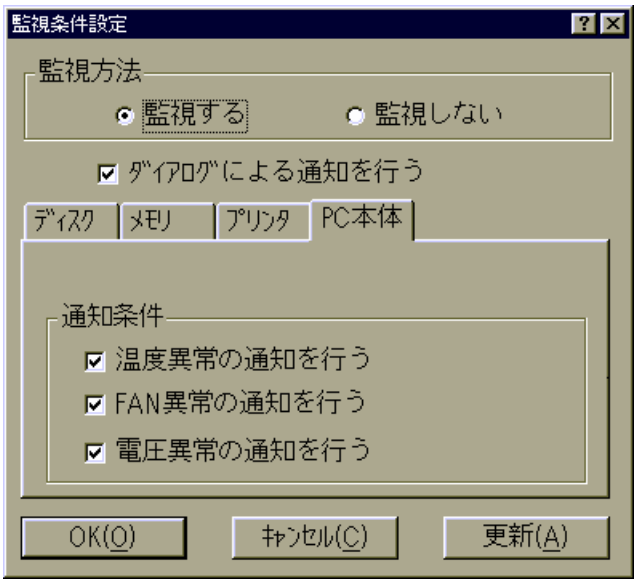
障害ログ／性能ログを収集する／しないはCMデータビューアまたはCM管理ツールを使って設定します。収集したログは、CMデータビューアを使用してCMデータビューアがあるマシンに転送することができます。

4.5.2.1　DMITOOL 4.X のシステムビューアの設定

DMITOOL Ver4.Xを使用して、ファン回転数、温度、電源電圧を監視する場合には、DMITOOLのシステムビューアの監視設定が必要です。

「スタート」ボタンから 「プログラム」-「DMITOOL」-「システムビューア」 を起動します。

「設定」メニューから「監視条件の設定」を選択し「監視条件設定」ダイアログボックスを起動し「監視方法」のラジオボタンで「監視する」設定にし「ダイアログによる通知を行う」チェックボックスをチェックしない設定にします。



設定終了後に、 ＜OK＞ボタンを押します。

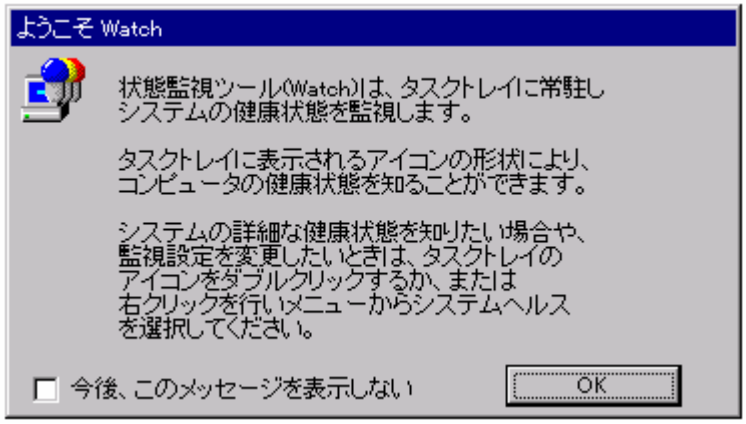
4.5.2.2　DMITOOL 5.X - 7.X 状態監視の設定

DMITOOL 5.X - 7.X を使用して、ファン回転数、温度、電源電圧、ディスク障害、プリンタ障害、シャーシ開閉、ECCメモリ障害を監視する場合には、DMITOOLのシステムビューアの監視設定が必要です。

「スタート」ボタンから 「プログラム」-「DMITOOL」-「システムビューア」 を起動します。

「ツール」メニューから「状態監視起動」を選択します。

「ようこそWatch」ダイアログボックスが表示されます。＜OK＞ボタンを押すとタスクトレイに状態監視のアイコンが表示されます。



タスクトレイのアイコンをダブルクリックするか、または右クリックを行いメニューからシステムヘルスを選択します。

「システムヘルス」ダイアログボックスの監視方法のラジオボタンを「システムの監視をする」に設定します。

「ダイアログによる通知を行う」チェックボックスのチェックをはずしダイアログによる通知を行わない設定にします。

設定終了後に、 ＜OK＞ボタンを押します。

4.5.2.3　通報するイベントの変更を行う場合

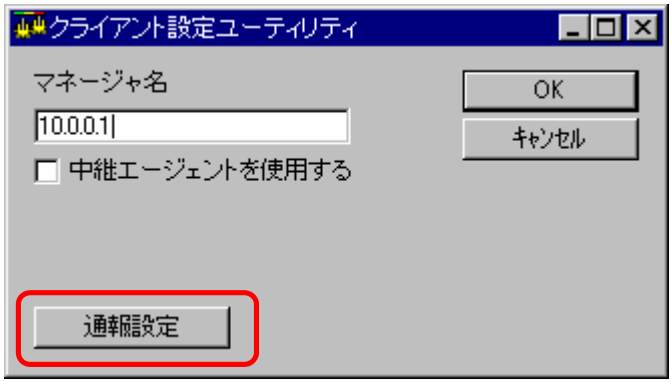
以下のような運用以外では通報設定を変更する必要はありません。

- 通報するイベントの変更を行う場合。
- マネージャマシンの階層化を行う場合。

(1) CMのイベントの変更

クライアント設定ユーティリティを起動し、<通報設定>ボタンを押し、アラートマネージャを起動します。

クライアントPCにおいて、「スタート」メニューから[プログラム]→[ESMPRO_CM]→[クライアント設定ユーティリティ]を選択することによりクライアント設定ユーティリティが起動されます。



「表示」メニューから「クライアントマネージャのイベント」を選択し、「アプリケーション」ツリーの下の「ESMPRO/CM」ツリーを展開し、設定を変更するイベントを選択し、マウスの右ボタンをクリックしプルダウンメニューから「通報先の指定」を選択し、「通報先の指定」ダイアログボックスを表示します。

通報する設定になっていたイベントを通報しない設定に変更する場合には、「通報先」から「マネージャ」を選択し、<削除>ボタンを押した後、<OK>ボタンを押します。通報しない設定になっていたイベントを通報する設定に変更する場合には<追加>ボタンを押した後、<OK>ボタンを押します。

(2) NTイベントの変更

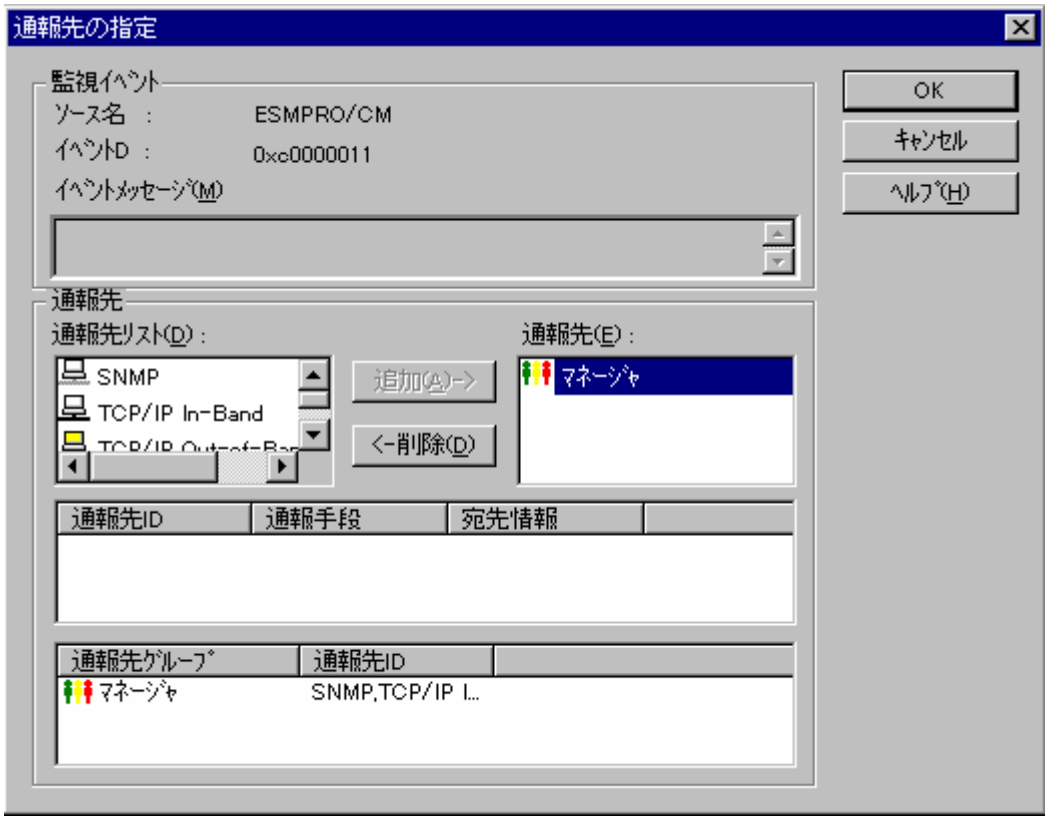
クライアント設定ユーティリティを起動し、<通報設定>ボタンを押し、アラートマネージャを起動します。「表示」メニューから「イベントログ」を選択し、（1）と同様の処理を行います。

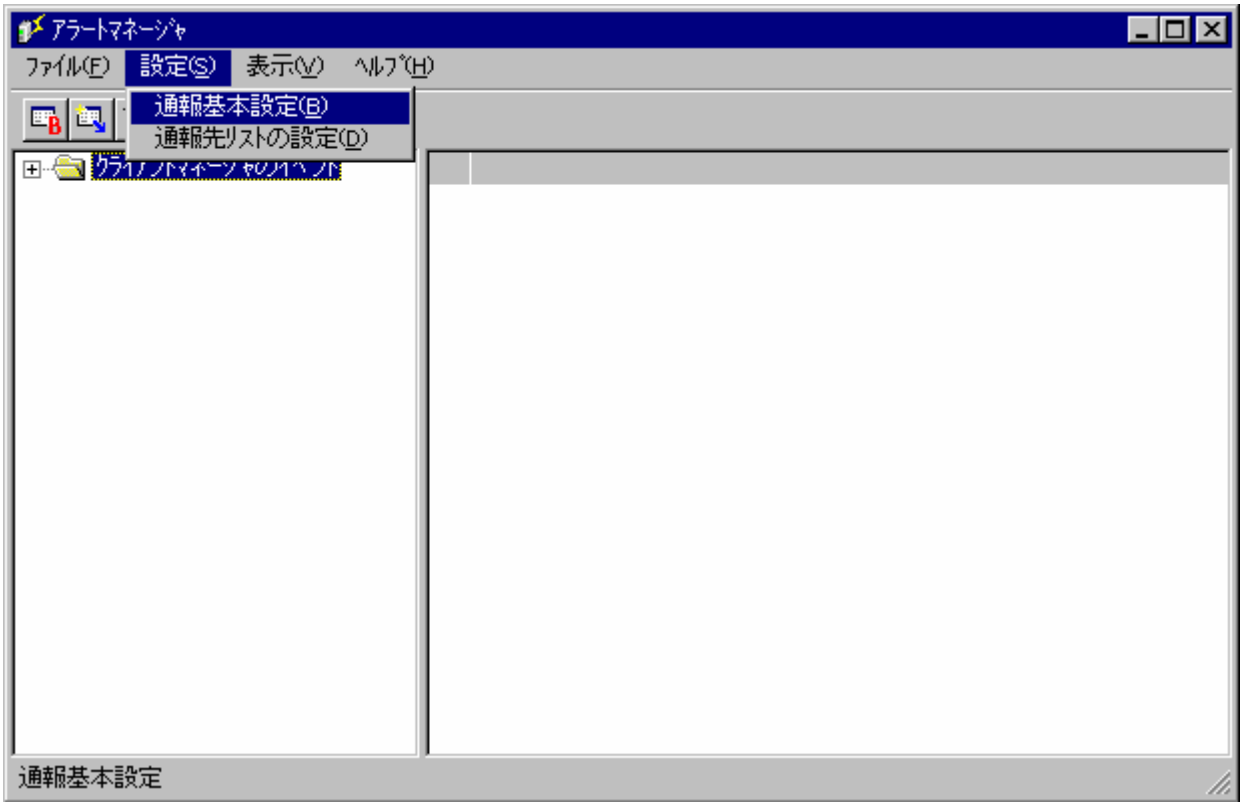
4.5.2.4　マネージャマシンの階層化を行う場合

マネージャマシンの階層化を行う場合には、クライアントPCは自分のマネージャに対しても、自分のマネージャの親マネージャに対してもTCP/IPを用いて障害の通報を行うよう設定します。

(1) 通報基本設定の変更

クライアント設定ユーティリティを起動し、<通報設定>ボタンを押し、アラートマネージャを起動します。「設定」メニューから「通報基本設定」を選択し、「通報基本設定」ダイアログボックスを表示します。

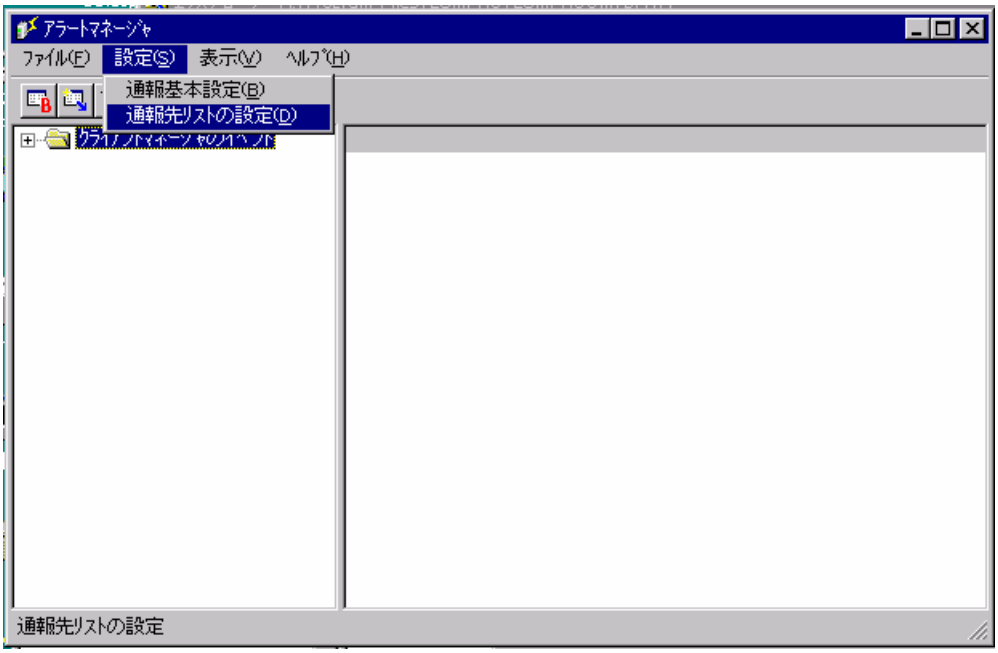




マネージャ通報（TCP/IP In-Band）の通報有効／無効ビットマップをクリックし、赤色から緑色に変更してください。

(2) 通報先設定の変更

クライアント設定ユーティリティを起動し、<通報設定>ボタンを押し、アラートマネージャを起動します。「設定」メニューから「通報先リストの設定」を選択し、「通報先リストの設定」ダイアログボックスを表示します。

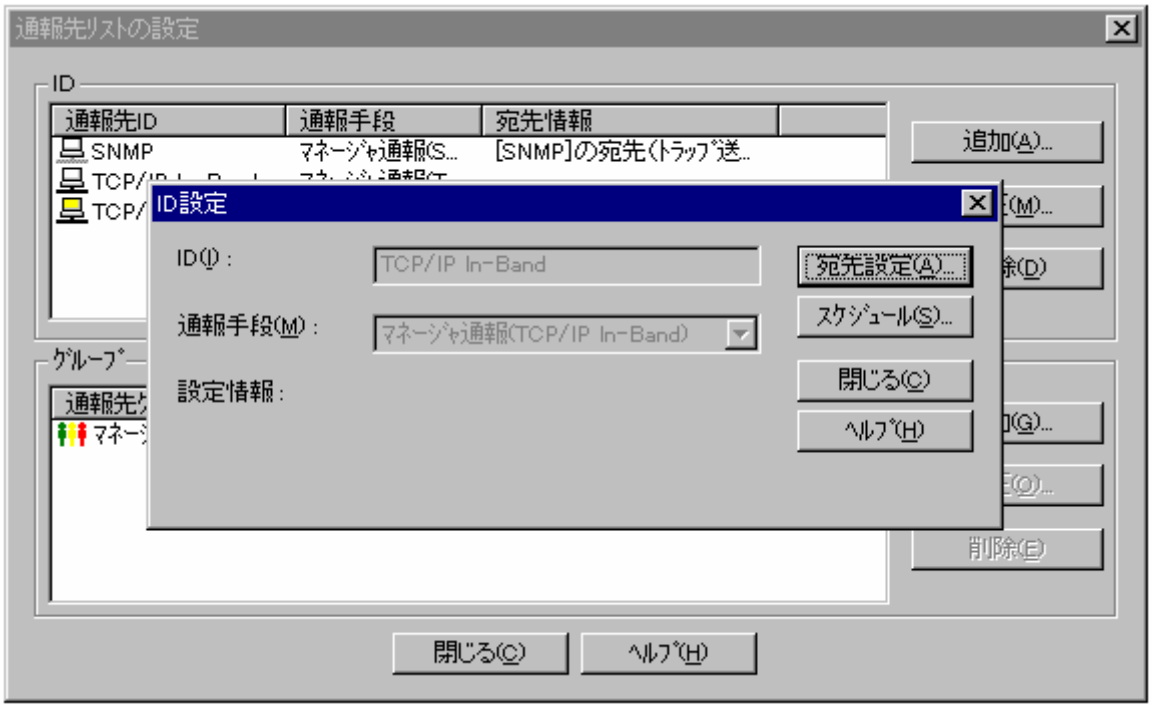


「通報先リストの設定」ダイアログボックスにおいて、グループの<追加>ボタンを押し、「グループ設定」ダイアログボックスを表示します。

クライアントマネージャで使用している通報先グループに通報先IDとしてTCP/IP In-Bandがすでに含まれている場合はグループの新規追加は不要です。IDのリストボックスからTCP/IP In-Bandを選択し<修正>ボタンを押してください。

「グループ設定」ダイアログボックスにおいて、親マネージャを通報先とするためのグループ名を設定します。（例えば親マネージャのマネージャIDを設定します。） 次に通報先IDリストからTCP/IP In-Bandを選択し、＜追加＞ボタンを押し、グループメンバーの一覧に移動した後、＜OK＞ボタンを押し、「グループ設定」ダイアログボックスを閉じます。

「通報先リストの設定」ダイアログボックスにおいて、通報先IDから「TCP/IP In-Band」を選択し、＜修正＞ボタンを押し、「ID設定」ダイアログボックスを表示し、IDとして先に設定した（または、すでに設定されている）親マネージャを通報先グループとするためのIDを、「通報手段」として「マネージャ通報（TCP/IP In-Band）」を設定し、＜宛先設定＞ボタンを押し、「マネージャ通報（TCP/IP In-Band）の設定」ダイアログボックスを表示します。



「マネージャ通報（TCP/IP In-Band）の設定」ダイアログボックスにおいて、親マネージャのIPアドレスまたはホスト名を「IPアドレス（またはホスト名）」に設定し、＜OK＞ボタンを押します。

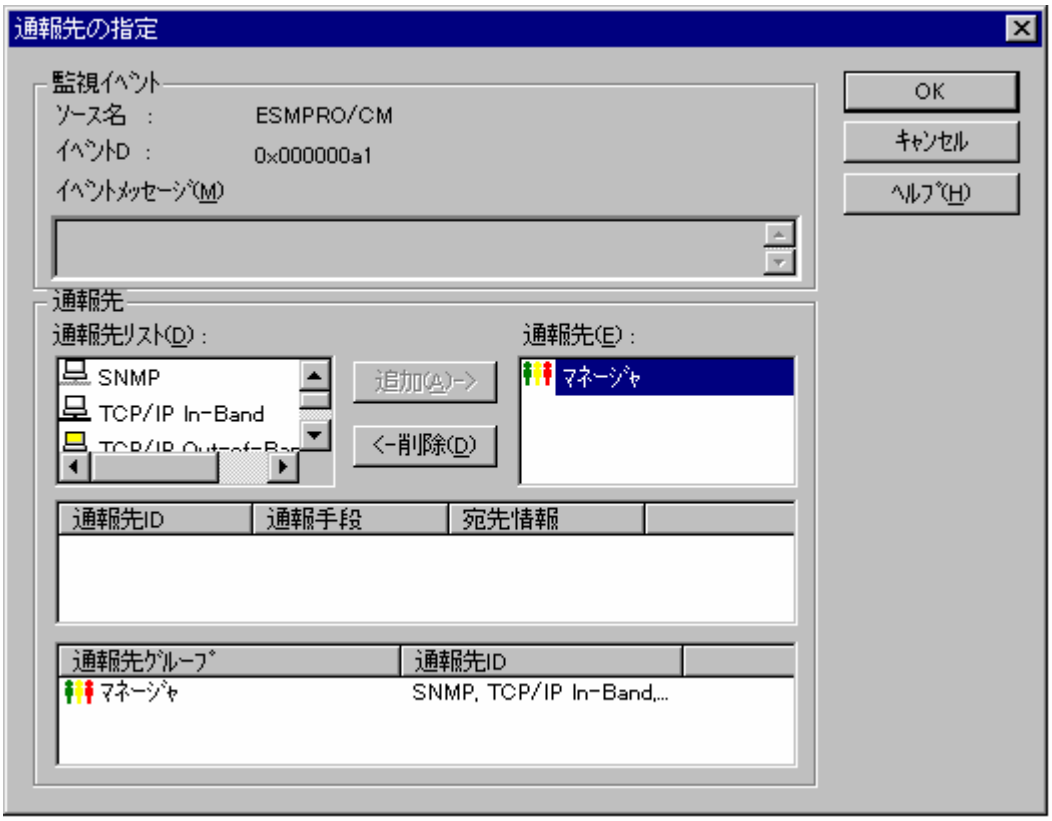
「ID設定」ダイアログボックスにおいて、＜閉じる＞ボタンを押します。
「通報先リストの設定」ダイアログボックスにおいて、＜閉じる＞ボタンを押します。

すでに設定されているグループの通報先を設定した場合は、ここで通報先設定は終了です。
通報先グループの追加を行った場合は、以下の各イベントに対する通報先の指定を行ってください。

各イベントに対して通報先として、先に設定したグループIDを設定します。
設定を変更するイベントを選択し、マウスの右ボタンをクリックしプルダウンメニューから[通報先の指定]を選択し、「通報先の指定」ダイアログボックスを表示します。

ESMPRO/CM配下イベント全てに指定する場合ESMPRO/CMを選択し、マウスの右ボタンをクリックしプルダウンメニューから「通報先の指定」を選択し、「通報先の指定」ダイアログボックスを表示します。

「通報先の指定」ダイアログボックスで通報先リストから通報先を設定したグループを選択し＜追加＞ボタンを押します。



＜OK＞ボタンを押して、自分のマネージャの親マネージャに対してのTCP/IP通報設定は終了です。

4.5.3 アンインストール

クライントPCからClientManagerのクライアントプログラムをアンインストールします。

Windows Server 2003, Windows XP, Windows 2000、Windows NT上でこのアンインストール処理を行う場合には、必ずAdministratorsローカルグループに属している（管理者権限を持っている）アカウントでセットアッププログラムを起動するようにしてください。

1. 「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。
2. CD-ROMドライブのルートディレクトリにある以下のコマンドを、OSの違いに応じて選択し、起動してください。

<table>
<tr><th></th><th>PC-9821シリーズの場合</th><th>PC98-NXシリーズおよび
AT互換機の場合</th></tr>
<tr><td rowspan="2">Windows Server 2003
Windows XP
Windows 2000
Windows NT</td><td></td><td rowspan="2">SETUP32I.EXE</td></tr>
<tr><td>SETUP329.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows Me</td><td></td><td rowspan="2">SETUP95D.EXE</td></tr>
<tr><td>Windows 98</td><td>SETUP959.EXE</td></tr>
</table>

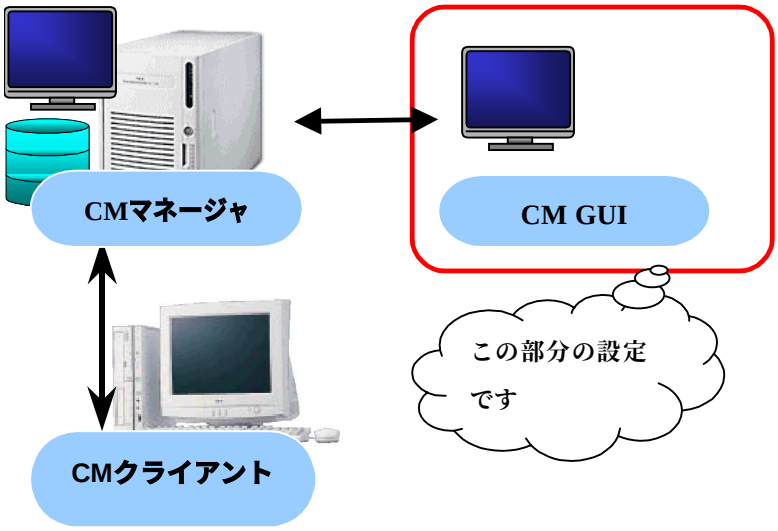
3. 「アンインストール」のボタンをクリックした後、表示されるダイアログにそって作業を行ってください。

備考：CMクライアントをアンインストールしても、DMITOOLはアンインストールされません。DMITOOLを削除する場合には「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「アプリケーションの追加と削除」からDMITOOLを選択し、削除してください。

4.6 CM GUI セットアップ

4.6.1 セットアップ

CM GUIセットアップはCM GUIをマネージャ以外のマシンにインストールするセットアップです。



1. CM GUIをインストールするマシンからCMマネージャをセットアップしたディレクトリのSETUPディレクトリに接続（共有）します。共有名は、『ESMPROCM』です。Windows Server 2003, Windows XP、Windows 2000、Windows NTの場合にはCMマネージャのセットアップ時に「ESMPROCM」の共有ディレクトリをセットアッププログラムが作成します。

2. CM GUIセットアップ プログラムを起動します。
   エクスプローラ等により、共有したディレクトリ配下の「CMDV」ディレクトリにあるCM GUIセットアッププログラムSetup.EXEを起動してください。

   注意：ClientManager 3.3までは、SETUP32.EXE を実行しましたが、ClientManager 3.4以降では SETUP.EXE を実行します。

3. CM GUIをインストールします。
   インストールするプログラムは、CM GUIコンポーネントです。以下に、セットアップの詳細を説明します。
   （1）「ようこそ」ダイアログ ボックスが表示されます。＜次へ(N)＞ボタンを押してください。
   （2）「ユーザ登録情報」ダイアログ ボックスが表示されますので、ユーザ情報を入力してください。
   （3）「セットアップディレクトリ」ダイアログ ボックスが表示されますので、ディレクトリを指定した後、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（4））ESMPRO/ServerManager、ESMPRO/Netvisor、SystemScope/UxServerManager等 統合ビューアをバンドルしている製品をインストール済みのコンピュータにCM GUIをインストールした場合には、「マネージャ名の設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、統合ビューアからデータビューアを起動する際に接続するマネージャ名および、CMMSPポート番号を入力して＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（5）ファイルのコピーを開始します。

（6）CM GUIのセットアップ完了後、自動的にWinShare(リモート制御機能)のセットアップが開始されます。設定する項目はCMマネージャセットアップの場合と同じです。

以上でセットアップ処理は終了です。

4.6.2　統合ビューアとの連携

ESMPRO/ServerManager、ESMPRO/Netvisor、SystemScope/UxServerManager等の統合ビューアをバンドルしている製品をインストール済みのコンピュータにCM GUIをインストールした場合には、統合ビューアからCM GUIを起動したときに接続する、ClientManagerマネージャのマシン名を設定してください。CM GUIのインストール時に、接続するClientManagerマネージャのマシン名を設定します。インストール後に、接続するマシン名を変更したいときは、CM GUIのインストールディレクトリ配下のBINディレクトリにある、CMSETDST.EXEを起動し、マネージャ名を変更してください。

4.6.3　DB のメンテナンス

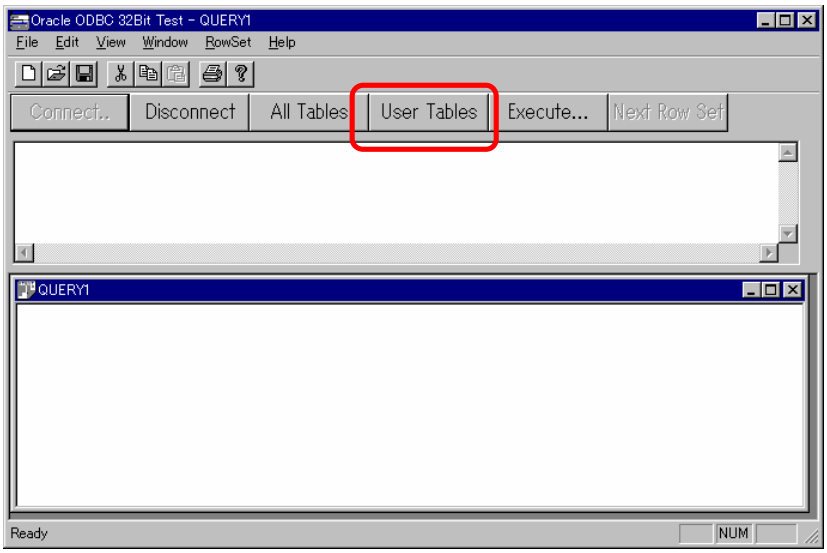
不要となったクライアントの情報の削除や、SGの設定結果などを削除するために、DBメンテナンスツール(CMMTN.EXE)をCMマネージャ以外でご使用になる場合には、CM GUIをセットアップしたマシン上でODBCの設定が必要になります。

ODBCのインストールおよび設定については、「4.2.3 データベースの作成とODBC（システムデータソース）の設定」のODBCのインストールおよび設定の項目を参照してください。

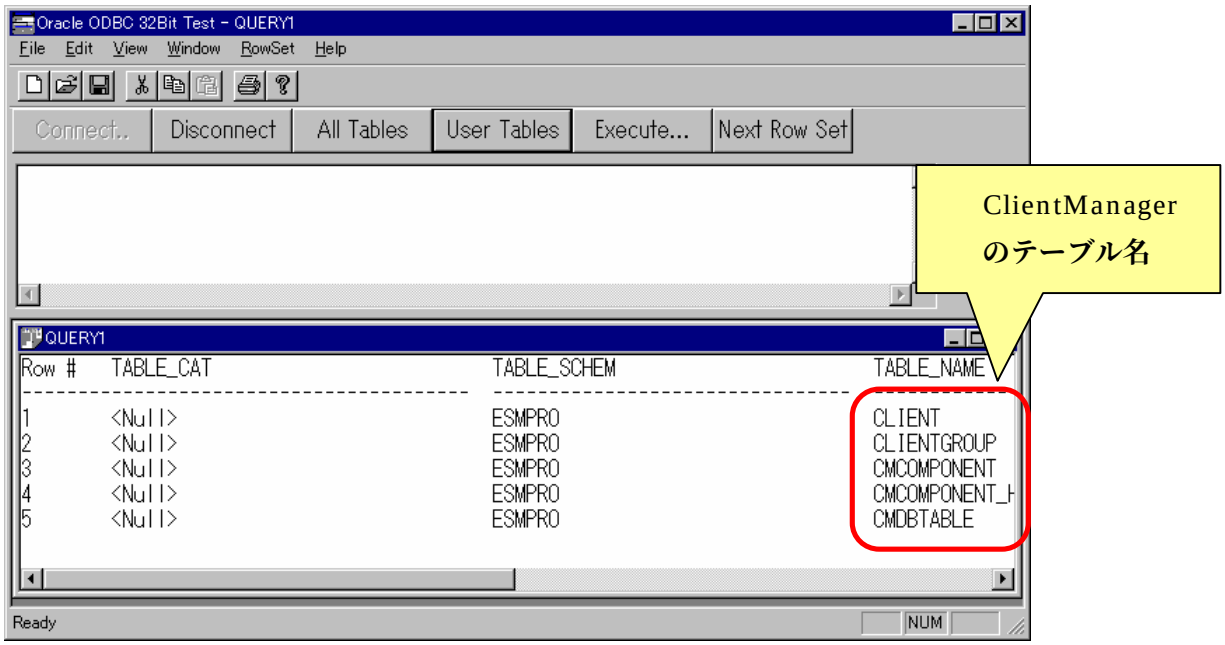
4.6.3.1　Oracle の ODBC の評価

「4.2.3 データベースの作成とODBC（システムデータソース）の設定」時に行うOracleのODBCのテスト方法とは別に、さらに追加して行うテスト方法を説明します。
CMマネージャをインストールし Oracleサーバが動作している状態でテストを行います。

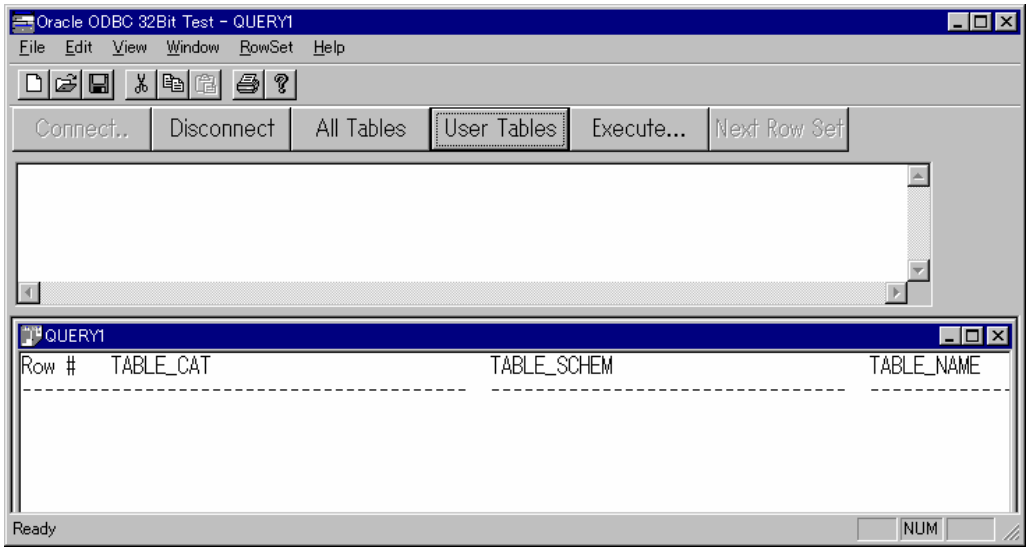
プログラムフォルダより、「32 bit ODBC Test」または「Oracle ODBC Test」を実行し、ログインを行うと以下の画面が表示されます。
＜User Tables＞ボタンを実行します



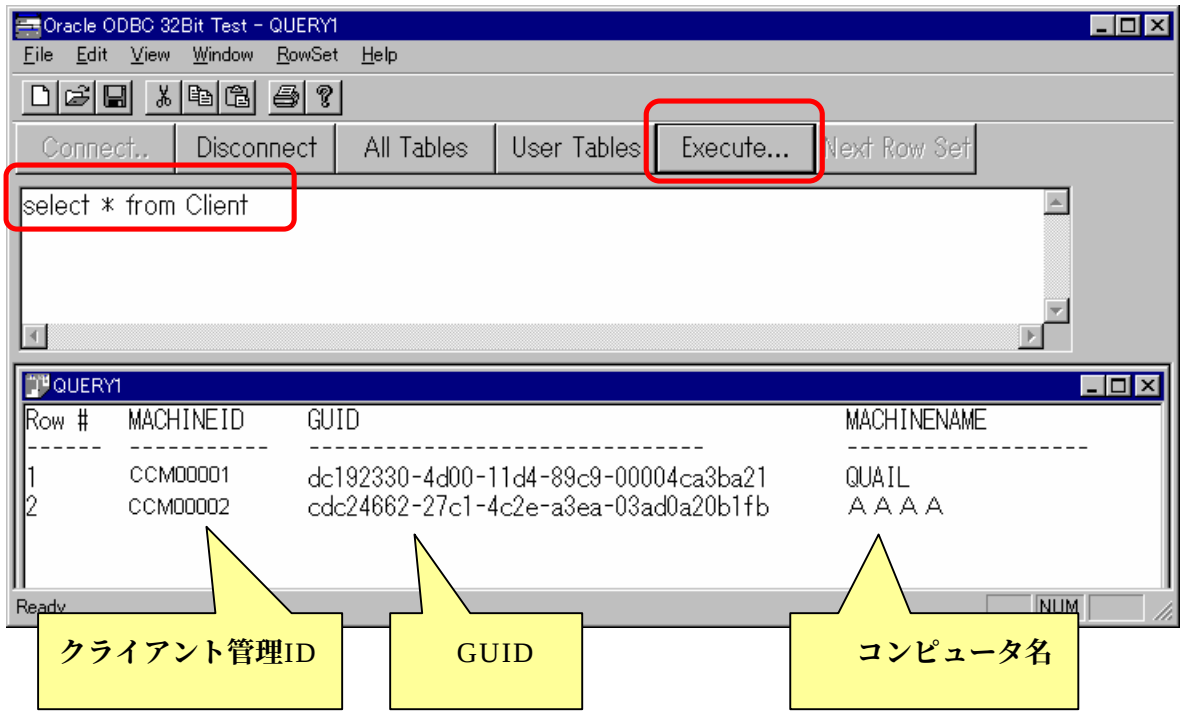
正しいアカウントでログインした場合には、TABLE_NAMEに、ClientManagerのテーブル名が表示されます。



正しいアカウントでない場合や、権限が不足する場合には以下のような表示になります。



「select * from Client」を入力し<Execute>を実行します。テーブル(表)をクエリする権限がある場合には以下のように、クライアントの情報が表示されます。



4.6.4　アンインストール

1. CM GUIアンインストールプログラムを起動します。
2. プログラムフォルダ(グループ)にある「CMデータビューアの削除」アイコンをダブルクリックしてアンインストールプログラムを起動してください。

注意：
　CMクライアントとCM GUIをインストールしているマシンからCM GUIのアンインストールを行う場合、CMクライアントも一旦アンインストールし、再度インストールしなおす必要があります。

4.7　中継エージェントセットアップ

4.7.1　インストール

中継エージェントを対象にプログラムをインストールします。

1. 中継エージェントをインストールするマシンからCMマネージャをセットアップしたディレクトリのSETUPディレクトリに接続（共有）します。共有名は、『ESMPROCM』です。Windows XP、Windows 2000、Windows NTの場合にはCMマネージャのセットアップ時に「ESMPROCM」の共有ディレクトリをセットアッププログラムが作成します。

2. 中継エージェントセットアップ プログラムを起動します。
   エクスプローラ等により、 共有したディレクトリ配下の「Agent」ディレクトリにある中継エージェントセットアッププログラムSETUP.EXEを起動してください。

3. 中継エージェントをインストールします。
   インストールするプログラムは、中継エージェントコンポーネントです。以下に、セットアップの詳細を説明します。

   （1）「ようこそ」ダイアログ ボックスが表示されます。＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

   （2）「ユーザ登録情報」ダイアログ ボックスが表示されますので、ユーザ情報を入力してください。

   （3）「セットアップディレクトリ」ダイアログ ボックスが表示されますので、ディレクトリを指定した後、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（4）「マネージャの設定」ダイアログ ボックスが表示されますので、マネージャ名を指定した後、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

（5）ファイル転送を開始します。

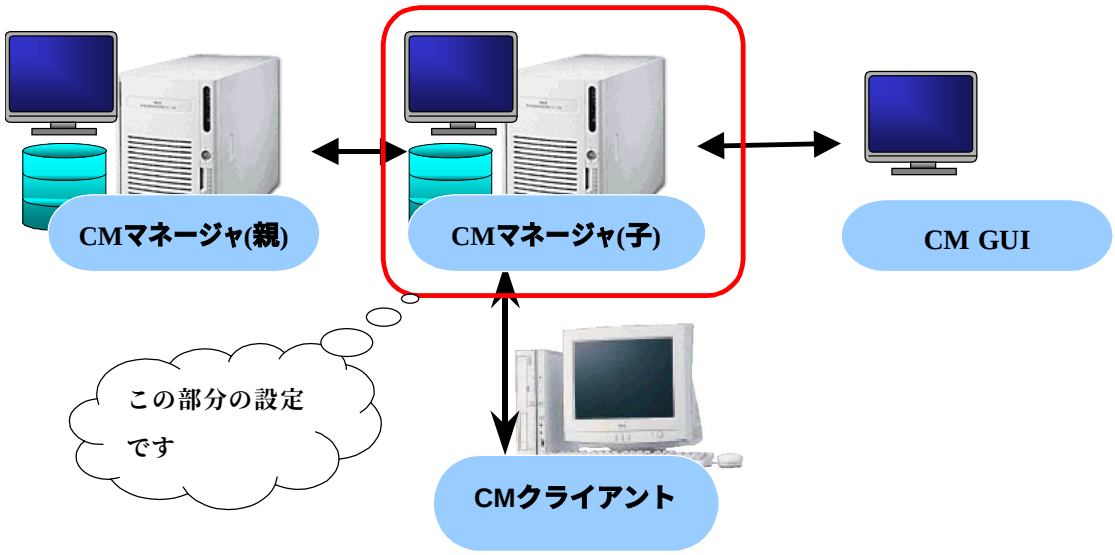
以上でセットアップ処理は終了です。

4.7.2　アンインストール

1. 中継エージェントアンインストールプログラムを起動します。
2. プログラムフォルダ(グループ)にある「エージェントの削除」アイコンをダブルクリックしてアンインストールプログラムを起動してください。

4.8　統合マネージャ中継

マネージャを階層化することにより、システムの拡張が可能です。
最小限の設定を行うだけで、子マネージャ配下のクライアントPCの構成情報が親マネージャのデータベースにも格納され、親マネージャから構成情報の参照、SGの設定、リモートパワーオン／オフ等を行うことができます。

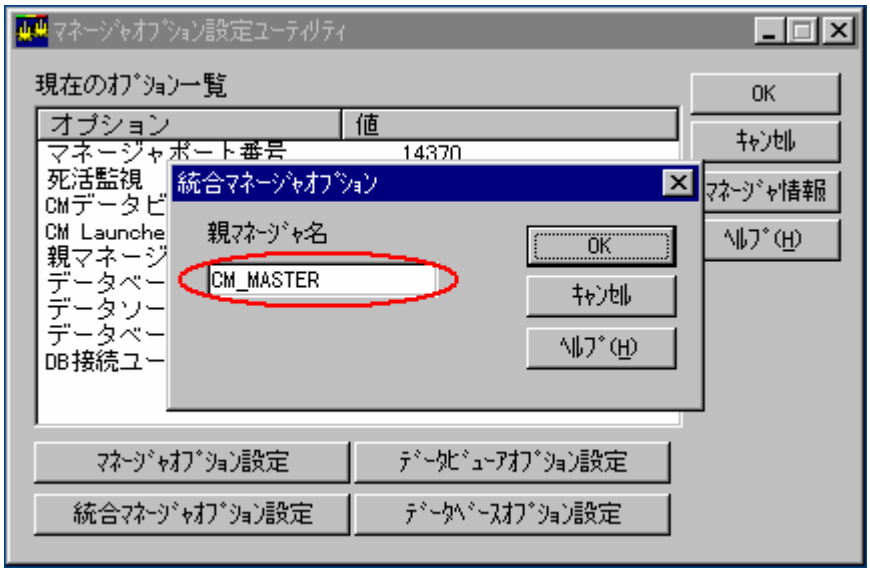


4.8.1　親マネージャへの接続

マネージャの階層化は子マネージャから親マネージャを指定します。以下に接続方法を説明します。

(1) マネージャオプション設定ユーティリティ

CMマネージャ設定を起動し、統合マネージャオプション設定ボタンを押します。



親マネージャマシンのホスト名またはIPアドレスを入力します。

注意：ClientManager 2.0 / 2.1で設定可能だった転送契機は3.0以降では設定出来なくなりました。転送契機は常に即時通知となります。

（2）親マネージャへの転送確認

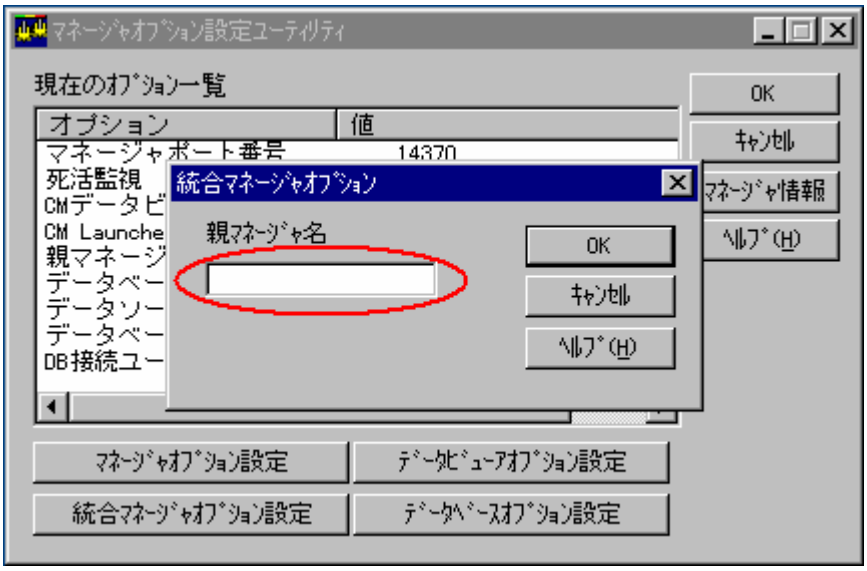
親マネージャに接続されたＣＭ管理ツールのクライアント一覧表示で子マネージャのクライアントが表示されることを確認してください。

4.8.2　親マネージャとの接続解除

親マネージャとの接続を解除するには以下の方法で行ってください。

(1)　マネージャオプション設定ユーティリティ

CMマネージャ設定を起動し、統合マネージャオプション設定ボタンを押します。



指定されている親マネージャ名をクリアします。

(2)　親マネージャ内の子マネージャデータ削除の確認

親マネージャに接続されたCM管理ツールのクライアント一覧表示で子マネージャのデータが削除されたことを確認してください。

4.8.3　注意事項

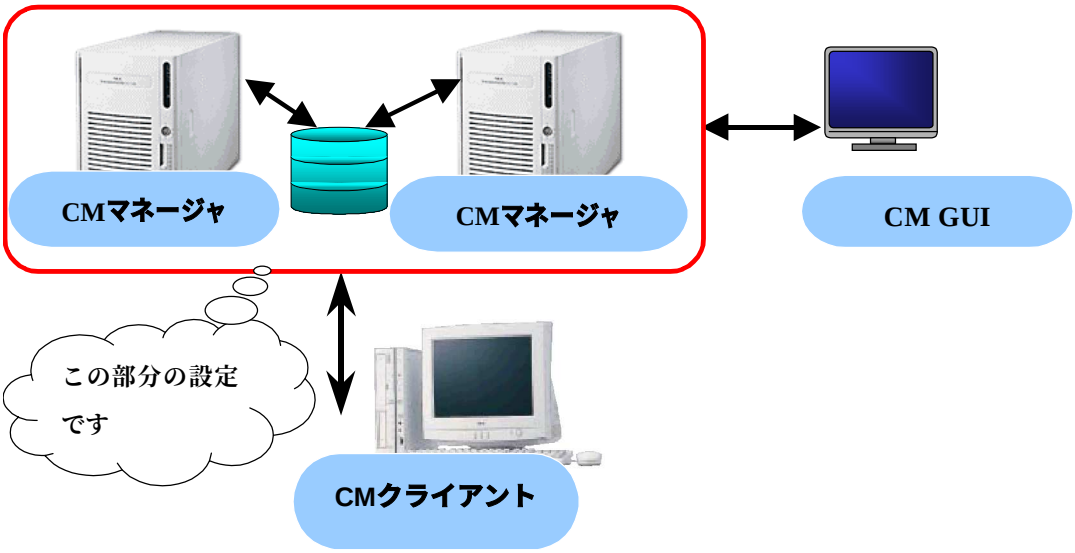
- 3段およびそれ以上のマネージャの階層化はできません。
- マネージャの階層化を行っている状態で子マネージャをアンインストールすることはできません。階層化を解除してからアンインストールを行ってください。
- 子マネージャが接続している親マネージャを変更することはできません。子マネージャが接続している親マネージャを変更する場合は親マネージャ接続解除処理を行った後、再度親マネージャ接続処理を行ってください。
- 子マネージャが親マネージャへのデータを転送が失敗（ネットワーク異常、親マネージャマシンの電源オフ等）した場合、10秒ごとに転送のリトライを行います。
- 互換性を保つため、子マネージャのバージョンが2.0 - 3.5で親マネージャのＣＭバージョンが4.0の階層化は可能ですが子マネージャのバージョンが4.0の場合は親マネージャのバージョンも4.0でなければなりません。
- 同一マネージャIDを持つマネージャとの階層化は行わないでください。マネージャIDはマネージャオプション設定ユーティリティのマネージャ情報で確認できます。

4.9 クラスタシステム

クラスタシステムでClientManagerをインストールする方法について説明します。

ClientManagerマネージャは、クラスタシステムにおける片方向スタンバイの形態で動作します。

クラスタ上のCMマネージャに接続するマシン(クライアント、中継エージェント、子マネージャ、CM GUI）には、CLUSTERPRO(ActiveRecoveryManager)クライアントをインストールして、クラスタ上のCMマネージャのマシンを仮想IPアドレスで識別します。CMクライアントと中継エージェントは、クラスタシステムのマシンでは動作しません。



次にクラスタに関連する用語を簡単に説明します。

「**片方向スタンバイ**」：

ある時点では、クラスタシステム内の1つのマシンだけでCMマネージャが動作し、そのマシンに障害が発生した場合に、フェイルオーバによって代替マシン上でCMマネージャが起動され、CM機能の継続動作を保証します。

「**フェールオーバグループ**」：

クラスタシステムが、動作と非動作を管理する単位です。フェールオーバグループの起動と終了時に実行されるスクリプトによって、CM関連サービスの実行制御を行います。スクリプトによって間接的にCM関連サービスとフェールオーバグループが対応付けられます。

「**仮想IPアドレス**」：

フェールオーバグループと対応付けられます。たとえばデータビューアが、仮想IPアドレスでCMマネージャに接続すると、クラスタシステムが自動的に、フェールオーバグループが動作中のマシンを接続先として選択します。

「**切替パーティション**」：

クラスタシステムの各サーバマシンからアクセス可能なパーティションです。ただし同時には1つのマシンだけがアクセスできます。

クラスタシステムの詳細については、CLUSTERPROの関連説明書をご参照ください。

以下セットアップ手順にしたがって説明します。

1．ESMPRO/ServerManagerセットアップ

統合ビューアで、クラスタシステムと連携を行う場合には、クラスタシステムをセットアップする前にESMPRO/ServerManagerをインストールします。連携が不要であれば、このステップは省略できます（後のステップにおけるCMマネージャのインストールで統合ビューアもインストールします）。

2．クラスタシステムセットアップ

クラスタを構成する各サーバマシンへCLUSTERPROサーバをインストールします。クラスタ管理用マシンにCLUSTERPROマネージャをインストールします。

3．フェールオーバグループの登録

CMの実行を制御するためのフェールオーバグループを、CLUSTERPROマネージャで登録します。後でスクリプト追加などのため、再度CLUSTERPROマネージャを使用してフェールオーバグループの設定変更を行います。

(1)グループ名の設定

グループ名として、

ESMPROCM

を設定します。

(2)リソースの設定

CMマネージャの共用部分をインストールするための切替パーティションの割り当てと、CMマネージャへ接続するための仮想IPアドレスを設定します。

(3)ポリシの設定

登録操作の最後の段階で、グループに登録されたマシンのフェイルオーバ（すなわちCMマネージャ起動）優先順位を設定します。

4．クラスタシステム再起動

CLUSTERPROマネージャでクラスタのシャットダウンと再起動を実行します。

5．CMマネージャセットアップ

フェールオーバグループへ登録した各マシンへCMマネージャをインストールします。ここでは、通常のセットアップと異なる部分を中心に説明します。

クラスタシステムでは、CM関連ファイルを、切り替えパーティションとローカルドライブ（各マシン固有のディスク）のパーティションへ２つに分けて書き込みます。

フェールオーバグループがアクティブになっているマシンでセットアップを実行しますと、クラスタシステムへのインストールの確認と、2種類（切替パーティションとローカルディスクパーティション）のインストール先ディレクトリの問い合わせを行います。それ以外は、通常のセットアップと同じです。

フェールオーバグループに登録したマシンの台数分、手動フェイルオーバによりフェールオーバグループの実行を切り替え、以下のセットアップの操作(1)～(2)を繰りかえします。

(1)フェールオーバグループがアクティブなマシンで、CMマネージャのセットアップを実行します。最初にクラスタシステムへのインストールを確認するダイアログが表示されます。

クラスタ対応セットアップを選択すると、その後でインストールディレクトリを2種類問い合わせます。1回目はローカルディスクのディレクトリを設定してください。

2回目は、クラスタの切替パーティションのディレクトリを指定してください。

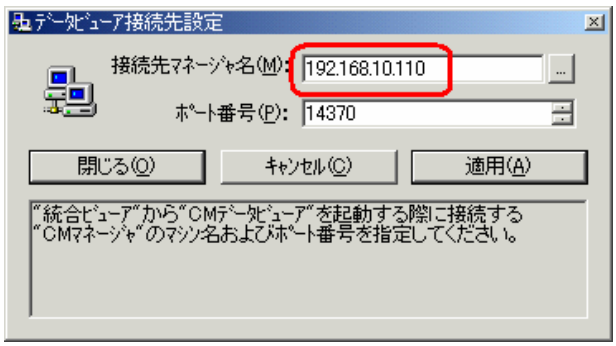
デフォルトを変更する場合には、問い合わせに応じて切替パーティションかローカルドライブの中から指定してください。変更したディレクトリのドライブの種類（ローカルあるいは切替パーティション）が異なる場合、再度入力要求を行います。それ以降は通常のインストールと同じです。

注意：以下の項目は、インストールを行う全てのマシンで同一に設定してください。

- 切替パーティションのインストール先（ドライブとディレクトリ）
- マネージャID
- データベース接続情報（ODBCデータソース名、DB名、サーバ名など）
  データベースが、クラスタシステム上にある場合は、接続先サーバ名を仮想IPアドレスで指定してください。

(2)次にデータビューア接続先設定を変更します。

"w:¥Program Files¥ESMPRO¥ESMPROCM¥BIN¥CMSetDst.exe" を起動してください。（wは切り替えパーティション）



接続マネージャ名に仮想IPアドレスを設定してください。

適用ボタンを押しダイアログを閉じます。

(3) CLUSTERPRO関連サービスの設定を変更します。

CLUSTERPRO関連サービスの「CLUSTERPRO Server」サービスに対し、以下の方法にて、デスクトップとの対話を許可する設定を行なってください。(既に設定済みの場合は作業の必要はありません。)

+ Windows 2000では、[プログラム]－[管理ツール]－[サービス]－選択したサービスの[プロパティ]－[ログオン]タブ
+ Windows Server 2003では、[管理ツール]－[サービス]－選択したサービスの[プロパティ]－[ログオン]タブ

(4)次にセットアップを行うマシンへ、フェールオーバグループを手動でフェイルオーバさせます。操作はCLUSTERPROマネージャで行います。全てのマシンでセットアップが完了したら、次のステップへ進みます。

6．フェールオーバグループ設定変更

操作はCLUSTERPROマネージャで行います。設定の変更を求めると、フェールオーバグループは強制的に停止させられます。

(1)CM用スクリプトの追加

グループの開始／終了のスクリプトを編集して、CM固有のコマンドを追加します。

下記コマンド列を開始と終了用スクリプトの２ヶ所へそれぞれ追加してください。

下記例では、切替パーティションのインストールディレクトリを

w:¥Program Files¥esmpro¥esmprocm

として記述してありますので、イタリック（***w:¥Program*** ～）の部分を実際にCMマネージャをインストールした切替パーティションのディレクトリ名で読み替えて操作してください。

```
ARMLOAD CMIT /M /S "ESMPRO/CM CMIT service"
net start "ESMPRO/CM CMURELAY"
ARMLOAD CMMANAGER /M /S "ESMPRO/CM Manager"
ARMLOAD CMPOWERON /M /S "ESMPRO/CM Poweron Service"
ARMLOAD CMSENDER /M /S "ESMPRO/CM Sender"
ARMLOAD CMSNMP /M /S "ESMPRO/CM Snmp Manager"
ARMLOAD CMTIME /M /S "ESMPRO Time Server"
ARMNSADD esmprocm "w:¥Program Files¥ESMPRO¥ESMPROCM¥setup"
```

を開始スクリプトの

```
  ～
rem ***************************************
rem  通常起動対応処理
rem ***************************************
:NORMAL

rem  ディスクチェック
IF "%ARMS_DISK%" == "FAILURE" GOTO ERROR_DISK
```

の直後と、

```
  ～
rem ***************************************
rem  フェイルオーバ対応処理
rem ***************************************
:FAILOVER

rem  ディスクチェック
IF "%ARMS_DISK%" == "FAILURE" GOTO ERROR_DISK
```

の直後へ追加します。

終了用スクリプトへの追加イメージとして、

```
Armnsdel esmprocm
"w:¥Program Files¥esmpro¥esmprocm¥bin¥splaunch"
ARMKILL CMTIME
ARMKILL CMSNMP
ARMKILL CMSENDER
ARMKILL CMMANAGER
ARMKILL CMPOWERON
net stop "ESMPRO/CM CMURELAY"
ARMKILL CMIT
```

を同様に終了スクリプトの

```
  ～
rem ****************************************
rem  通常終了対応処理
rem ****************************************
:NORMAL

rem  ディスクチェック
IF "%ARMS_DISK%" == "FAILURE" GOTO ERROR_DISK
```

の直後と

```
  ～
rem ****************************************
rem  フェイルオーバ対応処理
rem ****************************************
:FAILOVER

rem  ディスクチェック
IF "%ARMS_DISK%" == "FAILURE" GOTO ERROR_DISK
```

の直後へ追加します。

(2)同期対象レジストリキー設定

フェイルオーバなどで、フェールオーバグループの実行が他のサーバマシンへ移動するときに、引き継ぎを行うレジストリキーを設定します。キー名として

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥ESMPRO/CM

を登録します。

7．フェールオーバグループ起動

CLUSTERPROマネージャで、クラスタシステムを再起動し、フェールオーバグループを第1優先度のマシンで実行開始させます。

これでCMマネージャのセットアップは完了しました。

8．CLUSTERPROクライアントセットアップ

CMマネージャへ接続するマシンへ、CLUSTERPROクライアントをインストールします。

これにはクラスタシステム上のCMマネージャが直接管理するCMクライアント、中継エージェント、CMマネージャへ接続する子マネージャあるいはCM GUIそれぞれをインストールするマシンが該当します。それらをインストールする前にCLUSTERPROクライアントをインストールします。

CLUSTERPROクライアントのセットアップで、接続先のクラスタ情報（クラスタ名、接続先フェールオーバグループ、仮想IPアドレス等）を設定します。フェールオーバグループ名、仮想IPアドレスは、先にCMマネージャのセットアップにおいてCLUSTERPROマネージャにより登録した値を設定します。

９．CMクライアント等のセットアップ

クラスタシステムにインストールされたCMマネージャへ接続するCM関連コンポーネントのインストールを行います。CMマネージャのマシンの識別名として、仮想IPアドレスを使用します。

１０．クラスタシステムでの運用

(1)クラスタシステムにおいてCMマネージャ本体は、フェールオーバグループClientManagerがアクティブな（動作中の）マシン上でのみ実行します。CM GUIも同じマシンだけで実行できます。クラスタを構成するほかのマシンでは、CM GUIは実行できません。

(2)クラスタシステムでCM GUIを使用した場合、手動によるフェールオーバグループの切り替えが失敗する場合があります。そのときには、フェールオーバグループClientManagerがアクティブなマシンは強制的にシャットダウンし、そのマシンを除いて実行プライオリティの高いマシンへフェイルオーバします。

(3)クラスタシステム外から、CMクライアント、CM GUIの接続については、仮想IPアドレスの機能により、フェールオーバグループのアクティブなマシンを意識する必要はありません。

(4)サーバマシンの障害等によるフェイルオーバが発生しても、クラスタシステムのほかからの接続では、その切り替えを意識する必要はありません。CMデータビューアでクライアント情報を取得中にサーバマシンでフェイルオーバが発生した場合、最大5分（レジストリの設定により変更可能）程中断してサーバマシンのフェイルオーバ完了を待ちます。その後、自動的に情報取得を再開します。ただしフェイルオーバの時間が5分を大幅に超えた場合は、CMデータビューアはマネージャへの接続失敗（あるいは情報取得失敗）を表示して処理を打ち切ります。

(5)CMクライアントからCMマネージャへ通知するクライアント情報は、フェイルオーバが発生しても自動再送します。

(6)アラートの通報は、フェイルオーバが発生したときに、失われる場合があります。

(7)クラスタシステムのCMマネージャは、上位（親）マネージャを持つことはできません。

１１．アンインストール

インストールと逆の手順で行います。

最初にフェールオーバグループの設定から、同期対象レジストリキーと、開始／終了スクリプトの追加分を削除します。次に手順(1)～(2)をアンインストール対象マシンの台数分繰りかえします。

(1)アンインストールを行うマシンへ手動でフェイルオーバさせます。

(2)CMマネージャをアンインストールします。

最後に、フェールオーバグループを削除します。

注意：CMマネージャをインストールした全てのマシンで、アンインストールが実行されないと、切り替えパーティションへインストールされた内容は削除されません。障害等によりデ

ィスクを交換し、アンインストールの実行ができないマシンがある場合は、最後に手動で切り替えパーティションのインストールディレクトリをエクスプローラなどで削除してください。CM GUIだけをアンインストールすることはできません。

4.10 ネットワークインストール

ネットワークインストール（以下、NETINSTと呼びます）は、ClientManagerクライアントを、クライアントコンピュータに自動的にインストールします。

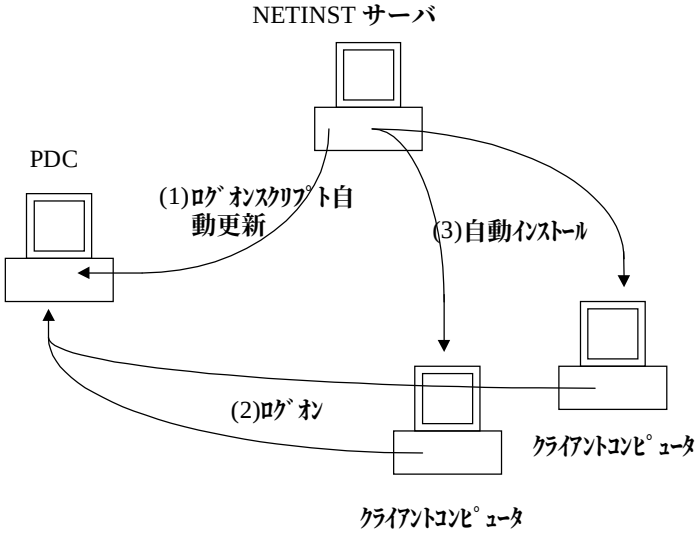
4.10.1 ネットワークインストールの機能

NETINSTで実現される機能には、以下のようなものがあります。

- NETINSTは、管理するドメイン全てのユーザのログオンスクリプトを自動的に更新します（ドメインにユーザが追加されたときにも、自動的にログオンスクリプトを更新します）。このログオンスクリプトによって、ログオン時の自動インストール・アンインストールを実現しています。
- ClientManagerクライアントの自動インストール時には、あらかじめ用意しておいた環境設定情報を、クライアントコンピュータに反映することができます。
- ClientManagerクライアントをアンインストール指定し、ログオン時にクライアントコンピュータから自動的にアンインストールすることも可能です。
- NETINSTを一台のサーバコンピュータ（NETINSTサーバと呼びます）にインストールし、複数のドメインを管理することができ、クライアントコンピュータでのインストール状況を参照できます。

これらの機能により、クライアントコンピュータにログオンすると同時にClientManagerクライアントをインストールすることが可能となります。

NETINSTによる自動インストール処理の流れは次のようになります。



※　PDC…プライマリドメインコントローラ

（1） 管理するドメイン全てのユーザのログオンスクリプトを自動的に更新します。
（2） ユーザがクライアントコンピュータから、NETINSTが管理するドメインにログオンします。
（3） ClientManagerクライアントをクライアントコンピュータに自動的にインストールします。

4.10.2 対象 OS

NETINSTを利用することができるOSは、以下のとおりです。

NETINSTサーバ

対象OS	必要ﾃﾞｨｽｸ容量	必要ﾒﾓﾘ容量
Windows 2000 Advanced Server / Server Windows NT Server 4.0	10Mバイト(*1)	3Mバイト

(*1)このほかに、ソフトウェアのインストール媒体をコピーするための容量が必要です。

プライマリドメインコントローラ、バックアップドメインコントローラ、ドメインコントローラ

対象OS	必要ﾃﾞｨｽｸ容量	必要ﾒﾓﾘ容量
Windows 2000 Advanced Server / Server Windows NT Server 4.0	5Mバイト	ﾛｸﾞｵﾝｽｸﾘﾌﾟﾄの実行に必要な容量

4.10.3 ネットワークインストールの注意制限事項

NETINSTを利用するにあたって、以下のような制限事項があります。

（1）複数ドメインを１つのNETINSTで管理する場合

複数のドメインを1つのNETINSTサーバで管理する場合、その複数のドメインで、同一のログオンスクリプト名を使用することはできません。使用されているログオンスクリプト名が同一名の場合には、それらのスクリプトの内容は同一になります。

たとえば、DOMAIN-Aと、DOMAIN-Bを1つのNETINSTサーバで管理する場合、DOMAIN-Aのユーザがlogon.batという名前のログオンスクリプトを使用しており、DOMAIN-Bのユーザもlogon.batという名前の（内容の異なる）ログオンスクリプトを使用しているとき、その内容は自動的に同じ内容に更新されます。

（2）管理ドメイン設定後、そのドメインを管理対象から削除した場合

ドメインをNETINSTの管理対象から削除するには、まずNetInst運用管理の＜動作情報設定＞ダイアログボックスの管理対象ドメイン一覧から、そのドメインを削除してください。このとき、ド

メイン登録時、NETINSTを運用するために更新したユーザ情報およびログオンスクリプトファイルは元の状態に戻っていません。

これらを元に戻すためにNetInst運用管理の＜ユーザ情報更新＞ボタンを押してください。 ユーザ情報の更新が完了すると、＜動作情報設定＞ダイアログボックスを開いたとき、管理対象ドメインの一覧に削除したドメインが表示されなくなります。

また、ログオンスクリプトファイルについては、元に戻せない場合があります。NETINSTの運用以外の目的でログオンスクリプトを利用している場合は、ログオンスクリプトファイルの内容を確認してください。

(3) ドメインのユーザ情報を変更する場合

管理するドメインのユーザ情報を変更する際は、PDCが起動されていなければなりません。また、ユーザ情報を変更した後は、必ずNetInst運用管理を起動し、＜ユーザ情報更新＞ボタンを押してください。

(4) 管理するソフトウェアをWindows 95/98へインストールする場合

NETINSTの管理するソフトウェア（CMクライアント）を、Windows 95、98に正しくインストールするためには、ログオンするドメイン名を正しく設定しなければなりません。ドメイン名は、コントロールパネルの「ネットワーク」を起動し、「ネットワークの設定」の「Microsoftネットワーククライアント」の「ログオンの確認」を選択したときに設定するドメイン名と「ユーザ情報」の「ワークグループ」に設定するグループ名が同一でかつNETINSTが管理するドメイン名と一致しなければなりません。

(5) 管理するソフトウェアをWindows NTへインストールする場合

NETINSTが管理するソフトウェア（CMクライアント）を、Windows NTに正しくインストールするためには、ログオンするユーザがDomain Adminsグループに属していなければなりません。ドメインユーザマネージャにて確認してください。

また、ログオンするドメイン名は、NETINSTが管理するドメイン名でなければなりません。ドメイン名は、コントロールパネルの「ネットワーク」を起動し、「ドメイン／ワークグループの設定」で設定します。

(6) 登録できるソフトウェア

NETINSTの2.5では、登録できるソフトウェアとして、 CMクライアント2.0、2.1、3.0、3.1、3.2、3.3、3.4、3.5、4.0と、CM SBPクライアント1.0、1.1、1.2、1.3、ESMPRO/DeliveryManagerクライアント (DMクライアント) 4.0、4.1、5.0、5.2、6.0、6.2、DM SBPクライアント1.0をサポートします。

ここでは、 CMクライアントについてしか説明しません。 DMクライアントおよびDM SBPクライアントについては、DeliveryManagerのマニュアルを参照してください。

(7) 旧バージョンのNETINSTがインストールされている場合

NETINSTはDMクライアントにも含まれています。DMクライアントに含まれているNETINSTの旧バージョンを利用して、CMクライアントの自動インストールを行うことはできません。旧バージョンのNETINSTをアンインストールしてから、CMクライアント3.5に含まれている、NETINST 2.5をインストールしてください。NETINSTの旧バージョンを使って、すでにESMPRO/CMクライアントをインストールしている場合には、NETINSTのアンインストールを行う前に、NETINSTのSGディレクトリを、SGディレクトリごと待避しておいてください。その後、NETINSTのアンインストール時に「SGファイルも削除」のチェックボックスをチェックせずにアンインストールを行ってください。新バージョンのインストール後、待避しておいたSGディレクトリを元に戻してください。

4.10.4 NETINST のセットアップ

(1) プランの作成

まず、NETINSTをどのような構成のネットワークで使用するかを決定しなければなりません。ここで重要なのは、以下の項目です。

- NETINSTで複数ドメインを管理するか
- NETINSTサーバをプライマリドメインコントローラ（PDC）やバックアップドメインコントローラ（BDC）と同じコンピュータにするか

NETINSTサーバをPDCやBDCと同じコンピュータにする場合は、ログオン時にそのコンピュータに負荷が集中することになります。極力、PDC、BDCとは別のコンピュータをNETINSTサーバとしてください。

(2) 前準備

① ドメイン間の信頼関係の設定

NETINSTサーバの属するドメインと管理対象のドメインとの間で相互に信頼関係を結びます。ドメインユーザマネージャを使用して設定します。NETINSTサーバが管理するドメインが、NETINSTサーバが属するドメインと同一の場合は、信頼関係を結ぶ必要はありません。

② ログオンユーザの確認

NETINSTによってソフトウェアをインストールするには、クライアントコンピュータにログオンするときに、NETINSTの管理対象ドメインへドメインユーザとしてログオンする必要があります。このドメインユーザが所属するグループは、以下のように設定されていることを確認してください。

	Administrators グループ	Domain Admins グループ
Windows 2000 Windows NT (4.0)	○	○
Windows 95 Windows 98	管理者である必要はありません。	

③ NETINSTユーザの作成

NETINSTでは、そのサービスプログラムに、アカウントを付与しなければなりません。ドメインユーザマネージャを使用して、このアカウントを作成します。

このユーザは以下の条件を満たさなければなりません。なお、この条件を満たすユーザがすでに存在する場合は新規に作成する必要はありません。

■NETINSTサーバがPDC,BDCと同一のコンピュータである場合

- 所属するドメインのAdministratorsグループ、Domain Usersグループに属すること。

＊NETINSTサーバが複数のドメインを管理する場合は、以下の条件も満たしてください。

- 管理するドメインのAdministratorsグループに属すること。
- すべての管理対象ドメインに、同一の名前、同一のパスワードのユーザ（ドメインユーザ）が存在すること。
- 上記のドメインユーザが、そのドメインのAdministratorsグループ、Domain Usersグループに属すること。

■NETINSTサーバがPDC,BDCと異なるコンピュータである場合

- そのコンピュータのローカルユーザであり、Administratorsグループに属していること
- すべての管理対象ドメインに、同一の名前、同一のパスワードのユーザ（ドメインユーザ）が存在すること
- 上記のドメインユーザが、そのドメインのAdministratorsグループ、Domain Usersグループに属すること

また、NETINSTサーバにログオンし、NetInst運用管理を使用するユーザも上記の条件を満たしていなければなりません。

④ ログオンスクリプトファイル格納フォルダの共有

NETINSTで管理するドメインの、プライマリドメインコントローラ（Windows 2000の場合はドメインコントローラ）に、共有名「NETLOGON」で共有されているフォルダが存在しますので、そのフォルダを確認してください。

そのフォルダを、共有名「ESMNILOGON」で追加共有してください。一つのフォルダを、複数の共有名で共有することが可能です。

「ESMNILOGON」には、アクセス権として、Administratorsグループ、およびDomain Adminsグループへのフルコントロールアクセス権を設定してください。その他のユーザ、グループへのアクセス権は設定しないでください

NETINSTで管理する全てのドメインの、プライマリドメインコントローラで、作業を行ってください。

(3) NETINSTのインストール

NETINSTのインストールは、次の手順で行います。

① まず、NETINSTのセットアップツールを起動します。

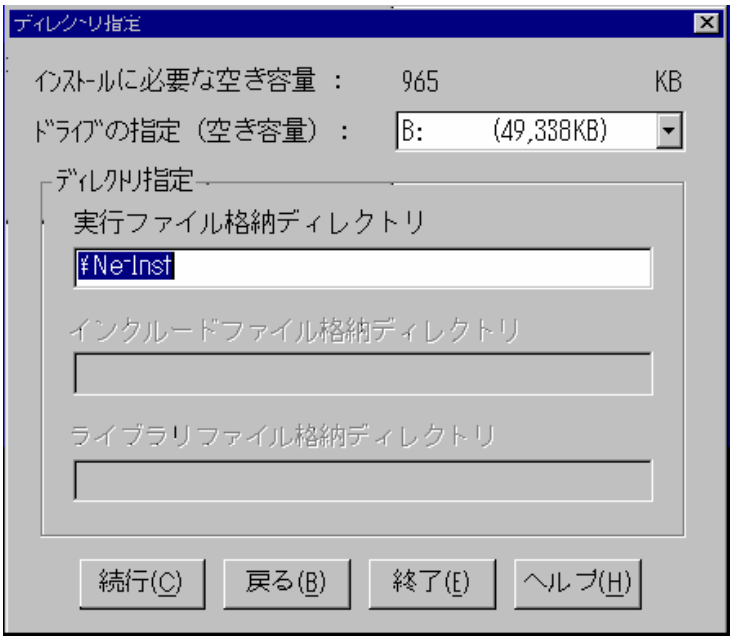
「Express Server Startup CD-ROM」を利用する方法とCMマネージャの共有ディレクトリを利用する方法があります。

CMマネージャの共有ディレクトリを利用する場合は、『ESMPROCM』共有ディレクトリを共有し、エクスプローラ等により、 共有したディレクトリ配下の「NETINST」ディレクトリにあるSetup.exe を実行します

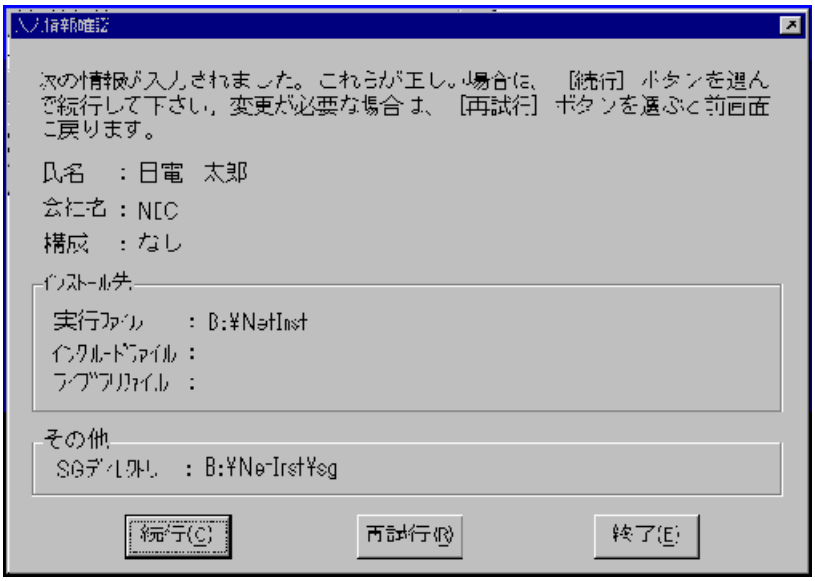
「Express Server Startup CD-ROM」を利用する場合には「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。そのCD-ROMの¥CLIENT¥NT95¥ESMCMC¥32¥NETINST¥Setup.exeを実行します。

② ［セットアップ処理の説明］ダイアログボックスが表示されますので＜続行＞ボタンを押します。

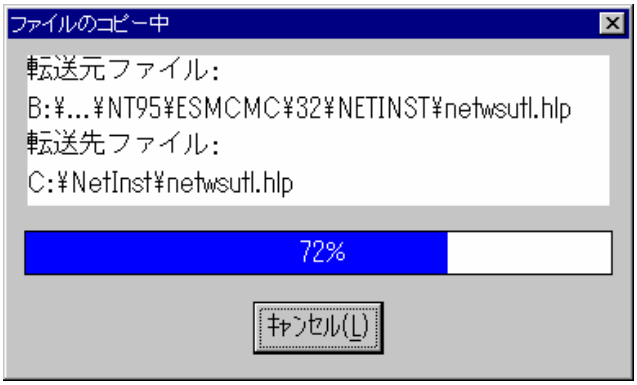
［ディレクトリ指定］ダイアログボックスが表示されます。NETINSTのインストール先のディレクトリを指定してください。
SGファイルは、ここで指定したディレクトリ配下のディレクトリsgにコピーされます。NETINSTのインストールに必要な空き容量に加え、NETINSTに登録するソフトウェアのインストール媒体をコピーするための容量が必要となりますのでご注意ください。
指定が完了したら＜続行＞ボタンを押します。なお、＜ヘルプ＞ボタンを押してもヘルプは表示されません。



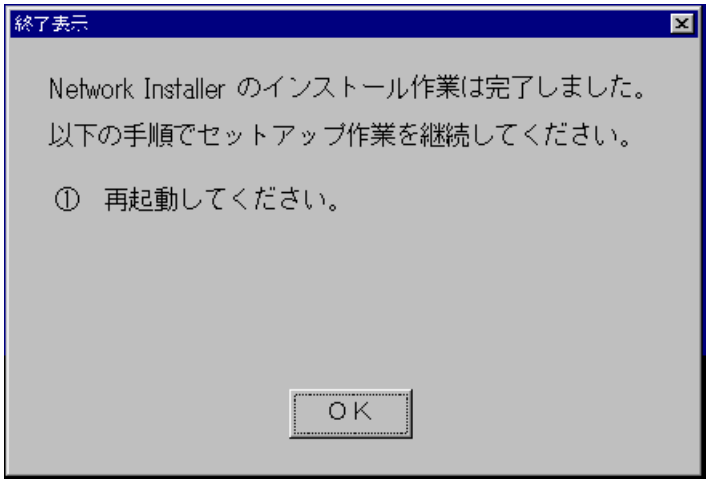
③ ［入力情報確認］ダイアログボックスが表示されます。インストール先ディレクトリを確認し、＜続行＞ボタンを押します。ファイルのコピーを開始します。



④ ファイルのコピー中は、次のウィンドウが表示されます。



⑤ インストール処理が正常終了すると、次のダイアログボックスが開きます。
指示に従い、コンピュータを再起動してください。



(4) NETINSTのアンインストール

NETINSTをアンインストールする場合は、以下の点に注意しなければなりません。

■事前にNETINSTに登録したソフトウェアを削除すること。ソフトウェアの削除の手順は「4.10.5 (8)ソフトウェア情報の削除」を参照してください。ただし、NETINST自身のバージョンアップ時にはソフトウェアを削除する必要はありません。

■NETINST自身のバージョンアップ時に、新しいバージョンをインストールする前処理として現バージョンをアンインストールする場合には、必ずNETINSTのSGディレクトリを待避しておくこと。

■NETINST自身のバージョンアップ時に、新しいバージョンをインストールする前処理として現バージョンをアンインストールする場合には、以下で述べる手順の中で、「SGファイルも削除」のチェックボックスをチェックしない。

これらの注意事項を守らない場合、ソフトウェアのインストール時に払い出すライセンス数とその残数に不整合が生じ、その結果インストールできるクライアントコンピュータの数が少なくなります。

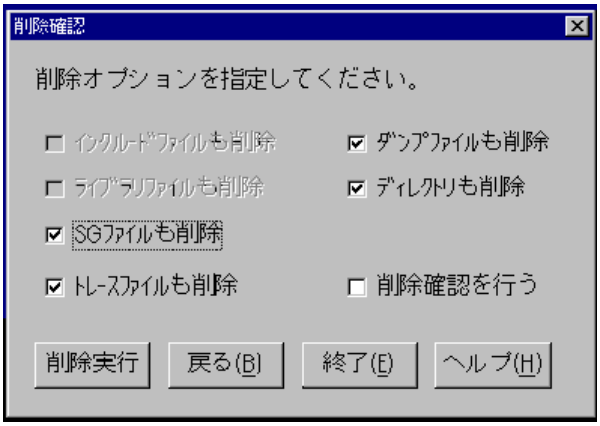
また、NETINSTのグループウィンドウに存在するアイコンはすべて削除します。アイコンを削除したくない場合は事前に移動してください。

NETINSTのアンインストールは、次の手順で行います。

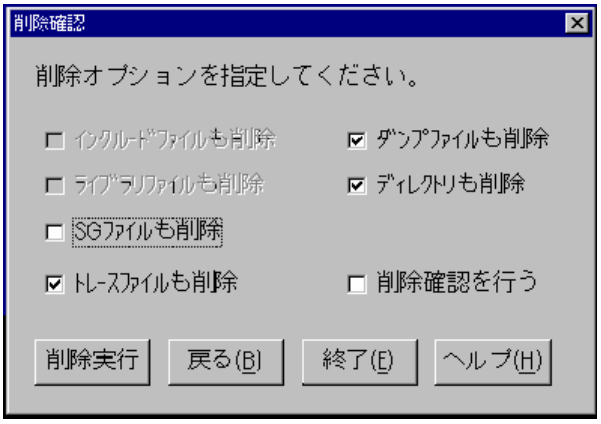
① (3)で述べた、NETINSTのセットアップツールに、「-u」を指定して＜OK＞ボタンを押します。

② ［削除処理の説明］ダイアログが表示されます。＜続行＞ボタンを押します。

③ ［削除確認］ダイアログボックスが表示されますので、削除オプションを選択して＜削除実行＞ボタンを押します。なお、＜ヘルプ＞ボタンを押してもヘルプは表示されません。



ここで、NETINSTのバージョンアップのために現バージョンのアンインストールを行う場合には、「SGファイルも削除」のチェックボックスは必ずチェックをはずしてください。次の図のようになります。



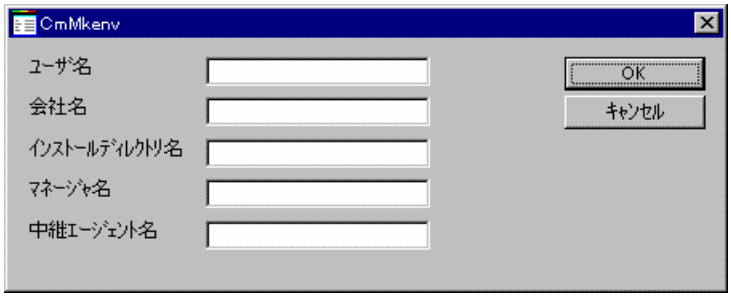
④ 削除処理が正常終了すると、次のメッセージボックスを表示します。＜OK＞ボタンを押すとアンインストールは完了します。

(５) CMクライアント環境情報設定ユーティリティによるインストール環境情報の作成

NETINSTのインストールが完了したら、次にCMクライアント環境情報設定ユーティリティ（CmMkenv）によるインストール環境情報の作成を行います。ここで作成した情報にしたがって、各クライアントにCMクライアントがインストールされます。

環境情報の作成は以下のように行います。

［スタート］メニューから、［プログラム(P)］－［Network Installer Ver2.5］－［CMC環境設定］を選択します。
各項目を入力して、＜OK＞ボタンを選択してください。



＊ **ユーザ名**

CMクライアントを使用するユーザ情報として登録する、ユーザ名を指定します。

＊ **会社名**

CMクライアントを使用するユーザ情報として登録する、会社名を指定します。

＊ **インストールディレクトリ名**

CMクライアントをインストールするディレクトリ名をフルパスで指定します。

＊ **マネージャ名**

クライアントを管理するマネージャマシン名を指定します。

＊ **中継エージェント名**

CM中継エージェント経由で構成情報をマネージャに通知する場合、中継するエージェントマシン名を指定します。中継エージェントを使用しない場合は、指定しません。

(６) WinShareのインストール環境情報の作成

ClientManagerでは、クライアントのリモートコントロールに、WinShareを使用しています。CMクライアントのインストールを行うと、同時にWinShareもインストールされます。そのため、WinShareのインストール環境情報を作成しなければなりません。

環境情報の作成は以下のように行います。

NetInst WinShareユーティリティ（WSSTENV.EXE）を実行します。［スタート］メニューから［プログラム(P)］－［Network Installer Ver2.5］－［WinShareインストール設定］を選択してください。NetInst WinShareユーティリティを実行すると、NetInst WinShareユーティリティダイアログが表示されます。ダイアログの各画面の各項目を設定して＜OK＞ボタンを選択してください。

以下に、各画面の設定内容の簡単な説明を記載します。詳しくは、NetInst WinShareユーティリティのヘルプを参照してください。

ユーザ管理画面では、ネットワークインストールするWinShareユーティリティを使用するユーザとパスワードを設定します。ユーザ登録を行わないと、NETINSTにCMクライアントを登録することができません。必ず一人以上のユーザを登録してください。

セットアップパス設定画面では、WinShareをインストールするディレクトリ名を指定します。インストールするディレクトリ名をフルパスで指定してください。

セキュリティ設定画面では、ネットワークインストールするWinShareの接続方法を指定します。

アクセスホスト画面では、ネットワークインストールするWinShareに接続するホスト名を設定します。

リモートコマンド画面では、ネットワークインストールするWinShareから実行するリモートコマンドを登録します。ただし、NAVIPADは、コマンドラインはセットアップパス設定画面で設定したパスと同じディレクトリとし、修正、削除は行えません。

ログ設定画面では、ネットワークインストールするWinShareのログを登録します。なお、画面内の「ログファイル削除ボタン」は、常に無効になったままです。

表示枠画面では、ネットワークインストールするWinShareの操作モードを示す、表示枠の色や太さを設定します。

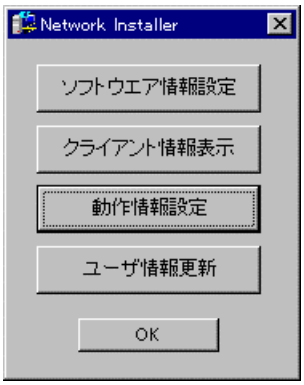
これで、CMクライアントのインストール環境情報、WinShareのインストール環境情報の作成は完了です。

4.10.5 ネットワークインストールの使用

（1）ネットワークインストールのSG（環境設定）

① ［スタート］メニューから［プログラム(P)］－［Network Installer Ver2.5］－［NetInst運用管理］を選択してNetInst運用管理を起動してください。

② NetInst運用管理が起動したら、＜動作情報設定＞ボタンを押します。



③ 監視間隔の設定を行います。NETINSTは、ここで入力した数字（分）ごとにドメインのユーザが追加されていないかどうかを監視します。ユーザが追加された場合には、自動的にユーザ情報を変更します。0を指定すると監視を行いません。

④ 次に管理対象ドメインの設定を行います。＜追加＞ボタンを押すと［ドメイン名］のダイアログボックスが表示されます。

ドメイン名の一覧から管理するドメイン名を選択し、＜OK＞ボタンを押します。

⑤ ドメイン名が管理対象ドメインの一覧へ追加されます。複数のドメインを管理する場合は、同じように＜追加＞ボタンを押し、適宜追加します。

⑥ すべての管理対象ドメインを追加し終わったら＜保存＞ボタンを押します。ここで、NETINSTサービス（NetworkInstallerサービス）にアカウントが追加されていない場合（NETINSTインストール後、初めてこの作業を行った場合）、次のダイアログボックスが表示されます。

これは、サービスにアカウントを設定することを促すメッセージです。NetworkInstallerサービスに、事前に作成したNETINST用ユーザアカウントを設定してください。ここで、設定するユーザアカウントは次のようになります。

■NETINSTサーバがPDC,BDCと同一のコンピュータである場合

- 所属するドメインのユーザ

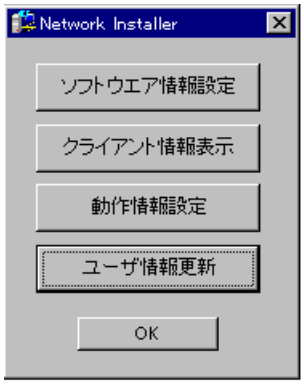
■NETINSTサーバがPDC,BDCと異なるコンピュータである場合

- そのコンピュータのローカルユーザ

サービスにアカウントを設定するには以下の手順で行います。

a) コントロールパネルを開き、[サービス] をダブルクリックします。
b) [サービス] ダイアログ ボックスで、NetworkInstallerサービスを選択します。
c) ＜スタートアップ＞ボタンをクリックします。
d) [アカウント] を選択します。
e) ボタンをクリックし、表示される [ユーザーの追加] ダイアログボックスでNETINST用ユーザーアカウントを指定します。同じユーザ名でも別のドメインに属している場合がありますので、注意してください。
f) [ユーザーの追加] ダイアログボックスを閉じたら、[パスワード] および [パスワード再入力] ボックスに、そのユーザーのパスワードを入力します。
g) ＜OK＞ボタンをクリックし、[サービス] ダイアログ ボックスで ＜終了＞ボタンをクリックします。
h) NetworkInstallerサービスが開始されている場合は一旦停止します。
i) NetworkInstallerサービスを開始します。正しく開始されれば、アカウントの設定は完了です。

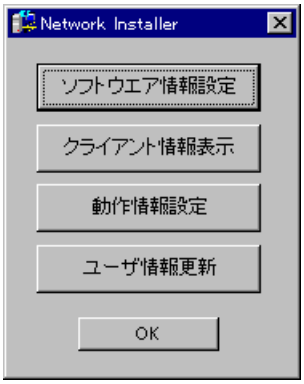
⑦ NetInst運用管理の＜ユーザ情報更新＞ボタンを押します。



⑧ ユーザ情報の更新結果を確認します。

正常でなかった場合、追加したドメインのPDC、BDCが起動しているか確認してください。 起動していないPDC、BDCがあれば、起動してから再度＜ユーザ情報更新＞ボタンを押してください。
それでも正常にならない場合は、NETINSTユーザでログオンしなおしてから＜ユーザ情報更新＞ボタンを押してください。

(2) ソフトウェアの登録



① ＜ソフトウェア情報設定＞ボタンを押します。

② ［ソフトウェア情報設定］ダイアログボックスが表示されます。新規にソフトウェアを登録するために＜新規＞ボタンを押します。

③ ［CD-ROM］ダイアログボックスが表示されます。
「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれている

CD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。

④ ［インストール可能ソフトウェア情報］ダイアログボックスが表示されます。インストールするソフトウェアを選択し、＜OK＞ボタンを押してください。

⑤ ［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスが表示されます。
インストールを許可するクライアント数を、ライセンス数の上限の欄に入力し、＜保存＞ボタンを押します。

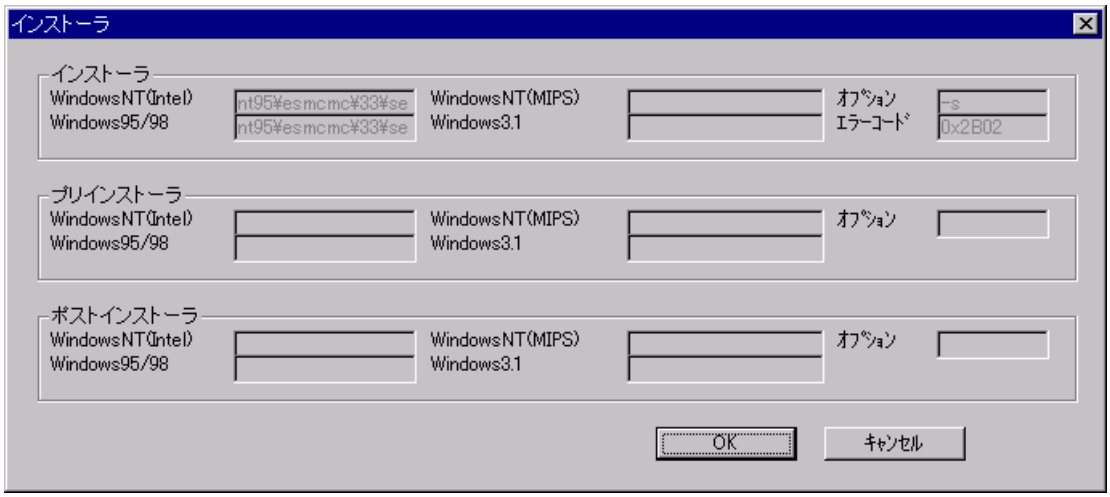
⑥ ［キーFD］ダイアログボックスが表示されます。
CMクライアント3.5のキーFDをフロッピードライブに挿入し、そのドライブ名を入力して＜OK＞ボタンを押します。

このとき、フロッピードライブにセットされているキーFDから指定されたライセンス数を減算し更新します。指定したライセンス数の上限が、現在セットされているキーFDのライセンス数よりも多い場合、現在セットされているキーFDから、許容される最大ライセンス数を減算し、更新した後に、別のキーFDを挿入するようにメッセージが出力されますので、指示に従ってください。

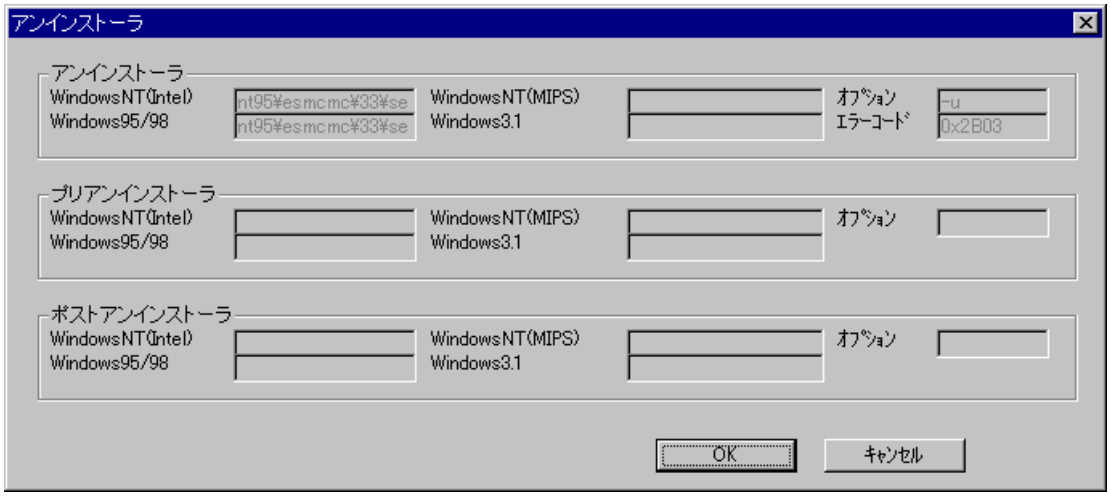
たとえば、手元にCMクライアント「５ライセンス」のキーFDと「２０ライセンス」のキーFDがあるとします。ソフトウェアを新規に登録するとき、「５ライセンス」のキーFDを挿入して、ライセンス数の上限を２３と入力し、＜保存＞ボタンを押すと、「５ライセンス」のキーFDから、５ライセンス減算した後に、次のキーFDを挿入するようにメッセージが出力されます。そこで、「２０ライセンス」のキーFDを挿入すると、そのキーFDから１８（=23-5）ライセンスを減算します。よって、「２０ライセンス」のキーFDには、あと２ライセンス残ることになります。

［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスで、＜インストーラ設定＞ボタン、＜アンインストーラ設定＞ボタンを押した場合、次のダイアログボックスが表示されますが、なにも変更する必要はありません。

＜インストーラ設定＞ボタンを押した場合



<アンインストーラ設定>ボタンを押した場合



［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスで<保存>ボタンを押すと、ライセンス数の処理や、必要なファイルのコピーを行った上で、［ソフトウェア情報設定］ダイアログボックスに戻ります。

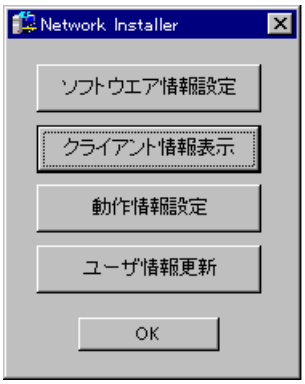
登録が完了したソフトウェア名が表示されます。

これでソフトウェアの登録は完了しました。

(3) クライアントの管理

現在管理ドメイン配下に属しているクライアントコンピュータを表示して、クライアントコンピュータへ適用するソフトウェアの制限を行うことができます。次の手順で行います。

① ＜クライアント情報表示＞ボタンを押します。



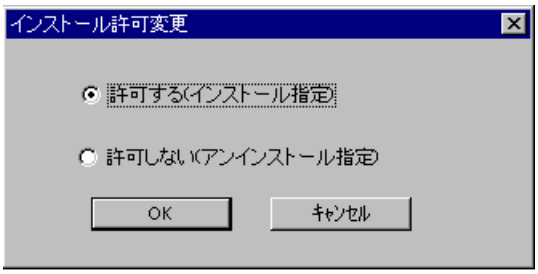
② ［クライアント情報］ダイアログボックスが表示されます。

③ ＜クライアント一覧最新化＞ボタンを押します。

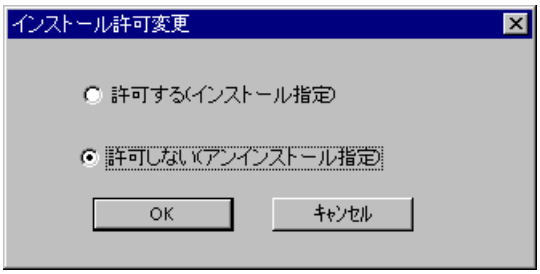
④ ドメイン配下に接続中のクライアント情報が表示されます。

⑤ 対象とするソフトウェアを選択して、＜処理指定変更＞ボタンを押します。

⑥ ［インストール許可変更］ダイアログボックスが表示されます。



⑦ ここでソフトウェアの制限を行いたい場合には、許可しないをチェックします。



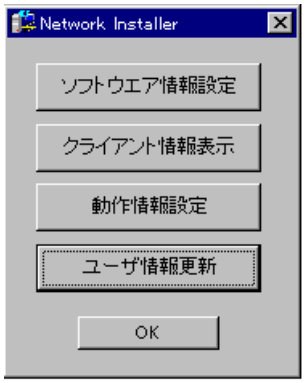
⑧ ＜OK＞ボタンを押します。

処理指定がアンインストールに変更されます。

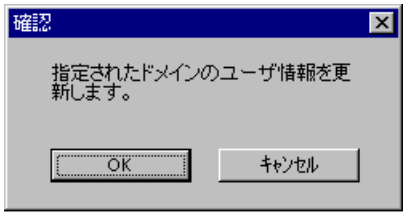
（4）ユーザ情報の変更

ユーザ情報の更新は、［動作情報設定］ダイアログボックスの監視間隔の時間で自動的に行われますが、すぐにユーザ情報を更新したい場合は、次の手順で行います。

① ＜ユーザ情報更新＞ボタンを押します。



② ［確認］のダイアログボックスが表示されます。ユーザ情報の更新を行う場合は、＜OK＞ボタンを押してください。



指定されたドメインとは、［動作情報設定］ダイアログボックスの管理対象ドメイン一覧に表示されているドメインのことです。

③ 更新が完了したら、次のダイアログボックスを表示します。

これでユーザ情報の更新は終了しました。

(5) 各クライアントへのログオン

ここまでの設定が正しく行われたら、クライアントコンピュータにログオンすると自動的にCMクライアントがインストールされます。

ここで注意しなければならないのは次の点です。

■クライアントコンピュータへログオンするときに、ここまでで設定した、NETINSTの管理するドメインにログオンすると自動的にインストールされます。自コンピュータにログオンしたり、管理していないドメインにログオンしたりしても自動インストールは行われません。

■クライアントコンピュータのOSがWindows NTの場合は、ログオンを行うユーザがDomain Adminsに属していなければ、インストールできません。ログオンを行うユーザがDomain Adminsに属しているかドメインユーザマネージャで確認してください。

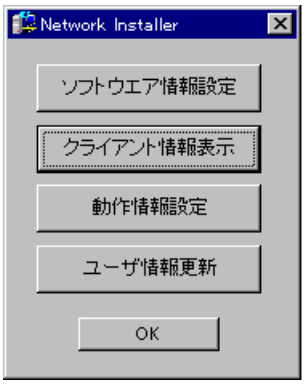
■インストール時にはネットワークマウントを行うため、クライアントコンピュータでは２つ以上の空きドライブを用意する必要があります。空きドライブがなければ「空きドライブなし」というエラーが発生し、インストールが失敗します。

(6) クライアントでのインストール状況の確認

現在どのクライアントコンピュータにインストールされているか、インストール時にエラーが発生していないかどうかを、NetInst運用管理を用いて参照することができます。

① ［スタート］メニューから［プログラム(P)］－［Network Installer Ver2.5］－［NetInst運用管理］を選択してNetInst運用管理を起動してください。

② NetInst運用管理が起動したら、＜クライアント情報表示＞ボタンを押します。



［クライアント情報］ダイアログボックスが表示されます。

左側のツリービューには、ドメイン名の一覧と、そのドメインに含まれるクライアントコンピュータ名が表示されます。

③ クライアントコンピュータ名をクリックし、選択すると、そのクライアントコンピュータにインストールされたソフトウェアの情報が右のリストボックスに表示されます。
右のリストボックスに表示される項目は以下のものです。

ソフトウェア名	ソフトウェアの名前
ユーザ名	そのクライアントコンピュータにログオンしたユーザ名。このユーザがログオンしたときにインストール／アンインストールされたことを示します。
処理指定	そのソフトウェアがインストール指定されているか、アンインストール指定されているかを示します。
インストール状態	現在のソフトウェアの状態を示します。 ・インストール未 ・インストール中 ・インストール失敗 ・インストール済 ・アンインストール中 ・アンインストール失敗 の状態がありえます。インストール失敗、アンインストール失敗のときには、エラーメッセージの項目にエラー詳細が表示されます。
エラーメッセージ	インストール状態がインストール失敗、アンインストール失敗のときに、そのエラー詳細を表示します。

④ ＜クライアント情報最新化＞ボタンを押すと、表示が現在の状態に更新されます。

インストール状態は、次のように遷移します。

■ソフトウェアがインストール指定の場合

- クライアントコンピュータにユーザがログオンし、インストールが開始されたら「インストール中」
- インストールが成功したら「インストール済み」
- インストールが失敗したら「インストール失敗」

■ソフトウェアがアンインストール指定の場合

- クライアントコンピュータにユーザがログオンし、アンインストールが開始されたら「アンインストール中」
- アンインストールが成功したら「インストール未」
- アンインストールが失敗したら「アンインストール失敗」

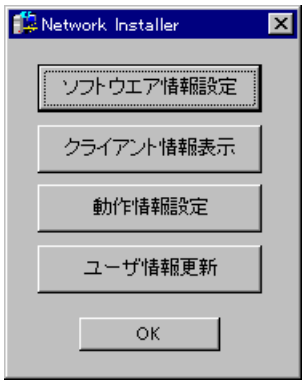
インストール状態の表示が変わらない場合や、クライアントコンピュータの名前が一覧に表示されない場合はクライアントコンピュータへだれもログオンしていないか、管理対象ドメインへログオンしていないか、またはクライアントコンピュータでNETINSTサーバにエラーを通知することもできないようなエラーが発生していることが考えられます。

また、ディスク容量不足によってNETINSTのコマンド群をクライアントコンピュータにコピーできないことも考えられます。ディスク容量をチェックしてください。

(7) ソフトウェア情報の変更

ソフトウェアのインストール、アンインストールの区別を変更したり、ソフトウェアのライセンス数の上限を変更したりする場合には、ソフトウェア情報を変更する必要があります。
ソフトウェア情報の変更を行うには、NetInst運用管理を用います。

① ［スタート］メニューから［プログラム(P)］－［Network Installer Ver2.5］－［NetInst運用管理］を選択してNetInst運用管理を起動してください。
② NetInst運用管理が起動したら、＜ソフトウェア情報設定＞ボタンを押します。



③ ［ソフトウェア情報設定］ダイアログボックスが表示されます。
④ 情報を変更するソフトウェアを選択して＜変更＞ボタンを押します。

⑤ ［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスが表示されます。
ここでアンインストール指定を行うと、次回クライアントにログオンしたときアンインストールが行われます。

［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスで、ライセンス数の上限を変更すると、<保存>ボタンを押したときにキーFDを挿入するようにメッセージが出力されます。メッセージにしたがってキーFDをフロッピードライブに挿入してください。

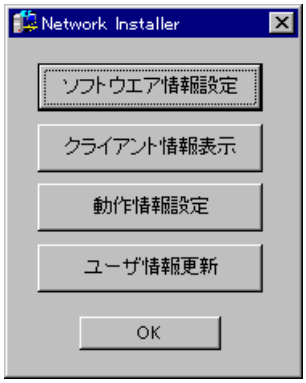
(8) ソフトウェア情報の削除

NETINSTの管理するソフトウェアを削除する場合には、そのソフトウェアがどのクライアントコンピュータにもインストールされていない状態でなければなりません。クライアントコンピュータにインストールされている状態は、そのソフトウェアのライセンスを使用している状態であり、その状態でNETINSTが管理するソフトウェアを削除すると、ソフトウェアの使用ライセンス数を正しく管理できなくなるためです。使用ライセンス数を正しく管理するために、ソフトウェアの削除に先立って、以下の作業を行ってください。

- ■NetInst運用管理の［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスでソフトウェアをアンインストール指定する。
- ■すべてのクライアントコンピュータにログオンしなおし、ソフトウェアをアンインストールする。ここで、クライアントでのインストール状況の確認を行い、すべてのクライアントでアンインストールされたことを確認する。
- ■ソフトウェアの残りライセンス数が、ライセンス数の上限と等しくなっていることを［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスで確認する。これが等しくなければ、いずれかのクライアントコンピュータにインストールされているということである。
- ■ソフトウェアのライセンス数の上限を0にする。

このあと、以下の手順にしたがってソフトウェアを削除します。

① ［スタート］メニューから［プログラム(P)］－［Network Installer Ver2.5］－［NetInst運用管理］を選択してNetInst運用管理を起動してください。



② NetInst運用管理が起動したら、＜ソフトウェア情報設定＞ボタンを押します。

③ ［ソフトウェア情報設定］ダイアログボックスが表示されます。

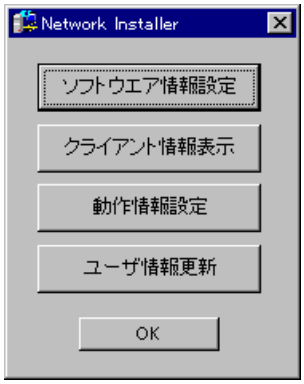
④ 情報を削除するソフトウェアを選択して＜削除＞ボタンを押します。
このとき、削除するソフトウェアに依存されるソフトウェアが存在する場合は、同時に削除されます。

(９) 修正モジュールの適用

NetInst運用管理を用いて、すでにインストールされているソフトウェアに、修正モジュールを適用することができます。

以下の手順にしたがって、修正モジュールを適用します。

① ［スタート］メニューから［プログラム(P)］－［Network Installer Ver2.5］－［NetInst運用管理］を選択してNetInst運用管理を起動してください。



② NetInst運用管理が起動したら、＜ソフトウェア情報設定＞ボタンを押します。
③ ［ソフトウェア情報設定］ダイアログボックスが表示されます。
④ 修正モジュールを適用するソフトウェアを選択して＜アップデート追加＞ボタンを押します。

⑤ ［CD-ROM］ダイアログボックスが表示されます。
「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #3」と書かれているCD-ROM媒体の¥rur¥necrur.txtを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。

⑥　［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスが表示されます。
何も変更せずに、＜保存＞ボタンを押します。

［ソフトウェアの登録・変更］ダイアログボックスで＜保存＞ボタンを押すと、必要なファイルのコピーを行った上で、［ソフトウェア情報設定］ダイアログボックスに戻ります。登録が完了した修正モジュール専用のソフトウェア名が表示されます。

4.10.6 ネットワークインストールのエラーメッセージ一覧

NETINST動作中にエラーが発生した場合は、イベントログあるいはNetInst運用管理の操作中あるいは「クライアント情報」画面のエラーメッセージ欄に詳細なエラーメッセージが出力されます。以下にエラーメッセージと説明／対処方法を示します。

エラーメッセージ	説　明／対　処
管理対象外のドメインから要求がありました。	ログオンスクリプトが不正です。PDCの「ユーザーマネージャ」－「ユーザー情報」－「ユーザー環境プロファイル」のログオンスクリプト名を削除してください。
ユーザー情報更新コマンドの起動に失敗しました。	登録したNETINSTユーザでログオンしてください。
ライセンス数の操作に失敗しました。	NETINST運用管理で、ライセンス数が設定されていない可能性があります（最大ライセンス数が0も含む）。または、キーFD が破壊されている可能性があります。
空きドライブがありません。 ネットワークドライブのマウントに失敗しました。空きドライブがありません。	ドライブがすべて使用されています。空きドライブを作成してください。
ユーザー情報がありません。	PDCが起動されていない可能性があります。確認してください。
ドメインコントローラーの取得に失敗しました。	PDCが起動されていない可能性があります。確認してください
コマンドからの応答がありません。	クライアントコンピュータで異常が発生している可能性があります。クライアントコンピュータをリブートしてください。
実行すべきツール(プログラム)がありません。	ソフトウェア情報設定時に1つ以上のインストーラ／アンインストーラを設定してください。
ログオンスクリプトとして登録するファイル名に「..」が含まれています。	PDCの「ユーザーマネージャ」－「ユーザー情報」－「ユーザー環境プロファイル」のログオンスクリプト名に「..」を記述しないでください。
すでに登録済みのソフトウェアです。	ソフトウェア情報としてCMクライアント が設定済みです。
キーFDの読み込みに失敗しました。	フロッピードライブ に正しいキーFD を挿入してください。
キーFDの書き込みに失敗しました。	フロッピードライブ に正しいキーFD を挿入してください。

管理対象外のソフトウェアのキーファイルです。	CMクライアント 以外のキーFD が挿入されています。フロッピードライブに正しいキーFD を挿入してください。
デフォルトSGファイルが存在しません。	CMクライアント環境設定ユーティリティおよびWinShare環境設定ユーティリティを使用して、インストールのための環境設定を行ってください。
Network Installer サービスの起動に失敗しました。	NETINSTサーバのサービスマネージャに異常が発生した可能性があります。アカウントが正しく設定されているか確認してください。正しく設定されている場合は、NETINSTサーバをリブートしてください。
(Setup)ユーザーが処理を中断しました。	クライアントコンピュータで実行中のインストール処理を中断した可能性があります。クライアントコンピュータにログオンしなおしてください。
(Setup)ディスク容量が不足しています。	クライアントコンピュータのディスク容量不足が発生している可能性があります。インストール媒体分の容量をあけてください。
(Setup)プログラムが起動中です。	Ver3.11以前のESMPRO/DMクライアントが起動している可能性があります。ESSでアンインストールしてから、ログオンしなおしてください。
(Setup)すでにアンインストール済みです。	ESSを利用してアンインストールした可能性があります。
(Setup)Administratorの権限を有していません。	クライアントコンピュータでログオンしたユーザアカウントが、PDCに未登録あるいはDomain Adminsグループに属していない可能性があります。PDCの「ユーザーマネージャ」を利用して正しいユーザアカウントを設定してください。
(Setup)すでにインストール済みです。	ESSを利用してインストールした可能性があります。
(Setup)ディレクトリが作成できません。アクセスが拒否されました。	クライアントコンピュータのインストール先ディレクトリに書き込み属性がない可能性があります。正しい属性を設定してください。
(Setup)致命的なエラーが発生しました。	クライアントコンピュータで実行中のインストール処理に致命的なエラーが発生しました。
ライセンス数をオーバーしました。	NetInst運用管理で残りライセンス数を確認してください。

管理対象外のソフトウェアのキーファイルです。	CMクライアント 以外のキーFD が挿入されています。フロッピードライブに正しいキーFD を挿入してください。
デフォルトSGファイルが存在しません。	CMクライアント環境設定ユーティティおよびWinShare環境設定ユーティリティを使用して、インストールのための環境設定を行ってください。
Network Installer サービスの起動に失敗しました。	NETINSTサーバのサービスマネージャに異常が発生した可能性があります。アカウントが正しく設定されているか確認してください。正しく設定されている場合は、NETINSTサーバをリブートしてください。
(Setup)ユーザーが処理を中断しました。	クライアントコンピュータで実行中のインストール処理を中断した可能性があります。クライアントコンピュータにログオンしなおしてください。
(Setup)ディスク容量が不足しています。	クライアントコンピュータのディスク容量不足が発生している可能性があります。インストール媒体分の容量をあけてください。
(Setup)プログラムが起動中です。	3.11以前のDMクライアントが起動している可能性があります。ESSでアンインストールしてから、ログオンしなおしてください。
(Setup)すでにアンインストール済みです。	ESSを利用してアンインストールした可能性があります。

4.11 WebAccess の導入

WebAccessをインストールするマシンには、既に以下のソフトウェアがインストールされていなければなりません。

- Windows NT 4.0：Microsoft Internet Information Server 2.0, 3.0, 4.0
- Windows 2000以降：Microsoft Internet Information Server 5.0以降
- Web版の統合ビューアとの連携を行う場合は、CMマネージャおよびESMPRO/ServerManager およびESMPRO/ServerManager ExtensionPack。

4.11.1 インストール

これらのソフトウェアのインストール方法については、それぞれのマニュアルをご覧ください。

WebAccessのインストールは、次の手順で行います。インストールは、必ず管理者権限を持つアカウント（Administratorsに属しているアカウント）で行ってください。

① まず、WebAccessのセットアップツールを起動します。
以下の何れかのセットアップを実行します。

(1) マネージャをセットアップしたディレクトリにある SETUP¥WEB ディレクトリ配にあるSETUP.EXEを起動してください。

(2) 「Express Server Startup CD-ROM Express5800/100シリーズ用 #1」と書かれているCD-ROM媒体のルートディレクトリに格納されているPPLIST.TXTを参照し、「ClientManager」が格納されているCD-ROM媒体を用意し、CD-ROMドライブに挿入します。セットアップツールは、そのCD-ROMの¥CLIENT¥NT95¥ESMCMM¥35¥Web¥Setup.exeに格納されています。
¥CLIENT¥NT95¥ESMCMM¥35¥Webディレクトリにある、Setup.exeを起動してください。

② 「ようこそ」ダイアログボックスが表示されますので、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

③ 注意事項が表示されますので、内容を確認してから＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

④ 「インストールディレクトリ設定」ダイアログボックスが表示されますので、WebAccessのインストール先を指定して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。

注意： ESMPRO/ServerManager ExtensionPackが既にインストールされている場合は、インストールディレクトリを指定することはできません。この場合のインストールディレクトリは、ESMPRO/ServerManager ExtensionPackのインストールディレクトリ配下に固定されます。

⑤ ファイルコピー等が終了すると、「CMマネージャ名の設定」ダイアログボックスが表示されますので、CMマネージャをセットアップしたマシン名またはIPアドレスを指定して、＜次へ(N)＞ボタンを押してください。ここで指定したマシン名が、構成情報を参照するCMマネージャの既定値となります。

注意： ここで指定するマシン名は、あくまで既定値です。複数台のCMマネージャを運用している場合、データビューアと同じく、Webブラウザから別のCMマネージャ名を指定することも可能です。

ただし、ESMPRO/ServerManager ExtensionPackと連携して統合ビューア（オペレーションウィンドウ）のページからCMデータビューアのページを表示する場合は、必ずここで指定したCMマネージャから構成情報を取得します。別のCMマネージャを使用する場合は、統合ビューアのページからではなく、CMデータビューアのページを直接表示してください。

⑥ これでセットアップは完了です。システムを再起動してください。

4.11.2 アンインストール

アンインストールは、必ず管理者権限を持つアカウント（Administratorsに属しているアカウント）で行ってください。

① ［スタート］メニューから、［設定］－［コントロールパネル(C)］を選択し、［コントロールパネル］フォルダを表示してください。
② ［アプリケーションの追加と削除］アイコンをダブルクリックし、［アプリケーションの追加と削除プロパティ］ダイアログボックスを表示してください。
③ ［インストールと削除］タブに表示されているソフトウェアの一覧から「ESMPRO/CM WebAccess」を選択し、＜追加と削除(R)＞ボタンを押してください。
④ ［ファイル削除の確認］ダイアログボックスが表示されますので、＜はい(Y)＞ボタンを押してください。
⑤ ［コンピュータからプログラムを削除］ダイアログボックスが表示され、アンインストールが実行されます。アンインストールが終了しましたら、＜OK＞ボタンを押してください。

4.12 エラーコード表

CMマネージャおよびCMクライントのセットアップを行っている場合に出力されるエラーコードと対応表を以下に示します。

コード	内容	対処方法
2A00	ファイルのオープンに失敗した。 %TEMP%¥opt.dat	なし
2A01	ファイルの削除に失敗した。 %TEMP%¥opt.dat %TEMP%¥cmret.dat	なし
2A02	外部のセットアップを起動できない。	なし
2A03	外部のセットアップのウィンドウが見つからない。	なし
2A04	外部のセットアップのプロセスが見つからない。	なし
2A05	ファイルのオープンに失敗した。 %TEMP%¥ret.dat	なし
2A06	ファイルの削除に失敗した。 %TEMP%¥ret.dat	なし
2A10	データベースの初期化失敗。	DBを作成していない場合はDBを作成する。ODBCドライバを登録していない場合にはODBCドライバを登録する。正しいユーザ・パスワードを設定する。
2B01	ファイルのオープンに失敗した。 %TEMP%¥opt.dat %TEMP%¥cmret.dat	なし
2B02	同じ Version の CM がすでに入っている。NETINSTでインストールする場合に発生します。	
2B03	CMクライアントのレジストリがない。	なし
2B05	SNMPエージェントを登録していない。	SNMPサービスの登録をする。
2B06	インストールの権限がない。	管理者権限を持ったユーザでログインし再度セットアップ実行します。

2B07	ESMPRO/Netvisor 3.1 がすでに入っている	ESMPRO/Netvisor 3.1をアンインストールするか、4.1以上のバージョンにアップグレードしてください。
2B10	アラートマネージャのセットアップに失敗しました。	なし
2B11	アラートマネージャのアンインストール失敗しました。	なし
2B20	Windows 2000、Windows NTレジストリのサイズが不足しています。	レジストリの空き容量を5Mバイト以上に設定する。

4 ClientManagerの導入 4-1
4.1 導入の概要 4-1
4.2 CMマネージャのセットアップの準備 4-3
4.2.1 Windows NT 4-4
4.2.2 データベースエンジンセットアップ 4-5
4.2.3 データベースの作成とODBC（システムデータソース）の設定 4-16
4.2.4 ESMPROユーザグループ（NvAdminグループ）の追加 4-128
4.3 CMマネージャセットアップ 4-129
4.3.1 インストール 4-129
4.3.2 アンインストール 4-141
4.4 CMクライントのセットアップの準備 4-143
4.4.1 SNMPエージェントの組み込みと設定 4-143
4.4.2 レジストリサイズの確認と変更 4-155
4.4.3 DMI製品のインストール 4-156
4.5 CMクライアントセットアップ 4-157
4.5.1 インストール 4-157
4.5.2 障害監視設定および通報設定 4-164
4.5.3 アンインストール 4-177
4.6 CM GUIセットアップ 4-178
4.6.1 セットアップ 4-178
4.6.2 統合ビューアとの連携 4-180
4.6.3 DBのメンテナンス 4-181
4.6.4 アンインストール 4-184
4.7 中継エージェントセットアップ 4-184
4.7.1 インストール 4-184
4.7.2 アンインストール 4-185
4.8 統合マネージャ中継 4-186
4.8.1 親マネージャへの接続 4-186
4.8.2 親マネージャとの接続解除 4-188
4.8.3 注意事項 4-189
4.9 クラスタシステム 4-190
4.10 ネットワークインストール 4-199
4.10.1 ネットワークインストールの機能 4-199
4.10.2 対象OS 4-200
4.10.3 ネットワークインストールの注意制限事項 4-200
4.10.4 NETINSTのセットアップ 4-202
4.10.5 ネットワークインストールの使用 4-211
4.10.6 ネットワークインストールのエラーメッセージ一覧 4-231

4.11　WebAccessの導入 4-234
4.11.1　インストール 4-234
4.11.2　アンインストール 4-238
4.12　エラーコード表 4-239

SQL Server 6.5 ..... 4-14, 4-232
CMデータベースエンジン 4-5, 4-232
ESMPROユーザグループ 4-1, 4-128
NETINST 4-200
ODBCドライバ 4-64, 4-68, 4-79, 4-90, 4-102, 4-109, 4-121,4-232
Oracle Client 4-11, 4-232
SNMPエージェント 4-1, 4-142
SQL Server 7.0 4-14
WebAccess 4-232
エラーコード 4-237
エラーメッセージ 4-229
クラスタシステム 4-189
データベース容量 4-17, 4-36
ネットワークインストール 4-197
マネージャID 4-132
親マネージャ 4-185